
空の下の神様

紗那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の下の神様

【Nコード】

N4753W

【作者名】

紗那

【あらすじ】

少女・シエルトの見た夢がすべての始まりだったのかもしれない。学園にて平和な生活を送っていたシエルトの日常は、少しずつおかしくなりはじめていった……。

別のサイトでも投稿しています。

ただでさえ酷い文章ですが、中盤辺りまでさらに酷いことになっています。また、一話一話が無駄に短く、無駄な改行だらけでイライラするかもしれません。60話くらいからはまだマシになりつつあると思います。時間を見つけて書き直していこうと思っています。

申し訳ありません。

1話 夢とともに始まる

いつからそこにいたのか。

少女はとても冷ややかで薄暗い空間の中に倒れていた。

ついさっきまで眠っていたような気がする。

頭の中に眠気のようなものが渦巻いて、思考がしっかりと回らないから。

でも、起きていたような気もする。

気付いた時、瞼を閉じてはいなかった。さっきからこの目で、この薄暗い闇を見ていたように思う。

体が冷たい。冷気が漂っているのか。時折、冷たい風が頬をかすめる。

とにかく起き上がろう。

そう思い、少女は両腕に力を入れようとした。

「…っ」

だが、思うように力が入ってくれない。上手く動かない。

無理に力を入れようとすると、腕がそれを拒んでいるかのように震えてしまう。

指先だけならなんとか動かせるのだが、それだけでは何の意味もな

い。
腕だけではない。足も、頭も。体全てに力が入らない。
かすかに苛立ちを覚える。まずここがどこなのか、それを確認した
いだけなのに。
声すら出せなかった。出そうとすると喉の辺りがきゅっと締まって
苦しい。

「……、………！」

無理矢理力を入れどうにかしてでも起き上がろうとしているうちに、
突然吐き気を感じた。
視界が気持ち悪くうねり出す。体の冷たさは増していき、指先すら
動かせなくなった。

「…っ、う………」

不気味にうねった視界は、それが何であるか確認する事すら出来な
い程のスピードで流れる映像に変わった。
…この映像は何を映しているのか分からない。
ただ、辛うじて小さな子供達が何人もいるのが見えた。

（これは…、なに…）

とてもおぞましく、不気味。そんな気がしてならない。

そんな映像が数十秒間程流れると、

「……!」

視界は先程の薄暗い闇に戻っていた。奇妙なうねりも消えている。

「……あ、……」

体の異常なまでの冷たさはうそのように消え去り、吐き気も感じなくなっていた。

…さっきまであんなにも必死になって起き上がるうとしていたのは、一体何だったのか。

あれほど頑なに動こうとしなかった腕が、足が、体が。

無理に力を入れる事なく、何事もなく動かせるようになっていたのだ。

少女は慌てて起き上がった。

…薄暗い空間。

真っ黒な壁には不気味で記号のような、意味の分からない文字がびっしりと書かれている。

その文字達はこの空間の明かり代わりのように煌々と光っていた。

こんな不気味で訳のわからない場所の筈なのに。

(……あれ?…何だっけ、私…)

どこかで見た事があるような気がする。

といっても、思い出す事も出来ずさっぱり分からないのだが…。

足は少しふらつくような気もするが歩行に支障が出る程ではなかった。

自分の足音さえ不気味に感じる。

暗くてよくは見えないが、それなりに広い空間ではあるようだ。

空間を囲む壁は一応確認が出来る。

それから、発光している文字がかすかに扉のようなものを照らしていた。

この部屋を探索してみようなどという気は起こらない。まっさきにこの空間から出る事だけを考えていた。

(……よかった、ちゃんとした扉だ…、…開くかな)

両手で押してみたがどうにも開く気配がしない。重い扉なのか。

それとも鍵が掛かっているとか、取っ手のようなものを回さないと開かないとか。

とりあえずこの暗い場所では鍵なんかは安易には見つからないだろう。まずは取っ手だ。

真っ黒な扉は壁と同じ黒い色で今一見分けがつかないのだが、文字の光を頼りに手探りで開ける為の取っ手が何かがないかを探す。

「……、あつ……、これかな」

それは扉を開ける取っ手にしては妙に歪な形状をしているが、間違いないだろう。

ひねってみると、砂が擦れるような音を立てながら回った。これで簡単に開いてくれるといいのだが……。

取っ手をひねった状態のまま扉を力いっぱい押す。

扉はゆっくりと、ぎしぎし音を響き渡らせながら開いていく。

足元の辺りで砂埃が舞っているが、長年使われていなかったのだろうか。

(よし……、よく分かんないけど、早くこんなところ……、？
……)

ふと、後ろに何かがいるような気がした。

そう思った直後。

ずるりと、引きずるような音がすぐ真後ろで聞こえた。

ずるずるずるずる、不気味で気持ちの悪い音が部屋に響く。

最初は自分以外の誰かがいるのかと思った。

だがその、水か何かに濡れたようなものを引きずり回すような音は……、

自分とは全く違う何かが、『誰か』ではなく、『何か』がいる事を思わせる。

気持ちが悪い。

扉はもう開いている。早くここから出ればいい。
だが、振り返らなければ、何なのかを確認しなければいけないよ
うな。
そんな気がした。

…ただ降り返るだけなのだ。
ただそれだけの事なのだから。

… 「……………ひ…いつ……………!？」

それを確認してしまった事を後悔する。
不気味な何かがあるのかもしれないというのは分かっていた。
ただ『それ』はあまりにも、

「……………う……………」

それは、一応は人の形をしていた。

両目は血のにじんだ包帯のようなもので目隠しをされていて、首には血の滴る赤い首輪が。

異様なまでに伸びた長い黒髪、下半身のぐずぐずの肉塊は、引きずるような不気味な音の正体。

異常に白く、異常に長い腕

そして、銀色の輝きと、あの不気味な文字と同じ文字が刻まれた、綺麗で、大きな天使の羽。

天使？この化け物が…？

……………化け物が、血がごぷりと流れ、溢れ出す口を大きく開き、女性のような甲高い声でうめくと、

「っ……………ああ……………！？何で……………！」

扉は轟音を立てて勢いよく閉まってしまった。

大慌てでもう一度取っ手をひねろうとも、びくともしない。金属音がぶつかりあう音が響くだけだった。

「何で…！？何で閉まっちゃうの…！？…開いてたじゃない、さっきは開いてたじゃない、勝手に閉まんないでよ、開いてよ…！」

何が起こっているのか何一つ理解出来なくなった少女は、声を荒げ扉を乱暴に叩きつけ、蹴り飛ばす。言う事を聞かない開かない扉。もはやただの壁でしかなかった。

あああ、振り向くんじゃなかった見るんじゃなかった、さっさと部屋を出ていれば…！！

（どうすれば…、どうすれば…、こいつをどうにかしないと…）

どうする事もできない。蹴る殴るくらい繰り返していればそのうち死んでくれるかもしれない。

だが、それが出来ない。怖くて、あまりの恐怖で、触れたくもない近付きたくもない。

そもそも体が動かない。怯んでしまって足が言う事を聞いてくれない。

…化け物は右腕を、嫌な音を立てながら振り上げた。
その振り上げた腕を物凄い勢いで壁に叩きつける。
そしてその腕は、

「……………っ!?!?」

少女に向かって振り下ろされようとしていた。

「っ、ひっ……………」

転びそうになりながらもその場から走り、逃げる。
他にどこか出口のような、扉のようなものはないのか。
探しても探しても。

そんなものはどこにも見つからなかった。

化け物は長い腕で体を引きずりながら少女の後を追いかける。

(いやだどうしようこのままじゃ……………、何か、何かないの!?)

大粒の涙をこぼしながら部屋を見渡す。

何も無い。こんなおぞましい化け物を殺してしまえるような物など
ない……………。

何も……………、

(何も……どうする事も……? ……いや、何か…出来る……
……出来た、筈)

こんな状況で、まず人が一番手にしたいと思うものは?

この化け物を殺す事が出来る道具だ。 武器だ。

その武器が、今、無い。 ……いや。

ある。

あった、はず。

それは何だったか。

よく、思い出して。

(……うん、…あった。忘れてた。私には…武器があるし、戦う
事もできる)

化け物は腕を振り上げては叩きつける攻撃をやめ、今度は少女に飛びかかる準備を始めた。

少女の方は、今度は今までのように逃げ惑うような事はしない。

飛びかかるうとしている事には勿論気付いている。それでもその場から動く事はなかった。

ただじっと、化け物を見つめている。

(…大丈夫、思い出したんだもの。…大丈夫だよ)

長い腕を床につけ、体を押し上げ、化け物は飛び上がった。

それでも少女は動かない。ただじっとしている。

飛び上がった化け物は、その醜い容姿からは想像できない、銀色の輝きを放つ羽をはばたかせ、少女へ接近する。

急接近し、巨大な羽、長い髪で覆いかぶさり、少女の姿が見えなくなつた瞬間。

その化け物は上半身を深く斬りつけられた後、いや、斬りつけられたとほぼ同時に跳ね返され、壁に叩きつけられた。

下半身の肉塊がべちゃべちゃと崩れ落ち、上半身はぐねりと曲がって地へ落ちる。

無事なのは羽だけだった。

少女の両手には、まさしく『武器』が握られていた。

それは少女の身長より若干低い程度の刃の長さの大剣。赤み掛かった銀色をしている。
その頑丈そうで鋭い刃は相手を容易く斬り裂くだろうし、少女を守る盾にもなるだろう。

…こんな武器はさっきまでどこにも無かった筈。

上半を血に染めた化け物はまだ生きているようだ。
しかしもう体を動かす事は出来ないらしい。あれほど暴れていた長い両腕はすっかり大人しくなってしまった。
ただ、代わりに羽をばたつかせている。

「……………」

次第に羽の色は赤と黒を混ぜたような色へと変わっていった。

そして、

「……………つえ…」

不気味で醜悪な化け物は、いつの間にか少女のすぐ目の前へと現れ、少女の両腕を掴んでいた。
何かを小声で囁き続けているが、全く聞き取れない。

「っ、」

すると突然、少女は激しく咳き込み始めた。

その激しい咳はいつまでもいつまでも止まってくれない。

(何……、何！？胸が苦しくて、…痛い……、いた、い……、
……え?)

痛みと同時に、胸の辺りに温かいような、何かが伝う。

「う………、ああ………!？」

足から力が抜け、腕を掴まれたままがくりとその場に崩れ落ちる。
胸の辺りが、服が赤くにじんんでいた。

分かる、血だった。

赤い染みはどんどん広がっていく。痛みも苦しみも増していく。

「……………」

そして、意識が薄れていく。薄れていく度に痛みも苦しみも分からなくなっていく。

さうじ。

なにか、胸の辺りで。

潰れたような音がした。

2話 夢ととまじ始まる？

「……………え」

体が温かい。

光が入ってきていて眩しい。

…布団の中だった。

(…………あ…………あー…………えっと…………)

胸の辺りを見してみる。

赤い血の染みなどついていない。

痛みも苦しみもない。

何も、ない。

目を瞑って。

大きく息を吸い込み。

深呼吸…。

目を開く。

「……………うん」

全部。全て。

「…夢？……だったって事？」

少女はきょとんとしていた。

さっきまで実際に起こっていたと思っていたあれが、

「……………全部、夢でしたかー……」

こじが。

この布団の中が現実の世界である事を確信する。
さっきまでのあれは、夢の世界であつたと確信する。

少女の心は一気に安心感で満たされた。

もう一度深呼吸。

布団の中、ベッドの上は何も変わらない。

あ
(夢、だったのかあ……、……いやでも、あの痛さは本物だったなあ)

更に深呼吸。

あの不気味な天使の羽の化け物はもうどこにもいない。

少女の胸も血に濡れていない。

あ
(何だったんだろなあ、妙に生々しかったし……まあ……いいや別に……)

ぐっと背伸び。

ベッドから降りると、少女はカーテンを引いて窓を開けた。

眩しい朝の陽ざし。

やわらかな風が少女の髪を靡かせる。

肩につくかつかないか程の長さの黒髪。たまには伸ばしてみようかとも思った。

しかしいざそうしてみると少し恥ずかしくて、すぐに切ってしまう

た。

「…ふう」

少女の名はシェルト・ハーヴァネスト。あまり好きな名前ではないらしい。

窓の外は、空がすぐそこにあつた。手を伸ばせば雲にさえ届きそうな程近い。

ずっと向こうには、豆粒ほどでよく見えないが、いくつかの建物らしきものが空を浮遊している。

浮遊している、というよりは、浮遊している歯車のような巨大な台座に乗せられている、というような感じだ。

それと同じものがずっと遠くにいくつか浮いている。

機械と魔法で栄える巨大都市『レーヴ』。

常にあらゆるものの中心となり、あらゆる技術が詰め込まれた、あらゆる輝きを持つ、皆が憧れる夢の街。

そんなレーヴでは巨大歯車の上に建物が乗せられ空を浮遊しているなどという事は、ごく普通でごく自然、実に当たり前な日常風景なのだ。

あの巨大な歯車はただの機械ではない。機械と魔法を組み合わせる技術により浮遊する事が出来る。

その歯車の上に建物が乗っているのだ。

シェルトのいる、この場所もそうである。

「あー…、もうそろそろ準備しないと……………ん？」

…何か、向こうの方からやたら甘ったるい匂いがしてきた。
窓の外からではないようだ。部屋の中からしている。
一体どこから…。

「しえーるーとーちゃんっ」

「ひいつ!？」

突然背後から名前を呼ばれ、驚いて声を出してしまう。

いつの間に現れたのか。いつからそこにいたのか。

シエルトの後ろには小さなリボンが似合う可愛らしい少女が。

そんな少女の片手には皿の上に乗せられたやや小さめのホールケーキ…、

甘ったるい匂いの犯人はどうやらこれらしい。

「シエルトちゃん今日お寝坊さんだったねー。あ、ケーキ焼いた
んだけど朝食にどーぞっ」

「お断りします」

「あひゃー」

朝から朝食に苺とホイップクリーム祭りのホールケーキキって。
それってどうなのだろう。

「そんな事よりイヴェル、こんなのにびりしてたら遅刻しちゃう
よ」

「あ、そーだね！まあ寝坊したのはシエルトちゃんんだけどね」

ごもつとも、と心の中で一言。

イヴェルと呼ばれた少女はケーキに乗せられた苺を一口摘み、冷蔵庫へとしまっていた。

…ここは学生寮。『シエル』という学園に通う生徒達が生活する寮なのだ。

つまりシエルトとイヴェルはその学園の生徒という事である。

3話 夢とともに始まる？

巨大都市『レーヴ』の空に浮かぶ学園『シエル』。

この世界には『魔力』がある。

それは目で見える事は出来ないが、空気のようにどこにでも漂っている。

人はそれを目で見える事が出来なくても、操る事は出来るのだ。

操る事自体はほんの少し練習すれば誰にでも出来る。何の役にも立たないようなほんの小さな魔法なら誰にでも出来る。

普通の学校では学ばない、あらゆる大きな魔法を扱う為の魔力の操り方。

魔力を使って人々や世界の役に立つ技術を学ぶ。

それが『シエル』である。

中央に花瓶が置かれた円形のテーブル。
そのテーブルの席にシエルトは座っていた。

いくつもの大きく背の高い本棚が、いくつもの列を作って並んでいる。

壁にも覆い尽くす程の大量の本棚が沿って並んでいる。

…ここは図書室だ。生徒や教師達が常に利用しており、かなり広いといっても、大半は本棚で埋め尽くされているが。

本のジャンルは非常に豊富だが、魔法関連や歴史関連の書物が多い。学園の生徒達はここを頻繁に利用しているが、シエルトはほんの3〜4回程しか使った事がない。

調べ物は苦手だが読書は別に嫌いではない。読む本の内容の問題だった。

彼女は、読書といっても漫画などの類しか読まない。小説も、図書室にあるような堅苦しい内容のものは殆ど読まない。

そんなシエルトが今日は大真面目に本を数冊持って来て何やら調べ物をしていた。

普段、誰も借りないような、分厚く細かな文字が詰め込まれた本。時折解説として載っている白黒の写真は意味の分からない図形。

勿論、シエルトはこの本の内容を一切理解していない。何を読んで

もどこをどう読んでも頭に入らない。
しかし意味もなくただ適当にページを捲っているのではなかった。
ちゃんと理由はある。

それは今朝見た夢の事についてだった。

目が覚め、夢だと分かった時は安心感に包まれていて「別にどうでもいい」という感じだったのだが…。

時間が経つにつれて、あまりにも生々しくリアルで、本当に本物のようだったあの夢が奇妙で不気味に思えてくるようになった。

気味の悪い天使の羽を持った化け物に襲われた時の恐怖も、その化け物を斬り裂いた時の感触も、胸が激しく痛み出した時のあの激痛と息苦しさも、

胸から血が溢れてきたときの生ぬるさも…。

思い出そうと思えば、鮮明にはつきりと確実に思い出せる。

夢の中の出来事のような曖昧さが無い。

現実なのか夢なのか、全く区別がつかないほどにリアル。

もしかしたら本当にただの夢なのかもしれない。

それでも気になって仕方がない。

夢に出てきたあの空間、記号のような奇妙な文字。

そして目には包帯、長い髪と長く白い腕、肉塊の下半身、天使のような銀色の翼を持った恐ろしい化け物。

流石にそれと同じものが実在している事はないかもしれない。

ただ、それと似たようなものがないかどうか。

それが気になり、こうして調べ物をしていったのだ。

だが…、

(見つからないという以前に……どう調べたらよいものか)

魔法関連や歴史関連の書物が多く揃うこの図書室ならば、あの文字に似たようなものを見つけれられると思ったのだが…。

それっぽい雰囲気のある本を見つけて見てみても、見当外れなものばかり。

あの化け物については全く何の本を見ればいいのかさっぱりだ。内容を見ても全く理解出来ず、理解しようという気すら起こらない。読む気にもならない。

何だか頭痛がしてきたような気がする。

「はあ……だめだ、もうやめよう」

結局分かった事は何一つなかった。

これ以上調べてもきつと何も分からない気がする。

もうあれは全てただの夢だったと。

そついう事にしよう。気にするのはもうやめよう。

少し疲れた顔で、シエルトは図書室を出た。

4話 夢とともに始まる？

「シエルトちゃん：大丈夫ー：？」

昼休み。学園の中庭のベンチに、シエルトとイヴェルの姿があった。ここは休み時間になると生徒達が大勢集まり会話に花を咲かせている。

そんな中、イヴェルは心配そうに「大丈夫？」と繰り返していた。シエルトの右肘には擦り傷のようなものができていた。イヴェルはそれにたいして心配しているようだ。

それは授業中の事だった。

授業、といっても席についてノートやら教科書やらを広げてやるようなものではない。

もちろんそうだった授業も普通にあるが、先程まで行われていた授業は戦闘技術を学ぶもの。

魔力を操り、魔法を扱う。

魔力を操り魔法によって武器、『アルム』と呼ばれるものを呼び出す。

シエルトがああ夢の中でいつの間にか手にしていた武器もアルムである。

シエルではそのアルムを使った戦闘技術の授業が行われているのだ。シエルトの相手をしていた戦闘技術科の教師のほんの小さな攻撃を、普段なら容易く防ぐ事ができるのだが……。どうにも夢の中での化け物との戦闘の光景を思い出してしまい、集中出来ずにいた。攻撃を防ぐ事そのものを忘れてしまっていて、慌てて避けた時に肘を掠ったのだ。

「痛そうだけど……平気なのー……？」

「うん、全然大丈夫だよ。ていうかほら、私が悪いんだし……」

イヴェルは手当をするから、と言っているのだが、シエルトはそれを断っていた。

手当をされる事を格好が悪い風に思っているのだ。

「それにしても、授業中ずっとシエルトちゃんぼーっとしてたねえ…、今日も珍しくお寝坊だったし」

「うん…、えっと、まあ、ねえ…」

夢の事を言っつもりはなかった。その理由もまた、何か格好が悪い気がするから。

そんな夢の出来事を気にして怪我をしたなどと言ったら笑われるに決まっている。

シエルトはいつも、そう。

笑われるから、格好が悪いから。そんな事ばかり気にしていた。

その日の夜。

シエルトとイヴェルは寮へ戻る途中だった。

もう9月も終わり。昼間はそうでもなかったが、夜になると冷たい風が吹くようになる。

「あひゃー、最近夜は寒いねえ」

肩を震わせ、イヴェルがそう言った。

夜空には無数の細かな星が輝いている。

空を浮遊するこの学園では、本当に星空がすぐそこまで迫ってきているように見えた。

手を伸ばしても届く事などないのだが。

…すると、遠くの方から何か歌声のようなものが聴こえて来た。
何人もの歌声。

「…あ、これって」

どこかで聞き覚えのあるその歌声達は、合唱団の生徒達のものだった。
遠くの方からかすかに聴こえてくる。

「シエルトちゃん、ほらっ。もうすぐ記念祭だから！」

「…あ、そっか…。そうだったね」

もうすぐシエルでは創立記念祭が行われる。

記念祭では毎年合唱団の生徒達が歌を歌うのだ。

今年も歌うのである。どうやら練習をしているようだ。

ただシエルトは、ほんの少しだけ記念祭が憂鬱だった。

5話 記念祭・前夜

あの不気味な夢を見てから何日か経つ。

まだあの生々しい感覚は多少残ってはいるが、じょじょに記憶から薄れつつある。

たかが夢に気にし過ぎていた。何冊も本を使ってまで真剣に調べていた自分がなんとも馬鹿らしい。

あれ以来、あの夢を見たという事もない。

あれはただの夢だったのだ。

最初から気にする必要など何もなかった。

(そんな事より……………記念祭、明日か)

毎年行われる創立記念祭が、明日開かれる。

といっても今はもう夜だ。明日までは後ほんの少ししかない。

記念祭は授業を終えた夜に開かれる。

生徒達は皆、浮かれた様子で落ち着かないようだが、シエルトはさほど楽しみにしている風ではなかった。

(苦手なんだよなあ…、あの空気…)

別に賑やかな場所が嫌いというわけではない。むしろ好きだ。

…賑やかな場所を遠くから眺めているのが好きなのだ。

賑やかな場所に自分が加わるといふ事が苦手だった。

小さい頃からそうだった。

近くで祭りが開かれているのを見かけて、それを遠くから見ている時は楽しい。

楽しそうな人達を見ているのが楽しい。賑やかな様子を見ているのが楽しい。

ただ、いざその祭りの中へと入ると、どうしたらいいのか分からなくなる。

どんな顔をしていればいいのかわからなくなる。

はしゃぐのは何だか子供っぽい。昔から自分は子供っぽいと言われている。

それが嫌で『子供っぽくない』風に振舞っていたら、はしゃぐ事が苦手になっていた。

…賑やかな場所に加わる事が苦手というよりは、その場所に加わった時の自分が苦手というべきか。

(ああいう場所では、イヴェルは凄くはしゃぐ。それを見ているのは楽しいんだけど…)

ああ私は暗い、と溜息を一つ。

「しえーるーとーちゃんっ!!」

「…ひいつ!？」

突然背後から名前を呼ばれ驚く。

…イヴェルだった。

前にもこんなやり取りをした事があった気がする。とつかいつもしている。

ぼーっとしている事が多いシエルトは、彼女に後ろから名前を呼ばれる度に驚いているのだ。

イヴェルもそれを知っているので、わざと驚かしているところがある。

「ねーねーシエルトちゃん、見て見てこれっ」

「……?」

イヴェルの差し出した両手には、真っ赤な花が何本か植えられた小

さなプランターが乗せられていた。
だが…

「かわいー花でしょー？」

「……………うん？」

その花はまるで生きているかのようにぐねぐねと動き、花びらからは不気味な呻き声と紫色の煙が出ている。
形状は花そのものだが、それなのに花とは到底思えない。

「……………これは」

「これねー、フォーリーの花なの！」

この世界に漂う魔力に命が宿った存在。

それが『フォーリー』である。

フォーリーの花は基本的に奇怪な姿をしており、改良され綺麗に整えられていない限りその花を好む人は殆どいない。

「だけどね最近、元気ないんだよねー。なんか病気しちゃってるみたいで…、今治療中なんだー」

「…えっと……………そうなんだ…？早く治るといいね……………」

「うんっ。あ、私先に部屋帰ってるね。ばいばーい」

笑顔で手を振るとプランターを大事そうに抱え、イヴェルは走って行ってしまった。

「かわいいの……………？あれが……………え？あれが？」

分からない。さっぱり分からない。

彼女は凄く良い子なのだが、変わっている所はとことん変わっている。

そしてよく分からない。全く分からない。

「…はあ。こんな時間だし、私もそろそろ寮に……………？」

ふと、後ろを振り返ると。

一人の少年が物影に隠れているつもりなのだろうが全く隠れていない状態でこそそこそとこちらを見ていた。

周りに何人か人はいるのだが、その少年の視線は明らかにシエルトに向けられていた。

6話 記念祭・前夜 - ?

隠れているつもりで全く隠れられていない少年の視線。

奇妙に思ったが、無視をする事にした。不審な行動を取る奴は相手にしないのが一番だ。…と思ったからだ。

しかし、

「……………」

こちらが行こうとすると少年も慌てて動き出す。

止まれば、少年も止まる。…あとつけるつもりなのだろうか。

というか今までつけられていたのかもしれない。気が付かなかっただけで。

仕方が無い、そう思い、

「……………なあに？」

と、シエルトは少年に声をかけた。

少年はまさか話しかけられるとは思っていなかったらしく、シエルトにじとりと睨まれると肩をびくりと震わせる。

その怯えた表情はいかにも気弱そうだ。

「何か用なの？」

「……………え…つと、……………あ、の……………」

どうしたらいいのか分からない様子で少年は困ったようにおどおどとしている。

何か用があるのなら、それを言えればいいだけの事なのに。

(……………?……………なんか)

妙に自分の腕を見られている気がする。特に右腕を。

シエルトの右腕には、どこか安っぽい感じのある銀色のビーズのブレスレットがつけられている。

こんなものを買った記憶も貰った記憶もないのだが、何故か小さい頃から身に付けていた。

なくてもあっても構わない物だが昔から持っている物だし、せつかなのでつけているのだ。

「用がないなら私行くけど……………」

「あつ……………！あのっ……………、ごめんなさい僕、用、というか、用はないんだけど……………！いや、あるようないようない……………なんだけけど……………」

「……………?…?…」

ようやくまともに喋ったと思っただけだと言っている事がまるっきり理解できない。

用は無くて、やっぱりあるような気がするが、ないような気もするとは一体どういう。

「ええつと……、君って」

…シエルトは、この少年の顔にどこか見覚えがあった。
確か…、

「……君、もしかして隣のクラスの？なんかフィリーとかって呼ばれてる…」

「あ、うん……。えつと…僕はフィリップっていうんだ」

そういえば、そんな奴が隣のクラスにいた。

優しい性格とかなんとかで一部の女子にそれなりに人気があるらしいが、また別の女子達にはよく遊ばれている、とか。

頭は悪くないらしいがどこか間が抜けていて気弱で頼りない。あと怖がり。

つまり情けない。

「あー、へたれ君ねえ……」

「…え、ええつ!?!」

まさか突然そんな事を言われるとは思っていなかった彼。
フィリップは「しっぴかりしなきゃ…」と涙目状態だ。

「で、結局何なの？用はあるの、ないの？」

「えっと……………ですね、……………ああえっと……………、ごめん、うん、やっぱり何でもないんだ……………」

「はあ……………そう……………、……………ん？」

気が付くと、何故か周りにいた何人かの人達が慌てた様子でその場を立ち去ろうとしていた。

それと同時に、眼鏡を掛けた一人の少女がこちらへとやって来る。

「…ありやりや委員長さん？」

「そうです、私です」

「あらー……………」

なんか眼鏡が光った気がする。

フィリップは何が何だか分かっていないらしいが、シエルトは他の生徒達と一緒にこの場を立ち去らなかつた事を後悔する。

まさか彼女がやって来るなんて思いもしなかつた。

…明日の記念祭の準備は基本的に実行委員の仕事だ。

他の生徒は手伝いたければ手伝うという感じである（ただ先生から指示が出れば皆準備をやらされるが）。

今年是他の生徒達が手伝いに来るといふ事が殆ど無い状態らしく、「怠慢が過ぎる、嘆かわしい」とかいう感じで委員長が暇そうな生徒達を見つけては捕まえて手伝わせているらしい。

つまり先程周りの生徒達が去って行ってしまったのは、委員長が近付いてきた事に気付き見つからないうちにさっさと逃げてしまった、

というわけだ。

「貴方達、そんな所で下らない立ち話をしている暇があるのなら、記念祭の準備を手伝いなさいな」

また眼鏡が光った気がする。

一度この人に捕まってしまったらもう逃げられない。

委員長はしっかりとシエルトとフィリップの腕を掴み、逃がさないと
言わんばかりの表情で威圧する。凄い。眼鏡がキラキラしてる。

二人は何も言う事が出来ないままずっと連れていかれてしまっ
た。

7話 記念祭・前夜 - ?

記念祭が開かれるのは、綺麗に手入れされた紅や桃色、紫や純白などの薔薇達が咲き誇る石畳の庭。

記念祭に限らず何か行事がある時は、決まってその庭で行われるのだ。

「…えーと、本当にやらなくちゃだめ？」

「だめです」

鋭い目つきで眼鏡を光らせてくる委員長。

言われた事は何でもやってしまうのか、フィリップは進んで手伝いを始めている。

…何だか面倒くさい事になった。

(…：…なんていうか、わざわざ私達が手伝わなくて)

記念祭の準備をしているのは、厳密にいうと実行委員の生徒達だけではない。

きちんと言う事を聞くよう訓練されたフォーリーが生徒達の補助をしている。

シエルトから見れば、手伝いはもう充分なのではないかと思う。

…何だか扱きを使われているように見えるが、フィリップはやたら楽しそうに、嬉しそうに手伝っていた。

すっかり暗くなった夜の空の下。

庭にはいくつか灯りがあるが、それだけでは少し暗く足元が見えに

くい。

しかしそんな事に苦戦する事なく準備は順調に進められている。…
フォリーの体が、暗闇の中で発光しているからである。
そのフォリーの近くにいれば、十分な灯りを得られるのだ。

(イヴェルの持ってた花のフォリーよりは、こっちの方がずっと
可愛らしいよなあ)

ここにいるフォリー達は皆小型サイズ。目はくりくりしていて、よ
たよたと一生懸命荷物を運ぶ姿はなんとも愛らしい。
ただ、手だけは妙に人間っぽく、腕があり五本指があり、それはち
よっとアレなのだ。

(……ああ、私もやらないと委員長さんに怒られる)

仕方なく、渋々手伝いを始めようとした、その時だった。

後ろの方で。

…どさりと、何か重い物が落ちたような、そんな音がした。
何かと思い振り返ると、

「シエ、シエルトさんっ………」

地面に落ちた、割れた眼鏡とその破片。
転んだのか何なのか。地べたに横たわる委員長の膝は擦り剥き血が
出ている。

………転んだ？いや………

「………シエルトさんっ………危ないです………！」

何か光るもの………

体を発光させた『フォーリー』が。

シエルトを目掛け走り出し、鋭い牙を向けていた。

「……っ……、……」

反射的にその場に座り込み身を屈めていた。

……だが、何も無い。

飛び掛かられ相当の怪我を負う事を、今の一瞬に覚悟したというのに。

シエルトは血の一滴も流してはいない。襲ってきたフォリーの何があつたのか。

おそろおそろ顔を上げると、

「……ファイ、リップ……」

刃の先端が歪な形状をした細身の剣が、フォリーの腹を貫き血を滴らせていた。

……剣の柄を握るのは、ファイリップ。

その剣は、ファイリップの操るアルムだった。

「シエルトちゃん、大丈夫？」

「……え？……あ、……ああ、うん…………だい、じょうぶ」

…驚いた。
情けなくて、気弱な彼に。
まさか。

まさかこのフィリップに助けられるなどと、夢にも思わなかった。

「うわっ……………っ」と

突然、腹を貫かれたフォリーが暴れ出す。

素早く剣を抜きフォリーの体を蹴って、その勢いで出来るだけ距離を離れた。

…だが、平常心を装っている風に見えて、恐怖からかフィリップの足はかすかに震えていた。

距離を離し地に足を着けた際、少し体勢を崩してしまった。

勿論、フォリーの狙いはフィリップへと向けられる。

「…何やってるんだよ」

シエルトは溜息を一つ。

…体勢を崩し隙を見せてしまったフィリップに向かって走り出そうと、足を前へ大きく振り出したフォリーは、

真っ赤な血飛沫を上げ、空へ。夜空へと舞っていた。
頭と体を分かちながら。

フォーリーを斬り裂いた、赤み掛かった銀色の刃は、夢の中でシエルトの両手に握られていた大剣。
剣…とはいっても、フィリップの細身の剣と、シエルトのほぼ身長程もある大剣では大分違った。

宙を舞っていた頭と体はべちゃりと音を立てて地に落ちる。
もう動く事はない。

周りにいた生徒達は皆一斉に安堵のため息を漏らす。
フォーリーが斬り裂かれた光景を、フィリップは呆然と見ていた。
そんな彼にシエルトが何か声を掛けようとした時だった。

「すっっ…ごいよ、シエルトちゃん!!」
「……………はあ?」

フィリップは爛々と目を輝かせていた。

「凄く大きな剣で、フォーリーを宙にバーンって感じで……うん、格好良かった！」

…返答に困ってしまった。

格好良かった、などと言われたのは初めてだった。

嬉しいのか恥ずかしいのか困っているのか自分でもよく分からない。

「…大袈裟。あんなの普通でしょ。まああなたが私を助けたのに驚いたんだけど」

「あ……あはは……。最後しくじったけどね。結局助けられちゃったし……ありがとう」

「……ん……。……あ、そっいえば委員長さん！」

「私はここにいますか？」

割れた眼鏡を掛け、彼女はそこに立っていた。

怪我の方もたいした事はなかったのか、普通に歩いている様子だ。

「わあ……委員長さん意外に丈夫？我慢してない？」

「たつたあの程度の事で、この私がかたばるとでも？甘く見ないで頂きたい」

割れている筈の眼鏡がざらりと光った。
痩せ我慢などではなく本当に平気でびんぴんしているらしい。

「しかし、今まで私達の言う事を従順に聞いていたフォーリーが、突然襲ってくるとは」

シエルトは地に落ちたフォーリーの無残な死骸を見る。
息絶えてもその体は薄暗い中で発光していた。

「……ああやって光ってるの、元からじゃないんでしょ？」

「ええ、確か訓練の際、暗闇の中で発光するよう改造を施したと聞いていますが」

「……多分、だけどさあ。そういう自然のものに無理矢理人の手を加えるから、いきなり暴走したりするんじゃないかなあ、と」

「……なるほど。確かに我々人間も、訳の分からない薬を飲んでたりすれば、いずれはおかしくなるでしょうしね」

委員長は納得したように頷く。

「…改造を施され、人間の扱いやすいように作り変えられたフォーリーは大量にいる。」

そして、そんなフォーリーが突然予測出来ない危険な行動を取ったり襲ったりするという事は、時折ある事なのだ。

彼らだって人間ではないが同じく命はあるし、感情もある。
体の中に得体のしれないものを入れたりしたら。
おかしくなるのは当たり前なのかもしれない…。

「さて……今日はこの辺にしましょうか。大分遅くなってしまいましたし」

結局、あの後シエルトとフィリップは最後まで手伝わされた。

あの後も何人が委員長に捕まり連れてこられた生徒がいる。まだ準備は終わっていないが、後は明日のうちに実行委員がやればすぐに終わってしまうだろう。記念祭は夜。いくらでも時間はある。

「シエルトちゃん、お疲れ様」

「……ああ、うん。……その、なんていうか」

小さな溜息を一つ。少し間を開けてから、

「…さっきは助けてくれて、どうもありがとうございます」

小さな声でぼそりと言った。何故か敬語になっているが。

「えっ？…あはは、うん、どういたしましてっ」

「あとそれから」

「…？」

「男の人に『シエルトちゃん』て呼ばれるの、苦手なんです…」

「あ、そうなんだ…じゃあ何て呼ぼうか？」

シエルトは少し考える。『ちゃん』付けは、女の人に言われるのはいい。イヴェルも『シエルトちゃん』と呼んでいる。

…他に何か。

呼び捨ても呼び捨てで何か考えてしまう。

フィリップとはまだ会って間もないのだから。

「しえ…………シエルト『さん』？とか…」

「『さん』付け？あはは、今更それも違和感あるかなあ」

フィリップも考える。

そしてすぐに何か思いついたような顔をした。

「じゃー、『シエルト』で、いいよね？」

「…えっ!?!?…は……………呼び捨て?」

「『ちゃん』とか『さん』とか付けるよりも呼びやすいしね。うん、決まり!」

会って間もないのだからと躊躇っていた呼び方をされ、少し戸惑い気味。

別に悪い気もしないのだがなんとなく妙な気がする。

「…あれれ?嫌だった…?」

フィリップが不安そうな顔をしてこちらを見ている。

嫌というわけでもない。ただ少し変な感じがしただけだった。

「……………別に、いいんじゃない。それでも」

シエルトがそう言うと、フォリップは「よかった」と笑った。

夜空の下、それぞれ自分達の部屋へと帰っていく生徒達。
そんな彼らの心は明日の記念祭を待っていた。

8話 創立記念祭

日もだいぶ落ちた夕方。

学園内は普段よりも賑やかで、生徒達は落ち着かない様子だった。

こんな状態は今朝からずっと続いている。

理由は一つしかない。

「もう皆さんっ！創立記念祭が楽しみなのは分かりますが！ですが！少し落ち着いてくださいっ」

この様子に委員長、リサ・レイトが声を荒げる。割れてしまった眼鏡はすっかり新調されていた。

…そう、今日は誰もが心待ちにしていた創立記念祭の日。準備の方は今朝終えたようだ。

「御下げ委員長だって楽しみにしてるくせにい」

そう言われると委員長は「リサですっ」と言い返した。

『御下げ委員長』とは彼女のあだ名。リサの髪型が御下げだからである。

まあ御下げの生徒など他にもいるのだが…。

「あはは、委員長も大変だねえ」

と、リサの事を見ていたイヴェルがそう言った。シエルトとイヴェルは教室で話をしていた。

昨日のリサの怪我を心配していたシエルトだったが、あの様子を見ると平気そうである。

そしてシエルトは今日まで委員長の名前をすっかり忘れていた。

…すると、黒板の前でたむろっていた女子生徒達が何か騒ぎ始めた。

「ねーねー、記念祭、きつとクロード先生もいるよね？」

「いるんじゃない？お話出来たらいいねー」

それは女子達の何気ない会話だったが、ふと、シエルトは疑問に思う所があった。

「…ねえイヴェル。クロード…なんて名前の先生、いたっけ？」

一応、この学校の先生の名前は全員把握しているつもりである。それでも人数が多い為、忘れてしまった人も何人かいるかもしれないが。

ただ『クロード』という名前は聞いた事がない。

「あれ、シエルトちゃん知らない？クロード先生ってねえ、えー

と…、確か一ヶ月くらい前に新しく来た先生なんだよ」

「へえ…」

「なんかー、格好良い、とか凄く強い、とかで人気あるんだって
ー。特に女子」

なるほど、それで女子生徒達が騒いでいるらしい。

彼女らは常に「誰が格好良い」、「あの人が好きだ」、「あの先生
は強い」などという会話で持ち切りだ。

つい先週辺り前までは隣のクラスの男子生徒の事で騒いでいたとい
うのが。

…シエルトにはそんな話題、ひどくどうでもいい事なのだが。

(ああそれにしても……、……はあ、……ちよつと憂鬱だなあ
やっぱり……)

オレンジ色の夕日と夜の空が少し混ざったような、暗い夕空。

その空は、シエルトの心の中そのものだったかもしれない。

賑やかで楽しそうな人々の声。それに混じって聴こえてくる、合唱団のやわらかな歌声と演奏。

煌びやかな花飾りが施された庭。いくつもの淡い色の灯りが夜を照らす。

創立記念祭は、まさに夢のパーティーだ。

…ただし残念な事に、夜空を飾る筈の無数の輝く星達は、黒い雲に隠されてしまい殆ど見えずにいた。

「あひゃー、シエルトちゃん困ってる困ってる」

あまりにも賑やかで華やかな空気に圧倒されてしまい、シエルトは今すぐにでも部屋に戻りたいという顔をしていた。

それを見て面白がるイヴェル。

「やはり苦手なものは苦手だ。毎年記念祭に参加していても、この空気には慣れない。」

こういうものは遠くから眺めているのが一番好きだというのに……。本当ははしゃぎたいと思っているのかもしれない。そうすればこんな空気、大した事ないように思えるのかもしれない……。

(ああでも…それは無理……。だって子供っぽいもん…)

毎年シエルトは、こうして早く帰りたいと思いながら記念祭を過ごしていた。

「む…ぐ!?!?」

突然、シエルトの口に何かふわりとしたものが押し込まれた。それは何か…甘い…。

「どー?おいしい?私が焼いたケーキっ」

「イ、イヴェル……、……うん、おいし……」

イヴェルは満面の笑みを浮かべる。

……が。

シエルトの表情は、イヴェルが持っていた皿の上に乗るケーキを見た途端、一瞬にして青ざめた。

「……あの……それ……」

「ん？あー、これ？」

ケーキの上に乗せられていた赤い『それ』。苺ではない。そしてどこかで見えた事がある。

……昨日、イヴェルが嬉しそうに見せて来た……

赤くて。ぐねぐねと動いていて。紫色の煙が出ている。

フォーリーの花……

「かわいいーでしょ？ケーキの飾りにぴったりだよねえ。あ、大丈夫。ケーキの中には入ってないからさっ」

ほっと少し安心。

ただよく見れば、このフォーリーの花。
同じものが庭の何箇所かに飾りつけされていた。
昨日準備の手伝いをした時には見かけなかったが……。今朝つけられ
たのだろうか。
遠くの方でその花を、リサが絶賛しているのが見えた。

(分からない……。ああ分からない……………)

「やあ、シエルト」
「……………」

名前を呼ばれ振り返ると、そこにはフィリップともう一人。

黒いロングコートを着た男が立っていた。

9話 創立記念祭？

「あ…ああ、フィリップ」

…突然名前を呼ばれたので少し驚いた。

それから、フィリップと一緒にいるこの男の人は誰だろうか。見た事がない人なのだが…。

黒いロングコートを着たその男は、見た目20代。少なくとも生徒でない事は確かだ。

…シエルトの後ろから、イヴェルがひょっこり顔を出す。

「あれ、フィリップ君？久しぶり〜」

(……………久しぶり?)

『久しぶり』、という事は。

「…イヴェル、フィリップの事知ってるの？」

「うん、まあ前にちょっとお話した程度なんだけどね〜」

フィリップはくすりと笑って、「本当に久しぶりだね」と言った。この二人が知り合いだったのは何だか意外な気がする。

まあ、お互い性格にほんわかつた部分が入っていてどこか雰囲気似ているが。

「…、あつ、シエルトちゃん。ほら、クロード先生って誰？って
言ってたでしょう？この人だよ」

『この人』。それはロングコートを着た男の事だった。
クロードは「初めまして」と会釈する。

「お嬢さんの名前は……シエルト、で…よかつたかな？」

「え？……あ、ああ、はい。……私の名前知ってるんですか」

初めて『お嬢さん』などと呼ばれ、少し返答に間が空いた。なんと
いうか、彼には少し教師というイメージが浮かばない。

「一応、生徒の名前と顔は出来る限り把握しているつもりだ」

「へえ…、凄いですね」

その時。

「きやつ…」

短い悲鳴を上げたのはイヴェル。

…一瞬、轟音と共に空が眩しく光ったのだ。花火などではない。すると今度はさつきよりも小さな音が空に鈍く響く。それと同時に黒い雲が光った。

「……………雷？」

他の生徒達も皆ざわつきながら空を見上げる。

轟音は次第に激しくなり、空も地を照らすように光り始めた。

「……………ああ、神様が怒ると雷が鳴るんだよな」

「……………え？」

ぽつりと、クロードがそう言った。

雷に掻き消されそうなくらい小さな声だったが、シエルトにはじつ

かりと聞こえていた。

『神様』…。

…シエルトの頭の中に一つの光景が過る。
それはずっと忘れていたものをふと思い出したような感覚。
だけどそこは見知らぬ場所。

…雷が鳴り響き。雨が地を打ち。
知らない少女に手を引かれ、知らない道を走っている。
まるで何かから逃げているかのように。
そして少女は突然立ち止まりこう言うのだ。

『また一緒に遊びましょう、約束よ』

……。

「わ、雨が降って来た……」

そのフィリップの言葉でシエルトは我に返る。

気付けば、少し地面が濡れていた。ぽつぽつと冷たい雨が肌に当たる。

皆慌てて建物の中へと入って行った。この様子だと記念祭は中止だろう。

とはいえ時間的にもう終わる頃であったし、シエルトにとっても丁度良かった。

「……………約束？」

その言葉に一つ、思い当たるところがある。

そう、あれは確か。

シエルトは慌てて自室へと戻った。
そして自分が使っている引き出しを漁り始める。その様子をイヴェルが不思議そうに見ている。

(……………、あつた……………)

手にしたのは一冊の古びたノート。
下の方に『シエルト・ハーヴァネスト』と名前が書かれているが、その字は小さかったり大きかったり曲がっていたりと下手なもの。実は、これはシエルトが幼い頃につけていた日記。名前もその時に書いたものだった。
ただその日記をつけていたという記憶はあまり無く、だいぶ前に偶然これを見つけたのだ。
その時にこの日記を読んだ時、内容に少しおかしな部分があった。おかしな、というか、不思議な、というか。

……………日記の途中から頻繁に出てくるようになる『あの子』という文字。
……ある日、自分は『あの子』という女の子に出会ったのだという。そしてすぐに友達になり毎日遊ぶようになった……。

……なのだが、シエルトには『あの子』というのが一体誰の事なのか分からない。

この日記には『あの子』の名前が一切書かれていない。

幼い頃、自分にはあまり遊ぶような友達はいなかった気がする。特別仲良くしていた子などいただろうか？いれば忘れる筈はないのだが…。

日記は暫く『あの子』と遊んだという内容で埋め尽くされていた。だが、毎日書かれていた筈の日記がある日。突然ふつりと途切れてしまっているのだ。

…しかしその途切れた後、何日か日にちが飛び、突然再び始まる。

…シエルトはそのページを開いた。

(…『あの子とやくそくをした。でもどうしてだろう、もうあえない気がする。もうぜんぶ、わすれたい』……………)

そこで、日記は本当に終わりを告げる。再び書かれた様子はない。

「…約束って……………」

脳裏に過った、…あの光景に出てきた『約束』と、何か関係があるのだろうか。

だとすれば『あの子』とは、光景の中にいたあの少女の事なのだろうか…？

10話 生徒と先生とたぶん授業

「あひゃー、寒いさむーい…」

開いていた窓を閉めるイヴェル。

記念祭も終わりを告げ、10月に入ると途端に冷たい風が吹くようになった。

今日は休日。つまり学校が休み。休みといっても生徒達はいつも通り学園内にいるのだが。

イヴェルは休日になると大抵は菓子を作るか花の世話をしている。今日はずつとあのフォーリーの花の具合を見ていた。病気をしていたようだが大分良くなったらしい。

「ごーんなに寒いのに、シエルトちゃん、もしかして外にいるのかなあ…」

今日は少し風が強い。

冷たい風に当たっていると少し耳が痛くなってきた。…それでも構わずシエルトは中庭のベンチで本を読んでいた。小説などではなく漫画の類だが。

(ああ、今日は寒いなあ)

空を見上げてみる。

少し灰色で分厚い雲に覆われていた。

雨が降るかもしれない。…寧ろ降って欲しいと思っていた。

晴れているより曇っていて雨が降っている方が落ち着くし色々な事に集中出来る。

別に勉強をするわけでもないが。

すると、向こうの方から生徒達の騒ぐ声が聞こえて来た。

見ると5〜6人くらいの女子達が誰かを囲んで盛り上がっているよ

うだ。

…誰かを、

(…って、あの真ん中にいる人……記念祭の時の……)

名前が少し思い出せない。

ただその女子に囲まれている男は確かに記念祭の時、フィリップと一緒にいた男だった。

(なんて名前だっけな…、…く…く、……なんか黒っぽい感じの名前)

「、あれ、君、シェルト……」

必死にその男の名前を思い出そうとしている最中に、その男に声を掛けられ一瞬どきりとする。

「…あ、ああ………どじも」

…向こうは自分の名前をすっかり覚えていたというのに。なんだか悪い気がした。

しかし、イヴェルが言っていた女子に人気があるというのはどうやら本当らしい。

こうして囲まれながら歩いているとは相当なものの気がする。ただシエルトには分からない。

この男のどこがいいのかさっぱりだ。…まあ、普段から異性を見てもなんとも思わないのだが。

…女子達は「先生またね」と手を振ってどこかへ行ってしまった。寒いから中へ入ったのか、別の用事があったからなのかは知らないが。

女子達も行ってしまったので、てっきりこの男もどこかへ行ってしまうかと思っていたが、何やらシエルトと話をするつもりでいるらしい。

「シエルト、君の考えてる事を当てようか」

「……はい？」

「俺の名前は『クロード』、な」

「……ああ、そうでしたね」

そう、クロード。確かそんな名前だった。黒っぽい名前ではなかったが、黒はあった。

「……お前ってさ、もうちょっと喋る奴じゃなかったか？」

少しクロードの言っている事の意味が理解出来なかった。
彼の言い方だとまるで以前からシエルトを知っているかのようだ。
実際知り合ったのはつい数日前の記念祭。クロード自身、一ヶ月程前にこの学園に来たばかりだった筈。…イヴェルによれば。
一か月前の自分と今の自分は何も変わっていないと思うのだが。

「……前からこんなんですけどね」
「人間って変わるものだな」

……そんなに一ヶ月前の自分はよく喋る子だったか？よく分からな
い。

「ああそういえば……、この間『リンセルト』って奴と話をし
たんだが……」

『リンセルト』。
その名前を聞いた途端、本のページを捲っていたシエルトの手が止
まった。
一つ、焦りが混じったような溜息をつく。

そう言った後、少し笑った気がする。馬鹿にした風で。

「……………で、そんな事わざわざ私に報告してどうするつもり？……………
…あ、いや…。私から聞いたんでしたっけね」

確かに腹は立ったものの、姉が何と言っていたか聞いたのは自分だった。

そして途中敬語でなくなっていた事にも気付き慌てて言い直す。…
仮にも相手は教師なのだから。

「あー、敬語は使わないでいい。そういうのは苦手だね。……………特別にお前は、今更敬語を使われるとなあ」

「……………はい？私達が会ったの、この前の記念祭が初めてですよね？」

「……………」
「そういうのは気にするな。というか敬語は使っなくなって言っただけ」

どうもさっきからクロードと話が噛み合わない部分がある。
あたかもずっと前から知り合っていたような言い方だ。

「まあ、それでだな。そんなお前の為に、この俺が特別に授業をしてやるうと思っただな」

「.」
「.」

11話 生徒と先生とたぶん授業？

第11回 生徒と先生とたぶん授業？

「授業って……」

「先生に連れられて、学園の外での授業は…何度かやった事あるよな？」

この学園、シエルでの授業は主に学園内で行われるが、先生に連れられ数人の生徒だけで行う特殊な授業も存在する。

…まあそこまで特別なものでもなく、余程成績が悪くない限り誰もがやっている授業なのだが。

シエルも何度かやった事がある。その中の殆どが危害を加える力の弱いフォリーの排除だった。

「ああ因みに拒否権は無い。授業を拒否するってのもあまり褒められたものじゃないしな。余程の理由がない限り俺は認めない」

「……………意味わかんねえ」

そこは列車の中。

線路らしきものは半透明で、奇妙な幾何学模様が点滅している。窓の外にもそれと同じ模様が空中に浮かびあがっている。…列車を制御したりしている何かなのだろうか。

「……で。一体どこに行くつもりなんだよ……」

シエルトが何度そう訊いても、クロードははっきりと答えてはくれない。

いまいち意味を理解出来ぬまま列車に乗せられたのだが、何故かイヴェルとフィリップまでクロードに連れられて来た。

「聞いたよシエルトちゃん、お姉さんに大分厳しい評価を貰ったんだってねえ」

「……なんていうか。成績が悪いつて言われたわけじゃないし。平凡っていうのも地味に傷付くような悔しいようなだけだ」

「なるほど。それでクロード先生がいきなり授業をするって言いだしたわけか。ちょっとでも成績を良くする為に」

この授業にフィリップが連れてこられたのはなんとなく分かる。シエルと同じような成績だとクロードは言っていたから。ただ、イヴェルまで連れられてきたのはよく分からなかった。少なくともシエルやフィリップよりは成績は上である。

「それにしても…シエルってお姉さんがいたんだね」

「……………まあ、私とはかなり違って出来の良い人間だけだ」

シエルの戦闘技術科の教員。

優秀な成績と高い実力が無ければ到底なれるものではない。

「フィリップは兄弟とかいるの？」

「ああ、うん、いるよ。兄が一人。まあ…僕よりもずっと優秀な人だよ」

そう言っつて、少し苦笑いをする。兄弟に対して劣等感を抱くのはよくある話なのかもしれない。

「フィリップ君のお兄さんってさ、騎士団に所属しているんでしよう？ 凄いよねえ」

「……………騎士団？」

シエルトは騎士団と言われても今一何の事だか分からなかった。

騎士団や騎士という言葉そのものの意味はちゃんと分かっているが、騎士団なんてあったかどうかよく分からない。

「あれね、シエルトちゃん知らない？騎士団シユヴァリエっていつてねえ。まあ基本的にレーヴで活動してるんだけど…凄いなだよ」

『騎士団シユヴァリエ』…、聞いた事もなかった。

ただ、フィリップの兄が本当に『凄い人』であるのはなんとなく分かった気がする。

ようやく列車が辿り着いた駅は、全く見知らぬ場所。人も殆どおらず廃れている感じがある。ゴミもその辺りに適当に投げ捨てられている有り様だった。

とてもレーヴとは思えないが、一応、これでもレーヴの中らしい。レーヴの中の、かなり外れの方。

そこから歩いて約一時間程。辿り着いた時にはもう昼を過ぎていた。そこはとても人が来るような場所ではない。

そこは…、木造の住居があり、井戸らしきものがあり…恐らく村なのだろうが、人の姿、気配は全く、一切無い。

それどころか生活している雰囲気すら無い。というか住めない状態だ。

住居はすっかり荒れ果て、壁が壊れ家の中が剥き出しになっているし、屋根も崩れている。

…どうやら廃村らしい。

「こんな所で何するんだか…」

「あひゃー、なんかあ…フォリーとか出そうだねえ」

フォリーは基本的に自然の中で生活しているが、人間がいなくなった廃村などにも住みついている事が多い。

無害のフォリーは特定の場所に留まっている事が多いが、人に危害を加えたりするフォリーはほとんどん行動範囲を広げていく事があるため、時折都市などに侵入してしまう事がある。

…恐らく今回の『授業』は、フォリーの排除…のようなものになる

のではないだろうか。

12話 生徒と先生とたぶん授業？

フィリップがきよろきよろと辺りを見回している。

「でも……いくら外れの方とはいえ、レーヴにもこんな所があったなんて」

レーヴはこの世界の中心となっている巨大な大都市。煌びやかで静けさを纏う事は永遠に無いと言われている程世界中の人々で溢れ返っている。

しかし、ここはレーヴであるという事を忘れてしまいそうな程、輝きの欠片も無い。

時が止まってしまっているかのような無人の世界。聞こえるのは重苦しい風の音だけ。

…朽ち果てた、死んでしまったかのような村。

「…お前達は知ってると思うが、まだレーヴなんて都市が無かった頃、あの辺りはいくつかの村が少しあった程度なんだ。ここみたいな感じのな。まあここは廃村だが…」

…確かにそんな事を授業で習った気がする。その時代は、レーヴの辺りはとても栄えているとは言えない状況だった。ただ、その時代の話だっただろうか。

(…レーヴの中心に建ってる『あれ』………)

『聖神塔』。

レーヴの丁度中心には、そんな名前の巨大な塔が建っている。その塔の中には、戦争の渦中にあつた自分の村を護る為だけに『神』となつた女性が祀られているのだという。つまり、聖神塔の中には神様がいるというのだ。

「……………ねえ、クロード……………先、」

「おいおい、『先生』なんて付けるなよ」

「……………はあ？」

「敬語を使うな」の次は「先生と呼ぶな」ときた。本当に彼が教師なのか怪しくなってくる。

……………まあ、向こうがそう言うのならシエルトは呼び捨てで呼ぶ事にした。

クロードはフィリップとイヴェルにも同じ事を言っている。

……………先生として見られる事が嫌なのだろうか。よく分からないが。

「で、なんだシエルト。さっき何か言おうとしてたが」

「……………あんたが遮つたんでしょ。それでさ、ほら。記念祭の時……………」

『神様が怒ると雷が鳴る』みたいな事言ってたよね？」

創立記念祭の日、雷が鳴り始めたあの時。

クロードがぼそりとそう言ったのを、シエルトは確かに聞いていた。

「その神様って……………、聖神塔にいるとかってどういう神様の事？」

「…さあ、どうだろうかねえ。まあ…別にその神様がお怒りなられた事にしてもいいけどな」

…彼の考えている事が今一よく分からない。理解出来ない。どことなく胡散臭い奴だと思った。

「お前はその神様とやらの事、どんな風に思っているんだ？」

突然、そんな質問をされ少し驚く。

「どう、と言われても…まあ、村を護る為に神になったっていう、そういうのは凄いんじゃないかなあ、とは思ったりもするけど」

といつても、その『神になった』という部分は何かの比喻表現であるとシエルトは思っていた。シエルトだけではない。

今はそう解釈する人はたくさんいる。ほんの少し前までは皆、本当に神になった、と信じてきたようだが。

「…まあいいや、そんな事より…。こんな所、来たはいいいけど何するの？」

「ん、授業で村ぐらい来た事あるだろ？その時何をしたさ」

「…普通にフォリーを倒したり、とか」

シェルトがそう言つと、クロードは大きなあくびを一つ。

「まあそういう事だから。あとはお前達に任せた」

そう言い、クロードは歩いてどこかへ行ってしまった。

…取り残された三人。

「…え？いや……そういう事ってどういう事だし」

任せた、と言われても何をすればいいのかさっぱり分からない。
まともな説明も聞かされず何が何だか分からないうちにここへ連れてこられた。

というかクロードがいなければ授業にならないのではないか。

13話 廃色の村、灰色の空の下で

どんよりとした雲が空を覆っている。

曇った空の下、訳も分からず取り残されてしまった三人。どうすればいいのかも理解出来ずにただそこにいるしかなかった。

イヴェルはその辺りに咲いていた花を眺めている。時々触ったり話しかけてみたりしていて、実に呑気だ。

シエルトはぼーっとただ空を見上げていた。慌てている様子もなく落ち着いている。冷静だった。ただ、これからどうするのか、という事は全く考えていないようにみえる。

フィリップが一人だけ。…一人だけ、どうも落ち着かない様子だった。

見知らぬ、重苦しい空気が漂う廃村に突然連れて来られ、クロードはどこかへ行ってしまった。

こんな状況でもしフォーリーなんかが見れたら、と思うと落ち着いてなどいられない。

この二人を見ていると、自分だけでもしっかりしなくては、という気分になる。

(ああ……クロード先生、いつになったら戻ってくるんだろう？
僕達に何をしろと……)

とりあえず深く深呼吸。まず自分も、一度シエルトのように落ち着いてみる。冷静でいなければ何があってもすぐに適切な対応を取る事が出来ない。

(ところで…シエルトちゃんはさっきから何を見て……………)

彼女が見上げている方向をフィリップも見てみる。

…空に黒い物が飛んでいるのが見えた。

(鳥…?)

黒いそれは一見すると鴉に見える。ただ尾は1メートル以上はあり、顔の部分は少し赤み掛かっている。鴉にそういう種類がいるのかどうかは知らないが…。

フィリップには何か別の鳥に見えた。

すると、上空を飛んでいたその鳥は突然急降下し、地上へ降りて来た。

よく見るとその鳥に口ばしは無く人間と全く同じ形状の口をしている。

鳥は大口を開けシエルトに威嚇しているように見える。

「わ……、シエ、シエルト、なんかそれ危ない気が…」

シエルトは怖気づく様子もなくその鳥の首根っこを引っ掴み、しげしげと眺めている。

…こんな鳥が、普通の鳥である筈がない。その異様な容姿を見れば分かる。明らかにフォリーだった。

ただ力が弱いせいか捕まえられてもたいした抵抗も出来ずにいる。あまり害はないのかもしれない。

「……………つて…！イ、イヴェルちゃ…ん」

さっきまで花と楽しそうに戯れていたイヴェル。…いや、今でも本人は楽しそうだが…。

花は明らかにさっきよりも大きくなり、何本も生えた長い蔦で今にも首を絞めそうだった。それに気付いているのかいないのか。相変わらずその花に触れたり話しかけたりしている。

その花も見れば分かる。普通の花ではない。フォーリーだった。とはいえイヴェルが大事そうに育てていたあのフォーリーの花とは違う。人に危害を加えるものらしい。

「あー、フィリップ君。凄いやねえこれ、こんな花初めて見たよ

ー」
「……………いや…あの」

思った通りだった。やっぱりフォーリーが出てきた。…花の方は予想していたよりも凶暴そうだ。それと平気で戯れているイヴェルは理解出来ない。

…すると何かふわりとした物が足に触れた。

一瞬驚き慌てて足元を見ると、そこには白い毛の子猫が一匹。か細い声で鳴きながら、フィリップの足に擦り寄ってくる。

「…わぁ、可愛い……………」

その子猫の頭を撫でてやるつと手を伸ばすと、

「……………え」

突然子猫は後ろの方へと大きく跳ね上がり、毛を逆なでながらみるみる体を大きくしていく。耳も異様に長くなり、これでは尻尾の長い兎だ。

(こ…………この村、こんな時まで……………)

…猫のフォリーは立ち上がり腕を振り上げる。どうしていいかわからなくなり動けなくなったフィリップ。
そして、

「……………、……………」

…猫の腕は見事に凍りついていた。

「え、……え!？」

「あははー、フィリップ君大丈夫?」

振り返ると、イヴェルの手には雪の結晶と氷の花で作られたような弓、彼女のアルムが握られていた。

…相変わらず鳶に絡まれ、半分首が絞められ掛かっている状態なのだが。

(……と、とにかく助かった………つて、シエ…シエルトちゃん!?)

シエルトの所にいたあの鳥。さっき見た時は一匹しかいなかった。…いなかった、筈なのだが。

「ねえフィリップ。この鳥なんか分裂したんだけど」

「……いや……それは、ね……」

鳥の数はいつの間にか増え、20匹以上にまでなっていた。…明らかに仲間を呼んでしまったようだ。

(クロード先生もいないっていうのに……!!!)

気付けばフォーリーに囲まれている状態。
こんな状況は、少なくともフィリップにとっては、初めての事だった。

14話 廃色の村、灰色の空の下で？

クロードは木に寄り掛かり目をうつらうつらさせていた。

ここからでは三人の姿は見えない。

…だが向こうの方から大きな音が聞こえる。それだけであの三人が今どつという状況なのかすぐに分かる。

分かっていても、クロードは動こうとはしなかった。

目をうつらうつらさせ、眠たそうにしながら。重く、曇った空を見上げていた。

ぼとり。何か落ちた音がした。

地面には数匹の鳥が転がっている。恐らく死んではない。

それと同じ鳥が何匹かまだ空を飛んでいる。

赤み掛かった銀色の大剣、シエルトのアルムが空へと振り上げられた。

すると空を飛んでいたフォリーの鳥達は、列を作って一斉にどこか遠くへ飛び去って行ってしまった。逃げてしまったらしい。

足元に落ちた鳥達に止めを刺す気はなかった。なんというか、フォリーといえど体は小さいし、力も持っていないしで殺す気にはなれなかった。

彼女の視線は次に、人間と同じ程の大きさにまでなった、あの猫だか兎だか分からないフォリーへと向けられる。

そのフォリーの足元で、フィリップが後退りをしていた。一応、いつ攻撃を仕掛けようか見計らっているようなのだが、足が進まず後退を繰り返している。

「……フィリップ、ちょっと上ぐらい見た方がいいんじゃない」

「……………え？」

シエルトにそう言われ、咄嗟に上を向く。……前方ばかり気にしないで全く気が付かなかった。

フォリーの長かった尻尾は更に長くなり、先端に刺のようなものがついている。それが自分の方向を向いていたのだ。

すると、後ろの方で大きな物音がした。何か大きな物が崩れたような音。

：フォリーはその音に気を取られていた。フィリップはその隙に長い尾の刺の部分を斬り落とす。：が、たいした痛みは感じていないらしい。気を取られたままだった。

：壊れかけていた家が砂埃をたてて無残に崩れて行く。それが音の正体だった。

そこはイヴェルとフォリーの花がいた辺り。崩れて行く木片やら硝子やら瓦やらに、氷のようなものが混じっていた。

「：あひゃー、随分脆かったんだねえ。簡単に崩れちゃった」

砂埃に咳き込みながらイヴェルがそう言った。：フォリーの花に攻撃を仕掛けた際、一緒に近くにあった家まで巻き込んでしまったらしい。

既に誰も住んでいないので：まあ、良いような、良くないような。

：残るは猫のような兎のようなフォリー。

そのフォリーは尻尾の先の刺が斬り落とされた事によく気が付き、それにたいして怒りを覚えたのか、両腕をフィリップに向かって振り上げた。その両腕をどうにかこうにか剣で受け止める。が、力が強く、そう長くはこのままではいられない。

(……………クロード先生は……………まだ……………戻って来ない……………)

：フィリップは、クロードはまだ暫く戻って来ないように思えた。

『お前達に任せた』、そう言ってどこかへ行ってしまったのだ。…
なんとなくだが。

彼は今ここにいるフォリーを全て倒すか、あるいは一人が瀕死にでもならない限り戻って来ないような気がする。

つまり…、今この目の前にいるフォリーさえどうにかすれば、クロードは戻って来るのではないだろうか。…いや……。

(終わってからじゃ遅い………出来れば、今ちょっと助けて欲しい、なあ……)

そう思った時。

突然、自分の両腕がふわりと軽くなった。剣で受け止めていた筈のフォリーの腕が、鈍い音を立ててごろりと目の前に落ちる。

「全く…、ちょっとはフォリーから離れるとかしなさいな」

シエルトの持つ大剣の先からは、赤い血が滴っていた。

彼女の言う通り、一旦距離を置くだとか、そういう事は一切していなかった。いつ攻撃を仕掛けるか、それしか頭になかったから。

…これでシエルトに助けられるのは二度目になる。なんだか情けない。…まあそれは元からだが。

両腕を失ったフォリーは力無く立ち上がると、最後の力を振り絞り噛み付こうと大口を開ける。

だが、折れそうな程細く、透明な氷の矢が。フォリーの首を突き刺し、貫通し。そのまま仰向けに倒れてしまった。

刺さった首の部分はパキパキと鳴りながら氷漬けにされていく。

「あれれ…、頭狙った筈なんだけど……」

イヴェルは、まだちょっと早かったかも、とって考えるような顔をした。

彼女の氷の弓は一度の威力は高いのだが、頻繁に連続して矢を射る事が出来ない。…いや、厳密には出来るのだが、今のように狙った位置と大幅にずれてしまうのだ。

「ええつと……終わった、の……かな」

フィリップは辺りを見回す。他にフォリーらしき姿は見当たらない。

「ねえ……あいつさあ……、まだ戻って来ないのかな」

シエルトの言ったあいつとは、クロードの事だろう。フィリップの予想では今ここにいたフォリーを全て倒したなら戻って来る筈なのだ。

……だからきつと、どこからかひょっこり顔を出すのではないかと。そう思つて、

「……うわわ、フィリップ君、後ろ……っていうか上ー!!」

「……………ふえ」

何事かと上を見上げる。

「……え、……………えええ!？」

「フィリップー、そこから離れた方がいいと思うんだー」

そう言われても、足がすくんで、というか驚愕のあまり動けずじまつた。

……それは、さっきまでいたフォリーの中で、いとも簡単に逃げて行

ってしまった鳥と同じ姿をしていた。

…のだが、大きさが異常だった。

三人を余裕で覆ってしまう程の大きさ。数メートルはある長い尾。真つ黒な翼が、不気味な影を作る。

あの鳥の、いわゆる親玉…だとか、そういう類なのだろうか。

15話 廃色の村、灰色の空の下で？

大きな鳥の黒い羽が、羽ばたく度にあちこち舞う。

「あひゃー、さっきの逃げて行ったのがきつと呼んじやったんだねえ」

フォリーは地に近付く事なく空を飛んでいる。イヴェルは良いのだが、シエルト、特にフィリップの攻撃は届きにくいだろう。

(クロード先生……まだ戻って来ないつもりなのかな………こんなの、どうすれば……)

イヴェルが弓を射るが、邪魔な程舞っている黒い羽に阻まれる。フォリーは右側の翼を地面へ叩きつけた。

ただそれだけで強い風が吹き、バランスを崩しかける。

だがシエルトの大剣は非常に大きい為、強風からシエルトを守る盾となっていた。しかしそれだけではどうしても防ぎきれない。

もう一度、イヴェルは矢を射る。氷の矢は宙で碎け、碎けた破片が更に鋭い氷の刺と化しフォリーへと向かって飛んでいく。

いくつかはフォリーの体に当たり傷をつける事は出来たものの、それだけでは倒せる筈もない。だがその一瞬間、フォリーは少し怯み地へ落ちかけた。

その隙を狙いシエルトが勢いよく斬りつけるが暴れてしまい危うく巻き込まれそうになる。

とはいえ斬られた腹から血を滴らせるフォリーは飛ぶ力を失ったら

しく、地面の近くでゆらゆらと揺れている。
そんなフォリーが無理にでも飛ばうと翼をばたつかせた為、さつきと同じような強風が吹き、近くにいたフィリップは投げ飛ばされそうになってしまった。
その時に足を打ってしまい少し痛む。

「あわわ、フィリップ君大丈夫ー…って、…あひゃー!？」

よけたフォリーが周りの建物を巻き添えにしていく。崩れる建物の下敷きになりかけ、その場を慌てて走り出す。
焦りながらも地面に向かって矢を射ると、矢の刺さった場所から雪の結晶のような盾が現れイヴェルを庇った。

石や木が当たり盾には次第にひびが入り割れてしまったが、その時にはもうイヴェルを襲うものは何もなかった。

フォリーは建物にぶつかっていった為瓦礫に埋もれてしまっている。
だが今にもまた暴れ出しそうだ。

(こんなの……僕達じゃ倒せないんじゃない？……あれ?)

ふと、シエルトの姿が見えない事に気付く。

すると突然どこからか轟音が鳴り響き、それと同時にフォリーのすぐ隣にあった火の見櫓が崩壊し倒れ始めた。

ようやく瓦礫の中から脱出したフォリーを、今度はその火の見櫓の崩れた塔が襲う。今のフォリーに咄嗟に避ける力は無く、そのまま下敷きとなった。

…その近くにシエルトの姿はあった。火の見櫓を倒壊させたのはシ

エルトらしい。彼女の持つ大剣ならばいとも簡単に崩す事が出来る。フォーリーがこの近くまでやって来るのを見計らっていたようだ。ただ下敷きになっただけでは息絶える事はないだろう。少し躊躇いもあつたが…。このまままた動かれては、殺されてしまうかもしれないのは自分達だ。

…シエルトはフォーリーの頭をまつすぐ突き刺す。…もともと赤い顔だったが、そこから流れる血は更に赤く生々しかった。自分でやった事とはいえ思わず目を逸らしてしまう。

…とにかく、もう終わったのだ。
向こうの方からフィリップとイヴェルがやって来るのが見える。

「シエルトちゃん、大丈夫？フォーリーさんやつつけたー？」

「んー…まあなんとか……………ていうかフィリップ足大丈夫？」

さっき足を痛めてしまったフィリップは少し歩き辛そうにしていたが、大した事はない、と笑って言った。我慢しているのかどうかは分からないが。

…と、フィリップが「あつ」と向こうの方を指差した。

「さて、ようやく終わったか。ちょっと時間掛かり過ぎじゃないか？」

一体今までどこにいたのか。

今になってやっとクロードは戻ってきた。シエルトはクロードを睨む。

「随分とタイミング良く戻ってきたな。…今までどこに行っていたのやら」

「そりゃあ、終わるまで待つてたからな。それまでちょっとばかり休憩をしていただけ。けどなかなか終わらないもんだから寝過ぎた気がする」

「…授業云々でここに連れてきておいて、あとはほったらかしだよ」

そういう内容の授業だったんだ、と言ってクロードは笑った。

…最後に現れた大きな鳥のフォリーは、自分達の住処をつくる為にこの村の人々を食らったのだという。生き残った人達ももうここでは生活出来なくなっていた。それが廃村と化した理由だった。

…三人だけで、ここにいる小さなフォリーとその大きなフォリーを倒せるのかどうか。倒す為にはどうしたらいいのか。…というのが授業の課題だったらしい。

本当かよ、とシエルトは相変わらず睨んでいる。人が危険な目にあつて大変な事になっていた最中、クロードは教師でありながら呑気に昼寝をしていたのだ。無理もない気がする。

「まあでも、お前達だけで本当に倒せるとは思っていなかったんだ。一応、二人より幾分か優秀なイヴェルも連れてきたが」

「でも……なんというか。僕達の力で倒せたってわけじゃない気がします」

確かに、結局最後は近くにあった火の見櫓を倒壊させて、どうにかこうにか止めをさした。周囲に利用出来る物がたまたまそこにあつたからどうにかあったのだ。運が良かっただけだったのかもしれない

い。
ただ、その戦い方が悪いというわけではない。自分達の力では勝てないと判断したのなら、出来るならそういった戦法を取った方が良い。

…そう、クロードが言った。

空を見上げる。

シエルトの黒髪が風に靡いた。ただその風はさっきまでの重苦しい風とは違っていた。軽やかで、自然な風だった。

空は灰色から夕日に照らされた眩しいオレンジ色に変わりつつあった。

…夕焼け色の空の下で。さっきの出来事を思い返してみる。

自分はただの平凡だと思っていた。

でも何か違う気がする。強さの事なんて考えた事もなかったが…。

澄んだ風が吹く廃色の村で。…あんな武器を握っただけでも、結局自分は殆ど非力であったと。初めてそんな事を思ったし、考えた。

少しだけ…悔しかった。

16話 神を讃える祭り

空は、星の輝きはあるものの、それでも暗い闇に覆われていた。

高い建物の…屋根の上に、華やかな大都市を虚ろな眼差しで見下ろす一人の少女。

つややかな長い髪が風に靡き、真っ黒なドレスは夜の闇より黒い。

少女の口から力の無い、気だるそうな溜息が漏れる。

虚ろで光を閉ざした暗い赤色の目は、この辺りで一番高い塔を見つめていた。

「……………まだかしら。もうすぐかしら」

少女の姿は今にも闇に掻き消えそうだった。

今日の授業は午前中で終わってしまった。普段は午後、夕方くらいまでだが、先生達の都合が何かで時折早く終わる事がある。勿論こういう日の生徒はいつもより機嫌が良い。放課後どこへ遊びに行くか、そんな話で盛り上がっている。

…大きな噴水の見える柱廊に、シエルとフィリップの姿はあった。イヴェルは朝から先生に連れられてレーヴの外の、別の都市へと行っている。

「イヴェル、一週間後くらいに帰ってくるんだって」

「へえ…結構掛かるんだね。それも授業なんですよ？大抵は半日とか…2、3日とか…だけどね」

紅く色づいた葉っぱが壁の隅に溜まっている。噴水の水面にもいくつかが浮いていた。秋の中頃にもなると風はひどく冷たくなり手が悴むようになる。鮮やかな葉っぱが木の枝からひらひらと落ちてくる。フィリップが寒々しい秋の空を見上げながら言った。

「そういえば…今度聖神塔でお祭りがあるね」

「……創立記念祭が終わったばかりで……また祭りかあ」

聖神塔…、レーヴの中心に建つ巨大な塔。あの廃村の時に少し話に出たが、その塔にはかつて自分の村を戦争から護る為に『神』となつた女性がどこかにいるのだという。勿論誰も見た事などないのだが。

その神の存在はレーヴ…、この世界に住む者なら誰もが知っている事。

そんな聖神塔で行われる祭りというのは、神を讃え、崇める為のものなのだ。

その祭りは大規模で、普段からたくさんの方が行き交い賑やかな大都市レーヴは更に人が増え賑やかになる。他の都市からも人々がやって来るのだ。

「フィリップは聖神塔の祭りって行った事あるの？」

「シエルに入るちよつと前まではたまに行ってたよ。シエルは？」

「私は…」

そこで、シエルトは苦い顔をした。：記念祭の時に分かっている事だ。

「あ…、苦手なんだっけ。お祭りとか」

「まあ…遠くから眺めてる分には良いんだけど…、実際その中にいるってというのがねえ…どうも」

そう言っただけ苦笑した。本当ははしゃぎたいけれど子供っぽく見られるのが嫌でそれが出来ない。結局どうい風にしていけばいいのかわからなくなつて…という、そんな理由なのだが…そもそもまだ14歳、子供といえは子供だ。そんな風に見られるのは仕方のない事。それでもそういう風に見られる事がどうしても恥ずかしく思ってしまう。

「あれ…、シエルト、あそこにいるのって」

フィリップが指差した先には、クロードの姿があった。それともう一人、整った顔立ちの黒髪の女性がいた。二人は何か話をしているようだった。……シエルトの足が止まる。

「ええっと、クロード先生と話してるのって…、確か………って、あ…」

その女性の名前を思い出して、フィリップは思わずシエルトを見る。クロードと黒髪の女性はこちらに気付いたようで、クロードが手招きをした。

…

シエルトは今すぐここから立ち去りたそうな顔をしている。黒髪の女性は「久しぶりだな」といきなりシエルトの頭を撫でた。

「……………姉さん、どういふ事？まさかこんな奴と仲良くなったの？」

『姉さん』、つまり。

この女性がシエルトの姉、リンセルトなのである。

こんな奴、というのはクロードの事。クロードは以前リンセルトと話をしたと言っていた。そしてまたこうして話をしていたのだ…。
という事は、この二人はそれなりに親しくなったのかもしれない、
という事。シエルトは正直言つと…、クロードの事はあまり信用出来な
ないと思っている。

17話 神を讃える祭り？

「いやいやそんな…ただお前達の話をしていただけだ。この前の事だ」

…そうやって話をしているのはつまり結局、親しくなったから、という事ではないのだろうか。

シエルトは『この前の事』が何の事なのか一瞬分からなかったが、その場にクロードがいた為すぐに理解できた。

「この前って…クロードに連れられて行った村の事？」

「ああ。クロードは確実に最後は自分が助けに入る事になるだろうと思っていたようだが…、シエルトもフィリップも…この場にはいないがイヴェルもよく頑張ったな」

いつもなら褒められるとどういふ顔をしていいか分からなくなる。

…が、姉に褒められると、少しだけ口元が緩んだ気がした。もともと村へ行く事となった理由はリンセルトによるシエルトの成績の評価。

決してあまり良い方ではない、そんな評価だったため、褒められると尚更嬉しかった。

…と、表情が少し緩み過ぎたような気がしてシエルトはそっぽを向く。何か少し恥ずかしくて慌てて無表情を装った。

「…そういえば。クロード、この二人に話があるとか言ってたか」

「ん、そうだったな」

リンセルトにそう言われて、クロードはぐつと背伸びをする。

「ここにイヴェルもいればよかったんだがな…、……………聖神塔で開かれる祭りは…知ってるだろ？」

そう訊かれて二人は頷く。聖神塔の祭りはさつきしていた話だ。

「で、まあ面倒くさい事に俺、祭りの警備任されちゃって。その時お前達二人も連れて行くこうと思ってだな」

「あー何でそこで私達が連れてかれる事になるんだい」

シエルトは溜息をついた。この前村に連れて行かれた時、わけも分からずその場に現れた複数のフォリーと戦う事になった。その時クロードはどこかへ行ってしまっていて、大変な目に遭った。…祭りの警備に連れて行かれたはいいが、またおかしな事になりそうな気がしてしまう。フィリップはその時の事を気にする事もなく一緒に行く事を了承してしまった。

「シエルトも一緒に来ようよ。僕一人じゃ不安だし…」

「え……………、…んー……………」

そんな風に返答に困っていると、

「…こいつも行くってさ」

「へ…」

迷っている間にリンセルトが勝手に返事をしてしまった。何か言い返そうとするが勝手に話を進められてしまう。

…安心しきった様子のフィリップの顔を見てしまうと、もう断る事も出来ない気がする。

結局何も言えないまま話は決まってしまったのだ。

そこは七つの巨大なエレベーターがあるホール。いくつもの宝石で飾られたシャンデリア、薔薇の模様の絨毯。壁には大きな肖像画が掲げられている。

シエルの生徒達や、その他の関係者らが大勢行き交うここはシエルから地上に降りる為の場所。つまりエレベーターと地上が繋がっている。

とはいっても地上から見るとエレベーターの箱が上と下を行き来している様子は見られない。何故なら人に乗せた箱はそのまま下に降りるのではなく、機械と魔法の力によって箱は地上にある『昇降機集合所』という場所に移動するのだ。瞬間移動…、のような気もするが、実際地上に到着するには10分程掛かる。

特にシエルは学園である為、生徒、教師など人も多く、休日や今日のように授業が午前中で終わる日などは利用者が非常に多くとにかく混む。そうするとエレベーターが地上に降りるまでの時間よりも、乗れるまでの時間の方が掛かる事が多い。

今日も相変わらず混んでいるが、いつもよりはましかもしれない。

「ああ面倒くさい。なんでわざわざ降りなきゃならないの…」

「下にいる奴に会いに行くには、下に行かないとだろっ」

それはそうなんだけどさ、とシエルは気だるそうに言った。そこにはシエルとフィリップ、クロードの三人の姿があった。

「そうは言っただつてさ、私、その『なんちゃら』っての全然分かんないわけ。誰に会いに行くのかもいまいち分かってないのに移動するのは、ちよっと面倒くさいものでしょう？だからまず説明しろよ」

なんちゃら、とやらの説明を要求するシエルト。三人がここにいるのは、その『なんちゃら』とやらに会う為らしい。少しフィリップが落ち着かないように見える。

「いや、なあ…。普通、名前ぐらいは聞いた事あるだろうよ」

「この前列車の中でイヴェルが言ってた…：ような気はするんだけ

どぞ」

「シエルの生徒なら尚更知ってる筈の事なんだけどなあ。…騎士団シユヴァリエって」

それは以前、村に行く途中の列車の中でイヴェルが言っていたものである。詳しくは聞いていなかったが、確かフィリップの兄が所属しているとの事だった。

何故か今からその騎士団に会いに行くのだという。それでフィリップは少し落ち着かない様子だったのだ。

クロードがシエルの生徒なら尚更知っている筈、と言ったのは、シユヴァリエは殆どがシエルの優秀な卒業生が集まっているからだ。シエルにいるなら少しは聞いた事がある筈だろう、という事である。

「はあ、確かそんな名前だったっけ。でさ、なんでそんなのに会いに行く事に？」

「祭りの警備には騎士団も来るのさ。その中に俺の知り合いがいるんだが、お前達の事を話したら会ってみたい、と。折角だからどんな奴らなのか見てみればいい」

「ふうん……ていうか、『話したら』、って…。一体今日の、いつその知り合いとやらに私達の事話したの？そんな暇なかったよな」

「お前達が拒否しても最初から連れて行くつもりだったから。一昨日、もう既に知り合いには話してあったんだ」

「…そんな前から言っちゃって、私達が行かないって言ったらどうするつもりだったの？」

「行かないって言われても、連れてくつもりだったからな」

「……………はあ」

シエルトの目には、クロードは変わった人、何を考えているのかさっぱりな人にしか映らない。どうも強引なところが苦手を感じた。

18話 神を讃える祭り？

シエルの学園内も賑やかだが、地上は世界の中心となる巨大都市。賑やかを通り越してとにかく騒がしい。慣れないと本当につるさく感じる程だ。

人々の声だけではなく店から流れる音楽、人々の歩く足音…、どこから聞こえているのか、何の音なのか分からないこの騒々しさ。

この辺りは車などは一切見かけない。そもそも走る場所がない。レヴは人と店だけで溢れ返っている。

歩いていると、何もなかった筈の上の方に小さな映像が現れて、二ユースが流れ始める。

…そんなものなど、シエルトは興味もなかったが。

他の人達も並ぶ店に夢中で、そんな映像などごく一部の人しかまともに見ないし聞かない。だいたい、こんな騒がしい中では二ユースキャスターの声などすっかり耳に届かない。

「…大都市、なのは分かるんだけどさ。もうちょっと人少なくならないかな？」

「大都市なのに人が少なくなってもらっちゃ困るだろ。こちら辺歩いているのは観光客とか多いよな」

シエルトは生まれた時からずっとレヴに住んでいる。ただ昔からそんなに外に出る事もなく、特に観光客が集まるような場所にはあまり来ない。それは今でもあまり変わっていない。

いつ来てもこの雑沓には慣れない。

「シエルトって、あまりこういう所来ないんだ？イヴェルちゃんとかと出掛けたりするのかなあ、って思ってたんだけど」

「いや…あまり。まあ、欲しいものがないっていう感じなんだけど…。買うといったら本ばっかりだし、こういう場所は来ないかな」
「へえ…、意外だなあ。女の子って、みんなこういう所に来るものだと思ってたけど」

確かにそうかももしれない。シエルの生徒達はこういった店が並ぶ場所によく買い物をしたりしているし、イヴェルもよく出掛けている。あまり興味を抱かないシエルトは珍しい方かもしれない。

『…………… その為、騎士団らが搜索にあたっています ……』

「……………？」

よく聞こえなかったが、ニュースキャスターがそう言っているのが耳に入った。

普段は気にしないが、騎士団、と聞いて思わず振り返り映像を見る。それに気付いてクロードとフィリップも足を止めた。

「…繰り返します。先程入った情報によりまずと…」

…そのニュースの内容はこうだった。

レーヴのどこかにフォリーが入り込んでしまったらしい。訓練用に輸送していたフォリーが逃げ出したものと思われる、との事。

今のところ被害は出ていないらしいが、騎士団がフォリーを捜索しているらしい。

ただこんな大きな都市に入り込んでしまつてすぐに人に気付かれな、という事は、体の小さいものなのだろう。

見つけるのは大変かもしれないが、フォリー自身もたいした危害は加えられないかもしれない。その為あまり緊迫感を感じられない。

「…ふうん、騎士団つてそういう仕事してるんだ」

「そう。つていうか、本当にお前知らないんだな」

「興味ないんだもの」

シエルトは映像から目を離すと、再び歩き出した。シエルの生徒はフォリーは充分見慣れている為、都市に入りこまれたとしてもあまり大きくなければ特に何も思わない。

心配性なのかフィリップは少し不安そうだったが、シエルトとクロードはたいして気にも留めなかった。小さなフォリーが入り込む事は、時々ある事なのだ。

… 暫く左右にずっと店が並ぶ通りを歩くと、店の列は途切れ広い場所に出る。

中央にはあの頭上に出ていた映像と同じものがいくつも映し出されたモニターがある。

このレーヴはどこを見ても機械があるのだ。この場所だけを覆っている透明のガラスのドームも、ただの屋根ではない。なにかここでイベントをやる時、大きな祭りなどの行事がある時は、このドームに映像が映し出される。

…ここへ来るとまだ小さかった頃。ドームに天体が映し出されるというプラネタリウムが開かれた時、リンセルトに連れてこられた時の事を思い出す。最初は行きたくないと思図っていたが、実際行くと姉の声も耳に届かない程釘付けになっていた。

「…随分と歩くんだねえ」

「まあ、シエルから行くとちょっと遠いな」

すると、向こうの方から今までの騒々しさとは違う、騒ぎ声のようなものが聞こえて来た。その声はだんだん近づいて、大きくなっていく。そして気付く。

騒ぎ声は、何か悲鳴のようなものだった。逃げろと促す声や、助け

を求める声まで聞こえる。
それを聞くと不安そうだったフィリップの表情は更に不安に包まれる。

「ねえ、もしかして…さっきニュースで言ってた…！」

「…うん？んー、そうかもね」

シエルトはあまり気にしていない。人に気付かれにくい程小さなフオリーなど、たいした事はないからだ。なかには幼い子供ですら簡単に殺してしまえるものだっている。
今回のものもどうせ、そういうものだと思っていた。

「あんなに慌てて大袈裟じゃないか。そんな逃げなくなつて、

…」

…何か真つ白いものが目の前を凄い勢いで通り過ぎた。あまりに速くてその姿を捕らえる事は出来なかった。

周りにいる人達が一斉に上を見上げる。羽はないが飛んでいる、毛むくじやらの白いものがガラスに張り付いている。普通の大人の人間程の大きさはありそうだ。

あのニュースを見ていればすぐに分かる、フオリーだった。

「…えー、あんなに目立つのに今まで見つからなかっただつて？」

「ほら、姿形を変えられるのっているから…っっていうか、ちよっと危ないんじゃないあ」

子供がわんわん大泣きしているのが聞こえる。我が子の手を引きその場から逃げる親子。他の人達も慌てて逃げ出したり、その場に立ち尽くしていたり、面白そうに眺めていたり。

その時だった。

張り付いていた筈のフォーリーが突然腹を貫かれ、地面へと叩きつけられる。

腹には黒い、禍々しさを放つような槍状のものが突き立てられていた。

19話 騎士団シユヴァリエ

腹に槍のようなものを突き立てられたフォリーは動かない。突然の事に周りの人達は啞然としていた。

すると、向こうの方から何か走るような音が聞こえる。そしてフォリーの元へ飛び込んできたのは一頭の馬。馬…といっても、それは槍のようなものと同じで黒く、まるで鎧を身に纏っているかのようだ。

その馬がやって来た事で、何故か人々は安堵の表情を見せた。

(……?…何?…うん…?)

フィリップとクロードもその馬が何なのか知っているようで、特に驚く様子もない。

シエルトは何も分からずその突然の馬の登場に戸惑っているが、皆が馬に対して何も突っ込まない状況に何か取り残されている感があり、どうしたものかとただ立ち尽している。

とにかく、それがこちらに危害を加えるようなものではない事はなんとなく分かる。

馬は突き立てられた槍を引き抜き、啞えた。…どうも普通に生きている動物の馬とは何か違う気がする。

「動かないが…、死んではいけないようだな」

それは知らない声だった。ただその声を聞いてクロードが顔を上げる。

その声の持ち主、やって来た少年は白と青を基調とした服を着ている。目つきはやや鋭い。

少年は馬の啞えた槍を手に取ると馬の頭を撫でた。そして槍はたちまち黒い砂のようになって姿を消してしまった。

（あれ、もしかしてあの槍みたいなの…、アルムだったのかな）

人々はその様子を見て安堵のため息を漏らし、また再び歩き始める。小声だったのと専門用語らしきものを使っているのでよく聞き取れなかったのだが、少年は馬に何か指示を出したらしく、馬は倒れたフォリーを啞えると周りの人達の邪魔にならないよう配慮しながら立ち去った。

その馬を、少年と同じ風な格好をした人が何人か現れ誘導している。

か）（…よく分かんないけどもう終わったっぽい？……何だったんだ

馬は立ち去ったのだが、少年はまだその場に残っている。そして…クロードの元へと歩き出した。

「すまないな、クロード」

「いやいや。お仕事ご苦労さん」

その会話で二人が知り合い同士だという事が分かる。

フィリップが行こう、とシエルトの手を引っ張り二人もクロードの所へ行くが、何が何だかシエルトはどうも展開についていけずいた…。

「で、こいつがその騎士団に所属してる俺の知り合いってわけ」
「初めまして。…ノックス・カートランドだ」

ノックスと名乗った少年は軽く頭を下げる。彼も勿論シエルの卒業生であり、今の生徒達の様子を一目見てみたかったのだという。そんなノックスによるシエルトとフィリップを見た感想は、随分と小柄だな、との事。

…確かに決して二人は身長が高くはない。気にしている事であるためフィリップはショックを受けシエルトは少しむっとなった。

「ねえ、そんな事より。さっきのあれなあに？なんか随分と風変わりな馬だったけど」

そのシエルトのセリフに、ノックスは怪訝な顔をする。

「…おい、本当にシエルの生徒なのか？シユヴァリエが使っている馬を知らないって…。生徒でなくなっただって知っているような事を」

「…知らないものは知らないんだ。仕方ないだろ」

こいつは何も知らない無知な奴で、とクロードが笑った。明らかに馬鹿にされて少し腹が立ち睨む。

それもまた面白いようで笑っている。

「…はあ、これだから女は。しかもガキで無知、無能そうなのがすぐに分かる」

「……………うん、別に性別関係なくね？てか今なんか物凄い酷い事を言われた気が」

ノックスは馬鹿にしたように鼻で笑い、シエルトを見下したような

目で見おろした。

「まあ女なんて…所詮こんなものか。基本自分の事ばかりで周りの事を一切知らない無知無能」

「なんだよ、いちいち女、女って鬱陶しい奴だな」

二人の間に決して良いものではない、何か不穏な空気が流れ始める。お互い口が悪いため、このまま放っておけばひどい喧嘩になりそうだった。

20話 騎士団シユヴァリエ？

「ほらシエルト、いい加減機嫌直せ……な？」

「……………機嫌なんてそんなもの別に悪くないね」

そう言いながら、つん、とそっぽを向く。充分ご機嫌斜め状態だった。

…さつきは不穏な空気が漂い始め、フィリップが慌てて二人をなだめた為どうにかおさまったが…。

シエルトはこの通りすっかり機嫌を悪くしてしまい、ノックスも溜息をついている。歩く二人の間はかなりの距離があった。

……何度も女なんて、と発言していた事から分かるが、クロードによるとノックスは女嫌いな所があるらしい。

クロードはこのなんとも刺々しい空気が嫌で機嫌を直そうと話しかけている。

「そうだ、さつきの馬について教えてやってもいいぞ」

「あんなの興味ない」

そんなシエルトの一言がノックスは気に入らなかつたらしく、

「『あんなの』とは何だっ…！」

と、声を荒げる。

「いちいちほんとうるさいな。馬なんかどうでもいい」

そう言いつつも、実際はあれが何だったのか気になってはいる。馬である筈なのに、生きた動物という感じがしなかった。どちらかというところ、フォリーの方に近いような気もする。

ただここで興味を持っているような事を言ってしまうと何か負けたような気になるので、わざと反対の事を言っただけで嘘をついた。しかしそれでもノックスはあの馬について勝手に説明を始める。

「いいか、よく聞け。あれはな、シュヴァリエの騎士だけが使える特別なものなんだ。機械で作られた馬に使用者が魔力を使う事で命が与えられる。姿は使用者によって異なるがな」

そして最後に「ま、女には理解出来ないかもしれないが」と付け加えた。

使用者の魔力によって命を与えられる機械の馬。命を与えられた時に機械の馬は使用者によってそれぞれ違った姿に変わる。

内心、少し凄いと思った。だがそんな事は態度にも顔にも出さない。付け加えられた一言が非常に腹立たしかったので思い切り睨む。

そんな風に睨まれてもノックスは決して、全く動じないのだ。

また何か微妙な空気が流れ始めた気がし、フィリップが慌てて話題を変えた。

「あ、あのノックスさん……。そういえば……。ファルクス……。って人知っていますか？」

その名前を聞いた途端、ノックスの表情がぴくりと変わる。

「……ファルクス、ファルクスさんか？……ファルクス「クラデ
イオ……」

「あ、はいそうです。ご存知なんですね。実は僕、そのファルク
スの弟でして……っ！？」

突然、ノックスがフィリップの両肩をがっしりと掴んだ。

何かまずい事を言ってしまったのかと思いフィリップは動けなくな
ってしまった。

「弟？お前が！？ ああそうか、君がああフィリップか！」

「……え？……あの……まあ……弟、……です……？」

機嫌があまり良くなかった風なノックスの表情が一変、目を輝かせ
てぱっと明るくなる。

……フィリップが動けなくなってしまっている事に気付いて肩から手
を離れた。

「ファルクスさんが何度かお前の事を話してたよ。とにかくあの
人は凄い人で……いつでも冷静で本当に強くて皆から慕われている
んだ。ああ凄い人だよ！」

何が何だか驚いたが、フィリップはとりあえず、ありがとうござい
ます、と言った。自分の兄が凄いとされたのが嬉しかった。

以前あの列車の中でフィリップが、兄がいる、と言っていたが、そ
のファルクスというのが兄である。ノックスと同じく騎士団に所属
しているのだ。

勿論フィリップもそんなファルクスを本当に凄いと思っているし尊

敬もしている。

…ただ自分自身は兄の足元にも到底及ばない、その程度の成績。そういう考えがあり、何かと兄と比べられる事もあったため小さな苦手意識のようなものを抱いてしまっていた。

「まあ、どうせ女には何言ったってあの人の良さは分からないだろうがな」

「何だよ嫌がらせのように………ていうかさあ。今私達って、どこに向かっているの?」

確かに、これからどこに行くのか、今どこへ向かって歩いているのか。

少なくともシエルトとフィリップには知らされていない。ノックスは分かっているようで、何も知らないんだな、と、何故かシエルトにだけ向かって言う。

どこへ向かっているのかについてはクロードが話した。

「そういえば言っってなかったっけな。ほら、聖神塔だよ。リンセルトから聞いたがシエルトは殆ど行った事がないらしいな。フィリップは?」

「いや…僕も数回程度しか」

「だと思っってな。今回は祭りの警備って事だし、それに備えてどいう場所なのか詳しく見ておいた方がいいだろう?」

そういう事が、とシエルトは頷いた。

「でもさあ、ただそれだけの事で、何でわざわざこの女嫌いが一緒？」

その質問にはクロードが言う前に本人が答えた。

女嫌いである事は勿論自覚しているが、それをそのまま名前として呼ばれたのは聞き捨てならなかったらしい。

「俺も聖神塔の方に用があるんだよ。だからついでだ、ついで。

それから年下の女のくせに何だその呼び方は。『ノックスさん』とでも呼べ、ちびっ子」

「嫌だよ気持ち悪いよ」

…そのやりとりが少し可笑しかったらしく、クロードは思わず笑ってしまふ。

「まあそれに、実際祭りの時になって、見た事もない馬に乗った騎士団の奴らがたくさんうろついているのなんて見たら驚くだろ。だから今のうちに見せておいた方がいいかなって事さ」

……シエルトは想像してみる。ノックスと一緒にいたような馬の類が、様々な色、姿形をした馬がその辺りを大量にうろついていたら。

確かに気持ち悪いし、何か怖かった。

ノックスをノックスさんと呼ぶ程ではなかったが。

21話 塔の天使

今にも天まで届きそうな程に高く、貫禄を放つ白い巨大な塔。真下から見上げてても天辺に置かれている天使像は見えない。

「……………うわ…こんな大きかったっけえ？」

ずっと見上げたまましていると少し足元がふらつきそうになった。ここ、聖神塔へ最後に来たのはまだシエルに入学する以前。せいぜい3〜4回程しか訪れた事がない。それに実際中へ入った事は一度もないのだ。

久しぶりに目にした塔は頭の中で想像していたものよりもずっと大きく見えた。

塔の付近では、天使の羽をモチーフにしたようなブローチを着けた人達が大勢、祭りの準備に取り掛かっていた。祭り当日まではあと数日あるが、煌びやかな飾りつけを充分施された様子はもう準備が殆ど終わっているように見える。

「いや、まだこれからもっと派手な飾りで飾られるのだろうか。むやみに派手にするより、今の状態が一番見栄えが良いのに、とシエルトは思った。

「みんなお祭りの準備頑張ってるね」

大変そうだなあ、とフィリップは見ていた。

「ねえ、みんな変わったブローチ着けてるよね？あれって何なんだろ」

「えっと、確かあれはねえ。この塔で働いている人が着けているものじゃなかったかな…?」

そのブローチは銀色で、変わった曲線の模様が描かれた天使の翼のような形をしたもの。

真ん中に歪な形をした宝石がついているが、人によって色が違うようだ。

「因みに、ここで働いてる奴はみんな『天使』って呼ばれているんだ」

「あ、クロード…」

突然後ろから話しかけられて少し驚く。

見ると、さっきまでクロードと一緒にいたと思っていたノックスの姿が見当たらない。

「ああ、ノックスは別の用事があるから…先に塔の中へ入っていたぞ」

それを聞いてシエルトほつとした。

初めて会って早々ずつと喧嘩のような状態だ。彼の顔を見なければこれ以上苛立ちを覚えなくて済む。

ノックスの第一印象はとにかく最悪の一言に尽きる。女嫌いなのは何か理由があるのだろうから仕方がないで我慢できるのだろうが…。

だからといって、女のくせに、所詮女は、などと言われ続ければ腹が立つのも当たり前。

嫌いだと思っただけならいいのだが、それをわざわざ口に出す彼はこれから先も到底好きになれそうにない。

というかもう顔をあわせたくない。会いたくない。絶対に。

男のフィリップとクロードには分からないだろうが、シエルトにとってはノックスのあの性格は大問題だった。

「それでな、祭りの時、俺達は基本入口の辺りをうろろろしていればいいだけなんだ」

そう言っただけでクロードは塔の入口の辺りを指差した。

入口の両脇には、ノックスと同じ格好をした男が立っていた。恐らくシュヴァリエの騎士なのだろう。

「…本当にうろろろしてるだけでいいの？」

「そう、いいんだよ。適当に、適当に」

塔の周りには様々な天使や女性の像が置かれている。

ここは一般人も普通に出入り自由だが、他の場所と違って真面目そうな人間が多い。

あとは観光客と思われる人が写真を撮っていたり。

「さて、折角だからな。中へ入ろうか」

塔の入り口の重厚そうな巨大な扉は常に開け放たれている状態らしい。中の様子がしっかりと見えるのだ。

塔の中は開けっぱなしであるにもかかわらず10月の外よりも暖かかった。

正直何が描いてあるのかちょっとよく分からないステンドグラス。建物の中にも外にあったものと同じような像がいくつも置かれている。

中でも祭りの準備は行われているようだ。祭り用につけたと思われる飾りが天井から垂れ下がっている。

外から見ても大きいと思ったが、中へ入ると更に広く感じる。

そして何より気になるのが、丁度真ん中辺りにある噴水。

女神のような像が中央に置かれた、やたら大きな噴水の周りには何人が集まって、何か拝んでいるように手を合わせていた。

「…何やってるの、あれ？」

ブローチの事も分かっていたし、あの噴水についてもフィリップが知っていると思いついてみたが…、

「うーんあれは……何だっけ？」

どうやら知らないらしい。

仕方がないのでクロードに訊いてみようとした時だった。

「あの噴水から出る水には神の力が宿っているとされていて、
噴水の前で祈ればご加護があるとされているのです」

そう言ったのは銀色の髪の、一人の少女。少女の服の胸元にはあの
ブローチが着けられている。ここで働く……いわゆる『天使』と呼ば
れる人なのだろうか。

桜と梅の花のような髪飾りが、少しこの場には釣り合っていない気
がする。

22話 塔の天使？

「へえ、そうなんだ。でも加護って…例えばどんな？」

「祈れば、あらゆる傷を癒してくださるといわれています。怪我も、病も、心の傷も」

銀色の髪の少女は無表情のまま淡々と説明をする。そのせいか、少し冷たい印象を受けた。

あの噴水の真ん中に置かれている女性の像は、この塔に眠っているとされる神を模してつくられたらしい。

かなり古いものなのかその像だけは他のものと違い、所々欠けたり汚れていたりする。

「なるほど、教えてくれてありがとう」

「…いえ…これも私達の仕事ですので…」

そう言い、少女が深々と頭を下げ立ち去ろうとした時の事だった。

「あれー、フウちゃんこんな所にいたんだー」

その男の声はすぐ近くで聞こえた。

…『フウちゃん』、というのが誰の事なのかは勿論シエルト達は知らなかったが、立ち去ろうとしていた少女がピタリと足を止めた為、それが彼女の事である事が分かった。

見ると、そこには胸元にあのブローチを着けた青年が立っていた。少女は少し不満なそうな顔で溜息をつく。

「……仕事の最中にそういった発言は慎んでください。ましてやこんな場所で……」

「んー、じゃあ仕事が終わったら慎まなくてもいいのかな？ねえ？」

「……………貴方は本当に不真面目な人です」

また溜息をつくくと、少女はこちらの方を向いて「失礼しました」と頭を下げた。

その時青年は初めてシエルト達がそこにいた事に気付いたらしい。

「あはは、ごめんね君達。フウちゃん全然笑わないからちよつと怖かっただろう？」

「……………え？あの……………いえ……」

さつきから何度もフウちゃんとあだ名らしき呼び方をされている少女は、呆れ果てたような顔をしていた。

そんな少女とクロードの目が偶然合った時、少女は何か思い出したようにはつとずる。

「……確か……貴方はお祭りの警備に来てくださる、シエルの……」

「ああ、初めまして。クロードです」

そう言うのと軽く会釈をした。敬語を使っていたクロードが可笑しく思えたのか、シエルトは軽く笑いを堪えていた。

確かに彼は殆どそういう話し方をしないし、それどころか生徒に対して敬語を使うなとさえ言っているのだ。

そんな彼が敬語を使っているのが物珍しかったらしい。クロードはシエルトが笑った理由をなんとなく理解し、苦笑する。

「…初めまして、クロードさん。私は……………フウカといいます」

フウカだから『フウちゃん』という事なのだろう。

本人はそのあだ名をあまり気に入っていないらしく、呼ばれる度に嫌な顔をしていた。

「フウちゃんも名乗ったし、一応。僕はルイス」

ルイスと名乗った青年は、その後に「よろしく」と言いたかったようだが、フウカに敬語を使うようにと叱られてしまった。

「…わざわざ聖神塔までお越し頂いたというのに、お見苦しい所をお見せしてしまって…申し訳ありません」

本当に申し訳なさそうに頭を深く下げるフウカを横に、ルイスは特に何も気にしていないのか機嫌良く話し始める。

「クロードさんがシエルの先生って事は…、シエルトちゃんとフリリップ君は生徒？」

「あ、はい。そうです」

答えたのはフリリップ。

「先生の警備の手伝いなんて偉いね。ま、適当に突っ立ってるだけでいいんだからさ、気楽にね」

(…クロード先生も似たような事…言ってたなあ)

そんな話をしていると、突然シエルトがフィリップの後ろに隠れてしまった。

…いきなり人見知りでもしたかと思ったが、普段の彼女ならそんな事はない。例えしたとしてもこんな風に隠れたりするような性格ではない。

その理由はすぐに分かった。

「あ……ノックスさん」

用があるからという事で先に行っていたノックスの姿が見えた。用はもう済ませたのだろうか、戻ってきたらしい。

…シエルトは隠れる程ノックスを嫌っているようだ。無理もないだろうが。

「何だ、お前らまだいたのか。てっきり帰ったかと」

「用事は終わったんですか？」

「ああ。だから俺はもう帰るつもりだが…」

ノックスは視線をクロードにやる。

お前達はどつするの、という事だ。

「さて…、もうそろそろ俺達も帰るか？二人だけ残ってもう少し見学してもいいが」

「私は帰ってもいいけど、フィリップはどうするの?」

「僕ももう帰るよ。充分見れたからね」

それを聞き、フウカはゆっくりとお辞儀をする。

「…今日は来てくださってありがとうございます。それでは、五日後の祭りの日に…また」

外へ出ると急に冷たい風が頬に当たった。塔の中は暖かった分、外が余計に寒く感じる。

いつの間にか空は少しだけ夕焼け空。塔の中には長くいなかった筈だが、塔へ来るまでの時間が掛かっていた気がする。

フウカとルイスに見送られ…、シエルトはノックスから隠れて威嚇しながら、ノックスはシエルトを睨みながら。

その様子をフィリップとクロードは笑いながら、それぞれの場所へと帰っていった。

23話 神様は助けてくれない

聖神塔とその周辺は五日前とはまるで様子が違っていた。

レーヴが人で溢れ返っているのはいつもの事だが、今は溢れ返っているというレベルではない。まずまともに歩けるようなスペースは無いに等しい。

少し休憩しようと端の方で立ち止まろうとすればかなりの迷惑になる。というよりも休憩するような場所さえない。

どこからともなく聴こえてくる大音量の音楽、普段とは比べ物にならない程に騒がしい人々の声が集まって、まともに相手の声も聞こえない。

あまりに派手な飾りつけは少々やり過ぎのようにも見えるが、それは仕方のない事。

今日は年に一度の聖神塔の祭りである。

この祭りは本来、塔に眠るとされる、かつて自分の村を護るためだけに神となった女性を讃える、といった内容のもののだが、人々はそんなもの、とつくに忘れているだろう。

知らない人さえいるかもしれない。祭りといえば、遊んで楽しむ事しか頭にないだろうから。

そんな現状を、塔の『天使』達はどう思っているのかは知らないが……。今の時代、そんな神の話など作り話、或いは実際にあった事を大袈裟に装飾しているだけ、などと思っている人が殆どだ。

神になった、といっても、それは何かの比喻表現と考えている。実際その話が本当なのか、塔に神などいるのか、などというのは誰も知らない。少なくとも天使達は信じているのだろうが。

…そんな盛大な祭りの中。

丁度塔の入り口の辺りでは、シエルトが目を瞑って何か落ち着かな

い様子でいた。

そこにはフィリップとクロードの姿もある。

一見すると祭りに遊び来た人と何ら変わらないのだが、一応これは警備なのである。とはいってもただ周囲を見渡して立っただけなのだが。

毎年この祭りはシエルから何人が警備に呼ばれる。今年も、クロード以外にも他に数名呼ばれている。シエルとフィリップはそんなクロードにただ連れてこられたただけだ。

何なら遊んで来てもいいと言われたが、シエルはこういう場、空気が、雰囲気がかく苦手で、フィリップは真面目に警備の手伝いとして連れてこられたのだからと、二人はそれを断った。

だが警備の経験なんて皆無。こんな人混みでは、ひとりひとりの行動を注意して見る事が出来ない。：騎士団に任せておけばいい、という感じだった。つい五日前、ルイスにも「気楽に」と言われた。

そこまで真剣になる必要もないだろう。少々適当過ぎるかもしれないが。

：シエルトの頭の中は早く帰りたい事でいっぱいだった。

別に面倒くさいからではない。祭りの中にいる事が、祭りの人混みが苦手だからだ。

祭りは夜まで続く。ただ、シエルト達は夕方までいればいい事になっている。それまでの辛抱だが、時間が異様に長く感じる。

もう、一時間は経った気がするのに、近くにある時計を見るとまだ三十分も経っていない。

時間を確認する度に溜息をついていた。

「いや…リンセルトから祭りは苦手だって聞いてたが…、ここま
で酷いとは」

「……………しょうがないじゃない、こういう所ってどういふ顔して
いればいいか分からなくなるし。祭りの人混みは気持ち悪くなる。
遠くから眺めてるのが一番好き」

なんでまた、とクロードは不思議そうな顔をする。とても理解出来
なかった。別に祭りが好きというわけでもないが、そんな風に思っ
たり感じたりした事は一度もない。

「だって…。小さかった頃、その時は祭りとか苦手じゃなくて、
むしろ大好きだったんだけどさ。はしゃいでたら子供っぽいとか馬
鹿にされた事があったんだもん。それからダメになった」

「……………なんつーどうでもいい理由…、てか小さかった頃の話だろ
う、子供で合ってるじゃないか」

それはシエルトも分かっているのだが、ダメなものはダメだった。
馬鹿にされて以来、みんながそういう目で自分を見ているんじゃない
かと思ひ、一向に克服出来ずにいる。

テレビや雑誌で祭りの様子を見る分にはいくらでも楽しそう、と思
えるのに。

…すると、クロードの表情が一瞬、ぎこちなくなる。

「……………その馬鹿したのって誰だか覚えてるか？」

「え、誰かって？……………んー、それがさ。いまいちぼんやりとしか
……………ん、でも何でそんな事？」

シエルトが怪訝な顔をする。

「あ……いや。覚えてないならいいんだ。思い出さなくてもいい」
「言われなくても思い出さないけど……相変わらず変な奴だな」
「……あ……相変わらず……？」

クロードはこっそりフィリップに訊いてみる。

「……俺って変人？」

「……まあ、ちょっと普通とは違う気がします」

フィリップでさえそう言う程、クロードは普段から何を考えているのかよく分からない。少しばかり胡散臭いような感じもある。そんな話をしていると、向こうの方からノックスがやって来た。この祭りの警備には騎士団もいる。ノックスも警備にあたっていているのだ。

その彼の姿を見るや否や、シエルトは嫌な顔をしてそっぽを向いた。結局五日前の塔の帰りも殆ど喧嘩状態だった。ただそんな二人の様子は小さな子供が言い合いをしているようなもので、ある意味仲がいいようにも見える。とはいえ本人は仲良くなるうとも思っていないが。

「……女にくせに警備なんてつとまるのか？」

「その女のくせについていうの、あんたの性格の悪さが滲み出てるよ。てか何で来たし」

「俺がどこに来ようと勝手だろう。……それにしても、こここの辺りは随分人が多いな」

そうですね、とフィリップ。

「聖神塔のお祭りですからね、店も塔の方に集中してますし…」

こんな状態では、塔に眠るといふ神も流石に寝ていられないだろう。神にとつては、自分の為の祭りが存在する事は有り難いのだろうが、この騒がしさはきつと迷惑極まりない筈である。

…ふと、シエルトが空を見上げると、何かがいくつか、ふわふわと浮いているのが見えた。

これだけ大規模な祭りなのだし、バルーンやら何やらの一つや二つ、空を飛んでいてもおかしくはないと思った。ただ、少し奇妙な挙動が目立つ。

空を浮いているそれは、だんだん大きくなっていくような気もする。膨らんでいるのか、それとも近付いてきているからなのか、よく分からないが。

…苦手な、騒がしい祭り。空だけは穏やかで、ずっと眺めていると幾分か気持ちが悪くなった。

そして、ほんの少しばかり眠気が襲ってきた。今日の事を少し考え込んでしまい、寝不足気味というのもあったが、
だがその眠気は、

「ね、ちょっと何あれ？」

祭りを楽しむ一人の女性の、やや大きめな声で覚まされた。

気にもしないような一言だが、その声には楽しい、とは違った…得体の知れないものに対して言っているようなものが含まれていた。どうせ、たいした事ではないだろうと、そう思った。

誰かが悲鳴をあげるまでは。

24話 神様は助けてくれない？

一瞬、誰もが『それ』はこの祭りの趣向か何かだろうと思った。
…しかし、そう思っていたのは、本当にほんの一瞬だった。

「何だこいつ、追いかけてきやがる!!」

一人の男がそう叫ぶ。

その叫び声が聞こえたと同時に、祭りを楽しみながら歩いていた人達は皆、悲鳴をあげてとにかく走り、逃げ出した。

『それ』は獣のような姿をしているが、単眼で腕や手らしきものはない。そんな異様な姿をしているのはフォリーしかない。

ただ普通、人はフォリーを見ただけでは逃げ出したりはしない。人間に危害を加えないよう訓練されたフォリーが、ごく一般的に、身近にいるからだ。

だが『それ』は男が叫んだ通り、逃げ回る人々を追いかけている。生活する中で身近にいるようなフォリーは、遊びでもない限り人を追いかけて怖がらせたりしないよう訓練されているのだ。

でも『それ』は、…目の前のフォリーは人々を追いかける。つまり、人間に危害を加えようとしている。

…追いかけているだけなら、向こうは遊んでいるつもりなのかもしれないと思えた。しかし、怪我を負い、立てなくなってしまった人、倒れた子供までいるのだ。

年に一度の盛大で華やかな祭りは、いつの間にかただの地獄のようなものと化していた。

そんなフォリーが、一匹だけだったのならすぐに騎士団が駆けつけ

て、あつという間に片付けてしまえただろう。
どこから湧いて出てきているのかさっぱりだ。
あっちへ逃げてもこっちへ逃げても、逃げ惑う人々をわざと意地悪
く通せん坊をしているかのようにフォリーは数え切れないほど現れ
る。

シエルトにフィリップ、ノックスやクロードは、すぐにそれぞれバ
ラバラになりはぐれてしまった。

幼い子供に飛びかかろうとしていたフォリーの腹が、シエルトの大
剣によって貫かれ血に染まる。

（さっきまでは何ともなかったのに……、どうして急にこんな、）

自分の背後にフォリーの鋭い爪が迫っている事に気付き、慌てて振り返り腕ごと斬り落とす。そしてそのまま刃は首を斬り裂いた。
…あと少し気付くのに遅れていたら、首を斬り裂かれていたのは自分だった。

(戦いづらい…)

今ここに数え切れないほどいるのはフォリーだけではない、人間もそうなのだ。

自分の周りにはとにかくたくさんの人が逃げ回っている。そんな場所彼女の身長程もある大きな剣を無闇矢鱈に振り回せば、フォリーどころか人間まで巻き添えにしかねない。

ちよつとでも動かさそうとするとすぐ人に当たりそうになる。フィリップの持つ剣ならやりやすいのだろうか…。

(すぐ目の前の塔に神様とやらはいる筈なのに…手も貸してくれないか)

ふと塔の方を見ると、バルーンか何かだと思っていた物体の姿が塔の天辺にあった。

それがフォリーであったとようやく分かる。

再び視線を前方に戻すと、もう既に別のフォリーが姿を現していた。これだけ量が多いとシエルト一人では体力的にも辛い。

…どうにかこうにかフォリーを倒しながら、人をかきわけ進んでいくと、いくらか人の少ない場所に出た。

ここからだともう塔の様子は見えない。

（ここから先はフォーリーもないみたいだし、引き返した方がいいかも）

そう思い、踵を返した時だった。

突然、何もなかった筈の…あるといえば捨てられたゴミが落ちていくだけの地面が、奇妙な模様を描いて黒い光を放っていた。

奇妙な模様、というのはいわゆる魔法陣のような形をしていて、黒い光は次第に強くなり、徐々に模様はぼっかりと空いた穴のようになる。

穴のようなものから、それははつきりとした穴となり、その中から一本の…、真っ白な人間のものらしき腕が伸びて来た。

少しずつ、もう片方の腕が見え、人の頭のようなものが見え、ずるりと音を立てながら、それは奇妙な…。

「っ……………人間……………なの？」

確かにそれは人に近い形をしていた。ただ、体中に血の滲んだ布を巻き、頭部は異様な形をしており痙攣している。

腕も足も真っ白でところどころ太い針のようなものが突き出っていて、赤い血が肌を伝っている。

（……………？）

ただ呆然と気味の悪い、不気味なそれを見つめっていると、その『人に近い形をしたもの』は低い唸り声をあげ始めた。それと同時に背

中が激しく震え出す。
背中はみるみる赤い血に染まっていき、赤くなったそこから、
奇妙な文字が刻まれた、銀色の、天使が持つ翼に似たものが形成さ
れていく。
その翼には…見覚えがあった。

「……あの夢で見たものと……同じ……」

そう、それは、ひどく生々しかった、あの夢の中に出てきた化け物
が持っていた翼と同じものだった。

…だから、こう思った。

…また夢を見ているのではないかと。

あの時見た夢も、夢だとは全く気付けなかった。だから今のこの状
況も、実は夢なのではないか。

そもそも直前まで何事もなかったのに、突然大量のフォーリーがこん
な大都市に姿を現すという事自体おかしかった。

一体こんなにも大量なものが、どこから湧いてくるというのか？…
理由なんてない。夢だからだ。夢の中の出来事に起こる理由なんて
ものはない。

夢…。

「シエルト!!」

…自分の名前を呼ばれると同時に、強い力で腕を思い切り引っ張られた。

夢だと感じ始めていた自分の中の意識が一気に現実に引き戻される。

「……っ、…フィリップ…」

彼女の手を引いたのは、偶然彼もこの場へやって来たのだろう、フィリップだった。

そして、さっきまで自分が呆然と立ち尽くしていた場所にはあの魔法陣のようなものと同じ形の、小さなものが浮かび上がっていた。

それが何なのかはよく分からないが、フィリップに手を引かれていなければ、今頃自分は…、という考えに至るのは安易だ。

「危ないじゃないか、逃げないなんて…!!」

「……ん、ごめん」

珍しくフィリップが大きな声を出す。…心配をさせてしまった、と思う。

フィリップは庇うようにしてシエルトの前に立った。

(………どうして、夢の中に出て来たあれと同じものが……)

翼を生やしたそれは、長い髪ではなかったり下半身がちゃんとあったりと、姿形は少し違うものの、それでも雰囲気似ていた。

特にあの白い腕はとにかくよく似ている。

「もうすぐここに、クロード先生やノックスさんも来るはずだから……」

そうフィリップが言っていたが、シエルトの耳には曖昧にしか届いていない。

すると、

「っ、……なに、……？」

突然、視界が薄暗くなり、赤みがかかる。周りがよく見えず、自分の前に立つフィリップの姿も、翼を持つ化け物の姿もはっきり見ることが出来ない。

それはフィリップも同じようだった。

そして、小さな地響きが聞こえてきた。それに混じり化け物が何かわけの分からない言葉を叫んでいる。

それが頭の中に響き、思わず耳を塞いで屈んでしまう。こんな状況にもかかわらず、フィリップはシエルトを庇うようにしてくれていた。

頭に響く化け物の言葉は夢の中で聞いていたものと似ていて、それを思い出すと気持ちが悪くなり目も開けていられなくなった。

「……………ノックス…さん…クロード先生…っ！」

目を瞑っていて全く周りの状況は分からなかったが、どうやらノックスとクロードがやって来たらしい。

肉が斬り裂かれるような、鈍い音が辺りに響き渡っている。

分かったのはそれだけで、自分の周囲で起きている事など、何一つ分からない。

そして化け物のものらしい悲鳴が聞こえた、その直後だった。

まるで地面がすっと消えてしまったかのように、足元がふわりと一瞬だけ浮いて。

がくりと体が落ちていくのを感じて。

そこで、意識がぶつりと途切れてしまった。

25話 黒と虚の世界

…それは、あの夢の感覚に少し似ていた。

自分は倒れていて、起きていたのか眠っていたのか分からなくて、いつからそこにいたのかも分からない。

冷たい風が頬をかすめる。体もすっかり冷え切ってしまったているようだった。

周りも少しだけ薄暗い。

ただ違ったのは、

「……………」

普通に起き上がれるという事。それから、ここは部屋の中ではなくて外であるという事。

地面はごつごつとしていて痛い。

「……………」 はあ……………」

シエルトが倒れていたのは、建物か何かが崩れたと思われる瓦礫の上だった。

何が起きたのか、あまりにも一瞬の出来事だったのでいまいち理解出来ていない。

気持ちが悪くなってうずくまっていたら、目を瞑っていたので実際何が起きたのかよく分からないのだが、突然…恐らく地面が消えた

か何かで落ちて……。そのままこの瓦礫の上に落下してきたのだろう。こんな瓦礫の上に落ちた、という割にはこれといって怪我をしていない。

とにかく分からないのは、なぜこんな場所に落ちてきたのか、そもそもここは一体どこなのか、という事だ。

(これはまた……変な場所に落ちてきたね)

そこは、とにかく寒々しい場所だった。まだら模様の灰色の空を真っ黒な雲が覆っていて辺りは薄暗く、どこを見ても壊れかけの建物、そして瓦礫しかない。

とても人がいるようには見えなかった。：人が来ていいような場所でもない気がする。

不気味といえば、不気味な場所だ。

(……………みんなどこ?)

よくさがせば近くに一人ぐらい、いるかもしれない

そう思っただけの山から降り、自分の倒れていた場所が視界に入る程度の距離を歩いてみたが、とても人が歩いているような気配はない。

土と、少しの草木と瓦礫だけが広がる暗い大地の上に、シエルトはただ立ち尽くすしかなかった。

何度も何度も行ったり来たり、それでも誰もいない。

知らない人でもいいから、誰かいないか、とにかく歩いて探してみる。

(…誰もいない…)

さっきまではあんなに人が溢れ返っていたのに。凄く騒がしくて賑やかで、やり過ぎと思うくらい派手で華やかな祭り。

あの光景はもうどこにもない。祭りの中にいるのは苦手だけれど、こんなところに一人きりにさせられるくらいなら、あの祭りの中にいた方がずっと良かった。

(…どうして…、じゃあ他のみんなは？…みんなはどこにいったかったっていうの…)

どこを歩いてもあの大都市レーヴの光景はどこにもない。

…見知らぬ場所にただ一人。なんといいか分からない怖さと寂しさが胸の辺りでぐるぐると渦を巻く。…また気持ちが悪くなりそうだった。

クロードは、フィリップは…、こんな状況だからだろうか、ノックスでもいいから。誰でもいいからひよっこりと姿を現してくれないか。

どんなにそう思っても、誰も姿を見せてはくれなかった。

…本当は泣きたかった…と思う。それでも泣かなかった。

泣いたら、涙を流したら、まるで本当に独りぼっちになってしまったように感じてしまうから。

(…すぐに見つかるよ、きっと誰かいるはずなんだから…)

根拠などないが、絶対に誰かがいると思っていなければ、歩けなくなってしまうそうだった。

どれほど歩いたかは忘れた。

とても長い時間を歩いた気がするが、それでも一時間は経っていないはず。

ただ、休まずずっと歩き続けていれば疲労を感じ始めるようになってくるし、足も痛くなってくる。とくにここは大きな石などが多く歩きにくい。

…そして、こんなにも歩いたというのに誰にも会う事はできなかった。会えないのは……、いないから、なのだろうか。

少し休憩しようとして、足を止めた、その時だった。

後ろの…少し遠くの方で、石ころと土を踏んだような…、足音に近い音が聞こえた。

(……………！)

たったそれだけの事だったが、人がいるのだとすぐに確信し慌てて振り返った。

「……………」

…絶対にそこには知っている誰かがいると期待していたから、それを見た時の落胆はかなり大きかった。

確かに人なんて誰もいなかったが、…フォーリーだっっていなかったはずなのに。

…じっとしていれば襲ってこないかもしれないと思った。そう思っ
てゆっくりと、まず右足から前へ、勿論背中を向けずに動こうとす
ると、

「な……、なんだよ……」

それに合わせて向こうも動き出す。ここで走れば追いかけれそう
だし、ゆっくりと歩いて距離を離していてもいずれは襲われそう
だ。

だからってそれを恐れてここでずっと大人しくしているわけにもい
かない。

…ここでアルムは出せるだろうか、と少し心配だったが、フォー
リーがいるという事は魔力が流れているという事だ。それは大丈夫だ
ろう。

26話 黒と虚の世界？

シエルトの手元にほんの小さな銀色の光がいくつか現れ、複数の魔法陣らしきものを描いて、飛ぶ。

魔法陣に描かれている文字は、あの化け物の翼に刻まれている文字とは違ってシエルで習った彼女の読める文字である。

その文字達はふわりと浮かび上がると、赤みがかつた銀色の大剣、彼女のアルムとなる。

(……………あれ)

この時、シエルトは少し違和感のようなものを感じた。大剣の柄を握る、その瞬間がいつもと違うというか、なんというか。

(…… ああ、いつもはもっと……………遅いのか)

遅い、というのは、魔力をアルムへと変化させるまでの時間の事だ。違和感の正体は変化までの時間にあつた。

普段は文字が反応するまで数秒ほど時間が掛かるのだが、さっきは文字が現れたと同時に浮かび上がった。つまり、魔力がアルムへと変化するまでの時間がいつもより短いという事。

「まあ……………別にいいか……………」

特にたいした事ではないと思い、然して気にする事はなかった。

…相手が攻撃を仕掛けてこない限り、シエルトは何もしないつもりでいる。

無闇に危害を加えてこないフォリーを、こちらから傷付いたりすれば仲間を呼ばれる可能性だってある。

ある程度の距離を離しても追いかけてきたりしなければそのフォリーは無視してもいいだろう。だが今回は…そうなりそうもなかった。最初はこちらが動かなければ相手も動きを止めていた。しかし、時間が経つにつれて立ち止まっても向こうは動きを止めない。

その動き方からして、後ろに回って攻撃を仕掛けようとしているようにも見える。心成しか息遣いも荒くなっているように感じる。

…アルムを出した事で相手も戦う気になってしまったのか、最初から襲うつもりでいたのかは分からないが…。

「ひゃっ…」

突然、フォリーは地面を蹴りこちらへ向かって走り出した。もしかしたら来ないかも、と思っていたので焦ってしまい、いつもなら大剣を盾にして攻撃を防ぐのだが…慌てたせいで剣は相手に向かって振りあげられていた。それでも刃が相手に当たっていいのだから、

「……あ…」

その刃先は当たる事も掠る事なく、フォリーの眼前を通り過ぎて行った。…まさかこんな近距離で外すとは思っていなかった。よほど

焦っていたのだろうか…。
しかし、

「……………え……………ええ!？」

…飛びつかれる、と思っていたのに。

フォリーは弾き返されたかのように背中から地面へと倒れ込んだ。
その体には乱暴に斬り裂かれたような傷があり…そこから真っ赤な
血がゴプリと音を立てて溢れだす。

シエルトは慌てて右手に握る大剣の刃先を見た。その刃に、血のよ
うなものは付いていない。

だが目の前のフォリーの様は…、明らかに体を斬られている。斬つ
た感触も、刃が掠った様子さえもなかったのに。

(でも…普通、斬ったら刃に血が付くとか…するよね)

だいたい、血が溢れる程深く斬っておいて分からない筈がない。

そもそも刃が当たらずにフォリーの前を過ぎて行ったのを、この目
で見ているのだ。

勝手に傷を負って、勝手に死ぬ。

この場所ではよくある事なのだろうか？

(……………考えても分かんないし。それより早く、誰か見つけなきゃ
……………)

フォリーの事などどうでもよかった。実際、気にはなるもの、こんな所で考え事をしている場合ではないのだ。

とにかく今はフィリップ達を見つきたい。瓦礫だらけで気味の悪いフォリーのうろつく場所を、これ以上一人で歩きたくなかった。

「……でも本当に、ここどこなんだろう？レヴにこんなところあるわけないし」

そんな独り言を呟きながら辺りを見回す。

どんなに歩いても似たような景色が続くばかりで、同じ所を何度も歩いているような錯覚を覚える。

ただ、あるのは瓦礫だけではない。フォリーもいるという事が分かった。

少し注意しながら歩いた方がいいだろう。

「もう……どうしよう。こんなんじゃないや帰り方だって分からないよ……って、うわ……」

シエルトは思わず足を止める。…一体、どこに隠れているのか。またフォリーらしき姿が見えた。

今にも崩れそうな建物の陰に隠れ様子を見る事にする。

フォリーの姿は大きく、体は黒いもやに包まれていた。…包まれているというより、よく見るともやの塊が体らしい。

(……絶対近寄らない方がいい……)

そう思い、フォーリーが立ち去るのを待つ事にした。…のだが。

それから軽く30分は経った気がする。フォーリーはさっきから行ったり来たり、その場を動こうとはしない。

それどころか若干、こちらに近付いてきている感じがある。30分もわざわざ待っている方もあれなのだが。少しでも動く気付かれそう、なかなか動けずにいた。

相手は異様な姿をしているせいか、見た目の判断ではまず勝てそうにない。

…相手が動かなければ、シエルトも動けない。時間ばかりが無駄に過ぎて行く。

「いい加減、そろそろ行ってほしいんだけど…」

正直、これ以上待つてはいられない。

こんな事をしている間に別のフォーリーがやって来てしまうかもしれないし、早くフィリップ達を見つけない。

動けば気付かれてしまうかもしれないが、上手く逃げ切れるかもしれない。追い付かれてしまったとしても、こちらは丸腰ではないのだ。

…案外どうにかなるかもしれない。

「よし…」

大剣の柄を力強く握り、立ち上がる。
下が瓦礫であるため踏むと石と石がぶつかる音がしてしまい、歩く度にフォリーの様子を窺ってしまふ。

(……………うん、大丈夫)

ある程度フォリーとの距離を離れた辺りで、少しずつ緊張が解けて行った。相手はまるでシエルトがいる事に気付いていない。
このまま行けば気付かれずにこの場を離れる事が出来る。
心配していた、追いかけられる事や戦闘になる事はなさそうだ。

「…ああ、もう平気かな。……………ん…でも何だろう」

さつきから、歩いて足を動かす度に変な感じがしていた。足に何か
が纏わりついているような…、水の中を歩くように重いような。
気になって見てみると、足元が先程よりも明らかに暗くなっている
事に気が付いた。

…なぜ今まで気が付かなかったのか不思議だ。
よく辺りを見渡してみると、暗くなっているのは足元だけではない。
周りも薄暗くなっていた。

「いつの間に…」

気味が悪くなって、自分の周囲を更によく見る。

「……………えっと、霧…？……………いや、違うな…」

それは…霧というよりは煙に近い、もやのようなものだった。

辺りが暗くなってしまったのは、この黒っぽい色をした、もやが掛かったからだろうか。

そんなもやを見て…一つ、思い出す。

(…さっきのフォーリー……)

偶然かもしれない。だが、このもやは…似ていた。

あのフォーリーの体となっていたもやに、

「…っわ……！？」

シエルトは突然驚いたような声をあげると、もやを見上げて呆然と立っていた。

彼女の目線の先には…そこだけ異様に黒いもやの、塊。

ついさつき、あれ程距離を離して逃げ切ったと安心しきっていたフォーリーが、目の前…すぐそこにいた。

一体いつ気付かれたというのか。辺りは薄暗くなって尚更見づかり

にくくなっていた筈なのに。

足がすくんで動けない…、武器を握る手も動かせない。

フォーリーの、手の平のような形のもやが伸びてくる。

「っ」

ぐさりと肉を貫くような、鈍い音。

…もやの体に突き刺さる…漆黒の槍。そこから流れ出る血のような赤いもや。

「……………あ、…あれって…」

その槍は、以前見た事がある。…レーヴに侵入したフォーリーを捕らえた槍と同じものだ。

「おい」

不意に聞こえた、その声も知っている。

………大嫌いな奴の…声だ。

「……………、…ノックス………」

27話 黒と虚の世界？

それは死神を思わせるような、やや装飾過多の大鎌。

弓形の曲線を描く鋭い刃は躊躇う事なく醜悪な姿をしたフォリーの体を、脳天から足元まで斬り裂く。体からは赤い鮮血がふき出し、容赦無く鎌の刃に降り掛かり生々しく真っ赤に彩った。

その様子を見ていたフィリップは思わず目を背ける。自身もフォリーを殺した事ぐらいはあるが、目の前の光景はまるで殺人現場も同然だ。

…大鎌はクロードのアルムだった。クロードは大量に溢れだした血の事など全く気にしていない。

シエルの先生ともなると、これくらいの事は当たり前の事なのだろうか。

(…先生のアルムは初めて見たけど…、イメージに合ってる事は合ってる…かなあ)

彼の着ている、かなり長い、黒いロングコートが鎌とぴったり似合っている…気がした。また、今いる場所が壊れかけの建物や瓦礫だらけの薄暗い場所であるため、尚更死神のように感じたりするのかもしれない。

…フィリップは辺りを見渡した。気味が悪く、さっきから異様な容姿をしたフォリーとしか遭遇しない。

いつの間にか倒れていて目が覚めて、運が良かったのかすぐにクロードを見つける事が出来た。しかし、シエルとノックスは未だに見つけられない。

「大丈夫かな……二人とも」

「…ノックスは心配する必要は無さそうだが…、…シエルトだな、危ないのは。こういう場所で一人になっても意外と平気そうだが、フォリーが思ったよりよく出てくる」

そう言つて、クロードは辺りに何もなければ確認した。

…何度も現れるフォリーを倒しているのは、全部クロードだった。フィリップはフォリーの、その奇妙な容姿に圧倒され全く動けずの状態。

自分がどれだけ弱いのか、どれだけ臆病なのか…改めて思い知る。

(……………兄さんだったら、敵を相手に臆するなんて絶対にならないだろうな)

フィリップの兄…、ファルクスが自分よりも『遙かに優れた人間』である事はよく知っている。ノックスにだって慕われている様子だった。

…自分が怯える時、まず思い出すのはファルクスの事。こんな時、兄さんならこうなんだろうな、と、そんな事ばかり考える。

その考えの後に「兄さんは凄い」と素直に尊敬したいのに、実際、生まれるのは劣等感と…嫌な嫉妬心。尊敬はしているのだが、それが素直に出来ない。

そんな調子でフィリップは正直…ファルクスを苦手な目で見ていた。『兄』という存在は、いつも自分の中に不愉快な感情を芽生えさせる種だから…。

…そんな事を考えていたせいだろうか。

「どうしたフィリップ、…どこか痛むのか」
「……えっ？」

そう思わせる程に、フィリップは苦痛そうな表情をしていた。

「あ……ああ、いや。何でもないですよ」

慌てて笑顔をつくる。…だが、どこかまだ表情がぎこちない。

「…俺には『さういうの』がないから分からないが…、そこま
で悩むほどの事なのか？」

クロードの唐突な言葉に一瞬、驚く。ただ、理解が出来なかったの
はほんの数秒の間。

『さういうの』、というのが兄弟である事がすぐに分かった。
だが自分は何も言っていない筈なのに、何故考えている事が気付か
れたのか。フィリップは問う。

「なんていうか……お前、兄の話題が出ると決まって今みたいな
顔をするから。なんとなく、その辺の事なんじゃないか、と」

…初めて自分が今までそんな表情をしていた事を知る。
ただこれ以上兄の話題を続けなくなかったため、兄の事は何も言わ
なかった。

「…クロード先生って、兄弟とかいないんですか」

そんなフィリップの心情を察したのか、クロードも特に兄の話を出す事はしなかった。

「ああ、そういうのはいないな。…まあ一人くらい、妹とか弟なんかは欲しかった時期もあったが」

「……妹、ですか」

フィリップはまた、自分の兄弟の事を思い出す。だが、それは兄の事ではなかった。

それは、かつて自分の後ろをいつもついてきた少女の事。

「年下の兄弟って、いいですね。楽しそうにあとをついてきたりして、可愛いなって」

「……あとをついてきたり、するものなのか？」

あまりよく分かっていないような顔をする。

…兄の話題と同じくらい、『それ』は辛い話。

それでも、あの少女の姿を思い浮かべるのは幸せな事だった…。

「…ええ、後ろを一生懸命ついてきて、可愛いんです。……妹が、いたので」

「へえ、三人兄弟」

しかし、クロードはそう言った直後に怪訝な表情になる。『いたの

で』、という言い方が引つかかった。
なぜそんな言い方をしたのか、少し考えればすぐに分かる。気にな
ったが、クロードの方からそれについて触れる事はしなかった。
…その必要もなかった。フィリップの方から話してくれたのだ。

「……あはは、死んじやった、とかそういうわけじゃないんです
よ。…同じ事なのかもしれないけど、……数年前、突然いなくな
っちゃって」

クロードはてつきり、事故死かその類かと思っていた。
行方不明というのが死よりも話を重苦しくしている気がする。

「……家出なわけ、ないよなあ」

いなくなってしまったのが数年前…、フィリップは今、14歳だ。
フィリップと妹がどれほど年が離れているのかは知らないが、数年
前が3年前だとしてフィリップは11歳。
そうすると、妹は10歳か…8、9歳くらいになる。
そんな小さな子供に数年経っても帰って来ないような家出が出来る
だろうか。出来たとしても怖くなってその日のうちに帰って来てし
まうか、警察辺りに保護されるかだ。

「いなくなった理由とか…、そういうのはよく分かっていないん
です。ただ…その頃、誘拐事件が多発してたんです」

「……誘拐？」

「小さい子供ばかりが狙われて…ひどい時は一日に何人も。結
局犯人は捕まっていないし、子供達も見つかからないままで…、……」

…だから妹も、もしかしたら…なんて」

…それを聞いた途端、クロードがぴくりと表情を変えた。

そしてどこか落ち着かない様子で、急に何か考え事でも始めたかのように黙り込む。

フィリップの声も届いていない様子だ。

「…でも確か、その誘拐事件の被害者の可能性がある子供が、一人だけふらりと戻ってきたって話を聞いた事があるような……、

……先生？」

フィリップに呼び掛けられ、クロードは我に返る。

慌てて返事をするも、彼の目はまだ別の何かを見ているようだった。

28話 黒と虚の世界？

倒れた柱から水滴の落ちる音が響く。

あちらこちら壁の一部が崩壊した瓦礫やら倒れて折れた柱やら。

見上げると屋根は所々崩れていて、隙間から不気味な空が顔を覗かせている。

それでもここは他の壊れかけた建物と比べるとたいして損壊はしておらず、ここが建物の中であるという事が分かる。

「はあ…。まさかあんなに追いかけられるとは思わなかった」

唯一崩れる事なく立っている、大きく立派な柱にシエルトはもたれかかっていた。

呼吸が荒く、ばくばくと激しい鼓動を打つ心臓を静めさせようと胸の辺りをおさえている。

深く深呼吸をするも、呼吸はまだ少し荒いまま。

そんなシエルトの向かいには、息を荒げる事なく平然と立っているノックス…。

「なんで女つていうのは、こども体力が皆無に近いんだ？ たったあれだけの距離で…」

「『あれだけ』、って事はないだろ。『かなり』の間違いじゃないのか…」

ようやく息が落ち着き始め、脱力したかのように力無く、崩れるよ

うにその場に座った。
そんな調子じゃ動けないじゃないか、とノックスは溜息をつく。

…黒いもやに包まれ、フォリーに襲われそうになったところを偶然、ノックスに助けられた。

あれだけ捜しても誰一人として見つける事が出来なかったというのに、あの状況でノックスがやって来たというのは実に運が良い。しかしフォリーはなかなか倒れてはくれず、追いかけてしまっていたのだ。そして慌てて逃げ込んだのが唯一建物としての形を保っているこの場所である。

それからフォリーが近付いてきている様子は無く、どうやら逃げ切れたらしい。

とはいえ、助けられた事には感謝するが…

(なんでこいつなのか…ねえ……)

そう心の中でぼやき、じとりとノックスを見る。

女嫌いのノックスなど、女であるシエルトにとってはあまり一緒にいたくない。クロードは何を考えているのかよく分からないし、…

…となるとフィリップが一番問題無い気がする。

…ただ少し、頼りない気もするが。

誰も見つからない状況で、ノックスでもいいから会えればいい、なんて思っていたりもしたが、とりあえず撤回する。嫌いな奴はどんな状況であっても嫌いだ。

「…とにかく今はこんな所で休んでいる場合じゃない。はやくフィリップ達を見つけて、さっさと帰るぞ」

「……はあ、もう行くの。だいたい帰り方なんて分かるの？」

ノックスは「早く行くぞ」とだけ言って『帰り方』については何も言わなかった。ただ、そんなもの知るはずもない、と言いたげな顔をしている。

当然だ、シエルトにもノックスにも…フィリップ、それから恐らくクロードにだって。帰り方など誰も知らないだろう。

目が覚めたら、いつの間にかこんな場所に倒れていたのだ。自分達が今どこにいるのかも全く分からないというのに、帰り道など見当もつかない。

勿論、そんな事はシエルトも当然分かっていたが、ノックスがあたかも簡単に帰れるかのような言い方をしたため、少し期待してしまっただのである。

「はあ……」

今日は何度も溜息をついている気がする。疲れきっていて体が重苦しいが、再び溜息をついて立ち上がった。

そんなシエルトの様子に、釣られてかノックスも溜息をついてしまっ

「あのなあ、思うんだが…。お前のアルム、あのでかい剣…お前が扱うには重過ぎるんじゃないのか」

つまり、すぐに疲れてしまうのは重い武器を持って移動しているからだ、と言いたいらしい。

今は必要ないと思えば消してしまっているが…、ついさっきまで、フォーリーに追いかけられるまではずっと持ち歩いていた。不意打ちに対処出来るように、だ。

確かにあれは重いことは重い。ただ、シエルトが普通に振り回せる程度の重さだ。見た目よりは軽い。

とはいえずっと持っているには…確かに重いのだ。最後の方は引きずりながら歩いていたのである。

「しょうがないじゃない。重さなんて、どうこうできないんだ」
「……………それくらいのコントロールはできるようにしておけよ……」

「スイスロールが食べたいなあ」
「…面白くねーよ」

冗談で言ったわけではない。ロールと聞いて、ふと本当に食べたくなっただけだ。

そう思うと、イヴェルの顔が思い浮かぶ。お菓子といたらイヴェルだ。さいごに彼女の焼いたケーキを食べたのはいつだっただろうか。なんだかもう二度と食べられない気がしてきた。

今頃イヴェルはどうしているんだろうか、もうシエルに帰ってきているのだろうか…。

「…ったく、これだから女は…。ちゃんと帰れるからさっさと歩

け、置いて行くぞ」

…そう言ったところで、ノックスは急に立ち止まった。
何故だかは分からないが、どこか様子を窺っているようにも見える。
そして、

「だめだ。今は出ない方がいい」

「……は？何だよ、行くなって言ったりだめって言ったり」

ノックスは呆れたような顔をした。

「…分からないのか？さっきのフォーリーに、すぐ近くで見張られてる。今ここから出たら、あいつの目の前に堂々と出てくる事になる」

「ほんとうに面倒くさいなあもう……。さっきから色々と…上手くいってない気がする」

そう言ってシエルトはまた、溜息をついた。

29話 静寂の中の二人

とにかく今はこの建物からは出られない。

ここは唯一他とは違い、ちゃんと建物としての形を保っている場所なのだ。それによく見てみると、いくつか扉のようなものがある。

慌ててこの場所に逃げ込んだので気が付かなかったが、どうやら思ったより広く大きな建物らしい。もしかしたらフィリップ達も、この建物のどこかにいたりはしないだろうか、と。

とても他に人がいるような気配はしないのだが、フィリップ達がないと断言できるわけでもないし、フォーリーはなかなか立ち去ってはくれない様子。

ずっと同じ場所で待っているのだったら、少しこの建物の中を歩いてみよう、という事になった。

それに、帰れる方法なんかが見つかったりするかもしれないし、ここが何処なのか分かったりするかもしれない、というのは都合が良過ぎだが、その可能性が無いとも言いきれない。

こんな状況なのだ。少しでも気になったら探索は必要かもしれない。しかし、ここはわけの分からない場所。むやみに足を踏み入れるというのも考え物である。

(……………なんか、似たようなところばかり)

シエルトとノックスは長い廊下を歩いていった。

ここは殆ど損壊しておらず、壁や天井、床に亀裂が入っているものの崩れてしまうような様子はない。

ここまで来る途中にいくつか部屋があったが、割れた窓ガラスやその破片が散らばっているだけで他にはなにも無かった。

人がいたような様子もなく今のところ、フィリップ達はここには来ていないだろう、という話になっている。

…そんな二人の歩く廊下には、冷ややかな二人の足音だけが響いていた。

特に会話が交わされる事もなく淡々と歩いているだけ。……シエル

トとノックスが問題無く話をした事は一度もないかもしれない。

始まりから終わりまで常に喧嘩だ。初めて会った時からずっとそうだ。

ノックスは口を開けば決まって「女のくせに」と言うし、シエルもいちいちそれにたいして言い返す。

互いに仲良くなるとうという気持ちは一切無いのでどうしようもない。しかしここへ逃げ込んできた時は普通に会話をしていた気がする。

あの時は色々と焦っていたし、ようやく会えたという安堵から自然と言葉が出ていただけかもしれない。

…ただ一応、この空気を「気まずい」とは感じているようだ。

とはいえ話すような事は無い…というより何を喋っているのか分からない。暗くて静寂なこの空間が余計喋りづらくさせている。

二人がそんな事を考えている間に、いつの間にか廊下の突き当たりまで来ていた。

それをきっかけにノックスがようやく話し出す。

「……………この辺りは、なにもないな」

「…どうなの？」

そう訊かれてノックスは少し考える。
フォーリーが立ち去ってくれたか様子を見に行くか、それとももう少しここを探索してみるか…。

…シエルトは何気なく上の方を見る。

(……………ん)

シエルトの目に留まったのは、壁が少し崩れて窪んでいるところにある…光るもの。
光る、といっても発光しているのではなく、小さな鎖のチェーンが見えているのだ。

それが無性に気になり手を伸ばしてみるが…届かない。
その崩れた窪みは壁のかなり上の方で、背伸びをしても指先があと数センチのところでも届かないのだ。
シエルトのその様子にノックスが気付く。

「届かないとかマジかよ……………」
「……………」

そう言って馬鹿にしているかのように笑い出した。
シエルトが睨んでも構わず笑い続ける。
そして、特に背伸びをする事もなく簡単に窪みから取ってしまった。

「ほらよ、感謝しろよチビ」
「……………こいつ」

窪みから取った『それ』をわざとらしく見せびらかしてくる。

シエルトは睨みつけ、何も言わず乱暴に『それ』を奪い取った。

『それ』は楕円形をした、キラキラと輝くオレンジ色の飾りのついたペンダント。

中央に描かれている四つ葉のクローバーの柄が可愛らしく、小さい子が身につけると似合うようなものである。

それはどうやら写真を入れられるロケットらしく、蓋が開きかけていた。

（何だったかな……………これ、どこかで見た事があるような……………ないような）

蓋を開けてみると、思った通り中には写真が入っていた。

写真は古いものなのかとどこどころ薄汚れていて破れかかっている。

写真に写っていたのは、一人の男性。見た目は20代前半程度。

少し釣り目気味なのが特徴で、首の辺りに傷跡のようなものが見える。

30話 静寂の中の二人？

(男の人の写真か……)

勿論その写真の男性の事は知らない。

それよりも気になるのはペンダントの事だった。

レーヴにあるアクセサリーショップなら、こんな感じのものがよく売っていた気がする。

イヴェルもたまにこういったものを身につけている事があった。

ただこれは……楕円形のオレンジ色の飾りといい、その中央に描かれている四つ葉のクローバーの絵といい……。

このペンダントに似たものをよく見る、というよりは、このペンダントそのものをどこかで見た事がある気がするのだ。

小さい頃、こんなものでも持っていたのだろうか？シエルトは昔からあまりアクセサリーを身につけたりはしなかった。

ただ右腕につけている幼い頃から持っていた、安っぽい銀色のブレスレットくらいならあるが……これはいつから持っていたのかも分からない。

昔からこれだけは身につけていて、それが今も習慣になっている。

「わざわざ写真入りなんて、持ち主にとっては大切なものだと思うけど……写真が男だし、見た目からして女の人のものかなあ」

「なんで女ってそういうの持ちたがるんだろうな。センスが良いとも思えないし、理解出来ないな……」

別にセンスは悪くないと思うけど、と何故かこのペンダントの持ち主を庇うような気持ちになっていた。

「まあいいや、これは……」

シエルトは周りをきよろきよろと見回すと、廊下の突き当たり部分にある出窓にペンダントを置いた。

まだどこかで見た事があるような気がして気になっているもの、ずっと考えていれば思い出すようなものではないだろうし。

だからといって持ち帰ってしまうなんていう泥棒みたいな事はしたくない。

もしかしたら無くなっている事に気が付いて持ち主が探しに来るかもしれない……とも思ったが、さすがにそれはどうだろうか。

持ち主はもうこの辺りにはいないだろうし、……こつこつという廃墟のような場所に置き去りにされている物は、どうしても持ち主はとつくと死んでいるのではないか、などと思ってしまう。

とりあえず、一応探しに来るかもしれないという事を考えて、すぐに目につく場所に置いておく事にした。

「……で、この後どうするか決まったの？」

「……フォリーが立ち去ったかどうか、見に行こうと思う」

…その会話が、シエルトにとってどこか変な感じがした。

それは決して悪い意味でも悪い感じでもない。…まともに喧嘩にならず会話を交わしたからなのか。

彼と『普通の会話』ができるようになったのは、ここに来てからのような気がする。

「なんかここにいるフォリーって姿も気味が悪いし、徹底的に見張りまでするなんて…ちよつと変わっている気がする」

「ああそれは……この辺り、…魔力が強いつていうのか。そのせいか、フォリーの知能が普通よりも高く感じるな」

魔力が強い……さっぱり分からなかった。

普段ただそこに魔力が流れている、というのを知っているだけで、それを感じたりした事はない。目に見えるものでもないだろうし。能力的に平凡な自分には魔力の強弱など感じ取れるものではないのかも知れない。

シエルトは、アルムが出るまでの時間がいつもより早かった事や、こちらの攻撃は当たっていなかったのにフォーリーが傷を負った事、などをノックスに話した。

どうやらそれも魔力が強いという事に関係しているらしい。

「というか、そんな事も分からなかったのか。シエルの生徒なんだから少しは勉強しろよな、チビ女」

「……………んー…なんていうか……なんでそこまで、女嫌い？」

ずっと疑問に思っていた事だったからだろうか。自然とその理由を訊いていた。

ノックスは少し間をあける。言うか言うまいか迷っているようだ。

…迷う事なのか。

「まあ、その……………女の兄弟がいるんだよ。そいつらの性格が色々あってだな……………ええと……………」

なぜかはつきりと言わない。

語尾を濁しながら喋り、珍しく焦っているようだ。

「……………ふうん…何言つてんだかよく分かんないけど、そんな理由だけで嫌いになるものかね。まあ別にいいけどさ」

あまり深く詮索するのは良くないと思い、それ以上はきかなかつた。ただ単純に女が嫌い、という事はなくちゃんと理由はあるようだが……。

それは焦る程はつきりとは言えないような、言いづらい事らしい。それがどんな理由なのかは到底思いつかない。

…相変わらずこの建物の中は不気味な程に静寂。
二人の声と足音だけが響いている。
そんな静けさにも慣れてきていた時のことだった。

「きゃ……っ……………」

まるで二人をわざと驚かせるかのように、静寂を打ち破る轟音が響き渡った。

ノックスはたいして驚いた様子はなかつたが、突然の大きな音がうるさくてシエルトは小さな悲鳴をあげると両耳を塞いだ。

その轟音は、よく大きな鉄扉などが勢い良く閉められる時のものに似ている。それと地響きのようなものも混ざっていた。

轟音は一度聞こえたきりで、再び静けさが戻って来る。

「……………びっくりした」

「これくらいで驚くなよ」

「ていうか、何の音……」

ぐるりと周囲を見渡しても、音の正体らしきものは見当たらない。それに轟音は遠い方から響き渡ってきていたような感じた。少なくとも

とも、この建物の中のどこから聞こえたものではあると思うが。

「誰かいるのか……？」

もう一度、ノックスが辺りを見渡す。それでもやっぱり何もないのだ。

……シエルトが怪訝な顔をする。

「……なんか……話し声が聞こえるよ」

初めは気が付かなかったが、よく聞いていると確かに人の話し声のようなものが聞こえてくる。

何人かの声が、ぼそぼそと小さな声で喋っているような感じだ。何を言っているのかは全く分からない。

「……人がいるのかなあ」

「どうする。……行ってみるか？」

行くか行かないのか、といったら、行かない方がいいだろう。

だがもしかしたら……この場所について知っている人間がいるかもしれないし、轟音や話し声はフィリップ達が関係しているかもしれない。

……。

「……行ってみようよ」

話し声の聞こえてくる方を辿り、ついたのは一つの大きな扉の前。そつと扉に耳を当てると話し声はこの扉のすぐ向こうから聞こえてくるようだ。

これだけ近付いても、相変わらず何を言っているのか聞き取れない。あの轟音も…この向こうからのものなのだろうか…？
ノックスは特に恐れる事もなく大きな扉を、開けた。

「……………」

扉の先の光景。

それは記憶の中の悪夢を…抉り出されるようだった。

扉の向こうの部屋は、天井が殆ど崩れていて空が完全に見える状態。

壁には、あの夢の中で見た奇妙な文字と…同じ。

文字が描かれ光を放っている。それは夢にでてきたあの壁と、全く同じものだったのだ。

それから、壁に埋め込まれているような、気味の悪い四つの球体からのびる鎖…。

それぞれ鎖によって四肢を拘束され、吊るされているのは…拘束された手足が異様に長い、痩せ細った人間…の、ようなもの。

その背中からは、夢の中でもここへ来る前も目にしていた…奇妙な文字が刻まれた、銀色の天使のような…あの翼が生えていた。

31話 空の再会

その光景はあの夢と似たようなものだった。

また夢を見ているのかと思ってしまう程だ。思わず後ずさりをしてしまう…。

夢の中に出てきた下半身が肉塊というのも不気味だったが、鎖で四肢を拘束され吊るされているというのも直視できたものではない。

まるで…拷問の様子を見ているような気分だ。吊るされている者は、時折苦しそうに低い呻き声をあげている。

そんな呻き声と同時に常に聞こえている、小さな話し声…のようなもの。

これも吊るされている者の口から聞こえている。

動く事が出来ないのか攻撃をしてくるといふような様子はないが、それでもこれ以上、ここにはいない方がいいような気がする。

動けない状態とはいえ、シエルト達の姿に気付くと突然暴れ出した。やかましく激しい金属音が響き渡り、頑丈そうな鎖が今にも壊れそうである。

こんなものが…四肢の拘束を解かれ自由に動き出されては無事で済まない…吊るされている者の異様な姿を見て、すぐにそう思った。あまりの光景に二人はただ立ち尽していたが、少ししてようやくノックスが口を開く。

「……………っ、……………何なんだ、一体」

「……………」

…もうこれは夢ではない。現実なのだ。

その区別がつかなくなりそうなり、軽く頭を振る。

「…で、出ようよ、こんな所……危ないよ」

夢の中で…吊るされている者によく似ている化け物にシエルトは襲われた。

あれは夢だったからよかったものの、もし現実であつたなら…確実に殺されていただろう。

同じ文字の刻まれた翼を持っているのだから、吊るされている者が夢の中の化け物と同じ力を持っていてもおかしくはない。

鎖で拘束され動けない状態である今のうちに早く立ち去った方がいい…。

ノックスがここから出るという事に同意し、扉を開けようと手を掛けた…時だった。

「……………、……………？」

扉を開けようとしていた手が止まる。

何故手を止めたのか…シエルトも分かっている。

…暴れている事によって響き渡っていたやかましい金属音が、突然ぴたりと止んだからだ。

それだけなら手を止めたりはしなかっただろうが…音が止んだその直後、小さな足音のようなものが聞こえたのだ。

こつり、こつりと…静寂に響く静かな足音は徐々に近付いて来る。振り返ると、そこには…

「……………」

吊るされている者の前に見知らぬ少女が一人、立っていた。

(……そんな……いなかった、のに……)

この空間には確かに誰もいなかった。

いなかった筈なのに……見た事のない少女はそこにいる。

……漆黒のドレスに身を包み、艶やかな髪を靡かせながら静かに歩いて来る。

光を閉ざしたような虚ろで赤い瞳は、こちらを見ているようで……見えない。

時々視線を逸らしては気だるそうな溜息をついて再びこちらを見る……。

少女はシエルトの目の前で立ち止まると、相変わらず何も映していないような目でじっと見つめる。

どうしたらいいのか分からずシエルトは一步、後ろへ下がった。

赤い目はそつと空を見上げた後に地面へと降ろされる。

また気だるい溜息をつき再びシエルトを見た。

そして、ようやく口を開く。

「……貴方は……、……」

……その少女の声はひどく弱々しい。

辺りは静かであるにも関わらず、掻き消えてしまいそうだった。

少女は何度も気だるい溜息をつく。

「貴方は……あの神を、……讚えるというの……?」

今度ははっきりとした声で。…少女はそう言った。

何を言われているのか全く理解できないシエルトは、何も言えずただ少女を見つめていた。

そもそも今、一体何が起きているのかすら理解出来ていないのだ。頭の中は混乱していて、それはどういう意味なのか、と問う事さえできない。

少女は虚ろな目を閉じるとゆっくり右手をあげた。

「……………っ」

…突然、目を開けていられない程に眩しい光が襲い、慌てて両目を手で覆う。

無理に開けようとすると激痛が走るが、それを堪えノックスがアルムを握り少女に攻撃を仕掛けようとするとするも…、

「……………え……………、…え!?!」

…気が付けば二人は…落ちていた。
ただ落ちていただけではない。
辺りはいつの間にか、すぐ側に雲が見えている…。

「ちょっと、落ちてる落ちてる！意味分らない…ここどこ！
！」
「どこってそりゃあ、ここは『空』だろうよ…」

そう、ここは眩しい夕焼けが見え、夕日によって染められたオレン
ジ色の雲が浮いている。空。…の、かなり上の方だった。
落ちているせいか風の音が凄まじく、ノックスの声がいまいち聞き
取れない。

「おかしい…絶対おかしい！なんで建物の中にいたら、いきなり
こんな空の上に出てくるの！どう考えたって繋がってないじゃない
か…！！！」

落ちている恐怖と理解不能な混乱と、うるさい風の音で自分がちゃ
んと喋れているのかさっぱりだ。もう喋れていなくても、いい。
とにかく…一体今、本当に何が起きているというのか。
あの場所のどこにこんな空と繋がっていたのか。
とりあえずこのまま落ちて行けば必ず死ぬ。だからといってどうす
る事もできない。
しかし何もしないで死ぬわけにもいかない…。

…どうする事も出来ないのなら、もうどうにでもなってしまう…と、シエルトは力強く目を瞑る…。

「 ああ、こんな所でようやく再会か」

風が周りの音をやかましく遮る中、かすかによく知る声が耳に届いた。

それは、ノックスの声ではない。

「 ……く……クロード……?……フィリップ」

そこには大鎌を片手に平然としているクロードと、そのもう片方の手で飛ばされそうになりながらも抱えられているフィリップの姿があった。

思えばシエルトはその大鎌を見るのは初めてだったが、こんな状況でそんな事に触れている場合ではない。

あれだけさがしても二人を見つけた事は出来なかったというのに。

…夕焼け空の中、こんな状態でやっとの再会だ。

「 ……うわ……、あれ……もしかして」

空に浮かぶ歯車の上の建物をいくつか通り越し、少しずつ地上の様子が見えてくる。

シエルトの言う『あれ』というのは、聖神塔の天辺にある天使像の

事。

どうやらここはレーヴの空で、落ちているのは丁度そのレーヴの中心……塔の場所らしい。恐らく塔に直撃……などという事はないと思うが。

「やっぱりどんどん地面に近付いてる……………」

「……クロード先生、この状況……………どうにかならないでしょうか、ね……」

そう言つて、抱えられているフィリップは地上を見つめた。

意外にも不安そうな、怖がるような表情はしておらず、寧ろクロード同様平然としているようにも見える。

…のだがそれは本当に何とも思っていないのではなく、半ば諦めかけて死を覚悟してしまつていっているようにも見える。

フィリップのついた溜息がもうどうにも出来ない事を表しているようで、こつちまで死ぬ覚悟をさせられてしまいそうである。

そんな中相変わらず冷静なクロードは、

「あー、安心しろ。そこまで心配する事はないさ」

と、こんな調子でとにかく呑気だ…。

だがそれは本当に『心配する必要がない』からそう言ったのである。クロードは鎌の柄を下へ、やや垂直に向けると、大きく歪な形をした陣のようなものがいくつか、それと文字が2、3個ほどふわりと浮きあがった。

32話 空の再会？

「……………、……………」

両目を固く瞑り、うずくまる。

いつの間にか落ちていているような感覚は薄くなり、あれほど高い所から落ちていたというのに……。

「……………え……………」

体は軽く地面へと着地し転がっただけで、全く痛みを感じなかった。それはまるでほんの十数センチ上から落とされた程度と変わらない。ノックス達も状況はシエルトと同じで、誰一人と怪我をしていなかった。

冷たい石畳の地面には薄く陣のようなものが浮き上がっている。恐らく、これのおかげ……つまりクロードのおかげで助かったのだろう。

少しすると陣は泡が弾けるようにして姿を消してしまった。

もしこれがなかったなら……確実に助からず死んでいたし、想像はしたくないがぐちゃぐちゃの死体と溢れる鮮血の……赤い血の海となっていたに違いない。

立ち上がり、自分が本当に無事であるかという事を確認してみる。

「……………はあ……………、よかった……………本当に、もう……………死ぬかと……………」

突然体の力が抜けてしまったかのように、シエルトはその場に崩れ

座り込んだ。

…ただ、落ちて来たここは塔の目の前。

シエルト達がいきなり上から降って来たものだから、それを目撃していた塔の天使達は慌てて驚き、見ている。

そんな中、クロードはまるで面白いものを体験してきたかのように笑っていた…。

「…一体どうしたというのですか！」

外が騒がしくなっている事に気付き、恐らく一人の天使が塔の中から現れ、シエルト達を囲むようにして群がる天使達を掻き分けた。群から姿を見せたのは、以前塔へやって来た時に出会ったフウカだった。

フウカは群がる天使達に「仕事に戻りなさい」と指示をすると、慌てた様子でシエルト達の元へと歩み寄った。

暖かい、どこか神秘的で神々しさと貫禄を放ち、やわらかで穏やかな雰囲気。霧が漂う塔の中は、さっきまで薄暗くて気味の悪い……得体の知れない場所にいたという事を忘れさせてくれる。

自分はもうあの場所にはいないのだと実感すると、安堵と共に軽い眠気まで押し寄せて来た。

ここは天使達の休憩所なのだろうか。

いくつもの……それなりに価値が高そうな、丸や四角のテーブルと椅子が並んでいて、皆そこでくつろいでいるようだ。

シエルト達はフウカにこの場所へ連れてこられた。

勿論、一体何があったのか、などと色々と訊かれ答える事になった。

「……………よく、分かりませんね。いえ、皆さんも理解出来ないのでしょうけど……。気が付いたら見知らぬ……暗くて壊れかけの廃墟しかない場所にいた、ですか」

フウカは少し考えるが、彼女にはそんな場所に心当たりは無かった。唯一建物としての形を保っていた場所での出来事……あの四肢を鎖

で繋がれた、吊るされている者の事など、ノックスが事細かに話した。

そんな事があったのかとフィリップが驚く。クロードは然して驚いたような反応はしなかったものの、興味を示しているらしい。

…シエルトは辺りをきよるきよると見渡した。

その様子に気付き、フウカはどうしたのかと尋ねる。

「あのさ……、随分のんびりとした様子だけど……祭り、どうなったの？あんなにいたフォリーは？」

奇妙、不気味な事が立て続けに起こり、やっと帰って来たらこんなにも平和な空気ですっかり失念してしまっていた。

「……もちろん祭りは中止となりました……ですが、その……フォリーの事なのですが」

フウカは少し言葉を途切れさせると、少し考えたような顔をして再び話し始める。

「……こちらの方でも理解の出来ない事が起きています……。フォリーは人々を襲いながらも、…突然姿を消してしまっただのです」

「突然消えたっていうのは……」

「……姿を現した後、三十分程で一齐に消えていってしまったのです。騎士団の方々が搜索にあたってくれましたが…全く見つける事はできませんでした」

最初、『消えた』というのは自分達の住処に帰って行った、という意味なのだと思っていた。

だが実際はそうではなくて、フウカの話を知っていると…それは本
当に、目の前からいつの間にかいなくなっていた、という事らしい。
それならば確かに理解の出来ない事だ。そこにいたはずのものが、
ほんの一瞬の間になくなってしまふというのは不思議である。

「…ですが今回は……奇跡というのでしょうか。あれだけたく
さんのフォリーに襲われたにもかかわらず、死者が出る事もなく…
命に関わるような怪我をした人も、誰一人といなかったのです」

シエルトはあの祭りで、怪我を負って立てなくなってしまった人や
倒れた小さな子供を見た。

命を落とした人がいなかった…、という事はつまり、祭りで見た怪
我人は皆無事だったようだ。

「この塔の神が、きっと助けてくださったのでしよう。……感謝
しなくてはなりません」

神…。

あの黒いドレスを着た少女の言葉を思い出す。

少女が言った神というのが、なんの事だったのかは分からない。

シエルトの知らない神の事なのか…それともこの塔の神の事を言っ
ていたのか。

…その答えを知る事はできないだろう。

もう………会えないだろうから。

暗い、夜。

暗いといつてもあの不気味な場所の暗さと比べれば、かなり心地良いもの。空に星の輝きが浮かんでいるだけでこんなにも違う。それに空に浮かぶこのシエルから見た夜空は地上からのものとは違い、どこか幻想的な雰囲気がある。

…シエルトは寮の自室にいた。

あんな場所にいたせいか、毎朝起きて毎夜寝るこの部屋がずっと恋しかった…。

「あひゃー…、そんな事があったの……………」

「もう帰れなくなっちゃったかと思っただし…」

一週間前から別の都市に行っていたイヴェルは今日、帰って来ていたようだ。

レーヴに帰ってきたらきつと祭りの最中だろうと思っていたのに、特になにもやっていなかったどころか、所々壁にひびが入っていた

り壊れていたり…何があったのかと驚いたらしい。
寮へ戻ってもシエルトがいなかったので、なにかあまり良くない事
があったのでは、と心配していた。

「でも、ほんとうに怪我がなくて良かった…。シエルトちゃん
がいなくなっちゃったら私死んじゃうよう…」

「な……何を変なこと言ってるんだか」

何やら少々おかしな事をさらりと言われたような気がして、嬉しい
ような恥ずかしいだけのよう…やや返答に困る。

「それにしても本当、凄く大変だったみたいだねえ。そんな頑張
ったご褒美に！…なにか食べたいお菓子、ない？今度つくってあげ
る」

「ほ…褒美……？お菓子ならいつもつくってもらってるような気
がするけど…」

いいからいいから、とイヴェルは妙に笑顔だ。

…そんなにもシエルトに菓子を振る舞う事が楽しいのか。

ふと、廃墟のような建物の中で、彼女の焼いたケーキを最後に食べ
たのはいつだったかとか、そんな事を考えていたのを思い出す。

あの時はもう帰って来られないし、イヴェルにだって二度と会えな
いような感覚になっていた。

そんな彼女が笑って隣にいてくれるという今が、いつもより幸せに
感じるのは気のせいだろうか。

「……………スイスロールが食べたい……………」
「うんうん分かった、おいしいのつくってあげる！」

その日の夜は、いつもより暖かった。

…それでもあの黒いドレスに身を包んだ少女の姿が、頭から離れてはくれなかった…。

33話 銀色の贈り物

…昨夜はよく眠れなかったと思う。

色々あって相当疲れている筈なのに、眠気がこんなにもひどいというのに…。

気になる事が多過ぎて自然とその事はかり考えてしまう。

こんな真剣に考え事したのはあの奇妙な夢を見て以来だろうか。

祭りの最中、現れた…夢の中に出てきたものと同じ翼を持った、人…のようなもの。

その後突然意識を失い、いつの間にか見知らぬ場所で倒れていた。

夢の中にでてきた部屋とよく酷似した場所に、あの文字の刻まれた翼を持ったもの。

それから…黒いドレスの少女と、少女の放った言葉。

…一度考え出すとそれらが一遍に頭の中でごちゃ混ぜになる。

理解のできない事が多過ぎて、どうせ考えても無駄であると分かっているのに気になってしまう。

(ああ…頭が痛い…)

カーテンから射し込む眩しい光。

…殆ど睡眠をとれていないような気がするのに、もう朝がやって来てしまった。

(……起きなきゃ…)

この妙なだるさは何だろう。

眠い。…でも、それだけではない気がする。

頭が重い、息苦しい感覚。色々と考え過ぎたせいかな。

それに…まるで真夏の朝のように暑苦しい。今は道の片隅に落ち葉が溜まる、立派な秋だというのに…。

向こうの方からパタパタと足音が聞こえる。

「シエルトちゃん、朝だよー」

「……」

イヴェルが起こしに来てくれたというのに何故だか口に力が入らない。

「今起きる」「…と、いつものように返事したいのに、口から漏れたのはまるで震えたような息。

起き上がるうと手足に力を入れたが…。

「……………ん、……………」

どうにか起き上がったものの、手足も微妙にうまく力が入ってこない。

疲労感のようなものが押し寄せてきて溜息をついた。

…ベットから降りて床に足をつけると、冷たいフローリングがひやりとしていて気持ち良かった。それほど今日は何故だかあついなのだ。立ち上がって暫くしてもその暑苦しさや重苦しさは消えてくれない。それになんだか足元がふわふわ浮いているような感じがあって、気を付けないとすっかり転んでしまいそうである。

「シエルトちゃん大丈夫？…まだ昨日の疲れが取れてないのかな

「？」

心配そうにイヴェルが顔を覗きこんでくる。

「……………あー、うん……。…まあ、大丈夫…。早く支度しないと遅刻しちゃうね」

そう言っつて着替えようとするが、服に手を伸ばそうとする事さえ億劫。

だからといつて着替えないわけにはいかないので、重い体を無理に動かすしかない。

…その様子を見ていたイヴェルは、突然シエルトの腕を掴むと無理矢理ベッドまで連れて行く。

着替えようとしている最中だったので何が何だが、とりあえず外れかけのボタンを慌てて戻した。

「…な、……………何？」

イヴェルは無言でシエルトをベッドに座らせると、棚の中の箱から何かを取り出し水色のコップに水を汲み始めた。

箱から取り出した『何か』と水の入ったコップをベッドの横にあるサイドテーブルの上に置く。

『何か』は、白い粒……………錠剤だった。

「あ……………あの……………えつと…………？」

「とりあえずそんなんじゃないや食堂まで行けないだろうから……………袋に入ってるパンを食べてからお薬飲んでね。そうしたらちゃんと寝てる事。効かないから」

「……………????????」

何が起きているのかさっぱり、という様子がシエルトの表情から分かる。

そんなシエルトにイヴェルは溜息をついた。

「もー、分からないの？朝起きたらちよつと顔赤いし…何だろうと思つたら、熱があるんだよ！ちよつとふらふらしない？」

「……………ん、…そう、……………だっけ」

いまいち返事になっていない。まあそれは、熱のせいで思考がまわっていないからである。

…イヴェルの言う通り、シエルトは熱があるようだった。

それは風邪なのか…それとも昨日の疲れからきているのかは、分からないが。

「……………でも、授業…」

普段そこまで真面目に授業を受けているわけでもないが、休むという事は今まで殆ど無かったため少し不安だった。

「大丈夫、シエルトちゃん分までノート取ってくるから！」

そう言うといヴェルはさつさと支度を終えて「ちゃんと寝ててね、行ってきます」と、部屋を出て行ってしまった。

「……………」

…確かに、足元が浮いているように感じるのは頭がふらついているからなのかもしれない。

滅多に風邪を引かないので分からなかった、…というくらい、本当に風邪は今まで引いた事が無いのだ。

そういえば、授業を休んだのはどれくらいぶりだったか。

どれほどだったかは忘れたが、ずっと前に家の都合で出掛けるので休んだ、という事はあった。

自分が風邪を引いたなどと知ったら姉は…リンセルトはどんな顔をするだろうか。

やっぱり珍しいと驚かれるのか。思えばリンセルトは小さい頃、よく風邪を引いたと母から聞いた事があった。実際、寝込む姿を何度か見ている。

(……………)

…そんな事を考えながら布団に潜っていると、いつの間にか眠りかけてしまっていたようだ。

寝る前にまず…イヴェルに言われた通り薬を飲まなければいけない。飲まなかったら、怒られる。多分。

その薬を飲む前にもしなければいけない事があったはず。

(袋の……なんだっけ…?)

熱が出るとここまで思考がはっきりしなくなるなんて、と苦笑した。

34話 銀色の贈り物？

どんよりとした灰色の雲が浮かぶ空。

その空は今のシエルトの気分そのものだった。

「シエルトちゃん、どう？ちゃんと寝てた？」

「うん……まあ、……寝てた、かな」

そんな曖昧な言い方に、本当に寝てた？と疑問を持たれる。

…多分、しっかりと寝ていたはずだ。

言われた通りに薬を飲んだ後あまり眠れていなかったのも、すぐに眠りの世界へ入ってしまった。

…少し体は楽になったものの、すっかり眠れなくなってしまう。

なので授業が終わりイヴェルが帰って来るまで適当に布団の中で本を読んだりしていたのだ。

…今この部屋にいるのはシエルトとイヴェル……それからリサもいる。

「委員長としてクラスメートの見舞いに行く事は当然」との事でやって来たのだ。

「…驚きましたよ。シエルトさんが熱を出して欠席だなんて、今までに無かった事でしたからね。てっきり風邪は引かないような人なのだ」と

「あはは……自分でもちょっと…珍しいなとは思ってる」

今日の授業の、代わりに写してもらったノートをイヴェルに渡され

た。

そのページを開いてみるが、恐ろしいほどに見やすく書かれている。
…。
まずわざわざペンで色分けなんてやった事がないし、非常に読みやすい。字も綺麗に整っている。

自分が書いたページと見比べてみてもその差は歴然。

… ちょっとは彼女を見習おう、と思った。

「フィリップ君とかクロード先生とか、みんなびっくりしてたよ
」。先生は… 昨日の事とか色々あったせいじゃないかなって」

フィリップは見舞いに行けない事を残念がっていたらしい。

… 女子寮に男子が立ち入る事はできないのだ。もちろん、その反対も同じである。

「今夜はきちんと薬を飲んで、ちゃんと寝てくださいね。でない
と風邪はすつきり治ってくれませんか」

その後リサは明日の授業の変更についてなど丁寧に、簡潔に説明し
終わると用事があるという事で帰って行った。

… 相変わらずの真面目ぶりに思わず感心してしまう。

「…………… それにしても、最近ほんとうに寒くなったねえ」

一応暖房が掛かっているのだが…それでもやっぱり寒い。
朝は熱のせいで暑苦しさがあったが、熱はだいぶ下がり布団から少し出るとひやりとした空気が当たって中に引っ込めなくなる。
すると、イヴェルが何かを思い出したかのように「そうだ！」と椅子から立ち上がった。

「ねえシエルトちゃん! ……んーと、何色が好き？」

「……………え？」

突然の質問に戸惑う。

寒い、だとかそんな事を言っていたのに、どうして好きな色の話になるのか…。

「たしか、赤とかは好きじゃなかったよねえ」

「…そうだなあ……………白、とか。…好きかな」

「なるほど、白ね。それじゃあ……………」

イヴェルは納得したように頷くと、自分の机の上に置かれていたバッグを持って出掛ける準備を始め出した。

財布の中身を確認したり、小さな紙に何かを書いている。買い物メモ…だろうか。

「……………。どこか行くの？」

「うん、ちょっとね。…あ、ちゃんと寝てなきゃだめだよ……………」

……………じゃあ行ってくるね!」

そう言って、イヴェルはやたらと機嫌良く部屋を出て行った。

籠に入った赤色や青色の毛糸玉、瓶いっぱいの様々な色や形、大きさのビーズ……。

折りたたまれたり巻かれたりしている布など、それらが棚やガラスケースの中にずらりと並べられている。

ここはイヴェルがよく買い物をする手芸店だった。

客層は若い女性が多く子連れもちらほらと見かける。

(…………… ああ、幸せだなあ)

手芸道具、材料を目の前に、イヴェルの口元は幸せそうに緩んでいた。

(暖かいマフラー…編んであげよう。シエルトちゃんは喜んでくれるかな)

去年、シエルトの誕生日につくってあげた、手の平サイズの小さな

くまの人形。今でも学校の鞆につけてくれている。
一昨年の冬はシェルトが手にしもやけをつくった。そこで手袋を編んであげると、喜んでつかってくれた。

今年も使おうと引き出しに大事にしまっけてくれている。

…そんな事を考えていたら、更に口元が緩んで早くシェルトの顔を見たくなった。

毛糸玉しか買う予定はなかったのだが色々眺めているうちに、ビーズやら何やらと買ってしまった。

買い物済ませ店を出ると、入口の横には毛むくじやらのフォーリーの姿が。

もちろんこれは人を襲わないよう訓練されているもので、客が出入りする度にぺこりとお辞儀をしてくれるのだ。

耳にリボン、体には暖かそうなケープを纏っているなど随分と洒落た格好をしている。

このフォーリーの姿を見るのも手芸店に来る楽しみの一つであった。

216

(……………ほんとう、最近急に寒くなったなあ……………って、あれね?)

行き交う人々の中に、見覚えのある後ろ姿。

「……………フィリップ君?」

「…あ、イヴェルちゃん」

見覚えある後ろ姿はフィリップだった。

フィリップはイヴェルが片手に持つ紙の袋を見る。

「その袋って、もしかしてその手芸屋さんの？」
「うん、そうだよ。知ってるんだ？」

先程の手芸店の買い物袋はチェック柄に猫のイラストが描かれていて、店のロゴマーク入りの大きなリボンの飾りがついているなど女性に人気がある。

…この袋欲しさにわざわざ買いに来る客もいるとか。

「母さんがよく買ってたからね。……………でもこの絵の猫、いつ見ても可愛いなあ」

「猫、好きなの？まあフィリップ君が猫とお戯れしてるようなイメージは安易に思い浮かぶけどね」

「猫ってさ、柔らかくてふかふかしてて、鳴き声とかあの猫目とか……本当に可愛いよ。冬の夜は一緒に寝ると凄く暖かいんだ」

「あーそれは分かるよー。湯たんぽみたいだもんねー」

イヴェルの家では猫を二匹飼っている。

シエルに入る前までは、毎年冬は猫二匹を自分の布団の中に入れて一緒に寝るのが恒例だった（勿論、無理矢理ではなく向こうから入って来るのだ）。

ただその分狭くなるので寝返りが打てなくなるのが欠点だが…。

「……………そういえばシエルト、今日風邪で欠席だったんだよね……………大丈夫なの？」

「朝よりは楽になったみたい。でもまだ…熱は下がりきってなくて……………ああそうだ。前から聞きたかったんだけど…、シエルトちゃんとフィリップ君で、どうやって知り合ったの？」

クラスも違うしシエルトは男子生徒との交友はあまりない。
だから記念祭の日に二人が知り合いだったという事を知った時には
驚いた。

…そこでなぜかフィリップは少し困ったような顔をする。

「うーん……なんていうのかな。その…」

言うか言うまいか迷っている様子。

無理に言わなくてもいいと言ったが、フィリップは話す事にしたよ
うだ。

「ほら、シエルトって右手に銀色のブレスレットみたいなの、つ
けてるでしょ？」

「うんうん、つけてるよね」と、イヴェルは頷く。

「その……あれと同じ……いや、似た物をね、僕の妹も持ってて
…」

「へー、妹さんがいるんだあ」

「うん……それで、あのさ……。イヴェルちゃん、シエルトがあ
のブレスレットをなんで持ってるのか……知ってたりしない？」

まさかそこで質問が来るとは思っていなかったので、返答にやや間
があく。

「……んー……そういうのは知らないなあ。どこかで買ったか、誰か
に買ったか……とかじゃないのかなあ。……でも、どうして？」

「妹が持っているのは誕生日の日にあげようと、母さんに教わっ
て僕が作った物なんだ。……その、数年前に妹は……いなくなっちゃ
って」

「あ……いなくなっちゃった妹さんが持っているはずの物を、どうしてシエルトちゃんが……って、事？」

妹がいなくなった、という部分にはあえて触れなかった。そんな事をわざわざ説明させる必要は無いと思ったからだ。

…そのブレスレットがどこかの店で買った物ならば、それは偶然同じ物を持っていた…という考えになるだろう。

だがそのブレスレットは妹の誕生日プレゼントとしてフィリップが母親に教わりながら作った『手作り』なのだ。

フィリップによれば色の感じや大きさ、ビーズの形など…本当によく似ているらしい。

ただビーズ自体は店で買ったものであるため、たまたま同じビーズを持っていた…という可能性もあるが。

「それで…もしかしたらシエルトが妹の事で何か知ってるんじゃないかなあ…とか思ってたんだけど。やっぱり偶然かな…いくらなんでも考え過ぎ…っていう気がしてきた」

それでもいなくなってしまった妹の事なのだ。そこまで考えてしまうのは当たり前。

そう思い、考え過ぎという事はない、とイヴェルは言った。

35話 影の少女、朦朧とする意識の中で

暖かい布団の中、柔らかいベッドの上…。ふと目を覚ますと見慣れた天井が見える。頭が重いのは寝起きだからというより、なかなか下がってくれない熱のせい。

「……………」

イヴェルが出掛けて行った後、ぼーっとしていたらいつの間にか眠ってしまっていた。

隣にあるイヴェルのベッドを見ると、その上にはバッグが置かれている。

バッグはイヴェルのものだった。

（……………もう帰ってきてるのか）

そんなに長い時間寝ていたとは思わなかった。…それとも彼女が帰って来たのが早かったのか。

だるい体を手で支えながらやっとこさ起こすと、椅子に座ったイヴェルの後ろ姿が見えた。

ただ顔はテーブルに伏せていて…眠っているようだ。

（どこに行ってたんだろっ？…出掛ける前に…なんか色の事を聞いてきたけど）

すると、ふらりと眩暈に襲われて起き上がった体は再びベッドに倒

れた。

…そういえばカーテンが閉められている。

外はすっかり暗くなっているようだ。…今は六時くらい…だろうか。間違っているかもしれないが。

夏の頃は六時でも外は充分明るかった。

十月辺りになってからはめっきり陽が短くなり、四時を過ぎた頃からだんだん暗くなってくる。

普段は外に出るといっても学園内を行動している事が多いので…そんな事は特に気にもしないが。

…ごりると、イヴェルのベッドとは反対側の方に体を向ける。

(この部屋は……イヴェルがいなかったら相当地味なものになっていたんだろうな)

部屋の隅に置かれている小さなタンスの上の、花瓶を見てそう思った。

…花瓶には淡い桃色の一輪の花。

出窓にもイヴェルが大切に育てている花が飾られている。

花だけではない。彼女がつくったぬいぐるみや小物がいくつか置かれているのだ。

もしこの部屋を使っているのが自分一人だけだったなら…飾り気の無い、とても『女の子の部屋』とは思えないものになっていたに違いない。

部屋の模様替え、飾りつけなんて思いつかないだろうから。

(……………ん)

どこか…違和感のようなものを覚えた。
それは桃色の花が飾られている辺り。どこをどう見てもいつもと変わらないはずなのだが…。

(…影……………?)

いつもと全く変わらないはずの様子の中、少し気になったのはそれだった。

影…というのはつまりタンスの上に置かれた壁に映る、花瓶と花の影。

「……………あつ、」

ようやく『違和感』の正体に気付き…それが少し驚いてしまうものだったので僅かに声が出してしまった。

横になりながら見ているからそういう風に見えるだけなのかもしれない、と思っていた。

ただそれはよく見てみると…明らかにおかしいものだった。

壁に映る花瓶と一輪の花の影。

…それだけではない。

そこにはなにか…『別の影』も映り込んでいた。花の影と重なり気付きにくかったのだ。

(…なん、だろう?)

まるで怪談話を聞いているような…そんな気分になる。

『別の影』をじっと見つめているとその影は突然ゆらりと動いた。びっくりして布団に潜り込み、それでも気になるので顔だけ出す。熱のせいで幻覚でも見ているんじゃないだろうかと思った。

…まあ、さすがにそれはないだろう。そこまで高熱は出ていない。実際、熱で幻覚を見るのかどうかは分からないが。

よく目を凝らし見つめていると、

(……え。……もしかして)

それはどうやら人の形…のようだ。

怪談話を聞いているような気分から、突如心霊体験をしているような状態に変わった。

鳥肌がたち、慌てて「見間違いかもしれないし」と自分に言い聞かせる。

そう、人の形に見えるだけなのかもしれないのだ。

「怖い」と思っているから…そういう風に見えるってしまっただけ。

…そういう可能性だってある。

もしかしたらイヴェルに見せたなら彼女はまた別の物に見えるというかもしれない。

……というシエルトの考えは、容赦無く否定される事となる。

「……………!!」

その人の形に見える影はすっと花瓶の方から移動して、確かな『人の形』となってしまうた。

シレットからして長い髪……。

「……………」

…不思議だった。

ただ長い髪というだけで、それが何なのか…誰なのか、という事が分かってしまったのだ。

考え過ぎかもしれない。こじつけかもしれない。

そう思つて…それなのに、その人の影からは『一人の存在』ばかりが勝手に連想される。

そんな事があるはずはないのに。

いくらそう思つても、自分の考えは自動的にそういう事になつてしまふ。

(黒いドレスを着た……………あの子だ！)

その影から分かるのは長い髪という事だけ。

ドレスを着ているのかまではつきりとしない。そもそも影なのだから色も分からない。それなのに何故かそれが黒いドレスであると確信してしまう…。

影はさらに移動し、部屋の入り口のドアの向こうへと消える。

シエルトにはそれが消えたというよりも部屋から出て行った…つまり部屋の外の廊下へ出て行ったように見えた。

熱がある。頭が重い。体も重い。とにかくくだるい。

時折軽い眩暈だつてする。

自分はこの部屋で、このベッドで寝ていなければいけないのだ。風邪を治さなければいけないのだ…。

…そんな事はもうどうでもよくなつてしまつていた。

こんな熱の事より、あの少女の事が優先される。

ふらつく足をそつと床につけベッドから降りる。暖房が掛かつているおかげでフローリングは冷たくなかつた。

「イヴェル……」

テーブルに顔を伏せるイヴェルは思った通り眠っていた。テーブルの上には…白い毛糸玉。

マフラーを編んでいる最中だつたらしい。途中になつたままだ。

（白………この事だつたのか）

…毎年、彼女にはいろんな物をつくってもらっている。いつかはお返しをしなくちゃいけない。

妙に嬉しい感情が湧き上がつて来た。

いつもいつも、彼女には感謝している…。

「……」

こんな状態で部屋を出て行ったら…熱があるのに、と怒られるだろうか。

（すぐに戻ってくれば……大丈夫）

イヴェルは自分の事を心配してくれているというのに…。

勝手な事をして風邪を悪化させてしまったら…申し訳ない。

(…でも、ほんとうにすぐ戻れば…)

シエルトは少し躊躇いながらも、寮の自室を出て行った。

36話 影の少女、朦朧とする意識の中で？

廊下に出ると、突然ひんやりとした空気が体を包み込んだ。部屋の中は暖房ですっかり暖かくなっていたのと、熱のせいで尚更寒く感じる。

…何か一枚上着のようなものでも持ってくればよかつただろうか。ただ、あまり何度も部屋を出たり入ったりと騒がしくしていると、イヴェルを起こしてしまうかもしれない。そうすると今自分がしようとしている事が彼女にバレしてしまう。

(すぐ戻るって決めたんだから……我慢、我慢)

寮の部屋の扉がずらりと並ぶ柄の無い地味な赤絨毯の廊下。この時間帯は皆自室にいて、廊下には生徒達の姿はなかった。

(この格好でも、別におかしくないよね)

今日はずっとベッドから出られなかったので寝巻から着替えていない。
い。
なのだがシエルトは寝巻という格好があまり好きではないので、今着ているのはゆったりとした服。見た目は寝巻とは分らないようなものである。
ただ自分はこの服を寝巻として使っているため、この格好で外に出る事が少し気になってしまった。

(あの影どこにいったんだろう……えっと、こっ

ち…かな)

…寮の外へと出る事にした。

なぜか寮の中を探すという考えにはならなかった。

それは、影だけで黒いドレスを着た少女だと分かった時と同じ。

この寮の中にあの影はいない。影は外にいる。不思議だが、そう判断できる。

寮の外は更に寒い。

風が強く、地面に落ちた枯れ葉がカサカサと音をたてている。

冷たい風は容赦なく体に吹きつけられた。

熱で頭が熱くて、なのに寒い。その感覚が眩暈を引き起こす。

そんな眩暈を無理矢理振り払いいきよるきよると辺りを見回した。

「……………あつ」

黒いものが寮の門の外、校舎の方へと消えて行くのが見える。

…しかし…一瞬しか見えなかったのではっきりとは言えないが、それには立体感のようなものがあつた。

つまり影には見えなかったのだ。

ほんの一瞬だけちらりと見えた、靡く艶やかな髪の毛先、ふわりと動く黒いドレスの裾。

それは間違いない。『吊るされた者』のいた部屋に現れた少女の姿…。その姿を見て早く追い掛けようと走り出すも、何もない場所で転びかける。

足元がぐるりぐるりとよろめいて、転びそうになってはじめて歩く事すら辛くなっている事に気が付いた。

(…私…何をこんなに必死になって…)

風邪を引いて、ベッドで寝ていなければならない病人が、何故こんなにも必死になってあの少女を追いかけなければいけないのか。今更馬鹿らしくなってくる。

あの少女を追い掛けて一体どうするといつかの？

少女の放った言葉…あの言葉の意味を問うのか。

意味を訊いてどうするのだろうか。どうせ自分にはなにもできやしない。

今している事はなんの意味もないのでは…。

(でもどうしてだか…会わなきゃ…というより、あの子に会いたい…?)

どうして自分はこの少女を追いかけようと思ったのか。それが分からなくて胸の辺りが気持ち悪い。

(私は…今、あの子を追わなきゃいけない…って、思ってる。

……何で、かな)

立ち止まった足をふらつかせながら、ゆっくり前へと動かす。

走る事は無理でも歩く事ならどうにかなった。

そうしてまであの少女を追いかけ…会いたかった。

どれだけ歩いただろうか。

両脇に木々が並ぶ長い道を行き、正面玄関から一度校舎の中へと入り、その後柱廊に出て噴水のある庭へ。

…誰もいない、そんな庭で。

「……………見失っちゃった」

やはり少女は影から人の姿へと変えていた。

少女は確かにこの庭の噴水の前に…立っていた。

それなのに。やっと追いついたと思ったのに。気が付けば少女の姿など、どこにもなかったのだ。

確かに目の前にいたはずなのに…消えた。

…もう限界だった。

意識が消えかかったように揺れて、その場に崩れる。

体の全てから力が抜けてしまったようになって立とうとしても足がそれを拒む。

……………もうこのまま倒れてしまおうかと、思った時だった…。

「……………」

何か暖かいものが背中を…シエルトの体を覆った。

すっと白い腕が伸びて優しく抱きしめられる。…それが凄く心地良

かった。

誰だろうと振り返りたくても、そうする事さえ儘ならない。

「……………私」だって、分かってくれたのね。ありがとう

その声はすぐ真後ろから聞こえた。自分を優しく抱きしめるものの声。柔らかくて、優しくかった。

それから、それは……………間違いなく黒いドレスを着た少女の声だった。

白い腕はそっと体から離れ、背中を覆う暖かさも…………消える。

…………ごめんなさい。

どこからかそんな声…………言葉が耳に届いた。

その直後、意識がふわりと浮いて、遠くへと飛んで行った気がする。けれどもそれは…………気を失うというよりも『眠る』という感覚に近かった。

ゆらりゆらりと静かに揺られながら…重い瞼をゆっくりと開いた。地に足をつけて歩いていないはずなのに、視界に入った景色は流れるように後ろの方へと過ぎ去って行く。そこは窓が延々と続く長い廊下だった。透明な窓ガラスに映る自分を見て、今がどういう状況なのか理解する。

「……………お前」

「ああ、シエルト。もう死んだかと思っただぜ」

そう言つて、クロードがへらへらと笑つた。

…シエルトはクロードに背負われていた。

ただその様子は親子、或いは兄妹のようにも見え、『おんぶ』されている、という表現の方が相応しいかもしれない。

「ねえちよつと、降ろしてよ。ていうかどこに行くの…」

「外で寝てるなんて頭がどうかしちゃったのかと思つてな。医務室だ」

「…馬鹿か。変な事言つてないで早く降ろして」

「そんな事よりなんで病人が校内にいるんだ」

「うるさい、私の勝手！降ろせって言ってるだろ！」

あまりにも「降ろせ」と怒るので、クロードは仕方なく降ろす事にした。

怒るくらいの元気があるなら歩く程度の事もできるだろう、とも思
ったのだ。

シエルトは医務室へは行かずそのまま寮へ帰るといふ。そういう場
所に行きたくないらしい。

さすがに熱を出している生徒を一人で寮に帰らせるといふわけには
いかないの、クロードが寮の門まで送る、という事になった。

…シエルトは一人で帰れると言い張ったが途中でまた倒れてしまっ
ては大変な事になる。

（はぁ………すぐに戻るつもりだったのに。イヴェル、なんていう
かなあ。………それにしても、ちよっと楽になった…？）

倒れてしまう程、眩暈が酷く体力も限界に達していたというのに。
目が覚めると驚く程大きな声は出せるし難無く自分の足で歩く事が
できた。

これは少し考え過ぎかもしれないが、と思ったが、もしかしたらあ
の黒いドレスを着た少女が…。

自分を抱きしめた時、何かしてくれたのだろうか。

…あの時は凄く心地がよかった。

37話 ルシファー

大勢の人々が神に祈りを捧げに訪れる聖神塔。

天使達の休憩場所に茶を飲むフウカの姿があった。

白を基調とした、どこか教会のような雰囲気のあるこの建物に彼女の飲んでいる…古めかしい感じのする湯呑みと渋い香りのする緑茶は不釣り合いだった。

…桜と梅の花の髪飾りにはよく合っているけれども。

彼女がこういったものを好むのは、和を中心に栄える「八重霞」という都市の出身だからである。

「フウちゃん!」

その声によって心の落ち着き、静寂が打ち破られた…。

フウカは茶を飲みながら自分の名を呼んだルイスを睨みつける。そして困ったような顔をして溜息をついた。

「…その呼び方、どうにかならないのですか」

「えー？前は『フウちゃん』って呼んでも怒らなかつたのに」

「……前々からそう呼ばれるのは好きではありませんけど」

そう言ってフウカは湯呑みを少し強めに置いた。

何度言ってもルイスは『フウちゃん』という呼び方をやめないの、それについては最近諦めかけている。

「……そういえば、貴方は墮天使ルシファアの話をご存知ですか？」

「…んん、何だって？お伽話はあまり好きじゃないんだけど」

「そういうものではありませんよ。天使達の間ではそれなりに有名な話なのですが…知りませんでしたか」

ルイスはその話に興味を持ったのかフウカの向かいの席に座った。残り少なくなつた緑茶を一口飲んでから話し始める。

「ルシファアという、少女の天使がかつてこの塔にいたそうです。そこまで昔の事でもないそうですが」

あと一口となつた緑茶を名残惜しそうに見つめる。

飲もうとするも少し迷い、結局飲まずに湯呑みから手を離れた。

「…ルシファアは…とても強い力を持っていたそうです。自らの力の強さを見せ付ける行為を働いたそうです」

予想していたより面白味の無い話だったらしく、ルイスは背伸びをしたあと大きなあくびを一つ。

その様をだらしがないと注意する。

「私もその話は詳しい、というわけではないのですが…、力で天使達を脅したり、神を侮辱した事もあつたそうです」

塔で働く天使の仕事は人々を助け、人々を支え、世界に喜びと幸福が満ちるのを手伝う事。

そんな天使が自らの力で人を傷つけるなど、絶対にあつてはならな

い事なのだ。

「そのような行為を繰り返し行い、結局ルシファーは塔を追放されたそうです。なので墮天使、だとか」

フウカは最後に残った一口を飲み終える。

…少し冷めてしまっていた。さつき飲んでいれば、と少し後悔する。

「……へえ、そんな事があったのかい。……でもなんでそういう話を？」

「…ルシファーがいた頃から働いていた天使達が…最近、このレビューでルシファーによく似た少女を見た、というのです」

「そりゃあいるんじゃないの？殺されたわけじゃないんだから、外を歩いていたらって何もおかしい事じゃあないだろう」

「それは、そうなのですが。…追放されてから暫く、ルシファーは姿を一切見せなかったそうです。それが最近になって頻繁にそれらしい人物を見かけるようになってきたらしくて」

空になつた湯呑みを指先で弄ぶ。

…天使達はルシファーを危険視していた。

自らを追放した塔を、快く思っていないはずがない。

塔は、ルシファーに確実に恨まれてるだろう。ルシファーは本当に強い力を持っているのだという。

姿を見せ始めたのは…何かを企んでいるのではないか。仕返し…復讐を企んでいるのではないか…。

天使達は、墮天使ルシファーを警戒し始めているようだ。

「…あひゃー…………シエルトちゃん、どういふ事、かな」

「ん…、そうだなあ…。…どういふ事…なんだろうねえ…これは」

顔だけは笑っていても、その内の感情は全く別のものであるイヴェル。

ベッドの上で頭から布団を被り、何気に目を逸らすシエルト。

…思った通りだった。

「『寝てる』…って、私は言ったよ。ちゃんと言った、はつきりそう言った。でも何でかな、シエルトちゃんはたった今、外から帰ってきたみたいだけど」

こうなる事は分かっていた。

寮へ戻って、まだイヴェルが寝ていたらいいな、なんて考えていた。…けれども、そんな長時間眠ってはいはくれなかった。

彼女は目を覚まし…すぐにベッドから、部屋の中からシエルトの姿

がなくなっている事に気が付いた。
寝ていてくれれば、目を覚まさないうちにこっそりベッドに戻って
「私はずっとここで寝ていました」という風に外へ出た事を隠せた
というのに。

「でも、あの、私……ちょっと変な話なんだけどさ、だいぶ体が
楽になっちゃったみたいで……あー、……ごめんなさい」

温厚なイヴェル。そんな彼女は今、明らかに怒っている…。

自分が風邪を引いて本気で心配してくれていたのだ。

こんな事になって怒らないはずがない。心配して、自分が部屋から
いなくなつた事で更に心配させた。

「か……簡単に許してもらおうなんて思ってないけど……
その、本当に……ごめんなさい」

「……………」

イヴェルが小さく息を吐く。

シエルトには……それが呆れた溜息に感じ取れる。

……互いに何も喋らず、冷たい沈黙が辛い。

「……………っ！？」

突然、イヴェルに両頬をつままれた。

「ひえっ……な、なに……」

「ずっとつまんでみたかったんだよねー、このほっぺた」

何が何だか分からず混乱する。

イヴェルは楽しそうに指でつまんで笑っていた。

「しよーがないから、今のこれで許したげるね」

「……は、はあ……」

「ちゃんと寝て、ちゃんと風邪治してくれる？」

きよとんとした顔でとりあえず頷く。

…なぜか頬をつままれて、なぜか許してくれた。

こんなに心配をかけさせてこんなおかしな事で許してくれるのか。すっかり機嫌を良くしたイヴェルは自分のベッドの上に白い毛糸玉を持って来て、マフラーを編み始めた。

（……早く、治そう。じゃないとイヴェルがずっと心配するもの……）

…腰の辺りに何かが当たった。

手で触れてみると、服のポケットが膨らんでいて固い物がぶつかるような音がする。

（…物なんて入れていたっけ）

手を入れ固い物を取り出すとそれはペンダント……。
四つ葉のクローバーのイラストが描かれた楕円形のオレンジ色の飾り。
写真を入れられるようになっているロケット。
…あの廃墟のような場所で見つけたペンダントと、全く同じ物だった。

（え……私、あの場所に置いてきたよね……これ）

それを見て一瞬体が硬直する。

あるはずのない物がなぜか自分のポケットの中に入れられていた。

…いつのまにか、ありえない筈なのに。

38話 花の姫君

…あれから二日が経った。

薬を飲んで寝ていたら風邪はすっかり治ってくれた。

久しぶり（といってもほんの数日ぶり）の戦闘技術の授業では、少し感覚を忘れてしまっていたのか不注意でまた怪我をした。

…しかも以前と同じ肘を。

風邪が治ってイヴェルが自分を心配する必要は無くなったというのに、この大した事のない小さな傷で彼女はまた心配する。

手当をした方が良いと何度も言われた。以前は何だか格好が悪いと思っただけが…。

イヴェルが「絶対にしなくちゃだめ」と言うので今回はやってもらおう事にした。

なので、右肘には小さめの絆創膏が一つ。…この程度の手当で済んでしまうような怪我だったのだ。

なのにイヴェルはひどく心配をする。

もし自分が大きな怪我をしたり病気をしてしまったら、彼女は心配に押しつぶされて寝込んでしまいかも、と思った。

…それからあのペンダントの事だが。

ある筈がないのに自分の服のポケットの中に入っていたのだ。

最初はなんとなく綺麗で可愛い物だと思っただけが…こうなると不気味にしか映らない。

ただそれは人の写真が入っているので「捨てる」わけにもいかない気がし、今は仕方なく引きだしの中に仕舞っている状態だ。

五階建て程の、やや小さめのビル。その一階にある最近出来たばかりの本屋の出入り口にシエルトの姿があった。

…本を買ったような袋は持っていない。

勿論本を買う為に来たのだが、欲しかったものと他に気になるようなものがなかったのだ。

それは少し残念な事だったが本は棚に並ぶ背表紙を眺めているだけでも楽しいものだ。

なので来て良かった、とは思っている。

本屋の外はそれなりに人はいるものの店が両脇に並ぶ通りと比べればかなり少ない。

人混みが好きではないのでここはとても落ち着く場所だ。

明るい茶色の石畳と複雑な曲線を描く飾りの街灯、様々な色に染められた小さな花が咲き誇る花壇や上品さのある黒っぽい木のベンチが並ぶここは、機械と魔法で溢れる大都市のレーヴらしさがない。

非常に落ち着いた空気と雰囲気、常に押し合うようにして人々がこつた返している場所とは違い気ままに自分のペースで自由に歩く事が出来、疲れる事もない。

レーヴが全部ここみたいな所だったらいいのにな、と思ったりする。ベンチの目の前にある街灯と同じ曲線の飾りの柵の向こう、足元より下には真つ青な広大な海が広がっている。

ここから海を眺める事はあっても浜辺へ行く事は殆ど無い。

派手な水着を着て海水浴にやって来た観光客がとにかく多くてあまり行く気がしない。

どこの海もそんな感じなのだろうが…こんな事を思っているのは自分だけかもしれないが、正直、目の遣り場に困る。

(……………。 …… ああ、ハンカチか)

足元の近くに何か落ちていた。

それは白い生地我真つ赤な薔薇と…あとは名前がよく分からない水色や紫の花柄模様のハンカチだった。

染み一つ付いていないこの綺麗なハンカチも、このまま地面に落ちていてははずれ風に吹かれて地に引きずられ、歩く人々に気付かずに踏まれて心無い者にわざと踏まれて、土と足跡で汚れてしまうのだらう。

…落し物を拾わず通り過ぎる自分も心無い人間だらうか。

いつもなら特に気にも留めず放っておくのだが、そんな事を考えたら何だか綺麗な花柄模様のハンカチが哀れに思えてきた。

さすがに落とし主を見つけた事は出来ないだらうから、とりあえず人に踏まれない目立つ場所に置いておく事にした。

(えっと、……………？)

どこに置いておくのが一番いいか、その場所を探している途中でベロンチに座り海を見つめる一人の女性の後ろ姿が目に入る。

風に靡く金色に近い色をした長い髪、その髪に飾られた花柄のリボン…。

それはシエルトの手に持つハンカチと同じような柄だった。

もしかしたら…これはあの女性のものなのだらうか？

だが花柄なんてよくあるものだし、ちゃんと見てみたら同じ花柄でも違うものかもしれない。…色合いはよく似ているけれども。

少しただ女性に近付いて髪飾りの柄を確認する。それでもここからだともまだ少し遠くて同じもののはつきりと分からない。

こんな事をしていてもあまり意味が無いので、意を決して女性に尋ねてみる事にした。

気品溢れる金色に近い髪が話しかけようとするシエルトを緊張させる。

…別に違っていたら違っていたで、それでいいのだ。何もこちらが困る事はない。

それにもしかしたら本当にこの女性の持ち物かもしれないのだ。

全く知らない人に話しかけるといふ事は滅多に無い。…やけに息苦しく感じる。

「あ、……あの……」

大きな声を出したつもりが、妙に小さくて震えた声になってしまった。

女性は突然声をかけられて少し驚いたような表情で振り返った。…ただシエルトの声からして緊張していると察してくれたのか、女性はすぐににこりと笑う。

「…あの、…このハンカチって、…もしかして…」

女性はシエルトが手に持っている花柄模様のハンカチに目を遣った。その途端、女性はまるで花が咲いたように表情をぱつと明るくして、くすりと笑う。

さっきの柔らかい笑顔とは違って、今度は子供みたいだ。

「まあ、ありがとう！落としていたなんて気が付かなかったわ。拾ってくれるなんて、とても優しい子なのね」

…ベンチに座った女性は、まるでアンティークの人形のようなだった。毛先の辺りに少しウェーヴがかかっている、髪飾りはやっぱりハン

カチと同じ花柄だ。

レースのフリルがついた薄いピンク色のドレス。じっと座っている
と、本当にそういう人形にも見える。

ガラスのような目は、女性が見つめていた海と同じ色。

見つめすぎて色がうつってしまったんじゃないかというくらいよく
似ている。

透き通った白い肌、ほんのりと赤い頬。

…貴族のお姫様…という感じだった。

「ねえ、お礼がしたいわ。ちょっと私の隣に座って頂けるかしら
？」

「え……………あの…お礼、なんて」

突然の事に少しばかり困ってしまふ。

ただ落し物を届けただけなのに、そんな小さな事でお礼をするなん
て過ぎていく気がした。

「お礼なんて要りません」と断ろうとしたが女性は「どうしてもし
たいの」と、半ば強引にシエルトを座らせる。

女性は少しだけシエルトの顔を見ると、ちょっと待っていてね、と
急に何かを考え出すような仕草をし始めた。

「ふふ、うん。やっぱりアレがいいわよね。うんうん、そうよね。
だってこの子に似合うもの」

独り言を喋り一人で勝手に納得して頷く女性。それがなんだかとい
ても可愛らしい。

女性は手の平を上両手を差し出すと、突然ふわりと金色の小さな
魔法陣が現れた。

手の平に浮かんで光を放つ魔法陣は、ぱちりと音を立てて消えたか
と思つと…。

いつの間にかそこには金色のブローチが置かれていた。
そのブローチは三日月を模ったような形をしている。

「…わぁ……」

目の前で起きた魔法にシエルトは子供みたいに目を輝かせる。シエルトは精々、魔力からアルムを出す程度の事しか出来ない。それはまるで夢のような…素敵な魔法だと思った。

「ふふ、とても綺麗でしょう？あなたにプレゼントするわ。私からのお礼！」

「え……え！？」

手の平に乗せられた金色のブローチはとても高価な物に見える。いくら魔力によってつくられた物とはいえ、そう簡単に受け取ってしまっただけのような物ではなかった。

39話 花の姫君？

シエルトは慌てて首を横に振り、断った。

「あ、あのっ……貰えません！こんな高価な物……、私はただ、ハンカチを拾っただけですからっ！」

その言葉に女性は面白そうに、くすりと小さく笑う。

「何を言っているの、今の見ていたでしょう？このブローチはたった今魔法でつくった物なのよ。だから高価とか安物とか、そういうのはないんだから」

「いくらでもつくり出せる物なのよ」と女性はまたくすりと笑った。…それでも、簡単に貰ってしまった方がいいものなのかと迷う。

自分はただ落し物をこの女性に届けただけなのだ。そのお礼にブローチを貰う、というのはやはり過ぎていてのではないか。

大体お礼をされる程の事をしたわけではない。

何度考え直しても、断った方が良くという結論に至る。

「えっと。あの……ごめんなさい、やっぱりこれは貰うわけには…」

「いいからいいから、遠慮しないの！ほら、つけてあげるわね」

「動かないで」と言っ、シエルトの服の胸の辺りに金色のブローチをつける。女性の白くてか細い指が、柔らかく緩やかに動く。つけ終わると女性はにっこりと笑って頷いた。

「うんうん、思った通り。とっても似合う！三日月って綺麗よね。満月より好きなのよ」

「は、はぁ……」

シエルトは女性の手によって服につけられたブローチを見つめる。困った顔をするしかなかった。

別に迷惑と思っっているのではない。むしろ、こんな綺麗な物をお礼としてプレゼントされるといのは嬉しい事だった。

…相手がお礼をすると言っているのにそれを断り続ける事は、失礼な事だろうか。

「あらあら。まだ遠慮しているの？私は、そのブローチを受け取って欲しいの。あなたは『ただハンカチを拾っただけ』というけれど。私にとってはたくさんお礼をしたいくらい、嬉しい事なのよ」

そう言われて、まるで海の色を映す鏡のような目でじっと見つめられると…もう何も言えなくなってしまう。

シエルトは申し訳なさそうな顔をして、指先でブローチに触れた。

「ふふ、貰ってくれる気になってくれたかしら？」

「……………ええ、あの…すみません。……………ありがとうございます、大事にしますね」

胸元で、金色の三日月が上品に光っている。…とても自分に似合うようなアクセサリじゃない。

この女性は似合うと言ってくれたけど、わざわざ似合わないなんて言う人もいないだろうし。

普段は絶対にブローチなんて身に付けない。そもそもアクセサリ

には興味を持っていない。

けれどもこのブローチをつけて少しだけ大人っぽくなった気分……
…気のせいだろうか。

まあ…たまにはこういうのもいいのかもしれない。

そんな事を考えていると、横から女性にまじまじと見られている事に気付く。

「あなた、本当に可愛い子ね。お名前を訊いてもよろしいかしら？」

いきなり可愛らしいなどと言われて驚いてしまい、名乗るまでに少し間があいた。

「えっと……シエルト、です」

「シエルトちゃん、っていうのね。私はダイアナよ。月も好きだけれどね、海も好きなのよ」

ダイアナと名乗った女性はベンチからゆっくりと立ち上がると目の前の柵に近付いた。

薄いピンク色のドレス…とってもしもワンピースに近い服のスカートが柔らかい風に弄ばれる。…少しの間海を見つめていた。

するとダイアナはくるりと振り返り「そうだ！」と手を叩いて再びベンチに腰掛けた。

「ねえシエルトちゃん。もし良かったらでいいんだけどね、今から一緒に塔へ行かない？」

「…塔って、聖神塔ですか？」

「ええそうよ。私、この後行くつもりでいたの。それで…良かったらあなたも一緒にどうかしら」

ダイアナはにっこりと微笑んだ。

この誘いを断る理由は特に無いし、一緒に行ってもいいと思った。それにお礼にお礼をするというのも変な話かもしれないが…、落し物を届けただけでブローチを頂いてしまったのだ。

それに対してのお礼をしなければならぬ、と思った。一緒に塔へ行く事がお礼になっているのかどうかは分からないが…。

「…いいですよ、一緒に行きましょう」

「あら本当？嬉しいわ、誰かと一緒に行くなんて初めてだから」

ダイアナが立ち上がり、シェルトもベンチから立ち上がる。

「さ、行きましょう？ほら…離れちゃうといけないから」

そう言うと、ダイアナは手を差し伸べてシェルトの右手をしっかりと握った。

…それがまるで「母親」みたいな人だと…思った。

塔はいつものように祈りに来た人や観光に来た人がたくさん行き交っている。

あの塔の祭りでの出来事で、像や壁に亀裂が入ってしまったようだ。がそれ程目立つ所もなく、ある程度の修復は済んでいるようだ。

中へ入ると、相変わらず噴水の周囲には手を合わせじっと目を閉じている人達が大勢いる。

その中にダイアナも入って周りの人達と同じように手を合わせて目を閉じ、祈りを始めた。

…祈れば、神の加護があるとされている。あらゆる傷を癒す、だったか。

見た目、ダイアナは怪我をしている様子はない。…なら病気をしているのか、それとも心の傷か。見ただけでは当然そんな事は分からなかった。

(……)

暫くその姿を見てみると、ある事に気付く。

何故だかダイアナの表情は周りとは違った。

……今にも涙を流しそうな、悲しげな顔。

それは祈っているというより、何かに対して謝っているような……。

その表情のせいか合わせられた両手は必死に許しを乞っているようにも見える……。

「あれ、もしかして……えっと、シエルトちゃん？」
「……？」

突然後ろから名前を呼ばれて振り返ると、そこには一人の青年……ルイスが立っていた。

ルイスは「ああ、やっぱり」とこちらへ歩み寄る。

「初めて会った時以来会ってないけど……僕の事覚えてるー？」

「……はい、ルイスさんですよ。フウカさんと一緒にいた……」

シエルトが名前を覚えていると知ると、ルイスは機嫌良くわしゃわしゃと頭を撫でてきた。

……乱暴ではあるが別に悪い気はしない。なぜ撫でられたのか理解出来なかったが。

「フウちゃんったらねえ、なんだか朝から忙しそうなんだよね。」

墮天使ルシファーってのが話題になってるけど、それに関係ある事なのかなあ？」

「……るしふぁー？……ですか」

「ああ、ルシファーっていうのはね、……まあ僕もよく分からないけど……。フウちゃんの話と周りの噂からすると、塔に恨みを持っているから危険人物、なんだってさ」

はあ、と曖昧な返事をする。

それだけでは何が何だかよく分からないが、とりあえず危険らしい。墮天使ルシファーなど聞いた事もない名前だった。

「そのルシファーの搜索か何かで……今、塔に騎士団の人達が来るよ。……あ、ほら」

ルイスは奥の扉を指差す。

開かれた扉からは騎士団の服を着た、ルイスと同じ年齢程の青年と…

「……………うわ」

その後ろを歩く、ノックスの姿が。

向こうがシエルトに気付くと嫌そうな顔をして、数歩後退する。…
人の顔を見るなり失礼な奴だと思った。

「あー、シエルトちゃんはノックス君は知ってるんだっけ。えっ
とね、こちらの男の人はファルクスさんっていうんだよね。……………
うん、確か」

「……………えっ」

ルイスはその人の名前にやや自身が無いようだったが、青年は特に
訂正をしなかったので恐らく合っているのだろう。

ファルクス…それは確か、フィリップの兄の名であったはずだ。

40話 花の姫君？

ファルクスというらしい青年は、軽くこちらに会釈する。慌ててシエルトもぺこりと頭を下げた。

青年は冷え切ったように無表情でどこか冷たい印象を与える。

ノックスが以前話していたファルクスという人物は「冷静で強くて皆から慕われている凄い人」。慕われているのなら、性格は別に冷たくはないのだろうか。

そしてそのファルクスは、確かフィリップの兄の名であるはずだ。目元の辺りが似ていない事もないが、その無表情さはあまりにも大違いである。

ノックスとファルクスは何やら小声で話を始めた。どうやらノックスとシエルトが知り合い同士である、という事についての話らしい。

短い会話が終わるとファルクスはこちらを向いた。

「……君か。ノックスが仲良くさせてもらっているという子は」「……ええと、仲良くは……してないと思います」

「そうですね、別に仲が良いわけじゃないんです。ファルクスさん、俺が女を嫌いなもの知ってるでしょう。ただの知り合いです」

そう言うとノックスはシエルトを馬鹿にしたような目で見てきた。そしてシエルトはノックスを睨む……いつもこの繰り返しだ。

その様子を見ていたルイスは二人があまり仲が良くないという事を理解する。

「君の事は一度、弟から聞いていた。……確かシエルトという名前だったね」

「ああ、そうです……弟って事はやっぱり、フィリップのお兄さんですか」

ファルクスは頷いた。

…本当に彼はフィリップの兄のようだ。

目元は似ていない事もない。だが、やっぱり雰囲気の違い過ぎる。フィリップは天然で、どこか頼りない感じがある。基本的に和やかに笑っているような子だ。頼りないという部分を除けば少しイヴェルに似ているかもしれない。

そしてこのファルクスというのは…どうも基本的に無表情。まだ会って数分程しか経っていないが、正直この表情から彼が微笑むという姿は想像つかない。

口調もどこか感情がこもっていないというか…冷ややかというか。真面目な性格ではあるのだろうか…。

(……うーん、何だかなあ。でもよくあるのかな、似てないって)

「…おい、ファルクスさんに『弟と似てませんね』だとか失礼な事は言つなよ」

「………言わないっての」

人の顔を見るなり数歩後退するという、あまりに失礼な行為を働いたノックスには言われたくなかった。

「すまないね、シエルト。ノックスの女性嫌いには困ったものだよ。いつも彼は女性に迷惑ばかり掛けてしまっている」

「あ……まあその、あまり彼の言動は気にしていないんで」

最初は「女のくせに」と連呼されて腹が立っていたが…。今はもう慣れてきてしまっていた。…それでも腹は立つが。

そこで、ルイスがシエルトの名を呼んだ。

「ねえシエルトちゃん、一緒に来てた女の人…お祈り終わったみたいだけど？」

「あ、ダイアナさん…」

向こうを見ると、祈りを終えたダイアナが噴水の方から歩いてくるのが見えた。

「あら、シエルトちゃん。お友達？」

「ええと…まあ、なんというか」

ルイスとは別に友達という事でも構わなかったが、ノックスとは全く違うしファルクスとは今し方出会ったばかり…。友人といえるかどうかやや微妙だったので、曖昧な返答になってしまった。

「……………。あの、ダイアナさん…大丈夫ですか？」

噴水から戻ってきたダイアナは、さつきから落ち着かない様子で辺りを見渡している。

それにどこか顔色が悪いように見えた。

そんな様子にシエルトは具合が悪いのかもしれない、と思ったのだ。

あらゆる傷や病を癒すという噴水に祈っていたのだから、尚更そう思ってしまう。

「…あ、…ふふ。ごめんなさいね、全然大丈夫よ。心配してくれてありがとう」

「……無理…しないでくださいね」

「あらあら、本当に大丈夫よ？…ちよつとね、貧血気味なのよ」

ダイアナは笑顔で笑ったが、それでも顔色は悪いしどこか落ち着かない様子で…それはまるで、何かに怯えているようにも見えた。すると、ファルクスがダイアナをじっと見ている事に気が付く。もともと冷たい表情の彼だが…ダイアナを見る彼の目は、更に冷ややかに厳しい目。

その眼差しが好意的ではない、敵意を表しているようなものである事はすぐに分かった。

…警戒している、そんな風にも見える。

ファルクスとノックスはまだ塔に用があるようで、他の天使達と話し込んでいた。

…塔の外は、来た時より人が少なくなっていた。塔を出た後もダイアナは少し落ち着かない様子だったが、だいぶ顔色は良くなっている。とりあえず安心は出来た。

「ほら、シエルトちゃん。手を繋がないと離れちゃうかもしれないわ」

「あ……」

そう言っでダイアナは手を握る。来た時も同じ事をしていた。

人が少なくなっていた、とはいえ店の多い通りに出ると行き交う人々で道は溢れ返っている。

…だからといって「離れてしまいかもしれないから」なんて、やっぱり彼女はどこか母親のような人だと思った。

41話 花の姫君？

「…ダイアナさんって」

「ん？」

「なんだかお母さんみたいな人ですね」

そう言われるとダイアナは「そうねえ」と軽く息を吐いて、空を見上げた。

二人の手は、まるで母親から子がはぐれないようにという風にしっかりと握られている。

シエルトの母親も小さい頃はよく離れないようにと手を握ってくれていた。最後に手を繋いだのは、シエルの入学式の日だっただろうか。

寮暮らしになってからは母と出掛ける事など殆ど無くなってしまった。

「ふふ、うーん…私、お母さんみたいかなあ」

「そんな感じがします」

「もしかしたら…私が本当に『お母さん』だから、かな。…私、娘が一人いるのよ。シエルトちゃんより少し年上なんだけれど」

「……………びっくりです」

ダイアナの娘。…ダイアナに似て、きっと綺麗で美人で、お姫様のような子に違いない。…そう思った。

だが少し驚いたのは、明らかに20代前半程のかなり若い彼女に自分よりも年上の娘がいた、という事。

シエルトは15歳（今年の7月に誕生日をむかえた）……………それより年が上。

こんなにも若くて自分より年上の娘がいる……ダイアナは見た目と年齢が合っていないのかも知れない。
義理の娘という事ならあり得るのかも知れないが。

(……………それにしても)

…ダイアナの顔をじっと見た。

風に靡く艶やかな髪、金色のような髪の色は、太陽の光を受けて更に輝いている。

オレンジ色に染まるうとしている空と彼女は絵になる程美しかった。露出過多でどれも似たような格好をした人達の中にと、ダイアナはまるで別世界の人間。

こんな騒がしい都市は似合わない、静かな屋敷のバルコニーで紅茶でも飲んでいるような…そんな貴族のお姫様、という感じ。

(…本当に綺麗な人だなあ)

寮の自室、ベッドの上で、シエルトは天井を見上げていた。ダイアナ。彼女は自分とは完全に正反対の女性。少しだけ、将来は彼女のようになってみたいと思った。どうせ、なれはしないと分かっているのだけだ。

「あれね、シエルトちゃん…天井なんか見てぼんやりして。どうしたのー？」

不思議そうな顔をしてイヴェルがこちらを見つめていた。シエルトはそのままベッドに横たわる。

「……きつとイヴェルが大人になったら、あんな感じなんだろうなあ」

「あひゃー……何の話だろう？……あ。シエルトちゃん、そのブローチ綺麗だねえ。どうしたの？」

シエルトの胸で光る、三日月の形をした金色のブローチ。

小さくてもやはり目立つのか、イヴェルはすぐに気が付いたようだ。

「えつとね……。まあ、落とし物を届けたらお礼っていう事でプレゼントされたの。その人はね、すごい綺麗な人だったんだよ」

「へえ〜……でも何だか高そうな物だねえ。お金持ちさんなのかなあ？」

…彼女が金持ちなのかは分からない。
だが見た目はいかにもお金持ちのお嬢様。着ていた服だって高そう
なものだった。

…ダイアナは、まるで優しいお母さんのような人。

そのせいだろうか。何だか妙に…久しぶりに母親に会いたくなくなった。
今度の休日に、できたらリンセルトと一緒に…家へ帰ってみようか。

「つて、あれ…イヴェル、何持ってるの？」

「ん？あははー、これはねえ……」

これから手品でも見せますよ、というような表情でイヴェルがぱつ
と両手を広げると、手に持っていた……白くて長いものが広げられ
る。

それはシェルトの首にふわりとかけられ、巻かれた…。

柔らかくて暖かくて、ふわふわしていて心地良い。白は自分の好き
な色。

それはマフラー。

イヴェルがずっと編んでいた、真っ白なマフラーだった。

「やっと出来あがったんだよー。ちよっと時間掛かっちゃったん
だけどね。どうかな」

「……………何これふわふわ」

もふもふとマフラーを触る。非常にふんわりとしていて、すごくあったかい。

これならどんなに寒い冬の外でも出掛けられる。……と、思う。……これはかなり良い。

「ありがとう、イヴェル。もうこれずっと大切にするし！」

「うーむ。照れちゃうなあ。…あ、そーだ！マフラーだけじゃ、ないんだよ」

そう言っただけでイヴェルがテーブルの方を指差す。

真ん中に花瓶が飾られたテーブルの上には…皿の上に乗せられた、甘い香りのするもの。

それはあの不気味で廃墟だらけの場所へ行ってしまった日、唐突に食べなくなったスイスロール。

その日の夜に、イヴェルがつくってあげると言ってくれたスイスロール…。

「きつと、美味しく出来たと思うんだけど。…さ、一緒に食べよう？」

絶対にイヴェルは、大人になったらダイアナのような素敵な女性になる。

どうして彼女はこんなにも優しいのだろうか？

にっこりと微笑む彼女の笑顔をずっと見ていたかった。…そんな気分だった。

…すっかり暗くなった夜。

白いマフラーを首に巻いて、シエルトは校内にいた。

教科書を教室に忘れてしまっている事に気付いて慌てて取りに行ったその帰りである。

夜になって風が少し強くなった。マフラーのおかげで首の辺りは寒くない。

「……………シエルト？」

突然後ろから名前を呼ばれて、少し驚いたように振り返る。

…そこにいたのはクロードだった。

「…ああ、先生つてやつぱり大変なんだねえ。こんな時間まで校内に残ってたなんて。寒いのに」

「…まあな。で、お前は何の用だ？この前みたく外で倒れるなよ」

「忘れ物を取りに行っただけ。…てか、倒れないし」

すると、クロードは「そうだ」と何かを思い出したような顔をした。

「ちょっと話があるんだが……怪談話的なものだがな。別に暇
だろっ?。」

「……はあ。」

42話 白昼の悪夢

「……よく分かんないけど手短に済ませてよね。確かに別に暇だけど、寒いんだから」

白いマフラーに顔を埋め、そう言った。

首の辺りはマフラーのおかげで平気だったが、さすがに足の方は寒い。

クロードは「怪談話とは言ったが、そこまで恐ろしい内容じゃないさ」と一言、その後小さな息を一つ吐いてから話し始めた。

「ちよつと前にレーヴで起きた、連続誘拐事件って知ってるか？」

「さあ。あんまりそういうの興味ないから」

解けかかったマフラーを巻き直す。

「さつきよりも更に風が強くなってきたようだ。冷たい風が顔に当たって、少し耳が痛くなってきた。」

「誘拐されるのは幼い子供ばかりで……一日に何人も連れて行かれた事もあったってな」

「ふうん……それ実話？」

「……。……ああ、立派な実話さ」

手袋でもしてくればよかったかもしれない。

忘れ物を取りに行くだけだからとマフラーしか巻いてこなかったが、外に出た間に突然冷たい風が吹きつけるようになった。

「それと、何故か先程からクロードが人の顔色を窺うようにしてこちらを見ている。」

この話で怖がっている、とでも思っているのだろうか。

「結局犯人は捕まっていけないし……子供も帰って来ない。何年も経っているのにな。……まあ……噂じゃ一人だけ戻ってきたとか、なんとか」

人の顔色を窺っているだけではない。

話す度に少し間をあけて、慎重に言葉を選んでいるような気がする。……まるでこちらに気を使いながら話しているようだ。

「よくあるんじゃないの、そういうの。臓器売買……とか。親が目を離れた際にトイレに連れ込んで、とか都市伝説系統でよく聞くよ」

「あるのか、そんなの。……まあ、一部じゃ犯人は人間じゃないって言われてるな。誰にも姿を見られずに尋常じゃない数の子供を誘拐してるんだ。……笛吹き男の仕業だとか、子供を喰らう人喰い妖怪とかな。あり得ないだろうけど」

「……ハーメルンに人喰いねえ……いるんだよね、そういうの本気で信じる人」

この世界は、魔力や魔法は存在している。

またその魔力に命が宿って生まれたフォリーも存在する。

フォリーも妖怪も、たいして変わらないものなのかもしれないが、妖怪というのはどちらかというとおぞましい雰囲気……、おどろおどろとした心霊的なイメージがある。

フォリーなどが存在しても大抵こういった事件というのは人間が犯人……という感覚があった。

一部では犯人は人間ではないと言われているようだが、連続誘拐事件を起こせるような知能を持った存在を、人間以外には知らない。だから……やっぱり犯人は人間なのではないか、という風に考えてし

まう。

魔力を使つて魔法を使用しながら…それなら人間でも一切姿を見せる事なく事件を遂行させる事が出来るかもしれない。

それでも檻襖を出さずに未だ捕まっていない、というのはやや人間離れしているような気もするが。

「……………あー、何だろ。頭痛くなつてきた…」

こここの所、暖かくなつたり突然寒くなつたりと気温の変化が激しいせいだろうか。

そういう時はたまに頭痛がする。

…何てことはない事だろうし、痛むと口にしただけだったのだが…。

「……………そうか。もうこの話はやめよう。他に具合が悪くなつたりしてないか？」

「えー、何…ちょっと気持ち悪いよ。あんたが人の事心配するなんて…」

そう言つてシエルトは怪訝そうな顔をし、「別に頭痛だけだから」と言つた。

風で乱れた髪を手で簡単に整えた。それでもまた風が吹きつけて、冷たい風に黒髪が弄ばれる。

「何でそんな話をしたのか知らないけどさ、もう寮に戻っていいでしょ？いい加減、寒過ぎ」

「ああ……………それから、今の話は適当に忘れといてくれ」

「……………あんたから話してきたんじゃないか。なのに忘れろつて…、まあどうでもいい内容だったから、明日には勝手に忘れてるだ

るうけど」

…突然誘拐事件の話を始めたりして、何となくこちらの顔色を窺っているような気がしていた。

一つ一つ口に出すにもいちいち慎重になっている様子だった。頭痛がただけで妙に体調を気遣ってきたり…。

最後には今の話は忘れて欲しいと来た。…明らかに。

明らかに、先程の彼の様子はどこか変だった。

自分から話し出しておいて忘れるという、訳が分からない所はいつも通りなのかもしれないが、それでもやっぱり彼らしくなかった。

…学校から寮までの道のりはそれ程長くはない。

それなのに今はやけに道が長く感じる。道の途中に街灯と共に立てられている時計を見ると、教室から出た時とたいして時間は変わっていないかった。

…風が強いせいで足が前に進んでいないのだ、という事に見てみる。

(……………頭痛いなあ)

…早く帰ろう。

43話 白昼の悪夢？

雷鳴が聞こえる。

轟く雷鳴は部屋にいる子供達の悲痛に泣き叫ぶ声を掻き消す。轟音が少しの間途絶えると、再び部屋には大勢の泣き声が響き渡った。

(……)

…壁にはあの奇妙な文字が刻まれていた。

それと同じ文字が刻まれた天使のような翼を持つ、人のようなものがゆらりと揺れながら座っている。

15、6人程の幼き子供たちは涙で頬を濡らし、涙のせいで顔に張り付く髪など全く気にせず嘔れた声で泣き叫び続けていた。

…漂う空気は冷たい。それなのに頭の中は暑苦しくて、気だるい。

疲れきったように力の入らない体は、冷たい床の上に崩れるようにして壁にもたれ掛かっていた。

部屋は薄暗く、唯一の灯りは祭壇の上に置かれた何本かの蠟燭に灯る小さな火だけ。

何故か顔も、姿も掠れてしまってよく見えぬ一人の人間が……一人の子供の腕を掴み、引きずるように翼を持つ者の前へと連れて行く。

これから起こる事は、とても怖い事。

不思議と、今から目の前で起きようとしている事が一体何なのか……
分かってしまう。

引きずられて連れてこられた子供は、自分の身に何が起こるのかを
想像して泣き叫び、その場から逃げようとする。

しかしその子供の腕は、再び掠れて見えない一人の人間に力強く引
つ張られて引きずり戻された。

翼を持つ者は……じろりと子供の顔を見つめて嬉しそうに笑っていた。

(……………あの子)

部屋の隅には黒いドレスを着た少女が立っていた。

少女は虚ろな目でじつと床を見下ろしていて、泣き叫ぶ子供の姿な
ど見向きもしない。

……その時だった。

ぐちゃりと嫌な音がした。水に濡れた物が落ちたような音だった……。

翼を持つ者の前に引きずられてきた子供は……赤かった。

赤くなった子供は声も出さず、涙も流さずすっかり泣き止んで、け
れどもまばたき一つせずぼうつと目の前を見つめたままで。

手も動かさず足も動かさず、子供は少し口を開けたまま胸の辺りと、

お腹と、足を真っ赤に染めていた。

赤い色は子供を中心に床にまで広がっていく。胸の中から音を立てて、赤い絵の具みたいなものが絶え間無く溢れ出ていた。

…子供の目の前には肉塊のようなものが落ちていた。

きつと、さっきの嫌な音はこれが落ちた音。…あまり気分の良くない臭いがしている。

だが、以前にも嗅いだ事のある臭い。…久しぶりのこの臭い。

肉塊のようなものは、子供と同じように……子供よりも真っ赤だった。

でもそれはよく見ると肉塊というより……「心臓」に近いもので

…。

「シエルトちゃんったらいけないんだあ。授業中に居眠りしちやだめなんだよー？」

「……………」

…気が付くと、シエルトは机に顔を伏せていた。顔をあげると目の

前にはイヴェルが立っていた。

「……………寝てた？」

「うんうん、寝てたよ。先生は気付かなかったみたいだけど、授業中ずーっと寝てた」

辺りをきよるきよると見回す。

どうやらもう授業は終わったようで、次の授業の準備を始めている生徒や、窓際にたむろって大笑いしながら盛り上がっている生徒達……………。

確かについさつきまでは授業中だった。だが、途中から記憶がない……………当然だ。イヴェルの言う通り、自分は寝てしまっていたのだからただ先生の方は気が付かず、誰にも起こされないまま授業を終えてしまったらしい。

居眠りなんてした事が無かったというのに。

(……………それじゃあ、さっきのは……………「夢」っていう事か……………)

……………また嫌な夢を見た。

激しい雷鳴、薄暗い部屋の中にはたくさんの子供達……………。

壁の文字、翼を持っているあの化け物、姿は掠れてよく見えなかった一人の人間。

そして……………あの黒いドレスを着た少女。

最後に見た肉塊、と想像していた心臓。つい思い出してしまうと、あの臭いがどこからか漂ってきているような気がして軽く吐き気が込み上げてくる。

もうこんな夢は見ないと思っていたのだが……………。

(子供がいつぱい……うーん、昨日クロードから誘拐事件の話聞いたから?)

子供が大勢誘拐された。そんな話を聞いて、子供が出てくる夢を見たのだろっか。

…そういえば、彼にはこの話は忘れて欲しいと言われていた。が、意外と忘れられるものではなかった。

話の内容は興味のあるものではなかったので特に気にする事は無かったが…どうも考えてしまうのはあのクロードの様子。

いつもの彼とは少し違った気がするが……よく考えてみると一応シエルの教師。生徒が、頭痛がすると口に出したら心配（おかし）くらいはするのかもしれない。

(そんな事より…夢……せつかく風邪が治ったのにまた具合悪くなりそう……)

夢といつても、あの光景は生々しかった。夢の中での自分はそれを特に臆する事もなく見ていた。現実だったら絶対にあり得ない。真昼間からあんな夢を見てしまい、すっかり不愉快な気分になってしまった。今日の昼食はまともに摂れる気がしない。

とりあえず、黒板に白や赤のチョークでずらりと書かれた内容を全てノートに書き写す(イヴェルに手伝ってもらいながら)事にした…。

…放課後。

シエルトはダイアナに出会った、あのベンチのある場所へと来ていた。

気晴らしに散歩をしていたのだが、彼女とは是非もう一度話がしてみたいと思いここへ来たのだ。

…海が好きだと言っていたから、もしかしたら今日もいるかもしれないと思ったが…。

そこにはダイアナの姿はなかった。昨日はたまたまここにいただけだったのかもしれない。

(まあ…そうだよな。さすがに毎日いるわけないかあ…)

でも、いつかまた会ってみたい。

まるで母親のような彼女と一緒にいると、自然と気分が落ち着く。

ダイアナは…いつか、またここへ来てくれるだろうか。

(んー、どうしようかな。…ああそうだ、またあの本屋にでも行くのかな)

ここすぐ近くにある本屋。それはダイアナと出会う直前に行って

いた本屋だ。

くるりと向きを変えらるとつま先は本屋の方向へ…。

「…あーごめん。ちょっと君、いい？」

突然呼び止められて、一步前へ歩こうとしていた足はピタリと止められる。

振り返ると、後ろに立っていたのは17〜8歳くらいの少年。

青色っぽいパーカーとジーンズというラフな格好の少年は、被っていた黒いキャップの鍔を少し持ちあげてよく顔が見えるようにしてから「聞きたい事があって」と言った。

…道を尋ねられるだとか、そういうものだと思った。

レーヴは観光客が多いので、その観光客に道が分からずに時々きかれる事がある。

「どうしましたか？」

「いきなりで悪いんだけど、以前レーヴであった誘拐事件。もちろん君知ってるよね？」

いきなり彼は何を言うのか。

…恐らく少年の言っている誘拐事件というのは、昨日の夜にクロードが言っていたものだろう。

「……ええまあ、知ってはいますけど」

「で！君、小さい頃にその事件の犯人らしき人に会ったりしてない？」

正直、返答にかなり困る。

とりあえず苦笑いをして首を傾げてみた。

「はあ……えっと、会ってはいないと思いますけどね……」

怪しい人間だと思った。

こういう事件が趣味だったりするマニアみたいなものだろうか。薄気味悪くなり、早々に立ち去ろうとしたのだが……それでも無理に引きとめて、少年はしつこく話を続けてきた。

44話 白昼の悪夢？

「あの……私、そういうの詳しく分からないんで。もういいですよね？」

「あー詳しくなくっても別に構わないだよ。まだ質問したい事が残ってるしね！」

詳しくない人間にその事件の事をきいても何にもならない。

何度そう言っても少年はシエルトを引き止めた。

あからさまに嫌そうな態度を取ってみせるが…相手は全く気にしていないらしい。

「……………で、もう一度訊くけどー。君は小さい頃、犯人らしき人に会った事はある？」

…誘拐事件の具体的な内容など、一般人が普通に知る筈も無い事を少年は繰り返し訊いて来た。

そして、質問は一番始めのものへと戻る。

「さっき答えたじゃないですか…。もう忘れたんですか？随分と物忘れが酷いようで」

異様に腹が立っていた。

訳の分からない事を何度も訊かれているという事もあったし、ダイアナと出会った場所にやって来て少し気分が晴れたというのにそれを台無しにしたという事。

それ以外にも何だか意味の分からない不愉快さが胸の辺りからじわじわと生まれてくる。

…胸で光るダイアナからプレゼントされた金色のブローチが、黒ずんでしまいそうな気になるくらい。
こんなに本気で腹を立てたのは久しぶりのような気がする。
わざと冷たい口調と相手が気分を害するような言葉で返事をしていった。

それでも少年は気にも留めないから、尚更腹が立つ。まるで馬鹿にされているような気分だった。

「もういいですか？いいですよね？何も知らない私なんかこれ以上訊いても無駄だって、いくら貴方でも理解出来たでしょう」

少年は少し考えるような顔をして、暫くシエルトの顔をじっと見ていた。

その視線がまた、不愉快。自分でも驚くくらい感情は不愉快さと気持ち悪さと怒りで満たされていた。

そこで少年は……笑う。

「……ていうかさあ、嘘は良くないって教わらなかった？」

「……はあ」

少年は自分が嘘をついていると言いたいらしい。

だが勿論、今まで答えてきた事は全て真実。嘘は何一つついていない。わざわざ虚言を吐く理由なんて無い。

「何を言っているかさっぱりです。何で嘘って言えるんですか…」
「君は犯人に会ったの？会ってないの？何で『会った』って言わないの？」

「……もう言ってる事が滅茶苦茶ですよ」

正直、普通の人ではないと思った。

こういう訳の分からない事ばかり言う人間はたまにいる。…薬とか、そういうものをやっているんじゃないかと、そんな風に感じさせるような。

この少年は、もしかしたらそういう類なのではないか…と思った。

「嘘はいけないし、人を頭のおかしい人間だって決めつけるのも良くないよ？僕は至って正常なんだからさー」

「……正常でも異常でもどっちでもいいですよ」

もういい加減、本当にこの場から立ち去ろうと思った。

相手がどんなに強引に引き止めてきたとしても、立ち止まらなければいいのだ。

それにここから少し歩けば人が溢れ返る程いる場所に出る。さすがにそんな場所ですつこくは出来ないだろう。

…すると、突然後ろから頭の上に手を軽く乗せられ、誰かに撫でられた。

「……………あ」

「やあシエルトちゃん、こんにちは。何だかすつこく不機嫌そうな顔してるねー」

…ルイスだった。彼と塔の外で会うのは初めてだ。

少年は残念そうな顔で、それでもどこか楽しそうに笑い、明るい顔で言った。

「んー、ちょっと空気読んで欲しかったな。ナンパ中だったのにねえ」

「……………え？」

今のが…ナンパ。…絶対に違う。

嘘はいけないと言っておきながら、自分が嘘をついているではないかとシエルトは少年を睨んだ。

「まあ…もういいかなあ。それじゃ、僕はこれで失礼するよ。…
またね！」

(…「またね」って、二度と会わないっての)

シエルトは少年の後ろ姿が見えなくなるまでずっとその背中を睨み続けた。

やっと少年の姿が消えると、自然と不愉快な怒りの感情もどこかへ消えてしまった。

…本当にもう二度と会いたくない。

それにしても、ルイスがもし来なければ未だにあの少年の訳の分からない発言を聞かされていた事だろう。

もしかしたら…少年を追い払う為にわざと話しかけてきたのだろうか。

「…あの……………」

「いやー、すぐにどっか行ってくれて良かったねー。最近変な人多いからさ、気を付けないと。おかしいと思ったらすぐに逃げなきゃだめだよ」

「……………すみません、ありがとうございます」

ぺこりとお辞儀をした。

そう、少年は…「不審者」という奴だったのかもしれない。最初は至って普通だったから、気が付かず会話をしてしまったが…。まさか不審者に出会い、そしてそこを助けられるという事になるとは思いもしなかった。何だか情けないような…恥ずかしいような。よくフィリップを頼りないと思ったり言ったりしているが、自分も同じような気がする。というか、フィリップよりしっかりしていないのでは…とさえ思う。

「あ、シエルトちゃん、今の事はあんまり気にしちゃだめだよー？……んんと、それから」

「…はい？」

「さっきの男の子……、見かけたら絶対に近寄っちゃいけないし口も聞いちゃだめだよ。あの子はちよつと……あれだから」

「……ええまあ、絶対にそんな事はしませんよ」

最後の「あの子はちよつとあれだから」の意味が若干分からなかったが、普通じゃないから、という感じの事が言いたかったのだろう。それ以外に、別の意味がある…気もしないでもないが。その後ルイスと別れ、シエルトは店が並ぶ通りを歩いていった。

(……ん、あれって)

どこかで見た事のある後ろ姿。

…金色のような色をした長い髪の女性、ダイアナだった。人混みに紛れているが、彼女の姿はどこか目立っている。

そして、その隣にはダイアナと手を繋ぎ帽子を深く被った子……恐らく、女の子。

(もしかして、あの子が…)

ダイアナは自分に娘がいると言っていた。

もしかしたら、帽子を深く被ったその子がダイアナの娘…なのだろうか。

45話 白昼の悪夢？

…シエルトはシエルに戻っていた。

時計の針は午後4時を回り、陽の短いこの時期はもう辺りは薄暗くなり始めている。

曇り出したのか空を分厚い雲が覆い始めた。

そんな曇り空のせいで、更に暗くなり足元が見えづらくなる。

「あ……」

薄暗くなった校舎の出入り口から、ぱらぱらと数人の生徒が出てくる中、その近くで話をしている二人の姿…。

イヴェルとフリップだった。

向こうもこちらに気付いたようで、イヴェルが軽く手を振る。

「シエルトちゃん、今帰って来たんだー」

「うん。ていうか二人とも、まだ寮に戻ってなかったんだ」

「なんかフリリップ君と話が盛り上がっちゃってー…、結構時間経ってたんだねえ」

フリリップは、「シエルトは知ってるかな」と、二人がさつきまで話していた会話の内容を教えてくれた。

「あまり面白がっちゃいけないような話なんだけどね…：…ほら、犯人がまだ捕まってるような事件ってたまにあるでしょ？」

「…うん」

「これは以前にもあった事らしいんだけど…：数年間なかなか捕まらなかった犯人が、首を刎ねられた死体で見つかったんだって」

「……何それ」

その死体は昨日、レーヴのとある路地裏で発見されたらしい。死体は数年前起きた事件の犯人だった。

そういう事は以前にも何度かあったらしい。レーヴだけではなく、別の都市でも起きているようだ。

中にはその殺された人物を調べると、実は数年、十数年前の未解決のまま放置されていた事件の犯人だった、なんて事もあったらしい。

「……つまり、犯人が捕まっていなかったり、未解決事件の犯人が首を刎ねられて殺されているって事？」

「そうだよ。犯人を、首を刎ねるっていう殺し方をしているから……この罪人殺しの犯人は『断罪者』なんて呼ばれているよ」

「あひゃー……一体断罪者さんは、どうやって犯人さんを見つけてるんだろうねえ」

罪人殺しに、過去に起きた連続誘拐事件……興味が無かったので知らなかったが、意外とレーヴは物騒な事件が起きているようだ。

どんなに楽しそうに、華やかに見える大都市でも恐ろしい事件は起きている。……平和と華やかさしか存在しない場所なんて無いのかもしれない。

もしそんな事件に巻き込まれたらと思うと……あまり外に出歩きたくなくなる。

(……ん、でも……という事は……)

連続誘拐事件だって、まだ犯人が見つかっていない未解決事件だ。

ひよつとしたら誘拐事件の犯人もいずれ首を刎ねられた死体で発見される…なんていう事があるかもしれない。もう既に断罪者とやらの、次の候補にあがっている可能性だってある。

…その断罪者というの、いくら相手が犯罪を犯した人間だからとはいえ殺してしまつては…同じ犯罪者。

それでも被害者からすれば英雄なのだろう。

未解決事件の犯人を的確に見つけ出し首を刎ねて殺す…フィリッブの言った通り、面白がつてはいけない話なのだろうが、断罪者が何者なのかという事を想像すると…少し興味を持ったというか、楽しんでしまった。

勿論不謹慎だと思ひそれを口にする事はしなかった…。

「…あ…そうだイヴェル。言っておかなくちゃいけない事があつたんだ」

「ん？何かなあ」

「明日…私、昼前から出掛けちゃうんだけど…きつと夕方頃までは帰って来られないと思うの」

白いレースのカーテンが引かれた窓の外は小雨が降っていて、窓ガラスには雨の粒が伝っている。

そんな小さな雨の粒が窓にぶつかる音がどこか心地良い。

広々とした部屋の中央にはガラスのテーブルと、白い横長のソファが二つ。

テーブルの上には温かいココアのいれられたマグカップが置かれていた。

ソファにはシエルトが座っていて、その向かいのソファには一人の女性が座っている。

…ここは寮ではない。同じレーヴでもシエルから少し離れた住宅街。シエルトの家なのだ。

肩より少し下程の長さの、ウェーヴのかかった髪はこの女性は…シエルトの母。

「本当にびっくりしちゃった。だつてイキナリ帰ってくるんだもん。部屋の掃除もしてないっていうのに」

「掃除って、私『お客さん』じゃないんだからいつも通りでいいんだって」

それもそうね、と母は笑った。

家には八月…つまり夏休み以来帰っていない。

「帰る」と連絡をするといつも大掃除になつて大変なので、今回は

連絡をせずにいた。

普段長期の休みなど以外には滅多に帰って来る事は無いのだが、ダイアナに出会って母を思い出して…無性に会いたくなった。

「…姉さんはお仕事忙しいみたいだから今日はだめだったけど…今度ちゃんと帰って来るって」

「そう…リンセルトは生徒に慕われているかしらねえ。うまくやっているといいけど…でも」

「…？」

「こんな突然帰って来るなんて、本当にどうしたの？…お母さんがいなくて寂しくなっちゃったのかしら！」

「…そんなわけないでしょ。なんとなく、たまにはいいかなと思ってる」

そうやって温かいココアを一口飲んだ。

シエルでの生活、寮の暮らしにもすっかり慣れて居心地良く感じていたが、自分の住む家へ帰って来た時の安心感は嫌な事全てを忘れられる程。

やはり一番安心出来て心地良い、落ち着く場所は母の待つこの家なのだ。

「…で、どうなのかしら。学校は、相変わらず？」

「……ん…まあそれはいつも通りだけど」

シエルトはフィリップの事や、イヴェル達とクロードに連れられて廃村に行った事などを話した。

その他にも祭りが苦手だというのにリンセルトが勝手に警備の手伝いを承諾してしまったり、女嫌いのノックスの事を話したり。

それから、祭りで起きた出来事……。フォリーが大量に現れた事や、その後廃墟だらけの見知らぬ場所に行ってしまった事など。

…さすがに見知らぬ場所に行ってしまったという話をする、母はひどく心配をした。

ダイアナに出会い、ブローチをプレゼントされた事も話した。三日月の形をした金色のブローチを、母は「綺麗ね」と言ってくれた。

「…何だか、ちょっとの間に随分と色んな事があったのねえ」

「うん……色々と大変だった」

ふと、茶色の本棚に目を向けると、一番下の段に数冊のアルバムが入っていた。

この間までは無かったような気がするが…掃除でもして本棚に仕舞ったのかもしれない。

家に帰って来る度に、ちょこちょこ家具などの配置が変わっていたりする事はよくあるのだ。

「……ねえ、アルバム…見てもいい？」

「あら珍しい。いいわよ、懐かしいものねえ」

46話 不愉快な断罪者と罪人

アルバムにのせられた何枚もの写真は、どれも母の姿が写っていない。

母はいつも「撮る側」だからだ。

シエルトが幼い時にもう父親はいなかった。顔も全く覚えていない。見た事が無いのかもしれない。いつからいないのかを知らないのだ。

だから、写真を撮るのは母しかいない。

数枚だけ写っているものがあるが、これはリンセルトやシエルト、旅行中に他の人に撮ってもらったものだろう。

「…小さい頃はいっぱい写真撮ってたんだね」

「まあね。でも大きくなったら二人とも写真に写るのが嫌だって言い出すようになったから…」

「…何でだろうね。よく分からないけど、嫌」

アルバムは数冊あった。

ページを捲っていくうちに写真の中の自分は成長していく。

そして、写真の数も減っていく。シエルトに入学してから二、三年後の写真は殆ど無い。今年なんて一度も撮っていない。

全てのページを捲り終わると、一つ疑問に思う事があった。

「…あのさ…お父さんの写真で、無いんだね」

「あ、お父さんの？それならね、こっちのアルバムに少しだけ」

母は別の棚の戸を開き、その中から小さくて薄い緑色のアルバムを

取り出した。
それは見覚えの無いアルバムだった…。

「お父さんの写真はねえ、あなた達が生まれる前のものしか無いのよね。……ほら、これ」

緑の表紙を捲り、一枚目の写真には見た事の無い男性が写っている。これが、父親。

(…見た事が……無い………?)

男性の目はつり目気味で、首筋に傷の痕のようなものが見える。この顔も首の傷も……以前確か、どこかで見たはずだ。特にこの首の傷の痕は特徴的で……よく覚えている。

(……これって……あのロケット……ペンダントの写真の人……)

思わず男性の顔をじっと見つめてしまっていた。写真を目の前に何も喋らなくなってしまったシエルトを母は怪訝そうな表情で見ている。

…今、あのペンダントは持っていない。なので同じ男性なのか確認は出来ないが……。
でもこの首の傷はかなり酷似している。
同じ人、なのだろうか。

外は、すでに雨が止んでいた。

道に出来たいくつもの小さな水溜りには眩しい夕日が映っている。水に浮かんだ落ち葉が揺れて、夕日も揺れた。

晴れて良かったと思う。

…久しぶりに家に帰って、母と話をして、帰り道は気分がとても晴れやかになると思っていた。

晴れやかになっているはずだった、この帰り道。

気分は少し曇り空。

これでまだ雨が降っていたら、更に暗くなるところだった。

家を出る時も写真の男性、父親の事が頭から離れなくて…帰りに手を振ってくれた時の母の顔は、笑っていたのは確かなのだがいまいち覚えていない。

（寮に戻ったらちゃんと見てみよう。もしかしたら…よく見たら違った、なんて事もあるかもしれないし）

とほとほと歩く足はわざと水溜りを、ぱしゃりと音を立てて踏む。

…もし、同じ人だったとしたら。

あのペンダントはシエルトか…それとも姉か、母か…これらのうち

の、誰かの持ち物という可能性が出てくる。

…あのペンダントを持って、あの場所に行った事があるのか…。

（そういえば、あのペンダント…どこかで見た事があるかもって、あの時思っただよなね）

それは、あのペンダントは自分のものだったから…という事なのか。…とにかくまだ同一人物と決まったわけではない。寮に帰って、しっかりと確認をしなくてはいけない…。

…気が付けば、あまり人のいない道。…ダイアナと出会ったあの場所に近い。

この通りは本当に人が少ない。シエルトが気に入っている場所だった。

「……………あ、ノックス」

「……………!!…お前…」

もしかしたらこの近くにダイアナがいるかも、と期待をしていた。しかしそこにいたのはノックス。

やはり人の顔を見るなり数歩後退をした。相変わらず、失礼な奴。

「何でお前が出てくるんだよ」

「仕方ないじゃない、ここはよく通るんだから」

じとりとノックスを睨みつけた。

「だいたい…フィリップのお兄さんに言われたでしょ、その女嫌いのせいで女の人に迷惑掛けてるって」

「…嫌いなものは嫌いなんだ。どうしようもないだろう」

「えーと、確かお姉さんだか妹だかの性格が原因で色々あって…
ってというのが理由なんだっけ？」

「……何でそんな前に言った事いちいち覚えてるんだよ…」

以前、女嫌いである理由を訊いた事があつたが、あの時は曖昧な返答で結局質問には答えていないようなものだった。

「でも…そんなので嫌いになつちゃうものなの？もし男の兄弟がいて、それが相当性格悪くても…私は男嫌いにはならないと思うけどなあ」

「あれは…悪いってものじゃないな。姉も妹も母親も、俺と父親以外は女尊男卑主義。毎日毎日、男のくせにだとか訳の分からない事で罵ってくるんだぞ」

ノックスの家では、父親はまるで母達の命令に従う奴隷のようだったという。父は笑って何でも言う事を聞いていたようだが…。

母親は、家にこっそり男を連れ込んでいたのを見て知っている。それも毎日、違う男を。

それでも母の言いなりになる父親はあまりにも不憫だったようだ。姉も母を真似て同じ事をする毎日…。

「…まあ確かに…それは凄い家庭だねえ…」

「俺なんかもう完全に妹のパシリだったんだからな。姉には夜だ

ろつがなんだろうが買い出しに行かされるし……そういうのが嫌でシエルに入学して寮暮らし、卒業した後も騎士団に入ってなるべく家には帰らないようにしてるんだ」

ノックスがパシリ扱い……という光景はとても想像がつかなかった。何を命令されても、彼なら怒鳴って断るといふようなイメージがある。

「でも……確かに酷いとは思っけどさ。全員がそうってわけじゃないでしょ？ 関係無い女の人まで嫌う事ないじゃないか」

「……そりゃあ、これだけの理由だったらここまで女嫌いにならなかったさ。ていうか、女のくせにいちいち詮索するなよ」

そつちから勝手に話し始めたようなものと、シエルトは思った。どうやらノックスの女嫌いの原因は女尊男卑という家庭だけではないらしい。

もう一つの理由の方は、どんなに大金を積まれようが絶対に話したくないのだという。

「でもさー、毎回女のくせにとかは言ってるけど、そう言ってる割には普通に喋ってる感じがするんだよね……あんだ。今だって女である私相手に、女嫌いの理由普通に喋っちゃってたし」

確かに彼は「女のくせに」や「これだから女は」という発言をしているが、そういうセリフがくっついていてただでシエルトとも普通に会話しているような気がした。

……彼が他の女性と会話をしている場面を、見た事は無いのだが。

「あーそれは……話してるうちにお前って……何か女らしくないって

いう事が分かったから、だな。他の女相手だったらまとも会話なんてしないぞ」

「……なんという」

別に女らしく見られなくても構わないのだが、こつ面と向かって言われると少し微妙な気分になる。

「…ま、まあいいや。私もうそろそろ帰るし…って、あれ」

ふと、少し古びた建物が並んでいる方を見ると、そこにルイスの姿がある事に気が付いた。

ルイスは辺りをきよるきよると見回していて、どこか焦っているような様子である事が分かる。

すると、急にノックスが驚いたような顔をした。

「あいつ……足……」

「…?」

ノックスに言われルイスの足の方を見ると、何やら赤い血のようなものが付いているのが見える。

歩きづらそうに足を引きずっているが…怪我をしているのだろうか。そのままルイスは路地へと入り、姿を消してしまった。

47話 不愉快な断罪者と罪人？

妙な不安と嫌な空気が重苦しく漂い始める。

「……………ルイスさん…？」

ルイスは…常にどこかふざけたような感じがあつて、少し不真面目
気味でよくフウカに怒られていて…。

危機感漂うものとは全く縁の無い、そんな雰囲気とイメージがあつ
た。

だから、彼が足を怪我してふらふらと路地裏へ姿を消したその光景
は…妙な違和感があつた。

「あんな…怪我してるって普通じゃないよ……………」

ノックスはほんの少しの間、じつと路地の方を見ていた。

「さすがに……………放っておくわけにはいかないだろう」

「あいたたたた……」

いちいち鋭い激痛が走る、動くには非常に邪魔な存在となっている
右足を手でおさえる。

だが、そんな事をして痛みが消えてくれるわけでも怪我が治って
くれるわけでもない。

見上げると…両脇にそびえる高い建物。その間からは夕焼け色の空
が顔をのぞかせている。

どうしようもなくなり、ルイスは仕方なくその場に座り込んで、綺
麗だなあ、と呑気に空を見上げていた。…もうそれ以外、何も出来
なかった。

（お仕事サボっちゃった上に、帰ってきたら怪我なんかしてて…
フウちゃん怒るかなあ。…ていうか、ちゃんと帰れるのかなあ）

服に染みた血は、赤というより黒に近い色になっていた。

一度座ってしまったと怪我をした方の足はもう力が入ってくれない。
無理に力を入れようとすれば思わず声をあげそうになるような痛み
が襲ってくる。

運良く誰かがここへやって来て、助けてはくれないだろうか…。
…
…こんな路地裏に、誰かが。

「…………ルイスさん……」

後ろの方で聞き覚えのある小さな少女の声が聞こえた。

自分の名前を呼んだその声にはどこか自信の無さが含まれていたが、少女はもう一度、今度ははっきりとした声で自分の名を呼んだ。そこでようやく少女が誰なのかが分かる。

「あ…………シエルトちゃん……？」

振り返ると、そこには何があつたのかさっぱり理解出来ない様子のシエルトと動揺しつつも冷静を装うノックスの二人が。シエルトはルイスの足の怪我の酷さに気付くと慌てて駆け寄った。

「ちよつと…………何があつたんですか！」

「…………ん…………それより、なんで二人がこんな所にいるんだい？」

「ルイスさんが路地裏に入って行くのを見たから…………怪我だつてしているし、何かかと思つて追いかけてきたんですよ」

「…………本当は俺が一人で行くつもりだった。なのにこいつは無理矢理ついてきて…………」

「だつてあんた一人だけじゃ心配…………つていう事はさすがに無いけど。前にルイスさんに助けてもらった事があつたから…………」

前に助けてもらった、というのは、妙な男に誘拐事件の事を色々と言われて困っていた時に追い払ってくれた事である。

ルイスはシエルトを助けた時の事を思い出すと、あの時の事かと笑った。

「……って、そんな笑っている場合じゃないですよ！何があつたかは分からないですけど、その怪我をどうにかしなくちゃ…………」

ノックスは「立てるか？」と手を差し伸べたが、ルイスは差し伸べられたその手を握ろうとはしなかった。

（確かに……さつきは誰かがやって来て助けてくれないかな、なんて思ったりはしたけれど……）

心配そうにこちらを見つめるシエルトと、立ち上がるうとしないルイスに怪訝な表情を向けるノックス。

そんな二人の姿を見て静かに息を吐く。そして、怪我などたいした事が無いとでもいうように笑ってみせた。

「はは……わざわざ追いかけてきてくれたりなんかして有難う。だけど君たちは、ほら。全然関係無いんだから、こんな事に関わらないで帰らなきゃだめだよ」

「……ルイスさんが何言ってるのかよく分かりませんし、こんな状況で平然と笑っていられる神経も理解できません」

何故こんな怪我をしているのか、その理由を全く話そうとはしないが、路地裏へと入って行く時のあの様子だけでも何かおかしい事になってるのは分かった。

「何を言っているのか分からない」とは言ったが、ルイスは二人を巻き込まない為にこの場から遠ざけようとしているのが理解出来る。だからといって怪我人をこのまま置き去りになんてしていくわけにもいかない。

もし置いて行ったりしてしまつたら……と、その後の事を想像してしまつたら尚更だ。

それでもこの場から去れと言いつけるルイスにシエルトは黙るしかなかった。ルイスも何と言つたらこの二人がここから去ってくれる

のだろうか、少し考え、口を嚙む。

そんな居心地の悪い沈黙を破ったのはノックスだった。

「……おい馬鹿女」

女と言ったので、それはシエルトにたいして言ったものだ。
馬鹿呼ばわりされたのだからそれにたいするシエルトの返事は実に不機嫌そうだった。

「はあ……なに……、……？」

文句を言いかけたところでノックスが前の方をじっと見据えている事に気づき、シエルトもそちらの方向に視線を向ける。

…何時の間にそこにいたのか。

足音一つさせず気配すら感じられなかったが、「彼」は確かにそこに立っていた。

眩しい夕日が建物と建物の間から射し込んで彼の妙に機嫌の良さそうな笑顔を照らす。

青色のパーカーとジーンズ、黒いキャップ…どこにでも歩いているような、ごく普通の格好の彼は…間違いなく会った事がある。

…その彼の姿を見ると不快な感情しか生まれない。

そこにいたのは、誘拐事件についてしつこく尋ねてきたあの男だった。

48話 不愉快な断罪者と罪人？

男を目の前に、シエルトは露骨に嫌そうな顔をする。それでも男は機嫌の良い笑顔のままだった。

「何であんたが…」

「んー、僕もなんで君がここにいるのかちょっと分かり兼ねるよー。さっきまではその足を怪我したのが一人だけだったと思うんだけど」

そう言っつて男はルイスの方を見る。

ルイスは特に表情を変える事も無かったが、さっきのように呑気に笑うという事もしなかった。…どちらかといえば不愉快そうだ。

シエルトとルイスの前に、ノックスが立つ。そして男にこう質問をした。

「こいつの怪我と、お前は関係があるのか？」

「うん、あるよ。…でも、関係あるけれどね。残念なことに僕は何も悪くないんだよなあ。悪いのは全部そいつなのさ」

「…関係がある、というのは…」

「そいつの怪我は僕がやったし、何で僕がここにいるのかというと、そいつが逃げるものだから僕はここまで追いかけてきたってわけさー。…逃げるなんてねえ…自分が悪いくせに」

「呆れた」と言わぬばかりの表情をルイスに向け、わざとらしく大きな溜息を吐く。

…そこでルイスはようやく口を開いた。

「まあ…ね。彼の言っている事は正しいよ」
「…え？」

シエルトは思わず小さな声を出してしまう。

その発言は男の言った通り、自分が悪いのだと認めているという事だ。

足に怪我を負わせられているというのに、それでもこの男は何も悪くなく、ルイスが悪い…。

自分には到底分からぬような理由があるのかもしれないと思いつつも、そう簡単に納得出来る事ではなかった。

「ど…どんな理由があるにせよ、こんなひどい怪我を負わせてもいってという事にはならないし…」

「ん……庇ってくれてありがとう。でもね、これは仕方がない事だから…」

…シエルトはもう何を言っているのか分からなくなる。それに、自分が何を言ったところで恐らくこの状況はなにも変わらない。

ルイスは壁に手をつきながらどうにか立ち上がる。…その表情は辛そうだった。

力の入らなくなっている右足は、無理に力を入れようとすれば激痛が走るのだろう。

それがどれほどの痛さなのか想像するが…それはきつと、想像などでは感じる事のできない程の痛さ。

男を追い払ってしまえるような、そんな言葉を探しても結局何も思いつかず、何も言えず…シエルトは苛立ちを感じる。

目の前の男には初めて会った時から不愉快な感情しか抱いていないのだから、苛立つのは尚更だった。

ルイスはそんなシエルトの頭を、彼女の苛立ちを落ち着かせるかのように撫でた。

そして、足を引きずりながら男に近付く。

「はぁ……まぁ、こうなったのは自業自得だからね。こんな事になるなんて予想もしていなかったけど仕方のない事さ。…だけど、この二人は巻き込まないでくれよ」

「ああ、よほど邪魔をしてこない限り、巻き込んだりはしないよ。もし邪魔をしてきたとしても…なるべく危害を加えないようにするしね」

それは良かったと、ルイスは笑う。しかしその表情にはどこか力が無い。

男は視線をルイスからノックスとシエルトの二人にうつした。

「だけど…さぁ。その二人、ここから立ち去る気はないみたいだよ」

「だろう、ねえ」

「…僕はその二人に意図的に危害を加えるつもりはない。けれど、僕だってもうそんなに時間が無いんだ。次の仕事が待っているからね。…今ここですぐに。今すぐ終わらせたいわけなんだけど…二人の目の前でやってしまえば、精神的に危害を与える事になってしまいかも…なんだよね。特に、その小さなお嬢さんが」

お嬢さん、というのはシエルトの事だ。

男の言っている事が殆ど理解出来ないのだが、シエルトは汚らわしいものでも見るような目で、睨む。

理解出来ていないのは恐らくノックスも同じだが…ルイスは男が何を言っているのか全て理解出来ているようだった。

「……そうだね。じゃあ、せめて二人が立ち去るまで待ってくれないかな」

「言ったじゃないか、時間が無いって。ま、五秒くらいはねえ…
待っててあげても、ね」

「……………ひどい、なあ」

ルイスがそう一言放つだけで、五秒などあっという間に経ってしま
う。

そして、その瞬間だった。

一瞬目の前が眩しく光り、何が起こったのか分からぬうちに辺りに
響いたのは…金属と金属がぶつかったような、鋭い音。

…男の手には大きな鎌が握られていた。それはクロードのものに少
し似ている。

金属音の正体は、恐らくルイスに斬りかかろうとしていた鎌の刃を、
ノックスが自身のアルムである漆黒の槍にて防いだからだった。

49話 不愉快な断罪者と罪人？

男は気だるそうな溜息を吐き、鎌の刃を防いだ槍を苛立ちの表情で蹴りあげノックスから離れる。
何が起きたのか分からずシエルトはただ呆然とするだけだった。

「シエルトちゃん……」

「……………あ……」

突然ルイスに名前を呼ばれて少し驚いたような声を出す。

…男はルイスに斬りかかろうとして、それをノックスに防がれた。
男は、ルイスを……。

「……ルイスさん、どういう事、なんですか。あいつ………なん
なんですか」

「……………混乱させるだけだろうし、君には関係のない事だから詳しくは言わないよ。だけど……さっき、もしノックス君が防いでくれていなかったら……僕は……？」

刃は槍で防がれる事なく、そのまま……。

その先を想像しただけでも恐ろしい気持ちになった。だから、あの男は一体何なのか、という事まで聞いてしまったら……。知ってしまったら、自分もあの男に……。

そんな妄想が頭の中で渦巻いて、きゅつと目を瞑る。

…今までフォリーなら何度か殺した事がある。

命を奪った事はあるくせに自分が殺されるかもしれないというのはとても……とても恐ろしかった。

「さ、シエルトちゃん。…こんな所にいちゃいけない」

ルイスは早く逃げるんだというようにシエルトの背中をそつと押す。すると、男が慌ててそれを制止した。

「…あ！だめだめ！そのお嬢さんにだって一応用事があるんだよ。こうして偶然会えたんだし、今のうちに済ませておかなくちゃ」

「……シエルトちゃん、構わないで。早く……」

「誘拐事件の事！この前尋ねた時はなーんにも進展が無かったからねえ。今日こそ犯人の事……思い出してもらおうよ」

「……………っ」

誘拐事件という言葉を聞いて…胸の辺りがぎゅっと締めつけられる。ルイスに言われた通りにこの場から去ろうとしていた足は…止まった。

自分にはなんの関係もない事件の事のはずなのに、それはシエルトを何故かひどく苛立たせた。

シエルトは振り返り男を睨みつける。

男は……笑っている。

「……も……もう二度とその話をするな……！」

シエルトの大声が、路地裏に響き渡る。

ルイス達は彼女の突然の大きな声に何があったのかと驚くが、男は相変わらずにやついていた。

その声にはシエルト自身も少し驚いたのだが、男の姿が視界に入ると再び苛立ちが蘇るのだった。

「ん……とにかく。私はそんな事件の犯人なんか知らないし、そもそも誘拐事件についてはつい最近まで知らなかったし！……本当に迷惑なんだよ前は……」

男はノックスとルイスの横を通り過ぎ、シエルトの前に立つ。

…それは、絶対にこの先へは行かせないという風に立ちはだかっているようにも見えた。

「……君に初めて誘拐事件について尋ねた時…僕はその犯人に会った事はある？って訊いたよね。君は会っていないと言った。それについて僕は、それを嘘だと言った」

「……………」
「犯人について記憶が無いのは仕方ないのかな。人間はもの凄く辛かったり恐怖を感じたりする事があると、その時の記憶を飛ばしてしまう事があるっていうしねえ。……僕は経験が無いからなんとも言えないけど」

気が付けば、シエルトはこの苛立ちをどうにか抑え込もうと自分の右腕に強く爪を立てていた。

その爪で今度は腕を引っ搔いたりとそれを繰り返すうちに腕はすっかり赤くなってしまう…。

痛いと感じているのだが、そんな事はどうでもよかった。痛みを感じなければ苛立ちを抑えられないし、気を紛らわす事ができない。

「……………言っている意味が分からないし、さっきも言ったようにその話は……」

「自分を誘拐した犯人をどうにか苦しめてやりたいとは思わないのかい？」

「……………は？」

シエルトは思わずきよとんとした表情で男の顔を見つめてしまう。一体何を言っているんだ……と。

「事件に関係のない人間に犯人の事なんか訊いてどうするんだよ。君は誘拐事件の『貴重な被害者』なんだ。だから君にこうして尋ねているんだよ」

「いい加減な事ばかり……………！」

「幼い頃、突然見ず知らずの人間に見知らぬ場所に連れて来られて。そこできつと、恐ろしい経験でもしたのかなあ……。本当にこれらの事が記憶に無いつていうのなら、君はきつとあまりにも恐ろしい恐怖を感じて記憶を飛ばしてしまつたとか……………おつと！」

辺りに重い金属音が響くと同時に男はほんの少しバランスを崩す。シエルトの両手には、彼女のアルムである大剣が握られていた。振り下ろされた大剣は軽々と男の大鎌に受け止められてしまつていた。

勿論、そのまま相手を押す事など彼女の力ではできるはずがない。……………どうしようもない。

シエルトは受け止められた大剣を後方へと放り投げてしまった。投げられた大剣は建物の壁にあたり、コンクリートを固いもので引っ掻いたような音を立てて地面へと落ち、そのまま鈍い光の砂となつて消えて行つた。

まさかそんな事をするとは思っていなかった男は少し驚いた様子で見えていたが、今度は思い切り両手で体を押され、押し倒される。…次にシエルトは何をするのだろうと面白がって、半ばわざと押し倒されたのかもしれない。

上半身だけ体を起こしている体勢となった男に、シエルトは乱暴に馬乗りになった。

「…どうしたの、何をそんなに怒ってるの？」

笑い続ける男の胸倉を引つ掴み、頭に浮かんだ言葉をとにかく次から次へと吐き出した…。

「うるさい、このツ…馬鹿じゃないの！！わけの分からない事ばかり言って！あんななんて頭おかしくて…不愉快でしかない！いつもいつも笑って…気持ち悪い、何がそんなに面白いの、何で私に関わるの…！！」

何故自分がこんなにも腹を立てているのか分からない。

分からないのだが…嫌な記憶を無理矢理掘り起こされているような、そんな気がしていた。

…その嫌な記憶とは何なのか。それさえ分からず、ただただ苛立つだけだった…。

「なんなのあんたは、事件だとか犯人だとかそんな事しか言わなくて！何がしたいんだよ！」

「…あー、何がしたいって？僕はさつき、犯人をどうにか苦しめてやりたいとは思わないのかって言ったよね。……………未だに捕まらない犯人を苦しめてやる事が、僕にはできる」

「また……ふざけた事……」

「ふざけてなんかいないよ。……ほら、新聞にだってさ……載ってる事だと思っんだ。未解決事件の犯人が、首を刎ねられた死体で見つかった、ってやつ！あれだよ、あれ」

50話 不愉快な断罪者と罪人？

「……………はあ？……」

男の口からは次から次へとわけの分からない言葉が飛び出してくる。彼の存在自体どうもわけが分からないが…何を言っているのかさっぱり理解できず、思わず胸倉を掴んでいた両手から力が抜けてしまった。

…しかしその二人の様子を見ているノックスとルイスは、男の発言と同時にシエルトの様子も理解できず、ただ呆然と眺めていた。なぜ彼女はこんなにも怒りを露にしているのか。…そんな事は誰にも分からない。

彼女本人ですら、なぜこんなにも苛立つのか分からないのだから。

犯人の、首を刎ねられた死体。

それはたしかこの男と初めて出会った…そう。つい昨日の事だ。昨日、イヴェルとフィリップから聞いた話が確かそんな内容ではなかっただろうか。

未解決である事件の犯人が、首を刎ねられ殺されていた。またその殺害方法から、犯人には断罪者という風な呼び名がつけられている。

…そんな話を昨日、二人から聞いたばかりだった。

そして…この男が言っているのはまさにその事なのではないだろうか。

「……………は、あんた馬鹿なの？」犯人を苦しめてやる事ができ

る』つて。……………つまり、自分がそうだと言いたいのに」

「そうだよ、僕さ。犯人の首をあちこちで刎ねてまわってるのはね。ま、実際やってるのは僕だけじゃなく他にもいるんだけどね」

男は妙に嬉しそうに…断罪の様子を語り始めた。

「一瞬で首を刎ねてしまふとか、そうじゃないんだ。それじゃ意味が無いんだよ。一瞬なんて犯人は苦しむ事も、自分が首を刎ねられたって事にも気付かないじゃないか。それだと捕まるという事から逃げなくてはならない日々から助けてあげちゃったみたいなものだろう。……………こう、ね。地面に突っ伏した状態にしてから、うなじの辺りを小さく何度もきるんだ」

…何かおかしな話が始まった。シエルトは男の胸倉から手を離す。

「不愉快だからやめろ」という目を向けるのだが、そんなものはこの男には通じない。

「そうすると、だんだん傷が大きくなってくるだろう？血もたくさん、出てくるようになるね。そうしたら今度はそのきつた部分を踏みにじってやるんだ。靴の裏に血がついてしまふけど気にしないよ。そして傷の中から肉を抉って放りだしてみる。これもまたなかなか面白い。相手の反応がいまいちだったなら傷を火であぶってみるのもいいよ。やりたい事をたくさんやってから、飽きたら一気に斬ってしまうのさ」

「……………」
「…その時漂うにおいは…はじめは苦手だったけど、慣れたらなんだか心地良くて……………不思議な香りだと思うんだ…」

「……………っ」

今、自分が馬乗りになっているこの男は……………。この、男は。

「…………シエルトちゃん！」

「…………ん……」

ぐるりと頭の中と目の前がまわりかけたところで、自分の名を呼ばれた。…ルイスだった。

どうにかシエルトの元へ行き男から引き離れたかったようだが…怪我をした足のせいで、もう歩く事がままならぬらしい。

「…………危ないよ」

その男から今すぐ離れると、そういう事だ。

シエルトはふらりと立ち上がり後ずさるようにして男から離れる。

…ルイスに言われなくともそうしていただろう。

男は自分の話を聞いてくれる人がいなくなってしまった事が不満だったのか、表情は不機嫌そうに…服についた土を簡単に払いながら立ち上がった。

「ふう。まあつまり…………僕は誘拐事件の犯人を見つけて、首を刎ねてみせたいんだよ。…………けど刎ねなくちゃいけないのはここにもいるんだ」

…男は怪我による激痛で辛そうにしているルイスを一瞥する。

…………なら、ルイスに斬りかかろうとしていたのは…。

刎ねなくてはならない、という事は、ルイスは…。

「……………わっ…！」

突然、シエルトと男の間に何か大きな物。いや、物というよりそれは生きている。

その生きているものが、どこからかは分からないが、恐らく上の方から飛んできた。

それが地に着地した時、凄まじい砂埃が辺りに舞ったためシエルトは目をおさえて二つ程小さく咳をした。

目に砂が入り痛くて開けられない。擦りつつ、どうにか目を開けられるようになった頃には砂埃も落ち着いてくる。

ようやく鮮明になりはじめた視界にうつったのは……馬？…なのだ
が、どこかおかしい。

普通の…あの動物である馬にしては、まず見た目が普通ではない。
白く滑らかなその肌は毛が生えているというよりも今にも割れてしま
いそうな陶器のようだし、額には一角獣を思わせるような透き通
った硝子の角が。

この、動物にしては命があるようには感じない、しかし物にしては
生きているように感じるこれは…騎士団が所有する、魔力が命とな
っている機械の馬…だったか。

しかしそれはノックスのものではないだろう。

そこで聞こえてきた静かな足音。…足音の主を見てまず最初に声を
あげたのはノックスだった。

「…え……………ファルクスさん!？」

…だが、ここにいたのはファルクスだけではなかった。
男の首筋に鋭い銀色の刃がそつと向けられる。柄に鈴の飾りがつけ
られた細く長い刃…刀を持つのはフウカ。
男はきよとんとした顔で後ろに立つ、自分に刀を向ける少女を見て
いた。

フウカは男にやや臆しつつも言い放つ。

「…直ちにこの場から立ち去りなさい！」

51話 少女の憧れ

「……………」

シエルトは寮の自室のベッドの上で、だるそうに寝転がっていた。窓の外はもうだいぶ暗くなり空の色は眩しい夕焼け色から黒と群青を混ぜ合わせたような色へと変わっている。

この時間はいつもならずでカーテンを閉めてしまっているのだが閉める事さえ面倒に感じ、そのままだった。…イヴェルは菓子作りだとかで学校にいるらしい。

(…………… 一体何だったんだ今日は……………)

…今日は久々に家に帰る、ただそれだけのつもりだった。

帰り道でノックスに偶然会い、話をしていたら足を怪我したルイスが路地裏へと入って行くのを見かけ、二人で彼のあとを追った。

ルイスを見つける事はできたが……………そこであの男に再び会う事になるとは思いもしなかった。

(……………もしあの二人が助けに来てくれなかったらどうなっていたんだか)

あの男と再会してしまったという事もそうだが、ファルクスとフウカの二人が助けにやってきてくれたという事もまた、思いも寄らぬ事だった。

「…直ちにこの場から立ち去りなさい！」

鋭い刀の刃が男の首筋でゆらりと動く。目の前には騎士団が所有する機械の馬を連れたファルクスが立ち塞がる。

男は二人に挟まれる形となっていた。…しかし、だからといって動揺…焦りが生まれたようには見えない。

「うーん、どうしたものかなあ。僕の後ろにいる女の子はどうにかできるだろうけど。さすがに目の前の騎士さんは強そうで強そうで…」

そう言ってわざと困ったような仕草をしてみせる。だが内心、本当に困ってはいるのだろう。

男は時間が無いから早く済ませてしまいたい、と言っていた。

ここまで邪魔が入ると済ませたい用事もなかなか済ませられないのか、どうすればいいかなどと考えているようだった。

…シエルトやノックスがいる前でも平気で首を刎ねようと斬りかかっていたのだ。たかが二人増えた程度でその行為ができなくなると

いう事はないだろう。

恐らく、男が考えているのはその後の事。…ファルクスを警戒しているのかもしれない。

彼の目の前で首など刎ねてしまえば彼に捕まる可能性がある…という事だろうか。

それどころか刎ねる前にファルクスによって妨害されてしまうのでは…と、男はひとりでぶつぶつと何か言っている。…実際、同じ騎士団の人間であるノックスに一度妨害されているのだ。

「……あー、よしよし決めた！」

男は何か納得したように手をぱんつと叩くと、そのまま…地を蹴りあげ飛び上がる。

見上げると、すぐ横の建物の屋根の上に男の姿はあった。

「時には無理せず逃げる事も大事だからね」

そして男はようやくこの場にいる全員の視界から姿を消した。

…すぐに立ち去れと言ったフウカは勿論、誰も男を追ったりはしない。下手な事をして状況を悪化させてしまったはこの二人が助けに来た意味が無い。

フウカとファルクスは「ルシファー」の件で一緒にいたらしく、そこで偶然男に追われたルイスを見かけ探していたようだ。

…ルイスは何故こんな事になったのかというフウカの問いにまとも

な返事をせず、はぐらかし続けるので、最終的にはフウカに怒られていたのだが…ルイスはへらへらと笑っているだけだった。

とりあえずファルクスには色々と尋ねられ、男の発言や行動など、あの断罪者と思わせるような事があったという事などを細かく話した。

だが、さきほど起きた出来事を説明しながらもシエルトは男の言っていた事を…殆ど信じてはいなかった。

実際に彼が首を刎ねているところを見たわけではないのだ。嘘などいくらでも言えるし、面白がって断罪者のフリをしただけの可能性だってある。

つまりあの男は偽物であり、面白半分で作ってみた断罪者「ごっこ遊び」だったのではないか…と思っているのだ。

…そうとしか考えられなかった。

もしあの男が「本物」だったなら、ルイスは未だ解決されていない事件の犯人という事になってしまっただろうし…。

それに自分が誘拐事件の被害者だった、などというおかしな話を信じなければならなくなりそうで、あれが本物だとは絶対に思いたくなかった。

その後ルイスからは巻き込んでしまったからと何度も謝られ、あの男については気にしないで忘れてほしいと言われたが…。

（忘れるとか無理でしょう…：ちょっと思い出しただけでも腹が立つのに）

お気に入りの水色のふかふか枕に顔をうずめて「むー」とうめきながら足をパタつかせる。

…さすがにあの時程苛立ちはしなかったが、それでもまだ不愉快に

感じていた。

「だいたい…私が誘拐事件の被害者の一人だって？無理があるだろ、絶対嘘に決まってる！」

絶対にあの男の言った事は信じない、ああいう性格なのだから平気で嘘だって吐いてしまっただろう。頭の中でそんな事を考えながら、ふとある事を思い出す。

「あつ……あの写真…！」

久々に家に帰り母と見たアルバムにあった父親の写真。

あの写真にうつる父が、あの不気味な場所で見つけたロケット、ペンダントに入っていた写真の男性とそっくりだった…。

気味悪く思っけて引き出しに仕舞っていたペンダントを慌てて取り出す。

同じ人物なのか、それともただ似ているだけなのか…。

かちりと音を立てて開かれた蓋の向こうからあらわれたのは、少し薄汚れた写真にうつる一人の男性。

そしてそれは、

「……………やっぱり、かあ…！」

目の辺りや首にある傷のあとなど、それは紛れもなく家で見た…アルバムにあった写真の「父親」だった。

…これはどういう事なのだろうか。

写真が違うとはいえ、うつっている人物は同じ…自分の「父親」だ

という人間だ。

その写真が入ったペンダントが、あの場所に。

（誰かがこのペンダントを持って、あの場所に行ったって事だよ
ね。……その「誰か」って？）

そんな事分かるはずが無い。ただ、父親の存在を知る人物である、
という事は確かなのではないだろうか。

……自分の父についてこれほど考えた事は今まで一度も無かったか
もしれない。

52話 少女の憧れ？

空がどんより灰色の綿で覆われて、こんな曇った日にはよく「あの日の事」を思い出す。

……僕がまだ、ずっとずっと幼かったあの日。

灰色に塗られた空の下に薄紅色の、ちょっと変わった服に身を包んだ女の子がひとりうつむいていた。

いや、本当は紅色の傘に隠れて女の子の顔なんて見えなかったんだけど。その子の物悲しげな後ろ姿を見てなんとなく俯いていると思っただ。

勇気を出してその子に話しかけてみたら振り向いてくれたけど、顔は傘に隠れて見えなかった。

…わざとそうしていたんだっけ。恥ずかしがっているのかなと思っ
ていたけど、そんな事じゃ…なかったんだよね。

「……足の具合はどうですか？」

「……ん…ああ、フウちゃんか」

いつの間にか窓の向こうの曇天空を見入っていたルイスに声をかけたのは、相変わらずどこか無表情なフウカ。
ルイスは背伸びをしてから苦笑する。

「…まあ、五日前と比べれば良くなつてはいるんじゃない？…よく考えたらあれから五日も経ったのか…」

「まだたったの五日しか経っていないのです。…分かっていてでしょうが、しばらく塔の外へは出歩かないようにしてくださいね」

出歩くなというのは足の怪我がまだ完治していないから、という理由もあるのだが、それだけではなくあの男の事もあった。
もしかしたらルイスを探しているかもしれないし、とりあえずしばらくは塔の中に隠れている、という事である。

「先日、また首を刎ねられた死体が発見されたそうです。数年前に起きた娼婦連続殺人事件の犯人だったそうで」

「……そうなんだ」

「あなたに怪我を負わせたあの男が本当に断罪者なのかは分かりません。ですがあの男はあなたを追い、そして未だ解決されぬ事件の犯人として首を刎ねようとしていました。……あなたが無実であるなら…男は断罪者の真似事をしている異常者、という事になるかもしれません」

…ルイスは何も言わない。だが、フウカも何も言わずルイスの返事を待っているようだった。

空は灰色を増していく。…同時に空気も冷たく、重くなる。

「僕に何があったって、フウちゃんを巻き込んだりはしないから

安心してよ?」

「……………」

突然、くんとルイスの袖の先が引っ張られた。人差し指と親指でつまむようにして袖を引っ張ったのはフウカだった。…それでも、彼女は何も言わない。

何か言いたいのだが何と言ったらよいか分からず、とりあえず袖を引っ張ってみた。そんな風に見える。

「どうしたの?」

「……………」

「どこか、痛いのかい?」

「……………」

すると今度は力強く、思い切り袖を引っ張られた。そして何故か抱きつかれた。…がっしりと。

「フウちゃ、」

彼女の名前を呼ぼうとしたが、「大きな声」でルイスの呼び掛けは遮られる。

…突然泣きだした彼女の、小さな子供のような、大きな泣き声によつて。

「あれ……」

ぽつりと冷たいものがシエルトの頬にあたる。
空がどんよりと曇っているので、それが雨だという事にはすぐに気付いた。

「降ってきたかあ……」

シエルトの隣を歩くフィリップは立ち止まって空を見上げる。

「こんな天気だけどイヴェルちゃん達……」

「うん……まだやってるんじゃない？」

休み時間や放課後、学校にいる間は三人で行動する事が多いのだが、今はイヴェルがいない。

テストで点が取れず居残りとなってしまうた下級生達の戦闘訓練の授業に補佐として手伝いに行ってしまうているのだ。

その授業は確か……屋外で行われているらしい。

すると、何やら向こうの方が騒がしい事に気付く。

(………?)

騒がしいそこには何人もの生徒達による群が出来ていた。

ただ、その生徒達は自分と比べると幾許か幼く感じる。……恐らく皆、下級生なのだろう。

「わっ…、シエルトあれ…！」
「え？」

突然フィリップが驚いたような声をあげて、人差し指を空へと向けた。

…生徒達の群で…恐らく向こう側には誰かがいるのだろうが、その向こうが遮られて見えない。

その見えない向こうから「何か」が地へ落ちる雨に逆行し直線を描いてすつと空へ走った。

このシエルは空高くに浮かんでいるわけだが、「何か」は更に空の上で硝子が割れたような音を立てて砕け散る。

…それは、氷が砕けた。そんな感じに見えた。透明にきらきらと輝く細かな欠片。その欠片と一緒に、周囲に降っていた雨までもが同じような輝く欠片になる。

空には氷の宝石が散りばめられた。

小さく、美しく輝く宝石たちは地へおちる事なく空を舞う。

群をつくっていた生徒はそれを見て、皆一斉にはしゃぎだした。

「……………すっい」

「ねえ今の、イヴェルちゃんみたいだよ？」

空を指差していたフィリップは今度は群の向こうを指差す。

集まっていた生徒達が動きだし、そこでできた生徒と生徒の群の間から見える微笑む少女…。

下級生に囲まれたイヴェルがそこにいた。

手には彼女のアルムである氷の弓、という事はつまり、フィリップの言った通り先程のはイヴェルがやったのか。

「すごいなあ……イヴェルちゃん、下級生達の人気者だねえ」

「本当にね。女の子らしい事は何だってできるし、みんなのお姉さんっぽい感じなのかも」

フィリップは、楽しそうな……というより、彼女が下級生に囲まれている事が嬉しそうな表情でイヴェルを見ていた。

「……綺麗だなあ」

「んー、それはイヴェルの今やった事が？それとも『イヴェル』がって事？」

「……え………えッ!？」

シエルトの想定外の問いにフィリップは慌てふためき数歩退く。彼の顔は真っ赤に熟れたりんごの如く赤くなり、沸騰したやかんにも似た音を鳴らした。

シエルトは今の自分の問いによってフィリップがなぜこんな事になっってしまったのか理解出来ずにいたが、もう一度さっきの自分の言葉を頭の中で復唱しようやく理解する。

……シエルトにとっては何てことの無い、ただ訊いてみた程度の話だったのだ。

別にフィリップがイヴェルをどうのだとか、そういった事が知りたかったわけではないのだ。

「あ………いや、あの………ほら、イヴェルは可愛いもの………ね？」

綺麗だなんていうのはみんな思う、とおもっし……訊き方が悪かったよね……！」

「……う、ううん！大丈夫だよ全然っ！……うん……うん……」

裁縫だったり、菓子作りだったり、ガーデニングだったり。

見た目も性格も趣味も何もかもが女の子らしいイヴェルは人気があるしシエルトも憧れたりする。

ただ、フィリップの今の反応で、彼がイヴェルにたいして抱いている感情が「ただの憧れ」だとかそういうものではなく、また別のものであるという事はすぐに分かった。

シャツと勢い良くカーテンの閉まる音がする。外はもう暗くなっていて、他の寮の生徒達もカーテンを閉めだす頃だろう。

テーブルの上にはくまの絵がプリントされたピンク色の可愛い小さな布。

その布の上には丸い形やら四角やら星やらと、様々な形状をしたクッキーが数枚置かれている。

その中の一枚、丸い形のを、シエルトはひょいっと取った。クッキーはイヴェルがシエルトの為に焼いたものだった。

「イヴェルはすごいなあ……うちのお母さんもたまに作ったりするけど、それよりも全然上手だと思っただ」

「えへへ、ありがとー。リンセルトさんは作ったりしないの？」

そう訊かれると、シエルトはげんなりしたような顔をする。

「……あー…姉さんは、ね。こういう才能は…皆無に等しいから」
「…あひゃー」

あの日、姉の焼いたクッキーの味を忘れたりはいしない。でも忘れたい。

ついつい思い出すと口の中にこの世のものとは思えなかったあのどんなホラー映画より恐ろしい味が広がり、手にしたイヴェルのクッキーをかじるのだった。

…甘い。実に甘い。そして美味しい。

思わず口元が綻びてしまうほどに。

「それにしても放課後のあれ……すごい綺麗だったよ」

「あ、見たたのー。なんていうか小さい子達って、喜ばせてみたくなっちゃうからねえ」

「でもほんとうに凄いなあ……成績だって良いし、イヴェルみたいに少しはなつてみたいって思うよ」

「……んつとねえ、でも私はねー、シエルトちゃんに憧れてるんだよ」

「……………？……………よく分かんない」

イヴェルはくすりと小さく笑う。

「『あの時』から、ずーっとシエルトちゃんみたいになりたいなって思ってるの。ここまですごい頑張ったのは、憧れてるからだし」

「……………あの時って、どの時？」

何を言っているのかわからずきょとした顔をしていると、イヴェルは笑った。

「忘れちゃったのか、何の事が気付いてないのかわからないけれど……………ずうっとねえ、前の時！」

53話 少年の不安

そこには、妙な緊張感が漂っていた。

たまたま校舎裏を歩いていた二人、シエルトとフィリップ。

たまたまというか、フィリップがここで落し物をしてしまったらしく、それを探している最中なのだが。

そこに、偶然フィリップの知り合いが立っていたのだ。それはフィリップの友人で、つまり隣のクラスの男子生徒。シエルトは話をした事はない。

向こうはこちらに気付いておらずフィリップはその友人の名を呼ぼうとしたわけなのだが…。

そこでもう一人、誰かが立っていた事に気付く。

そのもう一人の誰かというのが…。イヴェルだったのだ。

あまり人気のない校舎裏。そして男子生徒と女子生徒。その二人きり。

なんというか、シエルトとフィリップは思わず近くの茂みに隠れてしまった。

見てはいけないものを見てしまったというか、遭遇してはいけない場面に遭遇してしまったというか。

「…リオト、イヴェルちゃんと何話してるんだらう?」

男子生徒はリオトというらしい。…フィリップは「何を話しているのか」と言ったが、本当はなんとなく、分かる。

彼らの会話の内容は…この雰囲気でなんとなく、分かっていた。

シエルトはひよっこり茂みから顔を出す。

「でもほんとうに……あれ、なのかな」

リオトとイヴェルは何か話をしているのだが、ここからではあまり聞き取れない。というか、リオトの声はやたら小さい。

ひどく緊張しているのか右手を閉じたり開いたり髪をいじってみたり……とにかく落ち着かない様子だ。

また、リオトは目線をこちらの方に向けてしまったため今茂みから出るとバレてしまう。

動こうにも動けない状況となり気付かれない程度に茂みから顔を出す。

暫く二人の様子を見てるとリオトが深呼吸をしてから数歩、後ろにさがった。

そして、「す、す……、好き、です!!」というやたらでかいリオトの声が校舎裏に響いた。

(…ああ……なんで私こんなところにいるんだろう…)

やはり見てはいけないものだったし遭遇してはいけない場面だった。ついでに聞いてはいけないものでもあった。

早くこの場から立ち去りたいと思った。

しかしあの二人が先に立ち去ってくれないと、少しでも動いたら気付かれてしまいそうで…。

(でもイヴェルは……どうするんだろ？あんなの……って、
うわっ……)

イヴェルが軽く、申し訳なさそうにぺこりとお辞儀したかと思うと、
リオトは何やらすごい大泣きで走って行ってしまった。

…なんというかよく分からないのだが胸の辺りがじーンとする。
本人にとっては見られたくないであろうものを見てしまったという
申し訳なさど、イヴェルは悪くないのだがリオトも可哀相という…
とにかくなんとも言えない。

しばらくするとイヴェルも姿を消した。とりあえず二人ともこちら
の方に歩いて来る事はなかったので気付かれてはいない…と思う。

「フィリップ……戻ろっか」

「う、うん…そうだね」

今見た光景についてシエルトとフィリップが言葉を交わす事はない。
見なかった事に、聞かなかった事に、何も知らないという事にしよ
う………口に出さなくともお互い自然とそういう事に…した。
自分達以外誰もいなくなったと思われる校舎裏。

ようやく動けるようになり茂みから立ち上がるうとした時、だった。

「お二人はそのような場所で何をしているのでしょうか？」

「え、わッ………!？」

突然、後ろから話しかけられ肩がびくりと跳ね上がる。

振り返ると立っていたのは…相変わらず眼鏡を光らせながら腕をく
む「お下げ委員長」、リサだった。

「い、委員長さんっ……！心臓に悪いって……」

リサは腕をくんだまま少し怪訝そうにこちらを見ている。

一瞬、後ろに立っていたのがイヴェルカリオトだったならどうしようかと思ったが（声でリサである事は分かるはずなのだが、焦っていた）とりあえず安心した。
なにやら誤解をされているような表情なので慌ててフィリップが説明する。

「あー…あの僕、この辺りで落とし物しちゃって……」

「落とし物…ですか」

…そういえばそうだった。

フィリップが落とし物をしていてそれを探している最中だった事を、ついさっきの出来事ですっかり忘れてしまっていた。

すると、リサは「そういえば」と手の平サイズの小さな赤い手帳を差し出す。…少し、古い感じのするものだった。

「さきほどこれをそこで拾ったのですが、あなたの物なのではないですか？」

「…あ、ありがとう！それだよ」

落とした物はたしかに手帳だと聞いていたが、どうにも古めかしくところどころ汚れが目立つ。

そして小さいせいか使いにくそうだ。

「フィリップ……それ何に使ってるの？」

「あゝ、」
「ねは僕のっていうより……妹のなんだ」

54話 少年の不安？

リサと別れ校舎裏を出て、二人は柱廊を歩く。

(フィリップってお兄さんのほかに妹もいたんだ……)

彼の口から妹の事を聞いた事は一度も無かった。たまたま言わなかっただけなのか、それともなにか理由でもあるのか。

それは分からないがフィリップはそれ以上、妹についてなにも話さなかった。

「…そういえば……塔でファルクスさんに会ったよ」

「あー、兄さんに会ったんだ…」

「うん。それで…この前ちょっと色々あった時、ファルクスさんに助けてもらって…」

「え……色々って大丈夫なの？」

あの男はどうせ断罪者のふりをしているだけ。それにその事を口に出せばまた苛立つだろうし、詳しくは言わないでいる。

「助けてもらったから大丈夫だった」とシエルトは答えた。

フィリップは兄の話題を出されたからといって笑ったりする事はなかった。…いや、一応笑ってはいるのだが…それは微妙な笑み。本心で笑っているとは思えない。

彼にとってあまり話したい事ではないのかもしれない……そう思い、それ以上は何も言わなかったのだが。

「僕と兄さん、全然似てなかったでしょ？」

「……」

初めてファルクスと出会った時、第一印象はたしかに「似ていない」。
だが、よく見てみれば目の辺りなどはフィリップのようだった。
…しかしフィリップの言っている「似てなかった」というのは恐らく容姿の事ではなく……もっと内面的なもの。

性格だとか考え方だとかそういったものの事なのではないだろうか。

「まあ、雰囲気とかは……でも別に似ている必要はないでしょう？？」

「そうだね…でもやっぱり親とかに比べられたりするとちょっとね」

それはシエルトも分かるものだった。

特に目立つところの無い至って普通の人間であり平凡な成績である妹のシエルトと、優秀な成績をおさめシエルの教員となった姉のリンセルト。

母に比べられた事くらい、それはあった。

自分より姉の方が遙かに優秀である事くらい分かっているのだが、それでもそれを自分以外の人間から言われるのは気分の良いものではない。

「お姉ちゃんの妹なのに成績の伸びがいまいちねえ」

「シエルトちゃんは学校の先生は無理かしら」

…などと言われた時にはとにかく反発したものだ。

別に成績が平凡である事が悪いだとか、そういう事を言われたわけではないのだが。

「あまりにも自分と違い過ぎて自分の兄じゃないように感じたりするよ」

「…小さい頃は勝手に姉さんみたいになるもんだと思ってたけど、
そももいなくなってくてねえ…でも年が結構離れてるし、劣る部分が
目立つのは仕様がないう事でもあると思うけど。そもそもまだ私は
卒業もしてないわけで」

「まあ僕は、勉強で兄さんに追い付く事は無いと思っっているから
…せめて性格とかそういうのは少しでもって思っているけど、それ
もだめそうだなあ」

「えー…性格は今のままだっ方がいいじゃない。ファルクスさんみ
たいなフィリップだったら怖いよ」

「あはは、兄さんちよつと目つき悪いからねえ。口調も冷たく感
じる事もあるし……だけど、兄さんの弟にしては僕は…気が弱過ぎ
る、かなあ」

何をするにしてもいつも不安になってしまっからね、とフィリップ
は言った。

いつもどこか頼りない雰囲気のある彼だが今はなんだかいつも以上
に頼りなさがある。

ファルクスにたいしての劣等感はそれ程までに大きいのか…。

「ちよつと大丈夫？そんなに気にする事じゃあないじゃないか…」

「うん……ごめん」

そこで、フィリップはなにが考え事をしているかのような表情をす
る。

…手に持った赤い手帳を眺めているが、それに何が書かれているの
かは分からない。開かずに赤い表紙を見つめているからだ。

なにを考えているのかは分からないがとりあえず声は掛けない方が
いいだろう。

(妹のだつて言つてたよね。いままでファルクスさんの事しか聞いてなかつたけど…)

しばらく、といつてもほんの数十秒…実際より長く感じた数十秒。フィリップはぱつと顔をあげた。

「あ…あのね、シエルト」

「？」

どこか躊躇いのある声に、シエルトは小首を傾げる。

なにか言いたい事があるようだが言いだせない…そんな風に見えて「どうしたの」と声を掛けようとしたが、意を決したようにさっきの躊躇いのある声とは違い、今度ははっきりとした声で話します。

「僕、今からすぐおかしな事きくかもしれない…」

「……うん。どうしたの？」

「その……」

おそろおそろ、フィリップはシエルトの右腕に目をやる。

「その、ブレスレットって…」

ブレスレットというのはシエルトの右腕につけられた銀色のブレスレットの事だろう。

「それって、どうしたの？」

…たしかにおかしな事だった。
なぜブレスレットの事をフィリップはこんなにも……辛そうに。

「これは…小さい頃から持ってたもので」

「小さい頃っていつから？」

「それがよく覚えてなくってさ……いつの間にかあったっていう
感じで……」

「誰かにもらったとか、そういうのじゃないの？……たとえば女
の子……とか」

「……ごめん、よく分からない」

フィリップの表情はさらに辛そうに、悲しそうになってゆく。

その理由が分からないシエルトは自分になにかまずい事でも言っ
てしまったのではないかと戸惑ってしまふ。

「……………傷」

「え？」

「ブレスレットについてる傷……」

そう言われて自分の腕につけられたそれを見るが、古いものなのだ
から当然細かな傷はある。

しかし今まで気にもしなかったが、ひとつ、他のものと比べて大き
な擦り傷のようなものがあるのに気付く。

シエルトは腕から外してそれをフィリップに見せた。

「傷ってこれの事？」

「うん……その傷は、確かにあの時の……もので」

フィリップの言っている事は分からなかった。

だが、彼にとっては大事な事であるというのは理解できる。だから

フィリップの言葉をしっかりと聞いていた。

「そのブレスレット……同じものを、妹が持っていたはずなんだ」
「……妹……？」

55話 アリスの大切なもの

さっきも言っていた「妹」。

フィリップに、兄以外に「妹」という存在がいる事をシエルトは知る。

「フィリップの…ええと、妹が、同じものを？」

「うん……ごめんね、おかしな話だね。でも……」

辛さを堪えているのかフィリップは下唇を噛む。

そして沈んだ表情、今にも泣きそうな目を、ブレスレットについた傷に向けた。

「ブレスレットはね、妹の誕生日に僕がプレゼントしたものなんだ。妹は毎日それを着けてて、でもある日階段から落ちて…妹は足を悪くしちゃったんだけど、そんな事より落ちた時にブレスレットにつけてしまった傷の事で大泣きして…妹は僕にずっと謝ってた。その時に何度も傷を見せられていたから、その擦り傷は…間違いないよ」

「……でも、私」

シエルトはフィリップの妹を、知らない。

しかしブレスレットはいつから持っていたのかも分からない。どこか店で買ったのか、あるいは誰かからもらったのか。

…これを女の子にもらったという記憶は無かった。

忘れていただけなのかもしれない。だがいくら思い出そうとも、このブレスレットが分からない。

銀色の、ビーズでできたこの輪は、一体なんだというのだろうか。

「あの、妹さんって……」

「いなくなっちゃったんだ。足が悪いからそう遠くまでは一人で
行けないはずなのに、見つからなくて」

…失踪した彼の妹が身につけていたはずのブレスレットが、今まで
ずっと、自分の腕に。

なら自身とその妹は、なにか繋がりでもあるのだろうか？

小さい頃は遊べるような友人なんて少なかった。その数少ない友人
のなかにフィリップの妹でもいたのか？

足の悪かった子なんて知らない。

とにかく、なにも分からない。

「…思い出してほしいんだ。もしかしたらシエルトと妹は会って
いたかもしれないし、もしそうならシエルトは何か知っているかも
しれない……！」

「……」

もしこのブレスレットがフィリップの妹からもらったものなら…。

もしかしたらその妹に何があったのかを、自分は知っているのかも
しれない。

知っているのならフィリップの力になりたいとは思う。しかしやっ
ぱり分からないのだ。

すると突然フィリップに右腕を力強く掴まれ、シエルトは一瞬驚い
てしまう。…ブレスレットをしている方の、腕を。

「シエルトは妹に、…アリスに会っているはずなんだ。じゃなき
やそれを持つてはるはずがないんだ……肌身離さず持っていた、それ
を……」

「アリス」、聞いた事のない名前だ。
テレビや雑誌でなんかは見たり聞いたりする事はあるだろうが、知り合いにはいない。

妹に会わずにこのブレスレットを手に入れる方法…。
妹はブレスレットを落としてしまったのではないだろうか？それを自分が拾って…。

（いやいや、拾って自分のものにしてしまうなんてそんな事絶対にしないし！それになんで持つてるのか覚えてないなんて、それがおかしい……）

…ふとここで、あの断罪者を名乗る男に言われた、自分が誘拐事件の被害者である、という事を思い出す。

あの男の言っている事が本当なら……自分の記憶がおかしい事はたしかだ。

…男の言った事など信じる気は更々無い…はずなのに、今は信じてしまいそうな気になってしまう。

「…いなくなったのは数年前だよ。あの日だってちゃんとブレスレットはつけてた……覚えてない？」

（妹さん…アリスちゃんがいなくなったのは数年前で……誘拐？
……えっと、誘拐事件、私はその被害者……）

アリスが数年前の誘拐事件の被害者だった場合。
もし自分がほんとうに被害者だったというのなら…。

同じ犯人に、同じ場所に連れて来られて、そこでフィリップの妹に
出会い、ブレスレットを…もらった？

誘拐された記憶は無いのだから、その時にアリスに出会いブレスレ

ツトをもらったという記憶がなくてもおかしくはない…のかもしれない。でも、しかしそれではあの男の言った事を信じなくてはいけないなってしまうのだ。

…あの男の事は絶対に信じない。
そう決めたのだから、その考えは頭から振り払った。

「僕がシエルトと初めて会った時、本当はあれよりもずっと前からこの事をきこって思ってた。でもなかなかきけなくて…」

「あの時こっちを見てたのは、そういう事？」

フィリップは、掴んだ腕から手を離す。

「……うん。…最初は…いなくなった妹の大事にしていたものを持つてるシエルトを見て正直あまりいい気はしなかった」

「…だろうね。あの時フィリップは私の右腕を見てた。プレスレツトの事だと私が気付いていればよかつたんだけど……ごめん」

「ううん、僕がちゃんとしてなかつたからいけないんだ。それに今は、シエルトはもう僕の大事な友人だから」

そう言つてフィリップは笑つてみせるのだが、その笑顔はあまりにも弱々しいものだった。

…自分がなにか一つでも覚えていたなら、アリスに一体何があったのか…それが分かつたかもしれないのに。
もしかしたら…生きている可能性だつてあるかもしれないというのに。

そう思つともう何を言えばいいのか分からない。

二人はそこで黙つてしまい、嫌な重い空気は動くことさえ許さなかつた。

56話 アリスの大切なもの？

「…おっと、二人で何してるんだ？もうすぐ授業が始まるんだが」
振り返ると、そこにいたのはクロードだった。

二人がなにやら重苦しい沈黙を放っていたせいかわこうは怪訝そうな顔でこちらを見ている。

「あ…あー、もうそんな時間かあ！えっと、僕先に行くね！」

普段なら、クラスは違うが途中まで一緒に行くところをフィリップは一人でこの場から去ろうとする。

その時にプレスレットをフィリップに渡しておこうかという考えが浮かんだのだが、走って行ってしまったため呼び止めようとした時にはすでに姿が殆ど見えなくなってしまっていた。

手の平にあるプレスレットを思わず握りしめシエルトはただ立ち尽くす。

ほんの少しの間クロードはそんなシエルトの様子を見ていたが、このままではいつまでたっても動くことはないだろうと思いを掛けた。

「…まあべつに授業はさぼってもいいものだったりするからな。さすがに俺はそういうわけにはいかないけど」

「……やだ、さぼらない」

「そうか。ならそろそろ教室にもどった方がいいんじゃないのか？」

クロードは、二人がまさか喧嘩でもしたのか、とも思ったのだが霧

困氣的にそういうものとは違うような気もした。
ただ…、ただなぜかすごく、重い。それは分かる。

「…どうせ答えられない質問をいつこだけ」

「ああ」

「三年前の今日の夕飯を思い出すにはどうしたらいい？」

「それは思い出さなくてもいいことなんじゃないのか？」

「必要だからきいてるのになあ…いいよ、どうせ答えられない質問だったから」

妙なことを聞いてくるものだと思った。

そんな質問の内容からでは到底二人に何があったのか、シエルトはなにを考えているのかという事は分からない。

まさか、三年前の今日の夕飯の事で喧嘩になったわけでもあるまいし。

「…覚えてて当然の事が思い出せないんだけど…記憶ってこんなものだったかね」

「さあ、そういうことはよく分からないな」

「覚えていて当然の事が思い出せない」。

その言葉にクロードはすこし…反応する。

「どうしても忘れるっていう事はあるものさ。無理に思い出す必要は無いだろう」

「それじゃだめなんだよ……」

プレスレットを握っていた手を緩め、今度はそれをじっと見つめる。
そして何度も深い溜息を繰り返すのだった…。

…するとぱたぱたと小さな足音が聞こえてきた。
それは、すこし慌てた様子でこちらへと走ってくるイヴェルのものだった。

本来なら告白現場を見てしまったあとなので態度にやや困るところなのだが今はその現場に遭遇してしまったことさえ…完全に忘れてしまっている。

「あひゃ〜…シエルトちゃんこんなところにい…、はやくしないと授業始まっちゃうよー…ってあれ、クロード先生もいるー…はあ」
ずっと走ってシエルトを探しまわっていたのかイヴェルは息を切らしていて苦しそうである。
しかしシエルトの顔を見た途端、イヴェルの表情から疲れは消えて今度は心配そうな表情になった。

「…どうしたの？大丈夫？なんか元気なさそうだけど…具合わるい？」

そう言っただけ顔を覗き込むが、シエルトは顔をあげて「大丈夫」と言った。

イヴェルはほんの些細な事でもひどく心配してしまう。
だからシエルトは特になにも言わず、イヴェルの手を引いてそのまま教室へと向かうのだった。

その日の放課後、といってもまだ殆ど生徒が帰っていないような時間。

とりあえずこのブレスレットはフィリップに渡しておきたかった。…おそらく、よくは分からないが擦り傷のことなどを考えると、これは彼の妹、アリスのものである可能性が高い。

そんなものを自分が持っているわけにはいかないと思ったのだ。…返さなくては、と。

とりあえず隣の教室をのぞいてみたのだが、どうもフィリップの姿は見当たらなかった。

もし寮に戻ってしまっていたなら今日は渡せないかもしれない。男子寮に女子は入れないからだ。

しかしまだ校内のどこかにいるかもしれない。そう思い、とりあえずうろろ歩きまわっているのだが…。

(んー……やっぱりもう帰っちゃったかなあ)

そこで、廊下の向こうに見覚えのある後ろ姿を見つける。それは昼間に見たばかりの姿、人物…。

(あ、えつと…リオ、ト…だっけ?)

昼間の校舎裏での…彼である。

(そうだ…あの人フィリップの友達だったよね。フィリップがどこにいるか知らないかな？)

あまり話した事のない人に自分の方から声を掛けるのは好きではない、というかなんとかなく苦手なのだが、ちょっと尋ねるだけなら我慢する事にする。

思い切って声を掛けようと近付くが…、

(……うわあ、なんかこれ話しかけてもいいの…？)

リオトから凄まじい陰気オーラが広範囲にわたって放たれている…。理由は勿論イヴェルの事なのだろう。交際を断られ、すっかり塞ぎ込んでしまっているようだ。

とにかく近寄りがたい。近寄りたくない。だが、でも、しかし。

「…あ、のー…」

「……」

リオトは無言で振り返る。彼の顔は宛ら死人のよう。

やっぱり話しかけないほうがよかったかな、などと今更考えてしまふ。

「ええっと…フィリップって知ってるよね？それで、フィリップ今どこにいるか知らない…？」

「…あー……」

首を絞められながらもどうにか振り絞って出している、そんな声。

少し怖い。

「あいつならー…中庭の方、かな……うん…」

「そ、そう。ありがとう」

とりあえずまだ寮には帰っていないらしい。

とはいえはやく中庭に行かなければ別の場所に移動してしまうかもしれないし、そんなゆっくりはしてられない。

礼を言つて軽く頭を下げ、そこから立ち去ろうとした、その突然。

「…っ、あ、まつ待って待って!!」

「え、あ、はい？」

さつきとはまるで正反対の、今度のはつきりとした大きな声で慌ててシエルトを呼び止めた。

こちらにも焦って驚き足を止める。

「君つてイヴェルちゃんによく一緒にいる子、だよね!？」

「まあ、一緒にいるけど…」

「彼女つて好きな人とかいるわけ？」

「え?……さあ」

そう答えると、リオトは「……ありがとう」と力の無い声で返事を
する。

ふられた理由を知りたかったのかもかもしれない。

しかし可哀相ではあるがリオトに構っている暇はないのもう一度
礼を言つと、今度こそその場を立ち去った。

中庭には色取り取りの花が咲き誇る。イヴェルの好きそうな場所だ。休み時間や放課後になると生徒がやってきて雑談をしたり、ベンチに座って読書をしていたりと皆ここで好きな事をしている。今日もたくさん生徒達が会話に花を咲かせていた。その中に、フィリップの姿もあった。

「あ……」

なのだが…そこにはイヴェルもいる。二人で話している最中のようだ。

いつもなら普通に話しかけたりするのだが、イヴェルの前でブレスレットを渡すというのは彼女に不思議に思われそうだ。それに…

(あらら…フィリップったら随分と嬉しそうに)

フィリップは、ただ単純にイヴェルとの会話が楽しいというよりも、イヴェルと一緒にいるという事が嬉しいようにみえる。どこか幸せそうな表情をしているものだからシエルトもすこし表情を緩めてしまう。

それくらい彼は楽しそうに、嬉しそうにみえるのだ。

(そっかあ…まあ、ねえ……………そういえば)

ファルクスの話題が出た時、フィリップはやけに弱気だった気がする。

それはもしかしたらリオトとイヴェルの告白現場を見てしまったからなのかもしれない。

もしかしたら、あの時は断ってもその後気が変わってイヴェルはリオトと……という感じに考えていたのだろうか。

「…邪魔しちゃあいけないよねえ」

…結局、その日はブレスレットを渡す事はできなかった。

57話 幸せの夜に

昨日渡す事ができなかったブレスレットを今日こそは、と思っていたのだが…。

(休みの日って、フィリップどこいるんだろ…?)

友人といえど彼の休日の行動まで把握しているわけではない。

一応校舎の中、昨日いた中庭なども探してみたのだが、フィリップの姿は見当たらなかった。

それ以上はどうすることも出来ず結局シエルトは寮の自室、ベッドの上で一日を過ごしてしまうこととなる。

といってもただだからだと過ごしていたというわけではない。

ベッドに寝転がりながらこのブレスレットを何故持っているのか、アリスと出会ったことはあるのか、などということを必死に思い出そうとしていたのだ。

…何一つ思い出すことはなく頭痛がするだけだったが。

時計の針は午後六時をさしている。

シエルトの寝転がるベッドにイヴェルが腰掛けた。

「シエルトちゃん、外の掲示板見た？」

「…え、見てない。どうしたの？」

どうにか思い出そうと一日中頭をフルに回転させていたせいか、シエルトの声のトーンはいつもより低く感じる。

「なんかね、学校を乗せて浮いてるあの歯車みたいな台座…あるでしょ？今度あれの点検で学校お休みなんだって。あれって、どう

やって異常がないか調べてるんだろっねえ」

「学校が休みになるって…ずいぶん大変なんだね」

「うん、なんか校舎のほとんどが使えなくなっちゃっただって。どういう事なんだろうね」

イヴェルは台座を点検する様を楽しそうに妄想している。

…たしかに、あんな学校より巨大なものを一体どうやって。

校舎の床だとか校庭の地面だとか、そういったものがぱかっと開いて直に台座に触れることが出来るのだろうか？などと、シエルトも想像してみた。

「たしか連休と重なってるから…数日間は休みになるのかあ」

そんなことを話しているイヴェルだったが、どうにもシエルトの元気がないことが気になり始める。

昨日からシエルトはどこか落ち込んだような、そして常に何かか気になっているような。

彼女の口から繰り返し吐かれる重い溜息に一体なにがあったのかとイヴェルもまた、悩む。

「…大丈夫？昨日から元気ないみたいだけど…体調あんまりよくない？」

「……んー…そんなことないよ…」

そう言うと思っていた。

しかし、そんなことないはずがない。

だから今日はシエルトと一緒に「行こうと考えていた場所」があるのだ。

「ねえねえ、今からちよっとお出掛けしよっ！」

そのイヴェルの突然の提案にシエルトは一瞬きよとんとした表情になる。

「…え、え？ど…どこ行くの？」

「だからーお出掛けだつてー」

「出掛けるつて、もう六時だよ？こんな時間に…」

基本、レーヴはたとえ夜中であろうが人の姿が消えることはない。店も一日中開いているような場所も多い。時間など関係なくいつまでも騒がしさに包まれている。

だが、シエルトはあまりこういった時間に出掛けるということをしたことが無いため少し不安に感じた。

イヴェルはシエルトの手を引いてベッドから強引に起こし「着替えて着替えて」と楽しそうに急かす。

「夜じゃないとだめなところなの！」

どうしてもシエルトに元気を出してもらいたかった。

そんな彼女がきつとほんの少しでも幸せになれるような場所。今日の夜、それはやってくる。

海……浜辺。

ダイアナと初めて出会った場所から見えていたレーヴの海。

夜の海は漆黒に包まれていて、どこか不気味で、なにかが這い出てくるんじゃないかという想像があつて……シエルトは子供の頃から苦手だつた。

昔見たホラー映画のせいなのだが。……あいかわらずだめだ。

(……なんか私って苦手なもの多くないか?)

イヴェルに手を引かれてやつて来た浜辺。

そこは異常なまでの人混みができていた。普段から海で遊ぶ人間は多いが、さすがに夜はここまで人はいない。

この様子から祭りの的なもの連想され……今ここはシエルトの苦手のかたまりだ。

「……ねえイヴェル……」

「今日は海でね、すっごいのが見られるんだよ」

「はあ……」

その「すっごいの」が一体なんなのかと尋ねても、イヴェルは内緒と云って教えてくれない。

……寒い季節の海は特に冷える。それなのに泳ぎはしなないが昼間から浜辺で遊ぶ人の気が知れない。

今は夜ということもあり尚更寒く、冷たい風が何度も頬をかすめて若干耳が痛くなってきた。

ちなみに以前イヴェルが編んでプレゼントしてくれた白いマフラー

を巻いている。ぬくぬく、ぬくぬくと首のまわりだけは温かい。
踏むたびにずむずむと音を立てる砂……なんとなくその音が心地よ
くて（）といっても騒がしくてあまり聞こえないが（）下を向いている
と、

「ほら、ちゃんと海の方見てっ」

そう言っつてイヴェルは漆黒の海の方を指差す。

暗くてよく見えないのだがその向こうに「何か」があるような気が
した。

そして突然。海に覆いかぶさっていた闇は、青い光に貫かれた。

58話 幸せの夜に？

闇が、海の中から現れた青い光に掻き消される。

青く照らされた海面がぼうつと浮かび上がり、向こうにあるような気がした「何か」が姿を現した。

…それは、女性。海の上に立つ女性だった。

白銀と水色の二つの扇が女性の透き通るように白く綺麗な手によってくるりくるりと舞う。

そしてその扇が無数の星が輝く夜空へ吸い込まれるようにして放り出され…。

その瞬間、照らされた海の水達が風船の割れたような音を立て、激しい水しぶきをあげる。同時に、浜辺の観客達も盛り上がりはじめ声をあげた。

扇は女性の手に戻り、青一色に照らされていた海面は水色、白、紫…などと様々な色を生み出す。

海の中からは次々と小さな…水でできているような「妖精」達が飛び出した。

半透明の妖精、水で形成された揚羽蝶のような羽をはばたかせ、女性の踊りに合わせて空を、浜辺を飛び回る。

「…え、…え？」

浜辺にいる誰もが楽しそうに歓声をあげている中、シエルトはひとり呆然としていた。

目の前のそれが何かのショーであるということは分かるし、これがとても綺麗で凄いものだという事も分かる。…のだが。

何も知らされずわけの分からぬままここへ連れて来られ、突然こんなものが始まったのだから驚いてしまうのは仕方がない…のかもし

れない。

「あひゃー、シエルトちゃん知らないのー？これは毎年やってるんだよ」

「ん…そう、なの？私は…こういうのあまり気にしたことないから…」

レーヴは一年中何かしらのイベント…祭りのようなものを行っている。

規模の大きい聖神塔の祭り程度なら知っているが、こういったものは…祭りは眺めているだけで充分というシエルトには興味が無かった。というか、似たような内容のものが多過ぎて区別がついていないのである。

しかし周辺に大掛かりな機械などは無いようだが…海が様々な色の光に照らされて色を変えているわけだが、魔法でも使っているのだろうか？

…などとシエルトは考えていた。

そんな口に出していないはずの疑問に答えたのはイヴェルである。

「えつとねー、魔法で発光するようにした透明の石をたくさん海に沈めてるんだよー。あと、海中に生息してる訓練されたフォーリーも何かの演出で使ってるんだったかな？」

「ああ、なるほど…」

なぜ自分の考えている事が分かったのか不思議だったが、とりあえず疑問が解消される。

だがそのやり方だと石の回収がなかなか大変そうだった。

よく見ると、海面に立っていたように見えた女性は海の色に同化して気付きにくかったが、沈められているものと同じものと思われる、

積み上げられた青く発光した石の上にいた。

「やっぱり綺麗だねえ。あの踊り子さんね、ミズキさんていうんだけど……」

女性の踊りを見ながらイヴェルの話を聞いていると、突然自分の左手をあたたかいものがきゅっと握った。

…イヴェルの手だった。

「シエルトちゃんの手冷たいね」と言われる。そんな彼女の手はとてもあたたかくて、とても心地良かった。

だから、思わずシエルトも手を握る。

「…あのね。ミズキさんの踊りを誰かと手をつないで一緒に見ると、ずっと幸せになれるんだって」

それは…おまじないのようなものなのだろうか。

(……またイヴェルを心配させた)

以前熱を出した時も、授業でちょっとした怪我をした時も、彼女をとても心配させてしまった。

いつも自分になにかある度にイヴェルは自分よりも悩むのだ。

今日だってブレスレットの事を考えていたから、そんな自分の姿がイヴェルには「いつもより元気が無い」という風に見えただろう。だからわざわざこんな所に、連れて来てくれた。

(…どうしてここまで心配してくれる?)

友人だからか？心配性だからなのか？

ただの彼女の性格なのか…それとも特別な意味、理由でもあるのか…。

「…えっと…これですつとしあわせ？」

あたたかい心配性の友人の手を握りながらシエルトは言う。

「うん、幸せなんだよ。またなにか元気がなくなっちゃう事があつても…私が、シエルトちゃんをずっと、」

イヴェルが最後の言葉を言い終わる前に、突然背後からパシヤリと眩しい光、フラッシュが焚かれた。

イヴェルの言葉を最後まで聞く前に驚いて振り返ってしまう。驚いたのはイヴェルも一緒のようだ。

そんな二人の背後に立っていたのは後ろにまとめた三つ編みが似合う女性だった。

女性の手には何やら普通とは少し違う、いかにもプロが使っているカメラが構えられていた…。

「あらら、ごめんなさいね！驚かせるつもりじゃなかったんだけど、なかなか良い雰囲気だったからつい、ね。というか無断で撮ったのはいけないかったわね。フラッシュ焚いたのもまずかったわ、こんなところで…」

「…え、あ、いえ…」

忙しく謝る女性。

良い雰囲気…女性同士の子供二人にたいしてそんな風に思うものなのか、と思った。

「それにしても…相変わらずミズキの踊りは素敵ねえ、うん。あなた達はあの子の踊り、どう思う？」

「えと…綺麗、だと思います。手をつないで見るとずっと幸せ、なんておまじないができるのも分かるかな…とか」

「あの子の踊りはほんとに幸せになれちゃうのよー？ミズキは私の幼馴染みで、私はずっと見てきたからねえ。手は繋いでないけどそれでも私は幸せ者だわ」

「あひゃー、幼馴染みさんなんですかー。てことはファン第一号さんですねえ」

「そうそうー！一号さんなわけよ。いやー、ほんと癒されるなあー…よだれ出ちゃうなあ」

…と言いながら女性の口から本当にさっきから出そうになっている。踊り子のミズキがひとつひとつ動作をする度に「うひゃあ！」だとか「おおっ！」だのと声を出し、ここまで興奮できるのはたしかに幸せ者かもしれない。

踊りが終わり、少しずつ騒がしさと人々の姿が浜辺から消えて行く。海の上にはあの踊り子の姿もすでになかった。

…幸せの夜が終わろうとしている。
祭りの中にいるのはあまり好かないというのに、なぜか今は寂しく思えた。

ところでカメラを持ったこの女性、名前はシアというらしい。

ミズキのほんの些細な仕草であろうといつでもその場面を残しておくようにと常にカメラを持ち歩いているのだという。

そんな話をしているうちに浜辺は更に人の数がまばらになりはじめ、

「……………えっ」

…だからこそ『見覚えのあるその顔』を、はっきりと確認することができた。

確認することができたから、シエルトは一人の命を助けることが…できた。

「…あ、シア、さんっ……………!!」

突然シエルトはそう叫びシアを思い切り、押した。それは突き飛ばしたようにも見えただろう。

尻餅をついてしまったシア。何が起きたのかと驚きつつも飛び込んできたシエルトが怪我をしないようにと、しっかりと受け止めてくれていた。

「わっ…一体どうしたの、……………っ?」

シアは、自分の服の胸元辺りがおかしい事に気付く。
…赤い色が…この服はこんな色だっただろうか……、よく見るとな
にかの染みにも見える…。

「…わ、私……え、なあに……？」

首が痛い。ぶつけたような痛みではなく、紙でスツと切ってしまった
たような…。

「う、いた…い」

時間が経つにつれて痛みが、感覚がはつきりしてくる。

「なにこれ？」と何度も心の中で繰り返しながらいくつかの指でそ
つと首を撫でた。

…血、が。

59話 幸せの夜に？

…シエルトは確かに見ていた。

シアの首へ、よく分からない何かに向かっていくのを。

それは絶対に放っておいてはいけないものだ、そう思い、だからシアを押し避けた。

しかし完全に避けることはできずシアの首には…綺麗にすっぱりと切れたような傷が。その切れた中から赤い血がじわりと垂れる。

やっぱり、その何かは、シアの首を狙っていた。

首と…あの見覚えのある顔。

(……あいつが……)

…それは自分を断罪者だというあの男。

あの男の顔を、はっきりと見た。

「シエルトちゃんっ……！シアさん、どうしたの!？」

突然のことにイヴェルは少しの間驚き立ち止まっていたが、シアの様子がおかしい事に気付いて焦ったようにシエルトの名前を呼ぶ。

シアはふらふらと立ち上がり「大丈夫よ」と震えた声で言った。

右手でおさえた首、傷口から這い出る血液が肌に赤く細い道を何本もつくる。

…シエルト達の周囲にいた人達もさすがにシアの様子のおかしさに気付いたらしい。

声を掛けようとしている人や、ちらちらと様子見をしている人などが現れ始める。

とりあえず誰か大人に助けを求めようとしたのだが、そこで誰かに自分の左肩に……手を乗せられた。そしてすぐ背後から肩に乗せられた手の主であろう人物の声が聞こえてきた。

「そんなに心配しなくて大丈夫だよ、まだ死んでないんだし」

……シエルトに対してだけに掛けられた言葉。

その言葉と同時に、シエルトの周囲にある変化が起こった。

「……」

何かが変わったという事に気付いた一番最初の理由は音。

人が疎らになりはじめていたとはいえ、それでもまだ浜辺はそこそこの騒がしさに包まれていた。

なのにその喧騒が突然、ぷつりと途切れた。

大音量でラジオをきいていたら、ラジオの電源をいきなり切られてしまったような。

けれど、砂を踏めばずむりと音が鳴る。あの心地良いと感じた音が聞こえる。

そして消えたのは人間によって生み出される「喧騒」であり、海の、波の音は静かに耳に届いている。

消えたのは人と人が交わす言葉、話し声。

なぜ消えたのかというと、誰も声を出さないから。

声を出さない、口を動かさない、動かない。

……誰もがびたりと凍りついたように動かない。

…ふと、たまたま近くにいた男性の腕時計が視界に入る。

まるでマネキンのごとく数ミリも動くことが無くなってしまった男性の腕にはめられた腕時計。

腕時計でさえ動かない。針が時間を刻まない。刻まれない、針が進まない。

……時間？

時間が動かなくなった。

でも、波はまだ時が進んでいるかのように繰り返し音を立てている。でも、イヴェルもシアも皆動いてくれないのだ。

「だってほら、いきなりほんとうに何も聞こえなくなっちゃったら君、すごく怖がっちゃうかとおもって。海、というか波だけは時間を動かしたままさ」

その声は、ついさつき自分の背後から聞こえた声。

そういえば左肩に乗っていたはずの手はいつの間にか消えている。

「まあ波の音だけっていうのはちょっと寂しさがあるけどねえ、どうでもいいけど……さてさてお話でもしようか、シエルトちゃん」

見覚えのある顔、あれは断罪者を名乗るあの男だった。

そしてこの声も……あの男のもの。今は姿が見えないが間違いはなかった。

嫌いで、二度と聞きたくないと思った男の声。……どうしてこんなところで……。

「遠慮せずになーんでも話してね？時間が止まっている……誰にも邪魔されないってことだよ」

明らかに機嫌の良いその声。

すると、シエルトの頭にぽんつと手が軽く乗せられた、かと思えば今度はわしゃわしゃと撫でられた。

そう、いつの間にか自分の真横に立っていた、断罪者を名乗るその男に……。

シエルトは驚いて思わず声をあげる。

「わッ……やだちょっと、触らないでよ!？」

まるで汚らわしいものに触れられたような反応で男の手を乱暴に払いのける。

その時のバシツという痛そうな音が浜辺に響いた……それでも、その音に反応する人間は誰もいない。皆、ほんとうに動かない……。男はわざとらしく悲しげな表情をして引っ叩かれた手を庇うようにさすっていた。

「あー、ひどいなあ。僕だってさあ、傷ついたりするんだよね、そういう反応されたら。僕別にばっちくないし、ここまで嫌われるとは思わなかったねえ」

「うるさいな、嫌い!あっち行って、近寄らないで!」

「……え、そんなに?いやさすがにそれは……なんか本気で傷つくというか」

シエルトは思い切り男を睨みつける。睨んだところで男がなんとも思わない事は分かっているが、それでも睨む。それから周囲を少し見渡した。

「これは、お前がやったってこと?」

これは、というのはつまり時間がまるで止まってしまっているような、この今の様子のこと。

さつき男は「波だけは時間を動かしたまま」「時間が止まっている、誰にも邪魔されない」などと言っていた。

……この状況について男は確実に何か知っている。

そう思い、ならもしかしたらと、男に問い掛けたのだ。

「そーだよ。誰にも邪魔されないように、君が怖がらないようにと配慮までして時間を止めたんだ。あー、僕ってちよびっただけ優しいね」

そう言ってひとりで頷いている。

「な、何なんだよ、しつこいぞ！……またあの話をしに来たんじやあ……」

「おやおやちゃんと分かってるんだねえ。誘拐事件の被害者で唯一の生還者。ま、どうやって帰ってきたのか知らないけど。とりあえず誘拐されたことを忘れちゃってるっていうのは信じるよ。分からないもの教えるってのはあまりにも無理難題さ。……でもそれなら、思い出してよ」

「誘拐されてもいないのに思い出せっていうのも無理難題だと思わない？ていうか、私が誘拐されたって……誰がそんな事言ったんだよ」

男は少し考えたような顔をして、それからシエルトの問いに答えた。

「んーとね、まあ……神様、だねえ」

「……………は？」

予想もしなかったおかしな返答にシエルトは思わずきょんととして小首を傾げる。

「神様って……塔の」

「いやいや、あれじゃないんだよ。あんなのじゃなくてもっと本物の神様。僕や他の断罪者が存在できるのは彼のおかげってわけさ」

相変わらず言っている意味が分からない、と思った。

よく考えると言っている事が理解できないという部分はクロードに似ていないこともない。

…そういえばクロードとこの男の持つ武器の形状……同じ鎌でよく似ている。

しかしこんな男と比べたらクロードに失礼だと思えるくらい、この男が嫌いだった。

「お前の言ってる神様とやらがなんなのか知らないけど……塔の神だつて本物、みたいなかんじじゃないの、一応は」

「ん？…んー……さてそれは、どうだろうねえ。まあそんな事はどうでもよくて！はやく思い出してよー、犯人とかさあ」

「だから知らないつたら！だいたいお前が断罪者だとか信じてないし、お前なんかどうせただの……人間じゃないか！」

「ああ、僕の言った事なにひとつとして信じてもらえてないんだねえ。そっか、信頼されてないならまずは仲良くなることから始めようかあ」

なんだその好きな人に告白したけどフラれてそれならお友達から始めましょう、みたいなのは……と思いつながらシエルトは怪訝そうな顔をする。

告白、という場面が浮かんだのはイヴェルとフィリップの友人のあの場面を見てしまったからかもしれない。

「じゃあじゃあそうだね、僕の名前はバートレット！こうして名

前が分かるだけでもちよつと仲良くなれたって感じがするでしょ？」

「するわけないだろ……」

「今日は僕ちよつと疲れててさあ、これ以上は時間止めてられな
いんだよね。なんかないの？どうやって連れて行かれたのかとか、
誘拐されてやって来たのはどんな場所だったのか、とか」

ほんとうになんて鬱陶しく、なんてしつこいのか……しかし。

フィリップの妹のブレスレットの事を考えるともしかしたら自分の
記憶はどこか正しくないのかもしれない。

もしそうだったなら……。

「とにかくなにも知らない、知るものか！記憶に無いことは思い
出しようがないってことくらいお前だつて分かるだろ！？」

「そうだな…信頼と、あと足りないのは危機的状况かあ」

「……」

「ほら、自分の身に危機が迫るとなんか思い出したりするんじゃないのかい？」

そう言つて男、バートレットの手には、あの路地裏でも見た大鎌
が……。

楽しそうに微笑んで、それをゆっくりと振りかざす。

「……なに、……っ！！」

シエルトが逃げると思ったのだらう。バートレットはシエルトの体
を足で、蹴った。

といつても軽くだったので怪我をする事はなかったが、それでもシ
エルトの体は地面、砂浜へと倒れてしまう。固い、大きめの石ころ
が当たって痛い。

…ふと横を見ると、すぐ側に動かなくなったイヴェルの姿があった。

「ね、シエルトちゃん。僕が今からこの鎌で君を殺してみせるから、殺されない前に頑張って思い出してね？……応援してるから！」

60話 幸せの夜に？

振り下ろされようとしている鎌……いくら「殺されてしまうかもしれない状況」だからって、自分の体に振り下ろされる前に、その一瞬の間に思い出せるはずがない。

それに殺してしまえば事件の唯一の貴重な生還者、犯人を知る存在を失うことになるのだ。

だからまさか本当にやるとは思えない……だが、もしかしたら本当にこのまま……。

そう、目の前の男は本当に、その大きな鎌を振り下ろして。

……振り下ろされたが、まだ自分の体へ刃が到達していないその僅かな間に。

また音が、鳴り始めた。人々の砂を踏む音とか、話し声とか、そういうものがまた耳に届き始めたのだ。

それは時間が正しく動き始めたという事だった。あの腕時計も、何事も無かったかのように再び針が進みだしただろう。

男……バートレットがこんな中途半端な時に時間を動かすだろうか

……理由はなんとなく分かった。

「今日は疲れていてこれ以上時間を止めてられない」と。そういえば、そんな事を言っていた気がする。

おそらくバートレットもここでタイムリミットが来るとは思っていなかったはずだ。

時間がいつも通り動き始めたから……イヴェルもシアも、時間が止まっていたなどという事には全く気付きもせず、止まる以前の動作の続きを始めるのだ。

「…………シエルトちゃん!」

…イヴェルの声だった。

突然、いつの間にかそこには見知らぬ男が立っていて、そして大きな鎌を振り下ろしまさに友人の命を奪おうとしているのだから驚かないはずがない。

時間が動きだし、イヴェルが声をあげる。

それらは鋭い刃が自身の体にまだ到達していない間の話。

あとはもう殺されるだけなのか。

こんな一瞬の時間に思い出せるはずがない。おそろしさに思い出す事などできない。

誘拐などされていなかったら、本当に記憶にない事だったら……なんて無理難題な話だろう。「危機的状況で奇跡的に失った記憶を取り戻す」という確率など存在しないのだ。

…………さて、そろそろ死ぬ頃だろうか。

想像を絶するだろう痛みを、もう数秒もしないうちに受けることになるだろうから。

「……………」

そしてシエルトは呆然と目の前を見つめていた。

鎌の刃が体に突き刺さることなんてなかった。

痛くもなんともない。血の一滴も出ない……いや、血が出ている。

ただそれは自分のものではなく。

「え、えへへ……シエルトちゃん、大丈夫、かなあ」

……イヴェル。

すぐ側にいたという事もあり、彼女は咄嗟にシエルトを大鎌の刃から庇ったのだ……そう、腕で。

バートレットはどうか振るう力を弱めたようだがあまりに突然の事で止めるには至らなかった。

赤く染まる彼女の腕は震えだしている。

辺りの楽しそうに騒ぐ賑やかさは一瞬にして消え去り、悲鳴と、不穏なざわつきに包まれた。

…鎌はバートレットによって投げ捨てるようにして放りだされたがその鎌は浜辺にも海にも落ちることなく空中のどこかで消えてしまった。

そして軽い舌打ちが聞こえたと思ったら今度はバートレットの姿も……見当たらなくなっていたのだ。

だが、今はそんな男のことなどどうでもいい。

シアは首の傷のことなど構わずイヴェルの元へ走った。

手を繋いで一緒に見ると、ずっと幸せになれる。
繋いだその手はいま真っ赤な血にまみれていた。

イヴェルの腕の傷は思ったほど深くはなく、しかし軽い怪我ではない。

真っ白な包帯が真っ赤な血を隠し綺麗にぐるぐると巻かれている。とりあえずシエルへと帰ってきたわけだがイヴェルはまったく痛がる素振りを見せていない。

それどころかいつも通りで、そして妙に普段より機嫌が良さそうに感じることもある。

怪我をした腕も動かさずらそうではあったがあまり不自由していないように……見えないこともない。

その動かさずらそうな理由も「痛いから」ではなく「包帯が巻かれているから」なんだとか。

「あひゃー、やっぱりこの事は家に連絡いくよねえ。怒られちゃうかなー、でもいいかなあ、別に」

夜の校内の廊下にはイヴェルと……泣きじゃくるシエルトの姿。

浜辺でのあの光景があまりにも恐ろしくて、そしてその光景は自分が原因で生み出されたもので……。

怪我は片腕だけだったがその時、イヴェルが死んでしまっかもしれないと何度も頭の中で繰り返された。

……シエルはずっとただ泣いて、ただ謝っていた。

他にもっとするべきことがあるのかもしれないし、言うべきことがあるのかもしれない。もしかしたらなにをしても意味などないのかもしれない。

しかしそんな事、自分の頭では分からない。

だからとにかく恐ろしさで申し訳なさ泣いて、自分などを庇わせてしまった事を謝るしかないのだ。……それしか今は分からないしできない。

そんなシエルトの頬を、怪我をしていない方の腕、指でイヴェルがつまんだ。

「む、どーしてそんなに謝ったりするのかなあ。そうするのは悪い事をして、それを反省している時だけでいいのに」

…だが、今のシエルトの耳にイヴェルの言葉など半分程しか届かない。

混乱していて相手の話す言葉のひとつひとつの意味があまり理解できていない状態なのだ。

つままれた頬は涙でびしょびしょのべたべた。それでも流れ出る涙はイヴェルの指も頬と共に濡らした。

イヴェルはどこか悲しげな顔で、涙で頬に張り付いた細い髪を取りながら言う。

「私のせいでシエルトちゃんはこんなに泣いてるんだねえ……私だって謝るよ。ごめんね……」

イヴェルよりも背の低いシエルトは、彼女の顔をやや見上げる様な形で、そして驚いた表情で見ている。

突然謝られた、ごめんと言われる理由が理解できなかった。

「そ、そんなの全然謝るような理由じゃないでしょ？やだよ、変な事言わないで」

泣いているせいでどこかはつきりとしなない口調。

それでもイヴェルはしっかりと聞き取って、返事をした。

「変なこと言ってるのはシエルトちゃんなんだよ？私だってなんで謝られてるのか理解出来ないんだもん」

彼女の表情は悲しげなものから少し笑った、笑顔になっていた。そして面白そうに頬をつまんだままいじるのだ。

「なんでシエルトちゃんが悪い事したことになるのかなあ。

私はシエルトちゃんが怪我して、痛い痛いって泣いちゃうのやだからああいう事したただけだもん。いま私に謝られて変に思ったでしょ？私も同じだから、だからもう謝っちゃうのはだめなんだよ」

「う……ずっと幸せなんて嘘ばかり……イヴェルがこんなになつて……」

「うん、仕方ないんだよ。何が幸せかとか、何が不幸せかとか、人によつてこんなにも……全然違うんだもの」

「……………？」

イヴェルに頬を触れられてシエルトは少し落ち着きを取り戻していた。

だから彼女の言ったことはしっかりと聞き取れて理解できるはずなのに、何を言っているのかすこし分からなかった。

結局あんなまじないなんかで本当に幸せになれるわけがない、と言いたいのか？

……それはないと思った。じゃあ、なんなのだろう。

困惑気味のシエルトを見てイヴェルはくすりと笑った。

「みんなが等しくいつまでも幸せでいられるのは難しいねえ……

あ、ほら！フィリップ君だよ」

またイヴェルが何を言っているのか分からず、そして廊下の向こうからこちらへ歩いて来るフィリップの姿に視線を向けた。

てつきりもう寮に帰っているかと思っていたが……イヴェルのことをどこかで聞いて、来たのだろうか。

そういえば、すっかり忘れてしまっていたが自分は昨日からずっとフィリップを探していた。彼の妹の物かもしれないブレスレットを渡すために……。

「…イヴェルちゃん！先生から聞いたけど……大丈夫なの！？」

「心配するようなことじゃないんだよ。もうなんかね、ほとんど平気なの」

「あ、あれ……そう、なんだ？」

フィリップは多分、怪我で辛そうにしているイヴェルをずっと想像していたのだろう。

巻かれた包帯を見て決して小さな怪我ではないことは確かなのだが、本人はあまりにもあっけらかんとしている。

とりあえず思ったほど悪くはなさそうで安心したようだが、もしかしたら無理をしているのではと心配もしてしまう。

「でも……どうしてそんな怪我なんて」

「ん？…あー、私のちよつとした不注意というか」

イヴェルは、シエルトのことは言わなかった。

もし「シエルトちゃんを助けてその時に」なんて言ってしまえばせつかく落ち着いたというのにまた謝りだしてしまうかもしれないと思っただからだ。

……あまりに一瞬の事ではつきりと見る事ができたわけじゃない。けれどたしかにあの時、知らない男の人がいた。そしてシエルトを……。

その男の姿を再び確認しようと思った頃にはもういなくなっただけだった。

（シエルトちゃんに元気だしてもらいたくて出掛けたのに……私

は余計なことしちゃったのかなあ……)

校舎から出て夜空の下、寮への夜道をシエルトとフィリップの二人が歩く。

因みにイヴェルなのだが彼女はまだ校舎に残っていたいのだという。怪我をしているというのに寮で休もうとはしないのだ。

男子寮と女子寮の建物はもちろんそれぞれ別の場所であり途中で道が分かれている。

別の場所、といってもそんなに離れているわけでもなく、校舎と比べればだいぶ近い。

「あのさ。イヴェルちゃんと一緒にいた時……もしかして泣いた？」

「……そ、そういうのには触れないようにするべきでしょ……」

泣いてないと言っても目は赤いし涙のあととはついているだろうしで相当泣いていたことはもうバレているだろう。

「それより、これ」

そう言つてシエルトが手の平に乗せて出したのは腕からはずした銀色のブレスレット。
フィリップは一瞬何だろうと思つたが、すぐに理解する。

「きっとこれは妹さんのだから……フィリップが持つてたほうがいいよ」

「でもシエルトのものでもあるわけだし」

「だけど、持つてて」

ほんの少しの間銀色のそれを見つめると、フィリップはゆっくりと手に取つた。

ブレスレットの無くなつた腕がいつもより軽く感じる。

「分かつた。僕が持つているね……ありがとう」

「えっと、もしなにか妹さんのことで思い出せたらすぐに言うから」

「うん……ありがとう、ほんとうに。でも無理はしないでね。思い出せないなら……分からないなら、それでいいんだ」

…そんな話をしているうちに男子寮と女子寮、それぞれへと通じる二つの道へ……分かれ道へと辿り着いた。

それからフィリップと別れて寮の中に入り、物静かな廊下を歩いて自室の扉の前へ。

すこし古めかしく感じるドアを開けて部屋に入るなり勢い良くベッドへ倒れ込む。

(……イヴェル)

隣のベッドにイヴェルの姿はない。…いつ帰ってくるのだろう。怪我をしているのにまだ校舎内に残っているなんて、先生なんかに見つかつたら怒られるのではないだろうか。とりあえず、イヴェルが戻ってくるまでは眠らずに待っていたい。

ベッドの上でぼんやりと天井を見つめて、そして浜辺でのことを思い出す。

……あの男が断罪者なんて信じていない。

でももしかしたらほんとうは、ほんとうに……たかが真似事であそこまでするだろうか？

あんなことまでして本気で誘拐事件の犯人を知りたがっている。見つけ出してその首を、刎ねるために。

(……シアさんは)

今日出会ったばかりの女性……そういえば彼女、あの首の傷は。

(決まってる、あいつがやったんでしょ)

そう、首を刎ねるために。

ならシアには刎ねられてしまう理由があることになる。……なにか罪を犯したのか。とてもそんな風には見えなかったのに。

……シアは大丈夫なんだろうか。

校舎内に残るイヴェル。

……彼女だって混乱してないわけではない。

少し落ち着くために一人でこの廊下の窓から夜の空でも眺めていようかと思った。

すると、この廊下を歩く静かな足音が一つ聞こえてくる。

「……あ、お久しぶりですね」

その足音の主は黒髪の女性……シエルトの姉であるリンセルトだった。実際には授業で何度も姿を見ているのだが、授業ではまともに会話を交わせることもなく。

こうしてしっかりと顔を合わせるのはイヴェルの言う通り久しぶりだった。

「あー……なぜお前は寮に戻っていないんだ。怪我をしていると、いうことを分かっているのか……」

「休むのは落ち着いてからにしたいんですよ。ここはなかなか好きな場所ですので」

「はあ、まったく……休むから落ちつけるんじゃないのか」

そう言っただけでリンセルトはイヴェルの包帯の巻かれた腕を一瞥する。

「……すまないな。妹を、庇って」

「あひゃ、姉妹で謝るんですね。それ以上はなにも言わないでくださいな」

「いやしかし、だな」

「だって。いいんですよ別に。シエルトちゃんを守れたから、そりゃあもう今は幸せなんです。シエルトちゃんはそうは思っていないけれど……まあ幸せなんて思えないかな」

「守ることができて幸せなのと、怪我をしてしまった不幸せで半々なのではないのか？」

それにたいしてイヴェルは、よく分からないです、と言った。そして少し……まるでなにか懐かしんでいるような表情をする。

「……先生はシエルトちゃんが初めてアルムを出せるようになった日の事って覚えてます？」

突然そんな事を訊かれやや怪訝な顔をするも、あの時シエルトはすごく喜んでいたし覚えている、と返事をした。

「ああ……そういえばあの日、あの時にお前が……」

「ええそうですね。懐かしいなあ」

……イヴェルとシエルトが初めて出会ったのは六歳ほどの頃、シエルの入学式の日だった。

イヴェルはどこか暗くて自分から喋ることのできない、今はまるで正反対の性格だった。

その時よく話しかけてきてくれたのがシエルトで、イヴェルは誰かと話すことの楽しさを覚え少しずつ明るくなっていった。

シエルトもそこまで自分から話しかける性格ではなかったが入学前は友人も少なく「友達を百人つくる」だとか、そんなことをリンゼルトと約束したらしい。

それから二年が経ち、二度目の進級をした頃。

訓練されて使われていたはずのフォリーが突然暴走をはじめて生徒のいる校内へと侵入した。

その時、イヴェルはその恐ろしさに逃げられなくなってしまったのだ……すぐ目の前にフォリーがいるというのに。

そんなイヴェルを助けようとフォリーの前に立ったのは、シエルトだった。

……その時、この日が、シエルトが初めてアルムを使えるようになった日だった。

イヴェルを助けるためにフォリーを倒そうと必死になって、そして……使えるようになった。

それからだ。シエルトのようになりたくて、あの時自分を守った友人を失ったり怪我をさせたりするのは嫌だったから。

なら、これからはずっと自分がシエルトを守ろうと決めた……勝手に、決めた。シエルトには言っていない。

でも、今日。自分が庇ったことでシエルトを泣かせてしまった。怪我をしてしまったから。

(じゃあ次からは怪我をしないように……それでも守れるように頑張ろう)

あの時のシエルトのように、自分もなれたらいいのに。

シエルトもいつか感じてくれるだろうか。あの日、守られた自分と同じ気持ちで。

……嬉しかった。

シエルトとダイアナの出会った場所。

夜、そこに海を眺めるダイアナの姿があった。

冷たい風が彼女の髪を揺らす。海の上では一人の踊り子が海の水とともに舞っている。

なんて美しいのだろう、と思った。

そしてダイアナの白い手を、一つの手がぎゅっと掴む。

それは顔がよく見えないほどに帽子を深く被った少女。少女は小さな声で、ダイアナに言った。

「あのね……こうしてあの踊りを見るとずっと幸せになれるんだって」

「まあ、そうなの？じゃあしつかり手を繋いでいきましょうね」

ダイアナも少女の手を握る。そして、微笑んだ。

それが少女にはとても嬉しいことだったのか、少女の口元がすこし緩んだ気がした。

「これからも毎日一緒にいてくれるよね、ママ」

「ええ、ずっとね。もう二度と、ひとりにはしないから」

61話 旅先の迷子と水の踊り子

……イヴェルの怪我から一週間が経った。

その一週間の間、彼女が痛がる素振りを見せた事は一度もない。学校生活でも寮での日常生活でも、だ。

不自由に感じる事はあるようでも、たまに手伝ったりした事はあるが痛みを訴えた事は一度も無かった。

無理をしているのかもしれないと思ってなるべく気にするようにはしている。

そして今日は以前（というか怪我をした日に）イヴェルが話していた点検とやらで学校が休みなのだ。

連休も重なりそれなりに長い休みとなったのだが……。

「……やだお母さん、ほんとにその格好で外出歩く気なの？」

「あら、やだとは何かしらね。誰だつて着てるワンピースなのに」

「いつもは適当にシャツとズボン、もしくはあの青ジャージなのに……誰でも着てるつていつたつて普段地味なお母さんが着るとやけに派手に見えるんだよね」

微妙な表情で見慣れぬ母の格好を一瞥するとシエルトは柔らかかそうな淡い桜色の布団のベッドの上にぼすりと座った。いつもより控えめに座った気もする。

そこは、今いるこの部屋は学園の寮でもシエルトの家の部屋でもない。

そもそもここは大都市・レーヴですらない。

和を中心に栄えている都市、八重霞……そのホテルの一室。つまり旅行。

そう、長い休みということやって来た久々の旅行だった。

着いたばかりだからということもあるが、レーヴとはまるで違うこの雰囲気に、どうもまだ慣れきっていない。

とりあえず寝るための場所はあの床に布団を敷くというものではなくベッドがあつたので安心したが、この畳というものは……素足で歩くとぞわぞわする。

今は寒い季節ということとその姿は見せないが桜の木が満開になるとほんとうに凄いのだそうだ。レーヴにも春になればそれなりに桜が咲くが、ここはそれとは比べ物にならないらしい。今度写真なんかで見てもみようと思う。

もうすぐで冬になるうとしていいる頃なわけだが、もう少し早く来ていれば紅葉もまた凄かったそうだ。

ところで八重霞の人達がよく着用しているあのやたら袖の邪魔そうな謎の服。

見たことがないわけではないが実際に実物を見てみると凄く綺麗で花のようで、しかし帯なんかを見ると構造がなかなか複雑そうで着たいとは思わない。というか似合わない。

ところで浴衣……あれも着物物の一種なのだろうが、何がどう違うのやら。

そして髪につける簪、というもの。あれは、なぜかとても気に入ってしまった。

あの歩きたびにゆらゆら揺れる飾りがなんともいえない。当然これも自分に似合うはずがない。それに髪が長くなければ無理のような気もするが……どうなのだろう？

……と、こんな風に一見するとそれなりに旅行を楽しんでいるようだが、実は最初シエルトは旅行を拒否していた。

たまには、という事で提案されたのだが……イヴェルが心配だった。一週間前と比べれば怪我は良くなつてはいるものの、やはりあれは自分のせいでああなつてしまったのだから。

完治するまではどうしても心配になつてしまつし、あんな事があつ

たのに旅行なんて、という気持ちがあった。

しかし、その旅行の提案は母からの手紙で送られてきたもので勿論断るつもりだったのだが。

その手紙をイヴェルに見られてしまい、そのイヴェルから「行って来なよ」と言われてしまい……申し訳なく思いながら八重霞へとやって来たのである。

だがあまりにもその調子が続くと今度はイヴェルが申し訳なく思ってしまうかもしれない。……ということで、楽しいと感じた時は素直に楽しむ事にした。

本当はやっぱりまだ心配なのだけれど。

「……しかしお前は背が伸びないな。私の妹なのだから、もう少し大きくなるものだと思っていたが」

「いきなり何さ、姉さん。姉妹が必ず似るとはかぎらないよ」

「ああ、似なくていいさ。私より背が高くなられても、それはそれで困るのでな。一生小型サイズで構わないぞ」

「そこまで小さくはないんだけどなあ……」

今日この旅行には姉であるリンセルトも来ていた。

普段は何かと多忙だが珍しく休みを取ることができ、こんな風に家族そろって出掛けることは本当に久しぶりだった。

「ねえ、それにしてもお母さんの格好、どう思う?」

「まさか、わざわざここで着替えるとはな……まあ似合ってはいるし、本人がいいのならいいのではないか?」

母は最初、家を出る時はいつもの地味な格好だった。

しかしホテルへやって来たそのすぐに突然着替え始めたのだ。全体的に青っぽい、花柄のようなよく分からない柄のワンピース。

いつの間にそんなものを持っていたのか……最初から着て行かなかったのは八重霞に到着する前に汚れると困るから、だそうだ。

「ところでシエルト、いつも腕に付けていたあのブレスレットはどうしたんだ？」

「……ん、あ、ああ……あれね。うん、ちよつとね」

「……そうか。よく分からないが腕になにも着けていない事に気付いてな」

そう言っただけでシエルトは何かを手に取りシエルトの腕に着けた。

その何かはブレスレット、のだが赤色の二重の紐と二つの金の鈴。そして桜の花……そんな飾りだからブレスレットというよりは腕飾りと呼んだほうがしっくりくる。

金色のその飾りが、しゃらんと美しく透き通った鈴の音を鳴らす。

「ふむ、ちよつといいな。忙しくて普段あまり構ってやれないかな。その詫びというか、私からの贈り物だ。綺麗な飾りだとは思わないか？」

「……え？ああ、うん、綺麗だね」

構ってやれないからその詫びだなんて言われるとは思わなかった。たしかに、ここしばらくはあまり話す機会が無かったかもしれない。授業で会うという事も殆どない。

姉としての彼女ではなく学校の先生としての姉の顔しか見ることがなかった。妹として見てくれたことがすこし嬉しい。

新しい腕飾りを着けてなんとなく腕をかざしてみる。動かす度に鈴が音を鳴らすがつるさいとは思わない。むしろ、落ち着く。

……なのはどうしてか心細く感じた。

それはいままで気付いていなかっただけで、フィリップにブレスレ

ットを渡してからずっと、そうだったかもしれない。

「……はあ。どうしてお母さんっていつもこうなの？」

そこはホテルの中、ではなくて外。長い木造橋の隅っこでシエルトは溜息をついていた。……それにしてもこの橋、壊れるのではないかと思ってしまう。

ところでシエルトはさっきまで母と一緒に歩いていた。リンセルトはまだ少し仕事が残っているらしく一緒に来なかった。

母なのだが、そう、いつもこうなのだ。

いつもどこかに行ってしまう。一緒に出掛けると必ずはぐれる。姉と三人で歩いている時も母一人だけふらふらと姿を消してしまう。

だから今回もなんとなく、こうなるだろうとは思っていた。……こういう初めて来るような旅行先ではやめてほしいのだが。

母をさがしているうちに、シエルトも半ば迷子状態になってしまっていた。ここからホテルへ辿り着ける自信は正直言ってあまり無い。

（どうしょ。ちょっとこわいけど、まずは誰かに道をきくしかないよなあ）

もしかしたら母はさきにホテルへ戻っているかもしれないし。

とりあえず話しかけやすそうな人、なんとなく見た目で優しいような人をさがしてみる。

(……………あ！あの人……………)

条件に合う人間が見つかったわけではない。しかしどこかで見た顔、姿が近くを歩いていた。

するとその人物はシエルトの姿を見るなりすごく驚いた様子で、慌てて駆け寄ってきた。

……………すこし短めの、さらさらな髪が綺麗な人。

それはあの海の上で踊っていた踊り子だった。……………まさかこんなところで出会うなんて。

女性は、ミズキはなぜかシエルトの顔を知っているらしい雰囲気だった。

「あの、あなたっ！シアを助けてくれた子！……………よね!？」

突然シアの名前を出されて、戸惑う。

(……………え、えっと、この人の名前、ミズキさん……………でいいんだよね?)

そんなシエルトの戸惑う様子にミズキは人違いだったのだろうか、と迷いの表情を浮かべる。

「あのね、私たまたま見たのよ。変な男の人がシア達の近くをうろついていて、怪しい感じで……………そうしたら男の人、いきなりシアの首を狙おうとしていたわ。その時あなたがシアを押してくれたから……………あの子、首の怪我だけで済んだんだと思ったのだけだ」

それはおそらくシエルトで間違いないだろう。あの時シエルトもシアの首を何かを狙っているのに気付いて、咄嗟に突き飛ばして避けさせた。

「……………えっと、多分」

「やっぱりそうだね、そうよね。この胸のブローチとか同じだもの」

ブローチというのは以前ダイアナからもらったものである。あの日以来、ずっと身につけている。

「シアを助けてくれたお礼、ずっとしたかったんだけど、レーヴなんて広過ぎるしもう会えないかと思ってた……………でもまさかここで会えるなんて。ほんとうに、あの子を助けてくれてありがとう」

「あの……………いえ」

礼なんて言われてどうにも恥ずかしくなって、返事に困ってしまう。

「シアさんは、怪我は？」

「大丈夫よ。一応病院へは行ったけどすぐ治りそうなの。それより、あなたと一緒にいた女の子……………あの子は大丈夫だったの？」

きつとイヴェルのことだろう。

見ていたなら、イヴェルが怪我をした場面も知っているのだろうか

「はい、多分、大丈夫だと思います」

「それは良かったわ……………」

ミズキはほつとしたような顔をした。

(そうですねシアさん、ミズキさんと幼馴染みだって言ってたっけ……)

「 …… シア、やっぱり 」

橋の手すりに手を寄せ、ミズキがそう呟いた。「 やっぱり 」 …… なんとなくその意味を理解してしまう。

「 シアさんはきつと何も …… 優しそうな人だったし …… その 」

「 あなたは知っているのね、断罪者のこと。シアは優しいから、だからこそやってはいけないことをしてしまっただわ …… あの子の口からそう聞いたわけじゃないけど、あれはきつとあの子が …… 」

…… もう、やっぱり何だかあの男はフリなんかじゃなくて、本物なんだと感じさせられる。

断罪者だというのは事実でルイスもなにか罪を犯して …… シアも。

「 私はシアのおかげで踊りをやってこられたわ。そして、私の考えが合っていればシアが罪を犯したのは私のせい。私は断罪者を見つけてどうにかシアを助けたい …… 」

「 …… 」

シアがなんの罪を犯したのかは知らない。けれど、犯さなければならぬ理由があったのだと思う。

どんな理由があるにせよ犯した罪が消されることも、このままではゆるされることもないのだろうけど …… 。

シエルトからしてみれば断罪者……あの男も犯罪者のようにみえる。断罪などではなく、彼はただ首をきって楽しく遊んでいるだけ。幼い子供が遊びのつもりで残酷な方法で虫を殺す、それと同じ。……罪を犯した人間はもはや断罪者の遊び道具。ルイスもシアも、だ。

首を刎ねるといふ、そのやり方が良い事なのか悪い事なのかは分からない。ただ、遊んでいるつもりならそれはただの犯罪である。犯罪者が犯罪者の首を刎ねるといふのは、シエルトは納得がいかなかった。

ダイアナはいつもの場所で海を眺めていた。今日は、あの少女の姿はない。

青と水色、なのに透明。海とは不思議なものだといつも思っていた。きつとこの海がゼリーのようなデザートだったなら、さぞかし甘くて美味しかったことだろう……などと考えてみたりする。

そんな彼女の楽しそうな想像を打ち破る、静かな足音。

その足音はダイアナの後ろ辺りでぴたりと止まり……視線を感じる。振り返らずにはいられない、そんなものだった。

なぜか怯えてしまっておそるおそる、ゆっくりと、振り向く。

「……………」

振り返った先に立っていたのは一人の男性。

男性はじつとこちらを見ているが、その顔はどこかで見た事があるような、けれどとはつきりとは思いつけない。自分のよく知る人物でない事は確かなのだ。

この男性は自分の事を知っているのだろうか……？

(えっと……どなただったかしら。でもきつとこの人とはお話をした事は一度もないと思うのだけれど)

どうしていいか分からずおろおろしてしまうと、男性の方から話しかけて来た。

「あなたはよく塔へ来ていますよね。昨日も姿をお見掛けしましたから」

「……あ、ええ。今日もこれから行く予定なんです」

そこで、そういえば、と思い出す。

この男性の格好……おそらく騎士団の人間。彼の顔は塔で何度か見たことがあったはずだ。

よく年下の、騎士団の男の子を連れている……そう、たしかファルクスと呼ばれていた。

ただ記憶が若干曖昧なのでその名前を口に出すことはしない。

「あの塔で祈りを捧げられるということは、どこか体の具合でも？」

「……え？あ、えと……ええ、ちょっと」

その質問にダイアナは少し戸惑いの様子を見せた。

そんな戸惑いを、ファルクスは鋭い視線で見おろす。それに気付い

たダイアナは、びくりとして動けなくなっていました。
なにか失礼なことでも言ってしまっただろうか、とにかく焦り、
冷やかな空気が体を蝕む。

「あ、のっ……ごめん、なさい。私、」

「見ていただきたいものがあるのです」

ダイアナが謝罪の言葉を言い終える前にファルクスは一枚の写真を
差し出した。

写真に写っているのは少女で、笑わないその表情のせいで無愛想、
という印象がある。

それはある人物の搜索のために使われている写真なのだ。

……ルシファーである。

写真の少女の姿を見た瞬間ダイアナの表情はひどく怯えたものにな
った。どこか顔色も悪く感じられる。

「私の弟の友人を連れてあなたが塔へやって来た時、あなたは異
常にルシファーという名前に反応していたようにみえた」

あの日、追放されてまったく姿を見せることがなかったはずのルシ
ファーが突然目撃され始めた事により塔では何人も人間がルシフ
アーの名を口にしていた。

その名前を聞き続け、塔から帰る頃にはまるで貧血でも起こしたか
のように具合が悪くなってしまっていた。

そんなダイアナを見てファルクスは、彼女がルシファーについてな
にか知っているのかもしれない、と思ったのだろう。

……恐ろしくて怯えているのか、それともなにか別の理由があるの
か。

ダイアナはついにふらふらとその場に座り込んでしまった。

62話 旅先の迷子と水の踊り子？

「ああ、ごめんなさいね。こんな話をしちゃって……」

「あ……いえ」

ミズキは暗い表情をぱっと明るくしてシエルトの方を向いた。そして、声の調子をとのえるように咳払いをひとつ。

「んん、もう一度お礼を言わせてちょうだい。……シアを助けてくれてありがとう。あなたのおかげでシアは助かったわ」

そう言つてミズキは服のどこからか閉じた扇子を取り出し（踊りで使っていたものとは違うようだ）その先端を橋の下に流れる透明の水に向けた。

すると、何もなかった水面に突然波紋が浮かび上がり、その後波紋が見えなくなつたかと思うと水の跳ねる音が川の奏でる心地良いせせらぎを一瞬、かき消した。

と、今度はさっきのものよりも大きな波紋が浮かぶ。なにが起きているのかとじっと川を見つめっていると、突然波紋から水の塊のようなものが飛び出してきた。

その塊はよく見ると海の踊りでもみたあの妖精。

揚羽のような羽を操つて妖精はくるくると空を飛んだあと、シエルトの鼻にちゅんつと小さなキスをしてまたふわり、妖精はミズキの肩の上に乗る。

「か、かわいい……」

ダイアナのブローチの時もそうだが、こういう魔法が使える女性とというのはほんとうに素敵だと思う。

自分もいつかこうなってみたいと思うがアルムを出せるのがやっとの状態。まだ先の話であると感じる。

「それで、ぜひあなたのお名前をきかせてほしいのよ、お嬢さん」
お嬢さんだなんて言われるとどうも緊張してしまふ。

「えっと……シエルト、です」

「シエルトちゃん、ね。シエルちゃんなんてどう？」

「はあ、私は貝殻でしようか」

「貝殻は浜辺の宝石よ。素敵じゃないの、さすがシエルちゃんだわ！」

「さすがってどういうことですか……」

意外と変わっているというか、子供っぽいというか。そんな人だった。

ミズキは水の妖精を肩に乗せたままシエルトに質問をする。

「シエルちゃんってつきりレーヴの子かと思ってたけど……家は八重霞なの？」

「あ、今はここに家族と旅行で来てて」

「旅行！なるほどね、そういえば連休って今日からだっけ」

「明日からですけど、学校の都合で今日から休みになったんです」

そう言うとミズキは「特別な休みの日ってなにか違うことしたくなるよね！で、結局いつもの休みと変わらず一日を過ごしちゃうの」「と子供みtainな笑顔で答えた。

大人が持つような梅と桜の柄の扇子が、はしゃぐ子供のような笑顔をばたばたと扇ぐ。

なんというか、その様にどきりとさせられる。

ちなみにミスキは八重霞の出身で今もここに住んでいるようだ。

「で、シエルちゃんは一人でこれからどこに行く予定なのかしら？」

「どこに……って、あ！」

思わず少し大きな声を出してしまったが、そう、すっかり忘れていた。

「お母さん……」

「えっ、もしかしてシエルちゃん迷子だったの！？ど、どこでお母さんとはぐれたかな？」

「ええと……言いわけのようで恥ずかしいのですが厳密には迷子になったのは母のほうで」

「迷子のお母さんをさがしてたら自分も道分からなくなっちゃったんでしょ？ふふ、同じことよ」

「……ですよねえ」

すると、ぱちんと音を立てて閉じた扇子の先端でミスキに頬をつつかれた。

なんだかこの扇子、独特な和を醸し出す匂いがする。使われている紙の香りだろうか。良いものだ。

「心配しなくても大丈夫！私が一緒にさがしてあげるっ。八重霞のことはミスキさんにおまかせだもの〜」

「ほ、ほんとう……れすか」

あまりつつかれるものだから喋り方がおかしくなった。

……とりあえず、二人は母とはぐれたと思われる場所へと向かった

のだが、母の姿は見当たらない。

この場所が本当にはぐれた場所なのかも分からなくなってくる。仕方なくしばらく周囲を歩いていることにした。もしかしたらひよっこり現れるかもしれない。

歩いている途中、ミズキが何人かに声を掛けられていた。踊り子ということで彼女を知っている人は多いようだ。

「ミズキさんて、ほんとに凄いですね。踊りも素敵だったし…」

「あらあら、嬉しいわね。でもここまでやってこられたのは本当にシアのおかげなのよ」

そういえばさつきもそんな事を言っていた。

幼馴染みだというし、おかげというのはシアが応援してくれているとか、そういう事だろうか。

そんなシエルトの考えていることがミズキには分かったようだ。

「もちろん、あの子はいつだって応援してくれているし……私の家がちょっとアレでね。踊りのことは家族からすごく反対されたの。でもシアがいるいる助けてくれたのよ。家族に抗議してくれたこともあったし」

アレというのが何かは分からないが、それなりに事情があったのだろう。

シアも、あれだけ彼女を絶賛していた。ミズキの家族が反対していると知れば抗議くらいするのだろう。

「今は賛成してくれているんですか？」

「うーん、残念なことに最後まで賛成してくれなかったわね」

……「なかった」。最後まで、なかった。

「家が火事で、家族も巻き込まれて。私以外みんな全滅よ。まあ、父と母だけだけど。私はその日シアの家に泊ってて無事だったんだけどね、もう何年も前のお話」

それは一緒に暮らしてきた家族を全員失ったという話。それなのにミズキは悲しむ素振りを見せない。

まるで自分のことではないように話しているのだった。

「ドメスティック・バイオレンスって分かる？」

「えっと、DVですか」

「そう。まさに私の家がそれだったのよ。父親は母と私に暴力振るって、母は私に暴力振るって。踊りの教室に通いたかったけど気に入らないからとかいう理由で反対。両親、いつもは喧嘩ばかりのくせに反対する時だけは意気投合。母は父に殴られたくないから、父と仲良くできる話題……私の踊りのことを引っ張り出してきて、なるべく暴力は私だけに向かうようにしてたわ」

シエルトに父はいないが、母とも姉とも仲が良い。

だからそんな家庭で育ち生活するということが想像できない。……ふざけて少し叩くだとかそういうことではなく、本気の暴力なんて。

「こんな親、死んだってどうってことなかったわ。いなくなってくれたのねって程度の認識。一応八重霞に住む親戚に引きとられたけど、親戚は暴力の事を知っておきながら今まで無視してきたわけ……そんな人達と仲良くすることなく、ある程度経ってから一人暮らしを始めたわ。まあ、それから本当に自由って感じてね」

「……」

「だから家族で旅行に来て、はぐれたらさがさなきや！って思えるお母さんがいる事は羨ましく感じるし……世界中の家庭から暴力なんて消えればいいのって思うかな」

「……でも、体があれば暴力を振るうことができずいます。消すことは難しいことなんじゃないか」

「ええ、難しいでしょう。たとえ優しい心を持っていても暴力や別の手段で人を傷つけたりするわ」

たしか、ミズキは言っていた。

シアは優しいからこそ罪を犯してしまったと……。

「家の火事は放火だそうよ。でも犯人は見つかっていないの」

「それって……」

「あの日、暴力がひどいからってシアが私を家に泊めさせてくれたの。そしてその夜シアがこっそり家を抜け出したのを知ってる。

その夜に火事が起きたのよ」

「……でも、それだけじゃ」

「いいえ、私の家族を焼き殺してくれたのはシアだわ」

そう言いきられて、シエルトは何も言えなくなる。

断罪者に狙われているということはシアにはなにか罪があるということだ。

それはシアが放火犯であるという証拠になっってしまうのかもしれないが、ミズキはそれとは別の理由で犯人であると思っているようだ。

「私を家に泊めてくれた日、何度も『辛いことを終わらせてあげるから』と言っていたし……その数日前からどこで知ったのか、えっと……心臓の儀式、だったかしら。そんな事ばかり言っていたもの」

「心臓のって……なんです？」

突然出てきた不気味な言葉。儀式というから怪しいオカルトの類だろうか。

「私も詳しくは分からないんだけど、人間を何人も簡単に、一瞬にして殺せる程の何かを生み出せるらしいの。きっとそれで両親を殺すつもりだったんだらうけど」

「その儀式ってシアさんはやったんですか？」

「……どうかしら。どうみてもただの放火だったみたいだし。何人も殺せる程の何かが火事の火のことだったとしても、そんなの儀式じゃなくて自分で火をつければいいだけだし。多分、実行はしなかったんじゃないかしら」

心臓の……そういえば以前に見た子供の出てくる夢の中に心臓に似たものがあつた。

子供の胸は血に濡れていたし、間違いはないと思う。あれは心臓だった。

祭壇や蝋燭なんかは儀式のようなものを連想させる。心臓と、そして儀式。

あれはその儀式の最中の夢だったのか？子供達の心臓を使った……。

(でも、なんでそんな夢を……)

儀式なんて知らない。なのになぜあんな夢を見せられたのか。ただの偶然かもしれない。所詮夢なのだ。意味なんてないはず。

(私は儀式なんて知らない、それでほんとうにあつてる？なんか……違うかも。間違ってるかも)

どうしてそういう風に思うのか。

知らないというよりは、忘れているという感覚に近いからだ。

知らないはずの事なのに思い出そうとすれば思い出せそうな気さえする。

でも、思い出してはいけないと、思う。だから、これ以上は、

「シエルちゃん、どう？お母さん、いそつ？」

「え、あ……」

ミズキの言葉で思考が途切れる。

彼女の言った事を数秒遅れてやっと理解して、周囲をきよろきよろと見渡して。やっぱりいません、と答えた。

「じゃ、次はあつちの方さがしてみよっか！向こうは人が少なめだし、さがしやすいかもね」

そう言われてミズキに手を引かれる。

……思い出してはいけない。忘れていたんだから、このままでいればいい。

嫌なことは、忘れたままでいよう。

63話 旅先の迷子と水の踊り子？

ミズキに手を引かれてやってきた場所は彼女の言う通り人が少なく、たしかにさがしやすいかもしれない。

といつても、いくらさがしやすくて母がいなければ意味がないのだが。

花柄のような全体的に青っぱい感じのワンピース。それが母の服装なわけだ。それなりに目立つし、いたら見逃すことはないと思う。

ミズキがこうして手伝ってくれているのだから早く見つけてしまいたかった。

(青っぱい……青、青)

それを何度も心の中で復唱する。

……儀式のことを考えないように、別の事に集中しようと無意識のうちになんか事をしているのだろうか。

(ほんとにもう、どこ行っちゃったんだろう)

一度はぐれると、なぜこうも見つからないのか。

シエルトも母も携帯電話のような連絡手段を持っていない。それは今時珍しいのだろうか、なんとなく必要がないという風を感じていた。

しかしこんな事になるのなら少し考えた方がいいかもしれない。

溜息を吐き、心の中で母にたいしてぐちゃぐちゃと文句を言っていたが、突然の大きな声にそれが途切れる。

「……待ちなさい！」

その声はミスキだった。ミスキの、どこか焦りのある声。

「待ちなさい」の意味が分からず、しかもミスキはどこかへ走り出してしまうものだからシエルトは少しの間立ち尽くしてしまう。

だが、ここはよく知らない場所。置いて行かれると大変なことになるので、慌ててミスキのあとを追うのだった。

意外にも彼女の足ははやく、ようやく背中が見えたのだがなかなか追いつけそうにない。

「あの、ちょっと、待つてくださいよ……！」

近付いたり、遠ざかっていたりするミスキの背中ではシエルトの制止の声……ではなく、ある人物の姿により立ち止まった。

そのある人物の姿を見た途端、さすがにシエルトも足を止めるしかなかった。

……なぜここにいるのだろうかと思うが、その姿を見て驚いたりはない。

もう彼の姿を見ることに慣れてしまっているのだろうか……。

いつだってシエルトを苛つかせる男が、バートレットがいつもと変わらぬ笑顔でそこに立っていた。

シエルトは心の中で「鬱陶しい」と呟いたあと、イヴェルのことを思い出す。イヴェルの腕を傷付けたあの光景を。

バートレットはイヴェルの事などすっかり忘れてしまっているに違いない。きつともう、事件の犯人の事しか頭にないのだ。絶対に。

そう思うと今すぐにでも殴り飛ばしたくなるような怒りがぐんぐん湧いて来る。

右手の甲に、左手の指の爪が突き立てられる。爪が食い込んであとがついても、またその痛みも気にしない。気にならない。

……すると、レーヴの浜辺で体験した、音が突然消える瞬間。それ

がまた、この場で同じように起こった。

(ん……また、なの?)

当然あの時と同じように、シエルトの周囲にいた人達は皆マネキンの如く動かなくなる。勿論今の彼らに意識なんてものは存在しないだろう。

再び時間が正しく動きだす時をじっと静かに待っているだけ。

その様が不気味に感じるのだが、今はそんな事、言っている場合でも考えている場合でもない。

本当はあの男と絶対に接触などしたくないのに……したくないのだが、こんな風にやられてしまうと無視するわけにはいなくなる。それに今回はあの男に用がある。

イヴェルのこと……絶対に仕返しをして、絶対に大変な目にあわせてやりたかった。

一歩、二歩と足を踏み出し、そしてシエルトはある事に気付く。

「えっ……ミズキさん?」

「シエルちゃん……」

ミズキの名を呼ぶと、そのミズキから返事が返って来る。つまり、ミズキの時間は止められていなかった。

ミズキはこの中でシエルトが動ける事に驚いたのか、あるいは時間が止められたことに驚いたのか。

一瞬、戸惑いの表情を浮かべるが、シエルトを一瞥したあとバートレットの方に向き直り、どこか怒りの感じられる声で言った。

「あなたなんでしょう?ずっとシアに付きまどっていたのは。シアが何をやったのかも全部、分かっているんでしょう!?!」

「僕に話があるのかなーって思って、君の時間だけは止めなかつたけれど。なんだ、そんな事？」

そう言つて男は溜息をつく。

多分、シアとバートレットが接触したのはあの日の夜が初めてではないのだろう。ずっと前から付きまといつて。そして、あの夜に狙われて……。

「シアは私のためにやったのよ。あれは私の両親ではあつたけど、あんなの死んで当然だつて思うもの。死んで当たり前人間を殺しただけじゃない！シアは悪くないわ！」

「ん、それはあのカメラのお姉さんを見逃してくれてこと？僕にお願いなんかしてるわけ？」

「悪い人間を殺しただけ。つまり、あなた達断罪者が普段やつている事となにも変わらない。それでもシアは悪いというのなら、あなただつて……！」

「あのね、処刑人や僕達のように殺してもいいよつていう権利があるなら許されるわけで。なんの権利も持たない、お馬鹿な人間さんが勝手にやつてもいいわけじゃないか」

そう言われるとミズキは、なにか言いたげなのだがその口をつぐんでしまう。

どんな理由であれ罪は許されないだろう。それは分かっている。それでもシエルトは、その男が気に入らない。

（あれは、ただの人殺し。殺してみたいから殺しているだけなくせに、権利なんてあるものか）

そんな権利がこんな男に与えられてたまるものか。

以前、路地裏でのルイスの時も……ずっと笑っていた。面白そうに

していた。それは、絶対に許されないことなのに。

「ね……そんな事よりさ、シエルトちゃん」

「……」

話しかけられても、シエルトはなにも言わない。どうせ「なにか思い出した？」しか言わないのだから。

答える必要だつてない。返事は「なにも知らない」、ただそれだけなのだから。

（私に記憶がないのは思い出したくないからだって、あいつは言ってる）

ミズキが言っていた儀式の事。

それを聞いて、その事について必死に考えないようにしていたのは……なにかを思い出してしまいそうで、そしてそれが嫌だと感じたから。

二回目に見た気持ちの悪い夢。まるで心臓の儀式という言葉がぴつたり合うような光景だった。

……そしてたくさんの子供達が、そこにはいた。誘拐事件で連れ去られたのは、何人もの子供。

すぐく、とてつもなく冷たい感覚が足元から這い上がって来る……。頭の中で勝手に夢の光景が再生されて、「ああ、そんな事もあったね」なんて、言ってしまうような。それはつまり、忘れていたことか思い出されていく瞬間。

まるで昔見た映画のシーンを少しずつ思い出しているような……。

（気持ち悪い……立ってるの、辛い……）

「ねえッ、この子は関係ないじゃない！どうしてこんな事……」

ミズキは、シエルトがバートレットにたいして怖がっているのだと思っただろう。

しかしバートレットはミズキを無視して、シエルトの肩に手で触れる。

触れられたと、理解したその瞬間、

「来ないでよ気持ち悪い!!」

そう叫んでシエルトは思い切りバートレットの体を突き飛ばした。だが路地裏での時のように、押されて倒れるということはない。足でバランスを取って、それから困ったような顔をした。

「きみつてよく人のこと突き飛ばすねえ。そういう趣味なの？乱暴な子だなあ」

「うるさい、あんななんか死んじゃえバカ!!」

思わず出た暴言。

それにはさすがにミズキも、シエルト本人も驚く。

「うーん、シエルトちゃんもしかして、なんか思い出したのかなあ」

「……………」

「で、犯人はどんな人だったの？僕に教えてくれるよね」

シエルトは、何も言わない。

頭の中が混乱して何を言ったらいいのかわからない。夢の光景が少しずつ現実になっていく気がして…………。

「シエルちゃんから離れて!!」

突然ミズキがそう叫び、シエルとバートレットの間で何か小さな破裂した。

何が起こったのか分からずシエルは後退りをして後ろにあった建物の壁に背をつける。そんなシエルの前に、ミズキが守るようにして立った。

破裂した何かは水でできた球体のようなもので、球体は少しずつ形を崩し、地に落ち流れていく。

「そんなに怖がらなくても私が守ってあげるから大丈夫よ、シエルちゃん」

そう言っただけミズキはふざけたようにウインクしてみせた。その仕草に頭の中の混乱が幾許か和らいでくれる。

「こんな子まで巻き込んで、どうかしてるわね。……とにかくシアにはもうなにもしないで。たしかに罪を犯したわ。でも、私は彼女に感謝しているの。お願いだから、そっとしておいて……!!」

「あれ、『私が代わりに死ぬから』とか、そういう事は言わないんだね」

「私が死んだって意味ないのよ。あの子は悲しむし、あなたは信用できない。私を殺して、きっとシアも殺すに違いないわ」

「おー、僕のことそんなに理解してくれてるんだ……大正解だよバートレットはどこか嬉しそうに笑った。

「まあ、カメラのおねえさんが今どこにいるのか聞きたいんだけど……それはまた今度でいいとして!シエルちゃんがついになにか思い出したようだから、いろいろお話しなくちゃだねえ。あー、

「いよいよあの事件の犯人の首を刎ねられるのかー！」

「……いい加減になさいな」

ミズキは手に持っている扇子を慣れた手つきで軽やかに開く。

それが開いたと同時に、地に落ちていた水は荒々しく空中に浮き始めた。水は刺のように、針のように、空に向かって持ちあがっていく。

恐らく扇子はただの扇子ではなくて、彼女のアルムなのだろう。

開かれた扇子は鋭い音を立てて再び閉じられる。その瞬間、浮いた水は大きく爆発を起こし一つの大きな針だったものが、いくつもの小さな針へと姿を変えた。

それらの針は、水中に潜ると聞こえる、あの独特な音を立てて自由に空中を移動し、バートレットの周囲を浮遊する。

まるで透明な宝石が空を飛んでいるようだ。きらきらと輝いて、けれどもそれは人を傷つける程の力があるのだろう。

「さすがにあなたを殺したりはしないわ。けれど、シアに何もしないと約束してくれなきゃ嫌よ？そして図々しいことにもう一つお願いがあるのよ」

「……分かるよー、僕にこの場から立ち去れって言いたいんでしょ？」

「ええ、そう。シアには手を出さず、シエルちゃんにも近付かないで。これ以上関わらないで」

「やだよ、やだ。なんで僕がきみなんかの言うこと聞いたり約束守ったりしなくちゃなんなの？意味分かんないよ」

「あらそう、意味が分からないのね。それは困ったわ」

周囲に浮く宝石達、水で形成されたいくつかの針はその場で破裂を起こし、またいくつかの針はバートレットを目掛けて勢い良く走っていた。

64話 顔の見えない少女

レーヴのちょうど中央に建つ聖神塔。

その塔で働く、天使などと呼ばれている人間達の休憩場。以前、フウカがルイスにルシファーの話をした場所だ。

今ここにはフウカとルイスの二人しかいない。

最初はルイスの一人しかいなかったのだが、たった今フウカがここに来て来た。彼がここにいると知っていて、話があるから、やって来た。

なのにフウカは一言も話せず、ルイスはただ黙って話し出すのを待っていた。

……あの日大泣きしてしまっただけ以来、どうにも顔を合わせづらく感じる。ルイスは何もなかったように普通に接してくれるのだが。

「……………」

「んー、フウちゃんどうしたのかなー？」

ついにルイスは声を掛けるのだが、返事が返ってきたのはそれから数秒遅れてのことだった。

「……………えっと、あの……………」

聞きたい事がある。と、まずはその一言を言いたい。聞きたい事というのは、ルイスが断罪者に狙われているという事にもしかしたら関係があるかもしれないのだ。

関係があるかもしれないから聞かなければならない。

あの時泣いてしまった理由は、彼が狙われるのは……………自分のせいかもしれないから。

だから、まずは聞かなければならない事が、ある。

「……あの、質問してもよろしいでしょうか」

「うん。どうぞ」

「……」

せつかく「どうぞ」と言ってくれたのに、フウカがなにも言えないのでどうしようもない。

心の中で早く何か言わなければと焦るのだが……「それ」を聞くのはとても、怖かった。

フウカの視線は話している相手であるルイスには向けられず、自分の胸の辺りで忙しく動かされる自分の指をただじっと見つめていた。すると突然、ルイスはこちらに手を伸ばし、半ば強引にフウカの腕を掴む。

「フウちゃんフウちゃん。そんなところに立ってないで座ってお話しようよっ」

「……え？あの……あの……」

困ったような声を出して、ルイスの隣の席に座らせられる。座った後の表情も困ったようなものだった。

「僕別に、フウちゃんが泣いちゃった時のことなんか気にしてないんだけどなあ」

「そ、そんなことを聞きたいんじゃないやありません……」

「あれ？違うのか」

じゃあ何だろう、と本気で考え出すルイス。

「あの……そんなに考えなくてもいいです。こ、今度こそちゃんと言いますからっ……」

「うん。じゃあ、ちゃんと聞いてるね」

すう、と少し大きく息を吸って、吐いて。
今度こそ躊躇うことなくルイスの目を見て話す。

「あなた……は、その、幼い頃、なのですけど……八重霞へ行ったことは、あるでしょうか」

言うてから、どこか言葉がおかしくなかったかと自分の言ったことを何度も頭の中でリピートしてしまう。

その問いに対するルイスの答えがなかなか返ってこないものだから、尚更。

まるで長い距離を走ってきた後のように心臓が激しく鼓動するし嫌な汗をかくし……指先はじっとしていられず、無意識のうちにもじもじと動いている。

視線もふたたびルイスから離れ今度は自分の足元を見つめていた。

「うん……あるよ？」

「……！」

ようやくやってきた返事に指先はびくりとはねて動きを止める。

しかしその返事の内容は……フウカの鼓動を更に激しくするものだったのだ。

それからルイスは右手を静かにフウカの頭の上に置き、撫でて、

「そっかそっか、僕のこと思い出してくれたんだねえ」

と、そう言った。

その言葉に……溢れそうになる涙をどうにかおさえて、詰まりそうな声を言葉にする。

「ど……して、今まで、黙っていたのですか……」

けれども声はひどく震えていて涙を流していなくても泣いていると
いうことが分かった。

「私の、せいじゃないですか……私のせいでしょう。あの日追わ
れて、足なんか怪我をして……追われていた理由も……！言うてく
れていたなら、もっと早くあなたを守れたかも……」

「ごめんね。せつかくフウちゃんはあんな事忘れて、ここで新し
い生活をしているのに、言ったらまた辛いこと思い出しちゃうかな
って」

「そんな……理由なんか……」

「僕にとつてはフウちゃんが楽しい生活を送れているかどうか、
それが重要だったんだよ……だからどうにも言い出せなくってね
え。フウちゃんから話してくれるの、待ってたんだ」

「……お父さん。これ、桜？」
「そう、桜だよ」

空を薄桃色の花で覆い隠す大きな桜の樹を、幼き日のルイスが指差した。

勿論見たことがないわけではない。ただ今まで見てきたものとは違い、目の前のそれはとても華やかで美しく、幻想的で壮大。

あまりに堂々としているものだから一瞬別のものに見えたのだ。

桜の木々達は広い道の両脇に、見えないほどずっと向こう側まで並んでいた。

上を見上げてみると、空は絶対に見せないとも言っているかのようにな花がひしめき合っている。それがどこまでも続いていてまるでトンネルのようだった。

どうにか花と花の隙間から見える空の色は、どこかうつすらと曇っている。

この季節のこんな空は花曇りや養花天などと呼ぶのだと父から教わった。綺麗な名前だと思う。

「ねえお父さん、もっと向こうの方まで行っていいかなあ」

「ああいいよ。ただお父さんはちょっと疲れてしまったからここで休んでいるけれど……迷子にならないようにな」

「うん、ならないようにする」
ルイスはたしかにそう言ったのに、向こうの方まで小走りで行ってから十分ほど。

すでに父の姿がどこにあるのか、自分はどちらの方から来たのか分からなくなってしまった。

どこを見てもただ薄桃色の景色が続くから自分がどのあたりにいるかなんて分からない。

おろおろ、うろうつると同じ所を何度も行ったり来たりして、どうし

たものかと困り果て俯くと、地面も桃色の花びらに覆われてますますここがどこだか分からなくなる。

けれどこの場に立ち止まっていても見つかるはずはない。

必ずどこかにいることは間違いないのだからと、ルイスは俯いた顔をぱつとあげた。

誰か周りの大人に迷子になってしまったと言えばよかったのかも知れない。だが幼い彼にそんな勇気はなかった。

(いない……)

きよろきよろと見渡しても近くに自分の父親らしき姿は見当たらない。あの時、父の側を離れなければよかった、一緒にいればよかった……そんな後悔をする。

その時、桜の木の根元に、さっきの自分と同じように俯く一人の少女が立っていることに気付く。

実際は彼女の持つ鮮やかな紅色の傘に隠れて顔なんて見えないのだがけれど、その後ろ姿はとても寂しそうで、なんとなく悲しいのかな、と思った。

大人に声を掛ける勇気はないがその少女になら話しかけられる気がした。自分と年齢が近そうな子だったからかもしれない。

「えつと……こんにちは！」

少女の前に立ち、ルイスはそんな挨拶をする。幼き少女はなぜか慌てて傘で顔を隠してしまった。

多分、年齢は自分と同じくらいか少し下くらいだと思う。少女の着ている変わった服だなぁと感じるそれはたしか着物というもので、これも父に教えてもらった。

傘と色が似ているが着物の方は傘と比べて薄紅色という感じだ。

「……………こん………にちは」

すごく小さな声で少女は返事をする。いきなりだから驚いていた、ということもあるのだろうが、それにしただって何だか怯えているような気がした。

それでも挨拶を返してくれたことが嬉しくて、迷子という不安はほんの少し和らいだ。

「あのねぼく、今日お父さんと一緒にここに旅行に来たんだ。でもはぐれちゃって………緑色の服を来た人、知ってる？」

「……………分からない」

分からないというのは当然だ。緑の服を来た男性などいくらでも歩いている。誰の事を言っているのかなんて分からない。

しかし幼いルイスにとって、今は緑の服といったら父親しかいなかったのだ。

……時々見える傘の向こうの少女の顔。それは後ろ姿と同じでやっぱり悲しそうで、どこか俯いていた。

「……………どうしたの？なにか困ってるの？」

思い切ってそう聞いてみる。

少女はすこし間をあけてから返事をした。

「かがみ……………落としたの」

「鏡？どんなのだろう、ぼくも探してあげるよ！」

少女は戸惑っている様子だが小さな声でたしかに、うん、と言った。鏡は柄のついた手鏡という感じで、少女の立っていた場所からだいぶ離れたところに落ちていた。

今いる場所と同じ色、桜色の綺麗な手鏡で、柄の部分には細かい金箔が散りばめられている。

「ねえ、もしかしてこれじゃない？」

少し離れたところで探していた少女に、やや大きめの声でそう言った。

ルイスの手にある手鏡を見て少女は駆け足でこちらにやって来る。この時もやっぱり傘で顔を隠していた。

「……ありがとう」

この返事でこれが少女の物だということが分かる。

手渡す時、偶然裏側になっていた鏡の部分に小さく「フウカ」と名前が書かれているのを見る。

少女は小さくぺこりとお辞儀をすると、どこかへ小走りで行ってしまった。

（フウカちゃんていう子なんだ……）

立ち去る時に一瞬見えた少女の顔。ほんとうにちゃんと見えたのは一瞬だけだったのだが、可愛らしい子だなあ、と感じた。

……フウカと初めて出会ったのは、旅行先の八重霞で迷子になった、この日だった。

65話 顔の見えない少女？

「……………それでね、すごくかわいい子だったんだよ！」

手鏡を落とした少女との出会いを、ルイスはようやく見つけた父親に嬉々として話す。

…………… 勿論迷子になってしまった事は叱られた。

「もしかして、その女の子に気を取られて迷子になったのか？」

「えー、ちがうよ。迷子になってからその子に会ったんだもん」

二人は今、先程いた「桜のトンネル」の近くにある喫茶店にいた。小さめの白い円形のテーブルとイスが外にいくつも並びオープンカフェになっている。

屋内の方でもよかったのだが、ここだと桜のトンネルを眺めることができるため、ルイスにとって初めてのオープンカフェで休憩することになった。

桜模様の皿の上に乗せられた抹茶色、抹茶味のアイス。そのアイスを囲むように真っ白な白玉がいくつもちょこんと座っている。そんな白玉が可愛くてそれは最後に食べようと決めていた。よこれ一つついていないスプーンをアイスにサクつとさす。

「…………… お茶の味っておいしいのかなあ」

「ああ、食べてみれば分かるさ」

さしたスプーンでアイスを少なめにすくい、初めて食べる抹茶色のそれをどんな味がするのかと楽しそうに口に入れた。

入れた途端、ルイスの表情はたちまちまずそうなものになる。

「アイスなのに苦いよこれ……」

「そうだろう、苦いだろう。抹茶の味だよ」

そう言っつて、ルイスの苦々しそうな顔に思わず笑ってしまっつ。

父は自分のバニラ味のアイスと抹茶のアイスを取りかえてあげるのがだつた。こうなる事は分かっていたからわざわざバニラ味を頼んでいたのかもしれない。

それから真つ白なバニラアイスを食べ終わり、ルイスは桜のトンネルの方を見て言つた。

「ねえ、明日もここにいるんだよね？」

「そうだよ。今日から一週間いるんだよ」

「明日もあの桜がいつぱいの場所に行つてもいい？」

「ああいいよ。じゃあ、明日も行こうか」

……ふたたびあの少女に会いたくて、またあの場所に行けば会える
と、そう思つた。

次の日。ルイスは昨日決めた通り、桜のトンネルへと来ていた。

しかし父の姿は見えない。ルイスが一人でここへとやって来た。また迷子になったわけではない。

朝、いつもより早起きをして着替え、父と一緒に朝食を取り……部屋へ戻るとそこで父はまた寝てしまった。ルイスが早く起きたので父も早い時間に起床する事になった、というのもあるのだろうか……。

どうも昨日歩き回ったせいで疲れてしまったらしい。まだ眠気が取れないようで、もう少し寝かせてくれと言い布団に潜り込んでしまった。

本当ならルイスも父同様慣れない土地を歩き続け疲れているところだろう。

しかし昨日出会った少女にもう一度会えるかもしれないという楽しみで、疲労など不思議と感じなかった。

何度も父を起こしたのだが、もう少し寝かせてくれと繰り返すだけ。ついにしびれを切らしたルイスは黙って部屋を、そして自分達が泊っているホテルを出て……ここへやって来てしまった。

実は、ホテルと桜のトンネルの場所はかなり近いのである。ベランダに出ればそれはすぐそばにある。なのになかなか出掛けられず、尚更我慢できなかった。

ここへの道のりは単純で帰るときも道に迷うことはないはず。

慣れない土地をたった一人で歩くのに若干の不安はあるものの、昨日の少女に会いたいという気持ちの方が勝っていた。

(でも、いないかもしれないよね……)

またここで会おうと約束したわけでもない。必ずここにいるとは限らない。

それどころか向こうはこっちのことなんてたいして気にしていないかもしれないし、忘れてしまっているかもしれない。

しかし、いるかもしれない。

会えなかったら会えなかったでそれは仕方がないと思う。
でも、もしかしたら。

（もしかしたら……こんどはちゃんとお話できるかな。してみた
いなあ……）

きよろきよろと何度か見渡して数歩前に進んでは、また辺りを見回
す。

（いないかなあ。きのうはどこら辺で会ったんだっけ）

桜のトンネルは、どこまでも同じ景色をコピーしたかのように続い
ている。

だからどこの辺りで会ったかなんてそんなもの考えても分からない。
するとどこからか子供達の大声……まるで怒鳴っているような、そ
んな声が耳に届いて来た。

（な……なんだろう？）

耳に届く子供達の言葉は「気持ち悪い」だとか「死ね」だとかで耳
を塞ぎたくなるような、非常に聞きたくないものだった。

とりあえず声の届かない場所まで移動しようかと思ひ、反対の方に
足を動かそうとした時……。

「やめて」という、叫ぶような悲痛な少女の声が響いた。
そしてその声は、たったの一度だけしか聞こえなかったのだが……
たしかに「彼女」のものだと確信する。

声とは逆方向へ向いていた足は、ふたたび声のする方へと向けられ
た。

走って、「彼女」のいるであろう場所へとどんどん近付いていく。
ひどい罵声は大声だったので、どこから聞こえているのかすぐに分

かった。

そこには見知らぬ二人の姿と、昨日の着物の少女がいた。自分と同じくらいか、あるいは少し年上かもしれない男の子と女の子の二人。

その二人に次から次へと途切れることのない罵声を浴びせられる……

少女。そう、フウカ。

昨日と同じ傘をさして、暴言から身をまもるかのようにはやがみ込んで。そして、彼女の足元には……。

なにか光るとても細かいものがいくつも散らばっている。よく見るとそれはガラスのようなもの。

鏡の破片、だった。

なぜガラスというだけでそれがもとは鏡の一部であったことが分かるのかというと、二人のうちの片方、女の子の方が割れた鏡を持っているからである。

しかもそれは……昨日フウカが落とした鏡だったのだ。

やめたと叫んだあの悲痛な声は鏡が割られたときのものだったのだろうか……。

その目の前の光景に、思わずルイスは後ずさる。

割れた鏡を持った女の子はじろりとルイスを睨みつけ、何か用？と明らかに不機嫌そうな様子で言った。

そんな風に睨まれたことは今まで一度もなく、恐ろしさのあまり頭が真っ白になりそうになる。

けれど、そんな自分よりも更に恐ろしい思いをしているのは……フウカなのだ。

そしていまこの二人を追い払うことができるのは自分だけ。自分だけ……。

「……あ、あっち行けっ!!」

そう思っただうにか放った言葉。まさかこんな大きな声が出るとは思わなくて、自分ですこし驚いてしまう。さすがの二人もいきなりそんなことを言われるとは思っていなかったらしく若干たじろいだ。

だがすぐにまたルイスを鋭い目つきで睨みつけると、鏡を地面に叩きつけ二人はその場を去って行ってしまった。

叩きつけられたことで割れていた鏡は更に粉々に粉碎。もう完全に使い物にはならない状態である。柄の部分もすこしひびが入ってしまっていて、せつかくの金箔が台無しとなっている。

「……………あ……………」

さつきとは真逆の、力の無い声をルイスが出す。

二人を追い払うことに成功してもフウカの心が癒されるはずがない。もうすこし早く来ていたなら……………。

彼女は相変わらず傘で顔を隠している。けれど昨日、後ろ姿を見ただけで悲しそうだと分かったように。今もまた、顔は見えないが確実に……………泣いていた。

フウカはそっと叩きつけられた鏡を手に取り、ただ無言でそれを見つめたあと、くるりと向きを変えて立ち去ろうとする。

きっと彼女は呆然と鏡を見ていたに違いない。それを想像するとつつもなく痛々しい気持ちに襲われた。

とぼとぼどこかへ行ってしまおうフウカ。

このまま放っておいてはいけないような気がした。

慌てて追いかけようとするルイスだったが、ある人物がフウカの名前を呼んだことでその足は止められた。

フウカの名前を呼んだのは、ルイスと比べるとだいぶ年上の少年。

少年の声に反応しフウカは少し振り返ったような、立ち止まったよ

うな。そんな気がしたが結局戻ってくることはなくどこかへ行ってしまう。

その様子に少年は困ったような悲しいような顔をして深く溜息をついた。

「ふう……えっと、君だよな？フウカを助けてくれたのは」

「……えっ？」

少年に突然話しかけられて驚くが、ルイスが返事をする前に「ありがとう」とお礼を言われた。

そして地面に散らばった鏡の細かな破片達を拾い始めるのだった……。

「……あの。ぼくも拾うの手伝います」

「ありがとう、優しいね。でも破片は危ないから触っちゃダメだよ」

「……えっと、フウカちゃんのこと知ってるんですか？」

「ああ、うん。というか俺はフウカの兄なんだよ」

話しながらも破片を集める手は止めない、少女の……フウカの兄。

「とはいっても血縁関係は無いんだけどね」

「……？ケツエン……」

ルイスにとってはすこし難しい言葉。

どこかで聞いたことがあるような気はするのだが意味なんて分からない。その様子にフウカの兄は笑って言いなおしてくれた。

「えっとね、血が繋がっていないって事だよ」

「ああ……」

その説明でなんとなく分かったような気がする。
つまり義理の兄だ。

「いつもは俺があの子へのいじめを止めていたんだけど……フウ
カがどこにいるのか分からなくなっちゃって」

「……こんな事するなんてひどいです」

「フウカをいじめてるのは、彼女の実の姉と兄なんだよ」

それを聞いてルイスはなにも言えなくなってしまう。

血の繋がった自分の妹を、あんなふうにいじめることができるなん
て……。本気で気持ち悪いと思っっているのだろうか？本当に死ねば
いいと思っっているのか？

理解できなくてわけが分からなくなる。

あれが……。彼女の本当の兄と姉……。

66話 顔の見えない少女？

「どうして……そんな事……」

自分にきょうだいはいないけれど、きょうだいというのは家族なのだから誰よりも仲がいいものだと思っていた。

自分の父親が自分をいじめるだなんて想像できない。

「フウカはいろんなことが得意なんだよ。勉強とかね。そうすると、親はフウカをよく褒めるようになる。ほかのきょうだい達はそれを快く思わないんだ」

「そんな理由で……」

「俺も最初は信じられなかったけどね。あの家に来た時にはもうそうなっていたよ」

鏡の破片を拾い終わり、フウカの兄は持っていたハンカチにそれを包んだ。

まだ地面にはいくつかの破片が残っているがこんな細かいものまでは拾っていられないだろう。

細かな破片が桜の花びらに紛れて輝き、幻想的な光景を生み出していた。

「……今日はフウカのいじめを止めてくれてありがとう。俺はもう行くよ」

そう言うと彼は軽く手を振り立ち去った。

あのフウカという少女はいじめられていた。自分のきょうだい達に。

残された鏡の破片を見ると胸が痛む。もしかしたらあの鏡は、大切なものだったのかも。
昨日、やっと鏡が見つかった時の彼女の姿を思い出して、ルイスは残りの破片を集め始めた。

八重霞に旅行へ来て三日になる。

昨日は無断で外出してしまった事を怒られたので、今回は許可を得てひとりで外をぶらぶらと歩いていた。なんとなく土地に慣れてきた感じがある。といっても油断をすれば迷子になりそうだが……。
……集めた鏡の破片。フウカの兄の真似をしてハンカチに包んでみた。こうすれば怪我をしない。

フウカはいま何をしているのだろうか。またあの場所にいるのだろうか……。

もしかしたら、またいじめられているかもしれない。だがきっと、あのお兄さんがいるのだから大丈夫だろう。

そんな事を考えながら適当に道を歩いていると、気付けばもう空は夕日の輝きに包まれていた。結局ただなにもせず、ただ歩いているだけだった。

昨日のあの光景を思い出すとなにもやるきがなくなる。

とはいえもうそろそろ帰らなければならぬ。夕方になったらちゃんと戻って来ると、そう約束しているのだ。

……すると、何か頭の後ろの辺りに軽く当たった。あまりに小さな感触だったので最初は気のせいだと思ったのだが、やはり再びなにかが当たる。

「……？」

気になってふと後ろを振り返ると、すこし遠くの方に立つ……昨日、フウカをいじめていた二人のうちの一人。
ルイスを鋭い目で睨んできたあの女の子だった。

フウカの、姉だ。

彼女の手にはとても小さな小石がいくつか乗せられている。おそらくこの女の子が石を投げてきていたのだろう。

いつから後ろにいたのかは分からないが、何故こんなことをするのは理解できる。

自分によってフウカのいじめの邪魔をされたのだから腹を立てて当然なのだ。

だから、これは自分への仕返し。

……けれど、昨日の様子とは変わって、なぜだか弱々しい雰囲気だった。

鏡を割るくらいのはするのにも今回は怪我なんてまったくしないような、それどころか気付かないかもしれないほど小さな小石を投げるだけ。

いくら年下といってもこちらは男だから警戒しているのだろうか。

それだけでもないような気がするが……。

女の子はもう何もせず、ただじっと立っていた。どうしたらいいのかわからない、という感じだった。

しかしこちらを睨みつけると持っていた小石を全部、いつせいに投げてきた。

小石といってもその小さな石の雨はさすがに痛い。

「あ、あんたが邪魔するからいけないのよ！あんな奴がばったりしてばかじゃないの!？」

突然大声を放たれて、ルイスはなににも言い返せなくなってしまった。それでもフウカを「あんな奴」と言われたことに納得がいかず、何か言わなければと焦る。

だが、ルイスが言葉を発する前に「やめて」という少女の聲が飛び込んできた。フウカの姉の声では、ない。

ひらいた紅色の傘がフウカの姉を叩く。その傘で姉もルイスもそれが誰だか分かった。

姉はもう、完全に慌てた様子になりここから走り去って行く。

ここに残ったのはルイスと……紅い傘を持ったフウカ。まるで昨日のルイスのように助けにやってきてくれた。

やっぱり顔は隠したままで、しかし小さな声で「大丈夫？」と声を掛けてくれる。

「……うん、大丈夫だよ！ありがとう。フウカちゃん」

「……」

自分をいつもいじめめる姉をあんなふうに追い払った。恐ろしい存在に反抗してみせた。

それは彼女にとってとても勇気のいることだったはず。

なのに助けてくれた……それがなんだか、ルイスにとってすごく嬉しかった。

「……なんで……私のなまえ」

なぜ名前を知っているのか。そう聞かれて答えようとしたが、鏡の

ことを口に出してもいいものかと悩んでしまう。
しかしフウカは「そっか」と返事をした。きっと、鏡の名前を見た
のだろうと分かったのかもしれない。

「……………昨日、は……………ありがとう」

「あ……………ううん、いいんだよ別に。あんなひどいことするなんて、
ぼくだってゆるせなかったし」

「……………アスカ兄さん」

突然出された知らない名前に一瞬戸惑うが、兄さんということであ
のフウカの兄の名前であると気付く。

「兄さんと……………話したの？」

「え？……………ああ、うん。すこしだけね。やさしいお兄さんだよね」

「……………そう」

フウカはどこか暗い声を出す。

それからほんの少しの間沈黙が続いたが、フウカはもう一度礼を言
うと立ち去って行った。

その時一瞬だけ見えた彼女の表情は笑っていたように思う。だから
ルイスも思わず口元がゆるんでしまうのだった。

「……ルイス、今日はずいぶんと機嫌がいいじゃないか」
「うん……えへへ。ちよっとね」

今日は父とまだ行っていない場所を歩くことになった。

ここへきて四日目となり、じよじよに一週間が経とうとしている。
そんな事も忘れ昨日のフウカの笑顔が頭から離れずルイスはずっと
機嫌の良いままだった。

せめてもう一度彼女に会いたいと思う。もっとフウカの笑顔を見て
みたいと、そう思うのだ。

「……あ」

すると、どこかで見た事のある顔……フウカの兄とばかり出会う
のだった。

向こうもこちらに気付いて手を振ってくれた。

「おや。知り合いかい？」

「うん、そうだよ」

「なら会ってきなさい。お父さんはむこうに行っているから」

そう言って父は姿を消す。といっても、ルイスの姿が見えるところ
にいるのだろうか。

「あの……こんにちは」
「こんにちは。フウカから聞いたよ、昨日……石を投げられたっ
て」

申し訳なさそうに頭をさげる兄。慌ててルイスは、大丈夫ですから、と言った。

「それに、フウカちゃんが助けてくれたので」

「そうか……驚いたよ。フウカがそんな事するなんて思わなかったから……」

たしかに、あの様子を見るといつも抵抗できずに終わっている感じがする。

気の弱そうな彼女があんなふうに助けてくれるなんて思ってもみなかった。きつと、そうとう怖かったに違いない。

それから、ずっと疑問に思っていたことを彼にたずねてみることにした。

「えつと、フウカちゃんってどうして……ああやって顔を隠しているんでしょう」

「うん……たぶん、だけど。よくいじめられている時、気持ち悪いって言われたりしているから、かな」

そういえば初めて彼女がいじめられている現場に遭遇した時、気持ち悪いと罵声を浴びせられていた気がする。

どうやらそれから顔を見られることを嫌うようになってしまったらしい。最近では両親にさえ頑なに顔を見せようとしないのだとか。あんなに笑顔の素敵な可愛らしい子なのに、と思った。

「でも、自分の顔をきらうのに鏡はもってましたよね……」

「どこか自分の顔がおかしくないか、ずっと見ているんだ。一時期的になつていたこともあったよ。いつまでも、部屋にこもって」

フウカへのいじめが思っていたよりも深刻であることを知る。

いくらフウカへの嫉妬とはいえ、まさかここまで追い詰めていくなんて……。信じられなかった。

その日は一度ホテルへ戻ったが、フウカのことを気にかかりひとりで桜のトンネルへと向かった。

きつとまたあそこにいる。なんとなく、そう思って……。けれどそこにいたのはフウカではなく彼女を傷付けるきょうだい達だった。

そんなきょうだい達の話をつい盗み聞きしてしまうのだが、その時は聞かなければよかったと、後悔することになる。

「鏡を割ったのは……。やりすぎたっただかなって……」

「だけどやらなかったら……。私達が恐ろしい目にあうかもしれないじゃない」

ぼそぼそと二人の会話が聞こえる。けれど姉の言った「恐ろしい目」が気になってしまった。

だから……。聞いてはいけないことを聞いてしまうのだった。

「どうして僕達にこんなことやらせるのかなあ……。たしかにフウカをちよつとは気に入らないと思ったりしたけど……」

「アスカお兄ちゃんが家に来なかったら、こんなことにならずにすんだのに……」

思わずどきりとする。いったい、なんの話をしているのだ、と。

「いつまで僕たちはあんなこと続けられいいんだろう？」

「……お兄ちゃんがやめてもいいよって、言うまででしょ」

「それっていつ？」

「……そんなの知らないわよ。でも変なことしてるよね。お兄ちゃんが私達にフウ力をいじめるって言うっておきながら、お兄ちゃんもフウ力を助けて……」

「あいつに脅されて仕方なくこんな事やってるのに……もうやだよ……」

あの優しい兄が、きょうだい達にフウ力をいじめるよう脅して。なのに兄はフウ力を助けて？

……わけが分からなかった。

動けなくなっただけなら、その場に呆然と立ち尽くしていたが、もうきょうだい達の会話は耳に入っただけでなかった。

67話 顔の見えない少女？

つい数分前まで彼は「優しい兄」だった。
それなのに……。

(あの子たちがきつと……嘘を言って……)

けれどあの二人はルイスがこうして盗み聞きしていることなど知らない。

だから、わざわざ二人で嘘をつく必要などない。それどころかあの場にはあの二人しかいないからこそ、真実が語られているのではないだろうか……。

フウカの実のきょうだいである彼女達にフウカをいじめるよう脅して、それなのにフウカを助ける。

一体なんの目的があつて……。

(そういえば、あの時)

フウカに助けてもらったときのこと。

フウカは兄の名前を口に出した。けれどその時、彼女の声色が妙に暗かった。いつも自分を助けてくれる兄の話なのに、だ。

嬉しそうな感じが一切しなかった。

もしかしたら、彼女は知っているのだろうか。兄のほんとうのことを……。

二人の話している事が真実かどうか知りたいのなら、いま目の前にいるその二人に聞けばいい。

そう、聞けばいいのだ。

真実を知るのはとても恐ろしいことだけれど……。

「……っ」

足は竦み、もし本当だったらと思うと怖くて声も出せない。恐ろしいことを口にする二人から離れたくて思わず走り、逃げ出してしまふ。

その時大きな足音を立ててしまい二人には気付かれただろうが、そんな事はもうどうでもいいというように構わず走り続けた。どこに向かつて逃げているのかは分からない。

……聞かなければよかったと思う。聞いてしまったことをとにかく後悔する。

走り続け、どれほど走ったかも分からない。けれど人とぶつかってしまい、そこでようやくルイスの足は止められた。

(……………どうしよう……………)

どうすることもできないのだが、あんなことを聞いてしまって自分はどうすればいいのだろうと考えていた。

どこからか焦げたような臭いがする。ずっと向こうのほうで人が騒いでいるようだが、火事でもあったのだろうか。だが気にもしない。

足をとぼとぼと動かし空を見上げてみる。重くどんよりと曇っていて、これでは花曇りとは呼べないだろう。

いまにも雨が降りそうな空の下を歩きながら頭のなかで二人の会話が何度も再生される。……信じたくはない。

気がつけばまったく人気の無い場所を歩いていた。

ひとりになりたくて無意識のうちに混む場所を避けていたのかも知れない。

いつの間にか雨が降り始め、肩を冷たく濡らす。それでもルイスはふらふらと歩き続けていた。

……雨音とは別の、水が流れる音が聞こえる。近くに川でもあるのかもしれない。

「……ん」

なにか、どこからか妙な臭いが漂ってくる。さっきの焦げた臭いはまったく違う……吐き気を催すようなものだ。

生々しいような肉のような。とにかく嫌な感じで気分が悪くなる。すると建物の向こう側から 赤い、ような色の液体が広がるようにして地面を流れていた。それは雨によってつくられた周囲の水溜りも同じ色に染めている。

不気味な光景で……それはすぐに人の体を流れる赤い液体だと分かった。

だって、臭う。そこから吐き気を感じる様な臭いが漂っている。血のにおいなんて嗅いだことはないが、そうだと思った。

そこへ近付いてしまわないよう一度足を止める。

やめたほうがいいと、最初は思った。けれど好奇心なのかなんなのか。それを、見たいと思うてしまう。

ちようど隠れて見えない建物の向こう側はどんなことになっているのだろうと気になり始める。少しだけなら見ても大丈夫だろう、と。一歩ずつ足を前へと進める。その間に雨はさらに強くなった。

そして赤い水溜りが足元にきたところで、建物の向こう側を覗きこみ、

「……」

それは一瞬、息を止めてしまう程の光景だった。
見てはいけないものなのに目を逸らすことを忘れてしまうくらいに
恐ろしくて、ぐちゃぐちゃと……。
赤色の液体の主は体の一部がただの肉塊になりながらも微動だにせ
ず静かに雨に打たれて横たわっていた。
おそらく人間の女性だったのだろうが、もう、だったものとかい
えないものだ。
時々肉塊のあたりから小さな噴水のように赤いものがふきだしてい
る。

……けれど、ほんとうに恐ろしいのはその死体ではなかったのかも
しれない。
もっと恐ろしいものが死体の上にあった。……あんなに優しかった
はずの彼が、どうしてここまで。

「……お……お兄さ……」

兄が、フウカの兄が死体の上に跨っていた。めちゃくちゃになった
肉の塊の部分を両手で引つ掻きながら……。
フウカを救ってくれる存在だと思っていたのに、実はフウカがいじ
められるように仕向けさせていて、それで。
これは、何なのだろうか。

「やあ……」

いつもより力の無い声で、さっき出会った時と同じように手を振っ
た。その指先からは大粒の赤い雫が零れ落ちる。
もう気持ちが悪いか吐き気がするのかなんなのか分からなかった。
体中が冷たいような、あまりにも信じられず夢を見ているようでふ
わふわするような。

逃げたら追いかけられるかもしれないと、そう考えたらもう足が動かない。

「ねえ、心臓ってどの辺りにあるんだろう……ああ、君にはまだ難しくて分からないよね、そんなこと」

まるで見られても何てことのないように、ルイスに話しかけ手を動かして続ける。

逃げたら追いかけられるだろうか。しかし逃げなかつたらどうなってしまうのだろうか。……そんな事を考え、とにかく引き返そうとするのだが。

突然何かを引きちぎるような嫌な音がして、その音を聞いたルイスの体はびくりと跳ね上がり足が纏れそのまま水溜りに倒れてしまう。わけの分からなくなつた頭の中。起き上がる事さえままならない。

……あれは何だろうか。兄の手には真つ赤な鬼灯が握られていた。彼はおもちゃを買い与えられた子供のように満足げに笑っている。きつとその握られているものは彼の欲しかったものなのだろうか。

「わあ……思ったよりやわらかいな。それにすごくあつたかい……あ、君もさわってみたい？」

そう言ってこちらに向けて差し出されたそれはあまりに恐ろしくて、胃からなにかが込み上げてくるような感覚に襲われた。

それをぐつとこらえても今度は涙があふれ出して、誰かに助けを求めようと叫ぶ。

「これでやっとフウカと二人だけになれるよ。あの家族だとかいうあいつらに邪魔されなくてすむ」

「……フウカちゃん……ん、どうして、あの子がいじめられてたの、

助けてたのに……っ」

「んー……あの家に引き取られてからさあ、フウカって可愛いなあって思い始めたんだ。血が繋がってないんだからいいよね」

「……なに、を」

「でもフウカは俺のこと、あんまり興味がないみたいで。たとえばさ、辛い思いをしている時に助けてくれる存在って素敵だと思わないかい？」

兄は手に持つ赤い塊を大事そうに眺めながら、淡々と話す。
ルイスは言葉を発せずに呆然と彼の話を聞くしかなかった。

「俺だって本当の家族がいなくなった時、一緒に暮らそうと言われたあの時はすごく嬉しくて……まあ、今はもうただ邪魔な存在でしかないんだけど」

「……」

「もしフウカが誰かにいじめられて、それを俺が助けたりしたら……きつとフウカは自分を好きになってくれるはずなんだ」

「……ひどい……よ……そんな事……なんで、するの……」

きょうだい達の言っていたことは全て真実だった。その理由が怖くて、信じたくもないし理解なんてできない。

フウカが傷付いて終わるだけだというのに何故それが分からないのか。

「俺……不思議な女の子に出会ってさ。その子に、心臓を渡せば邪魔な奴を皆殺してくれるって言われたんだ。邪魔な人間とはいえ家族を何人も殺すより、この顔も知らない女一人を殺す方がいいからな。その方法を選んだんだ」

「……なに……それ……」

顔も知らない女というのは横たわるその死体のことだろう。この頭のおかしい人間に、理解不能な理由で殺された……。

ほんとうに目の前にいる彼はあのフウカの兄なのだろうかと疑うことしかできない。

もしかしたら彼と初めて出会った時、本気でフウカを心配する自分を、彼は心の中で邪魔だと思っていたのだろうか。

兄は真っ赤なそれを優しく手のひらで包み、ゆっくりと立ち上がった。

「……さてと。はやくこれ、あの女の子に渡してこなきゃ。ああ……楽しみだなあ。ようやくフウカと二人だけでいられるんだ……」

すると、突然彼の隣で黒く細い光がくるくと空中を彷徨った。その光はやがて人の形を形成し……するりと、真っ白な手が兄の持つ心臓へと伸びた。

兄はその様子に驚き目を見開いたのだが、白くか細い手はそんな事には気にせず赤い塊を指で撫でると……光は完全に人間の姿へと変化した。

……それは小柄で色白な少女。

少女の小さな頭には少し大きく感じる黒いシルクハットの帽子には垂れ耳気味の兎の耳がついていて、可愛らしいはずなのにこの場所ではあまりにも不気味に見えてしまう。

レースをあしらった真っ白なエプロンドレスのスカートの裾をふわりと揺らし、

「おやおや、まさかほんとうにやってくれるなんて思わなかった。もう一人の写真機を持った子は結局自分で殺しちゃったようだからねえ、あなたにも期待していなかったんだけれど……」

そう言ってまた、裾を揺らす。

突然現れた少女に、ルイスはもう考えることすらできなくなり、兄は最初こそ驚いていたものの再び子供のよような笑みを取り戻す。

「不思議な女の子」というのは……兄に恐ろしい話を持ち掛けてきたのは、この少女なのだろうか。

68話 顔の見えない少女？

少女は楽しげにフウカの兄が手に持ったそれを眺める。
兄は少女に問い掛けた。

「ねえ、ほんとうに邪魔な俺の家族、殺してくれるんだよね？」
「ええもちろん……でもちよつと時間をいただけける？」

その言葉に、兄は一瞬少女を睨んだ。兄は今すぐにもフウカと二人だけで生きていきたいのだろう。それをフウカが受け入れるはずもないだろうが。

少女の白く細い指があかい鬼灯のような心臓を撫でる。
睨まれたことは気付いているようだが、怯む様子もなくまったく気にしていないようだった。

「まあ、私がきちんと説明しなかったのが悪いからね。不満なのはわかるけど理解してほしいわ……この心臓の持ち主はどうやら若くないようね」

倒れている……もう動くことない女性を一瞥する。顔が血に染まっているとはいえ年齢の判断はできるようだ。
それからやや乱暴に、兄の手から心臓を取り上げる。兄の表情は少しずつ少女に対する不信感を表していった。
取りあげた心臓を、目を細めて見つめる。

「こんな使いこまれた心臓たったのひとつで成功するかどうか……
……ためしてからでないと。おかしなことになられても困るもの。それでもし成功したなら……約束を果たすわ」

「……もし、成功しなかったら」

「そうねえ。まあ、私のことは忘れてちょうだいな。約束も無かったことに、ね！」

当然、兄は「ふざけるな」と大声を出し怒りを露にした。約束したから、だから人を殺したのに、なのに罪を犯した理由が無かったことにされるなんて、と。

その様に少女は呆れたような顔をしてため息を吐く。

「なにを言ってるの？そんな簡単に他人を信じて人を殺して、私からしてみたらただの馬鹿なだけだ」

兄は少女の手から心臓を奪い返そうとするも、少女は地から足を離し雨の中を自由自在に飛びまわった。

必死に兄は手を伸ばすが結局掴むのは冷たい雨で、それをくすくすと陰湿な声で笑われる。

「まったくしつこいね。成功したらあなたの願いが叶うんだからいいじゃない。失敗しても、私の研究に貢献してくれたことになるんだから……得するのは私だけだけども！」

高く高く飛びまわり、やがて地上に降りてきた少女が足をつけたのは、荒く流れる川の水面だった。

ここへ来る途中雨が地を打つ音以外に別の水音が聞こえたが、どうやら向こうに川があったようだ。そこにあった光景があまりに凄まじくて気がつかなかったが……。

荒々しくはやく流れる川の水に足を取られることなく平気で立っている。

もう取り返せないと分かった兄はじつと倒れた死体を見つめ、それ以上言葉を発することはなかった。

少女は心臓を空にかざす。雨に打たれる心臓は突然真っ黒な光につ

つまれて、まるで砂のようにさらさらと消えてしまった。

「さて。すっかり持ちかえらせてもらうわね。成功するといいいんだけどねえ、どうなることやら」

すると、兄は……突然足元に落ちていた手のひら程の大きさの石を掴み上げ、それを少女にむけて投げつけた。

けれど少女の人差し指の先にあの黒い光が雷のように走り、石は空中で止められそのまま砕け散る。からからと小さな音をたてて水溜りの中へと落ちていった。

「ふん、乱暴者め。こんなんじゃあんたの好いてる女の子も即逃げだろっわねえ。絶対にさ」

「……うるさい！！人を、騙しておいて……、……っ」

「あー、騙しただって？知らないわねそんなの。あんたの被害妄想じゃないのかしら。たしかに私の説明不足は認めるけれど、騙した気はないし……そもそも今すぐ殺してやるなんて言っていない。必ずやるとも言っていない。そこはあんたが勝手に勘違いしちゃったんでしょっ」

少女は足をくるりと動かして今度は空中に座っているような体勢になった。

「雨が邪魔ね」と言って次は指をくるりと動かすと雨は少女を避けるようになり、濡れていた体はいつの間にか乾ききっていた。

魔法を使いこなしていく少女。兄はそんな彼女が自分よりもはるかに力があると感じたのか、数歩後ずさる。

「……とにかくね。私はあんたがその女の子と二人きりになれようがなれまいがどうでもいいの。だから絶対に約束を果たそうなんて気はないのよ。あ、もしかしたら成功しても私、あんな約束忘れ

「ちやうかも」

「何を……言ってるんだよ……！ふざけるなバカ！！」

「心臓が欲しかっただけだし。代わりにあんたに取ってきてもらっただけ。そのお礼で家族を殺してあげようと考えていたんだけど……その気もなくなってきたわね」

兄は、もう何を言っているのか分からなくなっていた。何を言ってももうどうにもならないのだと、分かった。

そんな兄の様子を少女はとても面白そうに見ている。そして……。

少女がこの場に姿を現して初めて、二人の会話を呆然と聞いて見ていることしかできなかったルイスに、話しかけた。

「ふふふ、ねえ坊や。私、彼と約束してたのよ。心臓を持ってきてつて。その心臓で恐ろしい存在を生み出し、それで家族を殺してあげるからつて」

「……」

「でもねえ。ひどい勘違いをして無駄に罪を犯して、約束までためにしちゃったのよこの人。とんだ馬鹿よね。幼い坊やでも分かるほど愚かよねえ」

少女にじつと見つめられ、その視線があまりにも恐ろしくて……今度こそ逃げようと立ち上がるのだが。

足はがくんと何かに引つ張られて動かなくなってしまう。

「もう……私のはなし聞いてよ！」

少女はどうしてもルイスと一緒に兄を馬鹿にしたいらしい。

「それにしても彼ってひどい人よねえ。坊やだつてこの男には裏切られたでしょう？」

……彼は、フウ力を助けしてくれる存在だと思っていた。

けれどあのいじめは全て彼の望みを叶えるためのものであり、彼が仕組んだことだった。あまりにも自分勝手にくだらない理由だった。

「私、こんな馬鹿男に馬鹿だなんて言われたのよ。ええ、正直死ねばいいと思ってる」

その言葉に、兄はびくりと肩を跳ねあがらせる。

彼女に「死ねばいい」だなんて言われたら……まるでほんとうに、そうなりそうだったからだ。

少女は川の上からふわりと兄の目の前へ降り立った。動くたびに揺れる純白のエプロンドレスの裾が天使の羽のよう。

それから、いきなり兄の服の襟を乱暴に引っ掴み、ずるずると川の方へ引きずって行く。……引きずられながらも彼は抵抗することはなかった。そんな事しても無駄だと分かっているのだろうか。それどころか、そんな事したら……。

川の中へ落ちないようにと張られた銀色のフェンス。襟を掴まれた兄は少女によって無理矢理、強引に身を乗り出させられてしまう。そして少女はルイスの方に顔を向けた。

「ほら坊や。ころして」

「……………え？」

ルイスの震えた声はあまりに小さくて雨音の中へ掻き消えたが、少女の耳にはしっかりと届いているようだ。

「人が人を殺すところって見てるとなかなか楽しいのよ。殺す側と殺される側は一体なにを考えているのか……どんな事を考え殺す

のか殺されるのか。想像するだけでとっても楽しいじゃないの！」

だから、自分では殺さずにルイスにやらせるのだと、少女は言う。

「このままこの男を野放しにしておいたら、坊やの好きな女の子はもつとたいへんなことになっちゃうわよう？それに許せないですよ、こいつのやってたこと」

「……でもつ、……そんなの……ぼく、は」

「おねーさんの言うこと聞けるでしょ？坊やだっていなくなればいいて思ってるんでしょ？ほら、いまがそのチャンスよ」

「……！」

きつとここで殺さなかったら、フウカはこれからもずっと苦しめられるに違いない。

でもここでいなくなるなら……フウカはどうなるのだろうか。もうきょうだい達にいじめられることはなくなるのだろうか。仲良くできたりするのだろうか。もつと、笑ってくれるようになるのだろうか……。

兄のいない世界は、彼女にとってどれだけしあわせなのだろうか？

そんな世界を想像したルイスは……一歩、足を踏み出して、また一歩、足を踏み出して。

数歩ずつ……ゆっくりと、兄へ向かっていく。

兄はなにか大声で叫んでいたと思う。けれどなんと言っていたかは分からない。あらゆる思考が、頭の中を駆け巡っていた……。

女性の死体の横を通り過ぎて、ついに兄の目の前へとやってきた。それほど無い距離。なのに、とてつもなく遠く感じた。

「坊や、手を伸ばして。私がいま掴んでいるところと同じところを掴むの。そしたらおねーさんは手を離すね。いい？手を離したら、

すぐにやらなきゃダメよ。坊やの弱い力じゃ簡単に抵抗されちゃうもの」

何をいまからやればいいのか。わざわざ説明されなくても分かる。彼を殺すのに躊躇う時間は無い。

ルイスはそつと手を伸ばして、ちいさな両手で服の襟を掴んだ。言っていた通りそれと同時に少女は手を離す。

もう、ここから、絶対に躊躇ってはいけないのだ。抵抗されたら、失敗したら、逆に自分が彼に殺される。

掴んだ襟。それを自分もフェンスから身を乗り出すような勢いで、ずるずると。

彼の、体は　。

「……………」

ルイスは人混みの中を、とぼとぼと歩いていた。もう少女の姿はどこにもない。

フウカの兄の姿もどこにもない。

……初めて人が水の中へ落ちる音を聞いた。初めて人が溺れる瞬間を見た。

彼が助かったかどうかなんて知らない。彼の死ぬ姿を見る前に、半狂乱になりながら逃げてきてしまったから。

……死んだんだろうか。苦しかったんだろうか。それは、どれほど苦しかったのだろうか。

彼の口の中にたくさんの水が流れ込むのを見てしまった。どれほどの量の水が押し込まれたのか。

考えると気持ちが悪くなって吐きそうになる。喉の奥をまさぐられているような、そんな感覚。

人を殺したんだろうか。よく分からない。……よく、わからなかった。

ホテルに戻って父の姿を見ると、何か弾けたようにルイスは泣き喚いた。泣いてもどうにもならないことが分かり、さらに泣いた。

父に何があったのかと聞かれ、ルイスは次から次へと起こった事を泣きながら話した。それはあまりにも言葉になっていなかったが、父はどうかルイスが許されぬことをしてしまったのだと理解し……。

「黙っていなさい、だれにも言うてはいけない。もう忘れなさい」と、そう言った。

だからルイスはその通りにした。

……八重霞から帰る日。

フウカの姿を見た。兄がいなくなったことを知っているはずだ。そんな彼女の顔は、あまりに遠くてよく見えなかったけれど……笑ってくれていたのかもしれない。なのに。だけど。とても悲しそうだった。

静かな塔の中。

ルイスの隣でフウカは湯呑みにいれられたお茶を飲んでいた。

……兄があの子に言われてやってしまった事、そしてその少女の事は話していない。あまりに恐ろしい内容だったから……話す気にもなれなかった。

……あの出来ごとから数年が経ち、用事でふたたび八重霞へ行くことになった。

そこで……あのきょうだい達に出会ったのだ。

兄は突然行方不明となった。そういう事になっていた。ただ、体の一部だけ川から見つかっただけらしい。

兄の着ていた服の布がちぎれてフェンスに引っかかっていたのと、そのすぐ側に心臓を失った女性の死体が見つかったこと……関係が

あるのかどうかは分からないが、あまりに奇妙でおぞましい事件だと、そういわれているのだそうだ。

自分が殺してしまったのだと、話すべきかどうか迷った。けれど結局……何一つとして言うことはできなかった。

きょうだい達はあれからフウカと仲良くできたようだ。それを聞いた途端、なんだか泣きそうになってしまう。

そして、いまフウカはどうしているのかとたずねてみた。フウカはいま、レーヴにある塔で働いているのだという。

もう解決したこととはいえ、八重霞にいとなく過去を思い出してしまう。だから、八重霞の外に出ることにした……。

塔で新しい生活を送ろうと、そう決めて。

それからすぐにフウカのいるという塔にやってきた。名前と顔で、彼女のことは分かった。

けれどルイスは……あの日、フウカに名前を覚えていなかったのだ。だからルイスがあの子だとフウカは分からなかった。

顔を見て「似ているけど」という思いはあつたらしい。

だがルイスは、せつかく新しい生活を送っている彼女に、あの日に繋がることを話してはいけなくともった。辛いことをたくさん思い出させてしまうだろうから……。

フウカから話をするまで自分は黙っていようと決めた。

そして今日、ついに彼女からたずねられた。幼い頃、八重霞へ来たことはあるのか、と。

何故もつとはやく言わなかったのかと怒られた。

彼女は、自分のせいでルイスが罪を犯すことになったのだと泣いた。もつとはやくあの時の子であると教えてくれていれば、断罪者から守ることができたのに、と。

結局、あの日罪を犯したことでフウカはまた新たに辛い思いをする事になってしまった。

なにをどうすればよかったのだろうか。いま考えれば、いくらでも他に方法があったのに。兄が……どうしても許せなかったから。だから他の方法を無視して自らの手で殺すことを決めてしまったのだろうか。

少女に殺せと言われたからとはいえ……自分が殺したことには違いない。

(……あの、子)

あの少女は、いったいなんだっただろう。

……心臓で恐ろしい存在を生み出す？どうやって？なんの目的があった？

少女の顔を……思い出す。

「……あ、れ？」

どこかで見なかったか……あの顔を。それも、つい最近。ルイスはしばらく考えて、それから、椅子から立ち上がった。突然のことだったのでフウカがすこし驚く。

「ね、フウちゃん」

「……な、なんでしよう」

「あの『写真』、見せてほしいんだけど……いいかな？」

一瞬なんの写真なのか分からなかったが、すぐに理解したフウカは「いま持ってきます」と言って、なぜそんなものが必要なのだろうという疑問を持ちながら写真を取りに行った。

69話 少女の夢と鬼のお茶会

時の止まった世界にばしゃばしゃと水の落ちる音が響く。
雨なんて降っていないはずなのに、雨のように水が落ちてきて地を打っていた。

「……………」

ミズキは目の前の光景を見つめ、手に持っている扇子を悔しそうに強く、握る。

まるで宝石のような水の針達はたしかにバートレットを狙ったはずなのに…………彼の大鎌によりいとも容易く裂かれてしまった。針は全て、ただの水となり地へ落ちる。

「……………むー。僕は僕に与えられた仕事をこなそうとしているだけなのに、なんでこんな目にあわなくちゃならないんだろ。今回はほんとう色々と邪魔が入るなあ」

「……………」

「あーあ、こんなんじゃ『あいつ』に全部横取りされちゃうかも……………」

そう言うとバートレットはシエルトを一瞥した。

…………このままでは、どうなってしまうのだろうか。ミズキはおそらくあの断罪者にはかなわない。ならシエルトでは尚更、どうにもならない。

けれどこの状況が続けば、バートレットにとってただの邪魔な存在でしかないミズキが無傷のままではいられるとは限らない。

どうにかしなければ…………どうにか彼を説得してこの状況を終わらせなければ。ほんとうに、危険かもしれない。

だがまだ完全に混乱からは解放されておらず、冷静に考えることができない。

「さ、シエルトちゃん、教えてくれるかな。べつに犯人がはつきりしないなら、手掛かりになるようなことだけでもいいからさ」

「……な、なんであなたは……そんなにあの事件のことに執着するんだよ……」

「ん？まあ被害者の数が多いからねえ。この事件の犯人の首さえ刎ねればあの人にはすごく褒められちゃうんだろっなあ」

あの人が誰のことなのかは分からない。といっても、断罪者に関係のある人物であるのは間違いないだろう。……今はそんな事、どうでもいいのだ。

「……つまり、他の事件よりも誘拐事件の方をなるべく優先させたいってわけ？」

「なんでそんな事きくのかしらないけど……まあ、そういう事になるよ。他のに横取りされてもいやだからね」

シエルトの言った他の事件とはルイスの事やシアの事である。

ルイスはどうか分からないが、今現在シアがどこにいるのかは分かっていないようだ。……二人の首が刎ねられるなんて、そんな事は絶対になつてほしくない。

……シエルトはこの状況をどうにかするために一つ、考えがあったけれどもそれは決して最善策とはいえないだろう。むしろ、あまりよくない方法なのかもしれない。

しかし今のシエルトにはもうこの考えしか思い浮かばなかった。

この考えに、彼が応じてくれるかどうかは分からないが……。

「……私。あんたに協力してあげてもいいんだけど」
「……！？シ、シエルちゃん……っ！？」

そんな突然のシエルトのセリフに、ミスキは思わず声をあげる。さすがのバートレットもこれには驚きを隠せないようだった。あんなにも断罪者を拒絶し続けてきたというのに。いきなり協力をしてやると言われたのだから……。

バートレットは軽く息を吐いて、シエルトに言った。

「その協力っていうのはさ、誘拐事件のつてことでいいのかな」
「そう。事件の犯人さがしに協力してやるって言ってるの」

「……うわー、どうしちゃったの？人間ってこんな簡単に頭おかしくなっちゃうもの？」

シエルトは深く溜息を吐く。

もちろん、ただ協力してやると、そう言っているわけではないのだ。……これから言うことに彼は応じてくれるだろうか。

「その代わり。誘拐事件の犯人が見つかるまでは、すべての事件……とは言わないし言えないけど。少なくともルイスさんとシアさんだけは殺さないでほしい」

「あー、そういうことなのかぁ……ま、べつにそれでもいいんだけどさ」

「……えっ」

想像していたよりもあっさりと承諾されて、つい声を出してしまった。

自分がバートレットに付きまとわれるということに変わりはないだ

ろうが、これでルイスとシアは暫くは安全だろうか。あまりバートレットは信用できないが。

それに協力といっても……自分にできることなど殆ど無いだろう。自分が被害者であると完全に信じたわけではないし、思い出せと言われてもどうやったって無理だ……夢に出てきた心臓や子供のことで多少引っかかりはするが。

あんなことを言っておいて卑怯かもしれないが協力はまともにできないだろう。

「シエルちゃん待って！そんな……そんな事して……！」

ミズキが慌ててやめさせようとする。しかし、バートレットはそれを制止した。

「はいはい、扇子のおねえさん。残念だけど僕もう承諾しちゃったし。無効とかナシね〜」

「……えっと……ごめんなさい、ミズキさん……」

「どうして……こんな事……」

……あの日。イヴェルが自分を庇ったせいで怪我をってしまった。いままもミズキにまもられて、それで今度はミズキに怪我をさせてしまったら……それはまた自分のせいなのだ。

せめてそんな事にはもうならないように。できるだけ、自分でどうにかしたかった。

……ひよっとしたらルイスやシア、ミズキの為というよりは、自分の心の為だったのかもしれない。そう考えると複雑な気持ちになつて仕方がなかった。

鬱蒼とした森。獣以外、人などまるでいないような、そんな場所。けれどそこには木々に隠れた人家。古く大きな屋敷があった。とはいえ、とても人が住んでいるようには見えないのだが……。

薄暗い森の中をかすかに照らす、唯一の灯り。それは屋敷のもので、窓から光が漏れているのだ。

つまりそれはこの屋敷には人が暮らしているという証拠である。

屋敷をぐるりと囲む錆びた鉄の柵。大きな門の先、そして屋敷への扉……。

その、屋敷の一室。灯りのついている部屋である。

あまり手入れをされていないとはいえないシャンデリア、落ち着いた色の絨毯と古めかしい家具達。部屋の中央には丸いおおきなテーブルが置かれている。

丸いテーブルのすぐ脇にある椅子に座る一人の少女……。

純白のエプロンドレス。垂れた兎の耳がついた黒いシルクハット

。ルイスの出会った少女が、そこにはいた。

少女はティーカップやポットなどを魔法で浮遊させ自由自在に操り、紅茶を淹れている。

そこには少女ただ一人しかいないというのに、まるではなやかなお茶会のようなだった。ぽんぽん、とさまざまな花が空中に咲き、部屋

を飾っている。

……なんとも奇妙な兔のお茶会。

少女はそのうち鼻歌を歌いだして、それからこう言った。

「ママ……まだ帰ってこないのかなあ？はやく帰ってきてほしいなあ」

そうして、少女はたった一人きりのお茶会を楽しむのだった。

70話 少女の夢と鬼のお茶会？

……白いテーブルが並ぶオープンカフェ。

少し遠くの方には葉がだいぶ散った木々が遠くまで並んでいるのが見えて、この季節でなければトンネルのようになっていているに違いないだろう。

そんなカフェに、何故か三人の姿はあった。

「なんでこんなことに……」

「みんなで仲良くお話ししようってことだよー」

「……あなた、シエルちゃんに変なこと言ったりしたら許さないわよ」

露骨に嫌そうな顔をして溜息をつくシエルトに楽しげに言うバートレット。そんな彼を警戒心に満ちた目でミズキが見ていた。

「シエルトが協力する代わりにバートレットはルイスとシアを殺さない」という約束が決まったあと早速、協力ということで話し合い（？）をする事になってしまったのだ。

……なぜかこんなところで。

ちなみにミズキはシエルトが心配だからという理由でついてきた。

シエルトにとつてそれは有りがたい事である。正直この男と二人にはなりたくない。

しかし、なんだか面倒なことになってしまった感じがする。

話し合いとやらの内容はおそらく誘拐事件の犯人のことだろうが、ほんとうによく分からないのだ。

さつきは卑怯かもしれないがまともな協力はできないだろう、なんて思ったりもしたが、こうなるとスルーはできない気がする。

あまり非協力的になりすぎても「約束違反だ」とか言ってルイスとシアが危うくなるだろうし適当な対応もできない。

あの状況を脱するためにこんなことを言いだしてしまっただけだが自分が協力するという以外にもいい方法があったのではないだろうか。……後悔しても後の祭りだ。話し合いにおとなしく付き合うしかない。

気分が重くなつて再び溜息をつくのだった。

「あー、安心してよ。いままではシエルトちゃんがあまりにも拒絶するものだからちよつとひどい事しちゃったりもしたけど。今は協力してくれるんだから、そんな事するわけないじゃないか」

「どうも……それから言っておくけど。協力するって言っただけで自分が被害者だとか、そんなの信じたわけじゃないからね」

「いいよ別に。しっかり協力さえしてくれればね」

「……で、どうしろっていうの？ 私には手掛かりになるような事さえ分らないんだけど」

「ん〜……ほんとうに思い出せないの？ 誘拐された時のこととかさあ」

「だから私は信じたわけじゃないって言ってるでしょ。思い出すとか無理なわけ」

「シエルトちゃんが信じないのは別に勝手だけど。僕は君が被害者だと信じているからさ、いつか思い出してくれると完全に期待してるんだよね」

つまり、シエルトがどう思おうが彼には関係ないらしい。信じていなくても思い出す努力をしると、そういう事だ。

バートレットの言葉をいちいち聞いているとほんとうに疲れてくる。会話をするのは、もっと疲れる。

なんて無理難題を押しつけてくるのだろうか……。

「例えばさあ、なんか最近変わった事とかなかったかい？ 知らないうちにすこしだけ記憶を取り戻してたりして……」

そんな質問をされたのでここ最近の過去を振り返ってみる。

記憶は戻ったりしていけば気がつくような気もするが……あまり些細なことであると分らないものなのだろうか。

とりあえず最近だが、まあいろいろとあった気がする。さまざま人と出会ったし特にあの廃墟だらけの不気味な場所へ行ってしまった時のことは……よく覚えている。

それからこの断罪者と出会ってしまったことも変わった事というか、災難というか……。

「事件に関係のありそうなことは無いと思うけどなあ……ああそういえば。気持ち悪い夢も見たりしたっけ、二回ほど」

「ふーん、どんな夢だったの？」

「いや……ただの夢だし」

「え、教えてくれたっていいじゃないかー」

夢……あの夢のことはミズキから聞いた心臓の儀式のことで少し引っかかっている。たくさんの子供達がいたことから誘拐事件を連想してしまう、ということも。

とはいえただの偶然の可能性だっただけである。

「なんか……わけの分からない暗い部屋で目が覚めて、その部屋から出ようとしたら気持ちの悪い怪物……っていつのかなあ。そんなのに襲われそうになって、結局最後は」

胸の辺りが自分の血で滲み、なにかが潰されたような、そんな感覚で終わった。なにか……とはなんだっただろうか。夢の話なのでとにかく曖昧なのだ。

なにかが……胸の辺りで……胸、心臓？

(……)

まさか、と思ってしまう。

バートレットは楽しそうに興味深そうにシエルトの話聞いていた。

「で、その夢を見たあとになにかおかしな事とかあったりしたかなあ？」

「……さあ……、あ」

ふと思い出す。記念祭の夜に見たおかしな光景、頭の中で見た映像。雷が鳴り雨の降る知らない道を、知らない少女に手を引かれながら走り、それからその少女と約束をした。

「あれえ……もしかしてなにかあったの？」

「よく、分かんない……けど、なんか変な映像みたいなのを見たよ。……それだけ」

「そういうのが記憶の断片であったりするんじゃない？で、夢は二回見たんだよね。もうひとつのは？」

記憶の断片。あれが、忘れてしまった記憶の一部分なのか……。なんだか想像もしなかった展開になってくる。ミズキはこの状況になにも言えず、すこし戸惑う様子だった。

「もうひとつ、のは……変な祭壇みたいなのがあって。一度目の夢の怪物とそれから……たくさんの子供が」

その言葉にバートレットは反応する。当然だ。誘拐事件の被害者は「たくさんの子供」なのだから。

「いたの？子供が」

「いた……けど。そうだけど……私……」

もしかしたら偶然なんかじゃなくてちゃんとした関係があるのかもしれない。なんて、考えてしまって……。

あの夢も記憶の断片なのか？なら子供達は誘拐されてきた子達なのか？

自分はその事件とはなんの関係もないと信じてきたのに、どこか繋がってしまうような気がする。

「それでその後どうなったの？」

「……その中の、ひとりの子が……、……」

そこまで言っつて口をつぐんでしまう。

信じていないのに、これ以上話したくない。言ってしまったらどんな何かが繋がっていったって、自分が被害者であると信じざるを得なくなりそうだった。

それに……ミズキから儀式の話聞いた時、忘れようと決めたじゃないか。……もういつその事夢なんて見なかったことにしてしまっても構わない。

「やっぱり……もう忘れた。結構前に見た夢だし」

「……」

バートレットはすこしの間にも言わなかったが空の方を一瞥したあと「そっか」とだけ返事をした。おそらくシエルトが続きを隠して言わなかったことに気付いているのだろう。

「まあ、いいよ。犯人はまだ分かりそうにないけどシエルトちゃ

んの方は……少しずつ思い出してきてはいるみたいだしねえ」

「……べつに、私は……なにも関係ないと思ってるから」

もしかしたら、心臓の儀式のことを話せばそれが犯人の手掛かりになるかもしれない。だけど、言いたくなかった。

……自分はなぜこんなにも事件の被害者であるかもしれないという可能性を否定するのだろうか？

たしかに、もし過去に事件にまきこまれていたという事実があったら恐ろしいことかもしれない。けれどなぜ、自分はこんなにも頑なに信じようとしなのだろうか。

思い出したくないから……だから自身と事件の繋がりを断ち切ろうとしているのだろうか。けれどそれは、やっぱり自分が被害者だからそんな思いが生まれるのか。

だがもういいのだ。忘れることに決めた。夢のことも忘れようと思う。

なんだかすごく嫌なのだ。思い出そうとする事や夢について考える事が……。

鬱蒼とした森の中の古びた屋敷。

純白のエプロンドレスを着た少女はまだお茶会を続けていた。部屋の中にはたくさんぬいぐるみ飛びまわっては踊り、もう一人きりのお茶会ではなくなっていた。ぬいぐるみと楽しそうに言葉を交わす少女。ぬいぐるみの口からは機械じみた声が出されている。

そんなふう飛びまわる彼らと遊んでいると、部屋の扉の向こうからコンコンと静かなノックが聞こえた。

その扉をたたく音が少女の耳に届いた途端。突然、ぬいぐるみ達は命を奪われたように床へ落ちる。もうただの布と綿でできたぬいぐるみに戻っていた……。

少女はそのノックの主が誰なのかすぐに理解し、楽しげだった表情がさらに明るく笑顔になる。大急ぎで椅子からおりて扉へと駆け寄った。

そしてその扉を　開ける。扉の向こうにはたしかに少女の待っていた人物が立っていた。

「おかえりなさいっ！ママ……！！！」

その人物　女性に、服の裾をふわり浮き上がらせて飛びつくように抱きついた。

女性は少女に微笑みかける。

「ただいま、ルシファー」

長い髪を揺らしそう言ったのは……ダイアナだった。

ルシファー、と呼ばれた少女はとても笑顔でテーブルの方を指差し「いまみんなとお茶会ごっこをしていたの」と言う。

それからぬいぐるみ達はふたたび起き上がって少女の、ルシファー

の側へと飛んでくるのだった。

「そう……みんなと遊んでいたのね。ママもお茶会にまぜてくれるかしら？」

「うん！ママもみんなと遊ぼう、お茶会ごっこしよう！」

ルシファアは、ダイアナの手を引いてテーブルへと導いた。その時……ダイアナの表情は一瞬暗くなる。

ぬいぐるみ達が部屋はどこからか椅子を運んできて、ルシファアの席と向かい合わせになるように置いた。ぬいぐるみに促されてダイアナは椅子に座る。

それからまた一瞬表情が暗くなった。しかし今度はそれを、ルシファアは見逃さなかった。

「ママ……どうしたの？どうして元気がないの？」

「……え？」

悲しげな声でそう聞かれてダイアナははっとする。ルシファアはダイアナをじっと見つめていた。とても、悲しそう目で。

……ダイアナは以前シェルトと一緒に行った塔での出来ごと、それから今日、騎士団の人間に言われたことを……あたまの中で考えた。そして、少しちいさな声でルシファアに……自分の娘に問い掛ける。

「あのね……ママに教えてほしい事があるの。いいかしら？」

ルシファアは不思議そうな顔をして「いいよ」と答えた。

「塔の、人達がね。あなたの事をさがしているみたいなの」

「……」

「あなたが塔からいなくなってしまったから、だから心配してあ

「あなたをさがしているのだと……ママはね、そう思っていたの。でも」

すると突然、ガタリとおおきな音を立ててルシファーは椅子から立ち上がった。飲みかけのティーカップが倒れる。中からこぼれた紅茶を拭こうとぬいぐるみ達が慌てはじめた。

その様子にダイアナはびくりと肩を跳ねあがらせる。ダイアナは動揺してルシファーを落ち着かせようとした……。しかし、ルシファーはダイアナに抱きつき顔をうずめ、それからあまりにも悲痛な声で泣きだすのだった。

それを見て、やはり自分の娘が何かしてしまったのだと、確信する。しばらく大泣きをしてようやくダイアナから顔を離れたルシファーはそれでも大粒の涙を流し続けていた。頬は涙に濡れ、目はすっかり赤くなってしまっている。

ルシファーが少しずつ落ち着きを取り戻してからダイアナはふたたび話をはじめた。

「ねえルシファー……なにがあったのか、ママにお話しできる？」

「ひ……っ、う……うん、ちゃんと……言う」

泣きはらした目でダイアナを見上げる。

そして静かに目をつむる……それは隠していたことをようやく話す決心をしたような、そんなふうに見えた。

「わたし、ね……あの、ね。あの塔にいた頃……お仕事ちゃんとできなくて……馬鹿にされて……くやしくて見返してやろうと思つて！得意な魔法をもつといっぱい練習して……！！」

「……ええ。そうね、あなたは魔法がじょうずなものね」

「それで、私こんなすごいこといっぱいできるんだよって見せ付

けてやったの！馬鹿にした人達はおどろいて……私、それを見たら
どどん調子に乗って……」

涙声で必死に話すルシファー。ダイアナはそれを頷きながら聞いている。

話を続けなければ続けるほど、ルシファーはたくさんの涙をこぼすのだった。それが頬を伝って白いスカートに染みをつくっても、なにも気にしない。

「ついに……人を傷つけてしまったわ……」

「……！」

「そんなことするつもりじゃなかった。だけど私は愚かで……結局、塔を追放される事になったの。その時は馬鹿にした人が悪いのにつて、自分の愚かさにも気付かなかった……」

「そう……だったの……」

「ごめんなさい……！私どうしても、ママに言えなかったの！ようやくママに会えたのに嫌われたりしたらどうしようって……」

ダイアナはルシファーを抱き寄せてそつと頭を撫でた。

「たしかにあなたはやってはいけない事をしてしまった……けれど、私があるあなたをあの塔に捨てたりしなければ……そんな事にはならなかったのに。ごめんなさいルシファー……！」

「でも……でも……！愚かさにも気付かなかったから私……もつととんでもないをしてしまった……！！」

涙を拭い真剣な目をする。スカートをぎゅっと握りしめて、しつかりとした声で言った。

「私……大勢の人の命を、奪ってしまった……！」

71話 ある世界の黒い少女

冷たい風に長い艶やかな髪が揺れた。

その髪の毛である少女は、じつと遠くの方を見つめていた。それから時折気だるそうにため息を吐いている。

膝上程の丈の真っ黒なドレスに身を包む少女がいるのは、貧困という文字がびったり合うような村。まるでどこかの令嬢のような彼女には不相应な場所だった。

重い灰色の雲の下。家屋か物置小屋か分からないような小さな建物が乱雑に並んでいる。

一応人が暮らしているようで、薄汚れた粗末な衣服を身につけた住人が家の路地を行き来している。走りまわる子供達もいるのだが彼らの体はあまりに細いものだった。

そんな子供の姿を少女はどこか悲しそうな目で見つめていた。

「……………」

「……………おや。またどこか出掛けるのかい」

少女にそう声をかけたのはやはり薄汚い、やや透けた水色の服を着た女性だった。

「ええ……………三日ほどで帰ってくると思うけれど」

「三日も、か。いったいどこへ行っているのかしらないけど……………まあよっぽど遠いところなんだろうっけどき。気をつけるんだよ」

「……………ありがとう。ちゃんと帰ってくるわ」

そう言うと少女はまた風に髪を揺らして歩いて行った。気だるそうなため息を、何度も吐きながら。

あの村を出てからどれほど時間が経ったのか。どれほどの距離を歩いたのか。そんなものは分からなかった。しかし少女は慣れた様子で迷うことなく歩き続ける。

そこは、廃墟となった建物がいくつもある場所だった。かつては形を成していたであろう瓦礫達があちらこちらで山になっている。どうにか建物としての形を保ったままではいるいくつかの廃墟は村の小さな家屋とは違い、しっかりとしたとても大きな建物である。

(すこし前はここにも……人がいたのにね)

少女はずっと、どこか虚ろに感じる眼差しでどんよりとした空を見つめていた。少女の表情はなんだか気力の失われたような、疲れきってしまったようなものだ。

ざりざりと土と瓦礫を踏む音だけが聞こえている。どこことなく物悲しい雰囲気漂わせる世界。人と呼べるような存在は少女くらいしか、この辺りにはいないのだろう。だが、人の形をしていないものならいくらでもいた。

たった今、いつの間にか、音も無く少女に襲いかかろうとしていた真つ黒な、影のような巨大な手のひら。

ほんとうは頭や足が、体がちゃんとあつたのだが、少女が手を振りかざしたただけでいとも容易く切り裂かれていき、結局残ったのが手のひらだけだった。

そんな手のひらも間もなく無音で散っていく。

……少女に殺されたのはフォリーだった。ここには、いくらでもフォリーがいた。

一匹のフォリーが殺されたことに反応したのかあらたに別のフォリーが姿をあらわす。真つ黒な毛皮を身にまとった獣が何匹も近付いて来た。

けれど少女は臆する様子もない。

自身の周囲にいくつかの円形の魔法陣を浮遊させて、その魔法陣からそれぞれ一つずつ実体の無いような光だけで構成された細長い刃を出現させた。

それから刃は空を自由に駆け巡り、少女に近付く獣達を正確に串刺しにしていった。逃れられた獣は一匹もないのである。

「……あるかしら」

獣に突き刺さった光の刃は砂の如く消えていった。

すると次に、今度は少女の人差し指に細い光の糸のようなものがくるくると回りはじめる。その糸は次第に長くなっていき指から離れて動かなくなつた獣達の、胸の辺りを探り始めた。

光の糸は一瞬なにかに反応したような動きをみせて……そして、ずぶりと体の中へ入っていく。獣の体はびくりと跳ね上がった。ほんの少しして糸が中から出てくると他の獣の体にも同じことを繰り返していった。少女はまるでなにかを祈るように目をつむり糸が自分の元へ戻つて来るのをただただ待っていた。

……ようやくすべての獣の体を探り終え、糸がふわふわと空中をさまよい少女の元へ帰ってくる。
少女が糸を両手で優しく包みこむとその糸はふわりと大きなひとつの光に姿を変えて弾け飛んだ。……両手に小さな白い光の玉をいくつか残して。

ある、廃墟となった建物の中に少女の姿はあった。壁や床に亀裂の入った廊下を抜けて広い部屋に出る。

そこには人のような、人ではないような、そんな姿があった。奇妙な文字の刻まれた天使のような翼を背中に持つてずつとなにかをうめいている。なにか少女に伝えたいようなのだが口が思うように動かないようだ。彼の声は少女の耳には届かない。

しかし少女は彼の伝えたいことを、言葉をしっかりと理解していた。少女は彼の翼をそつと撫で、優しく声をかける。

「……大丈夫よ。あなたを戦わせることもしないし殺したりもしない。けれど、もし死にたくなったらいつでも殺してあげるから。伝えられない口など持つていても苦しいだけでしょ」

そう言うと少女は彼の元を立ち去り、建物の更に奥へと進んで行く。

そして辿り着いたのは先程の部屋よりもすこし小さい部屋。その部屋はどこからか嫌な臭いが流れていた。

大きな祭壇が置かれ部屋のあちこちにある蝋燭が、壁に刻まれたあの翼と同じ奇妙な文字を照らしている。ゆらゆらと揺れて、とても頼りない灯り。

少女は部屋の中央に立つと軽く息を吐く。いつものため息と同じようにも感じるのだが、すこし緊張の色が見えていた。

すると、ふわりといくつもの小さな文字が螺旋状に少女を取り囲むようにして空中に浮かび上がる。その文字は翼や壁に刻まれているものと同じだった。

文字達は螺旋の形をゆっくりと崩していき……あのいくつかの白い光の玉となった。

「……さあ、姿を見せて」

その言葉に反応して白い光の玉達は神秘的なその姿から……あまりにも醜い肉塊に。

真っ赤な血を滴らせた静かに脈打つ心臓へと姿を一変させていた。

72話 歪んだ空

ミズキやバートレットに出会ったあの日以降、特に何事もなく旅行を終えることができた。

ただ、シエルトが一人になった時にバートレットが付き纏ってくる、というのはあった。協力するなどと言った自分が原因なのは分かっているがさすがに鬱陶しいことこの上無い。

それでもミズキが時々様子を見にきたりしてくれたため、幾分かマシだったのかもしれない。

しかし旅行を終えてレーヴに帰ってきたことでそんな状態からようやく解放されたのである。この三日間、彼の姿は見えていない。あの男の顔を見ないで済むというのはシエルトにとってとにかく幸せなことだった。

そんな事もあり上機嫌でシエルトはレーヴの人混みの中を歩いていった。あまり混んでいるのは好かないが、今はさほど気にならない。それに人混みといっても今日はまだマシな方だ。休日となるとまともに行くことさえままならなくなる時がある。

とくに目的地があるわけでもないが、ここをこのまま真っ直ぐ進むとあのガラスのドームの場所へと辿り着くだろう。初めてノックスと会った場所である。

そして少しずつドームの姿が見えてきて、やっぱりここへ来ると幼い頃姉と見に来たプラネタリウムのことを思い出すのだった。あの日見た星達の映像は今でもよく覚えている。

普段はこのガラスにはなにも映されていないのだが、どうやら今日はレーヴを上空から映した映像をドームに流しているらしい。

鮮明で綺麗に映されており時々シエルの建物も見える。なんだかそれが少し嬉しかった。

しばらくそんなレーヴの様子を眺めているとやがて映像はレーヴの

中心である聖神塔を映しはじめた。塔を見て思い出すが、ルイスは大丈夫だろうか。あの断罪者が絶対に約束を守るとは限らない……が、フウカがいるなら平気だろうか。

……そんなことを考えながら塔の姿を見てみると、一瞬。ほんの一瞬だけ塔の天辺が光った……ように見えた。

驚いて少しの間天辺の方を見つめていたのだが結局映像は違う場所に切り替わってしまう。……気のせいだったのかもしれない。

(まあ……べつにいいか)

そう思つてドームから立ち去ろうとした時、突然後ろから肩を掴まれる。なかなか強い力だったため引つ張られた、という感じに近かった。

慌てて後ろを振り返る。その振り返るまでの瞬間、絶対に当たつてほしくない予想があたまの中に思い浮かんだ。

もしかしたらあいつが、

「やあ。シエルトちゃんっ」

「……………」

ようやく解放されたと安心しきつてから三日目、じつはそんな事は全然なかったという事にいま初めて気が付かされた。

「……どういつつもり？」
「んー？どういつって何がだい」

ドームを抜けて、聖神塔の近くをあきらかに不機嫌そうなシエルトと妙に上機嫌な断罪者……バートレットが歩いていった。
人混みも気にならなくなるほどに良かったはずの彼女の機嫌はもはや無かったことにされている。……それほど暗い顔をしていた。

「ふざけないでよ、どうしてくれるのさ……」
「僕はきみがなんでそんなに落ち込んでいるのかまるで分からないんだ」

「ああ、馬鹿にはわからないよ」

協力する。そう言ってしまったせいで今までのようにあからさまに彼を拒絶することもできず、八重霞では仕方なくバートレットの話を素直に聞いたり時々適当に相槌を打ったりしていたのだ。

しかしそのせいで彼はなにを勘違いしたのかシエルトと自分は非常に良い友好関係を築いていると。すっかり仲が良くなったのだと、そう思っているらしい……のである。

……冗談じゃなかった。
協力というのはあの状況を脱するために仕方なくのことであり、本気で彼に心を許したからではない。というか普通はそうだと分かるはずだ。

「だいたいお前、ようやく姿を見せなくなったと思ったのになん
でいきなり……………」

「シエルトちゃんに会わなかったのはほんの数日だけじゃないか。
それにねえ、僕だってそんなに暇ってわけでもないんだよー。ちょ
つとぐらいいなくなる時もあるさ」

「……………はあ、あれだけ毎日のように付き纏っておいてよく言うよ
「あ、分かつちゃったよー。きみが機嫌悪いのって僕が会いに行
つてあげなかったから怒ってるんだ」。意外と寂しがり屋なウサギ
さんなんだね」

「死ね」

すたすたと歩いて行ってしまおうシエルトをそれでも機嫌の良いバー
トレットはひよこひよこことついていく。……………ほんとうはすぐに逃
げてしまいたいところなのだが、人が多いなかで走ることはできな
い。

どうしようもなく、シエルトはバートレットを睨んでいた。いつも
通り彼はそれをまったく気にすることはない。

「……………あ。そういえばさあシエルトちゃん」

「……………」

「きみの学校の先生のことなんだけど……………」

「は？」

「……………んー」

どこか楽しそうに面白そうに。そんな様子で考えたような顔をして
から、

「やっぱいいいや。なんでもないよ」

と、そう言った。
いきなり学校の先生といわれてもなんのことだかさっぱりだ。そもそも誰のことを言っているのだろうか……。
彼の言い方がすこし気になってしまふものだったが、なんでもないと言われたのでとりあえず無視することにした。どうせくだらないことだろうと、そう思ったからである。

「……ていうか。どこまでついてくる気なわけ？ 言っておくけど今あなたに協力できるようなことはないからね」

「それでもいいよ。僕はシエルトちゃんに約束を破らないか見張ってるっていうのもあるんだから。どこか遠くへ逃げられちゃったら困るしね」

「わざわざそんな面倒なことしないし。あなたが二人を殺さないっていう約束を守ってる限りは、こっちだっておかしな事はしないもの」

「大丈夫だつてー。一応約束は守るつもりでいるよ。それに、こうして二人一緒にいれば見張り合いつこしてられるもんね」

……たしかにこうしていれば互いに監視しあうことができる。安心かもしれない。

でも、だからといって付き纏われるのは嫌だった。こんな調子が毎日続いていいたら……。

そんな事を考えていると無意識のうちに深いため息がでてしまった。

「……ほんとにあんたもよくやるよね。なんの為にこんなことまでしてるの？ あの事件のことか……あんたには一切関係ないんじゃないの。面倒くさいとか思わないわけ？」

「おー。シエルトちゃんが僕に興味を持ってくれたよ！感激だなぁ。せつかく仲良くなったのになにも聞いてくれないんだもん」

「それはね、仲良くなったとは言わないだよ」

「まあ死んじやいたいくらい面倒なだけだよ。僕はもう一度愛してもらったために死にたくなるほど頑張ることにしたんだよ」

「……………」

彼が愛してほしいとか、そういうことを口にする性格だとは思わなかった。むしろ、そういうのは嫌っていきそうなイメージがあったのだが…………。

「……………またそんなわけのわかんないこと言ってさあ」

「僕はわけがわかるから構わないだよ。あ、でもシエルトちゃんが愛してくれるなら僕もう頑張らなくても、」

「ほんと死ねばいいのに」

殴り飛ばしてやるうかとおもった。想像するだけで軽く吐き気がするほどだ。

……………それからまた少し歩いて、しばらくすると塔の建物が見えてくる。

バートレットは相変わらず上機嫌でついてくる。ルイスのことを考えると、一応彼をここに近寄らせない方がいいのかもしれない。ほんとうに、なにをするのか分からないのだから。

しかし…………。

「…………ん…………、えっと、あれ…………？」

なにか塔の天辺に違和感を感じた。

様子がいつもと違うというか、空気がおかしいというか、よく分からないのだがなにか変なのだ。

そういえばさつきドームで見た映像で一瞬天辺の辺りが光ったようにも見えた。一体…………。

「…………って、えッ…………!!」

違和感の正体を探っているうちに、その違和感はさらに大きくなっていった。それはもう一目見ても分かるくらいに。

塔の天辺の辺りは明らかに大きく歪んでいる。それもいま、その歪みは突然形を大きくしたのだ。

しかも歪んでいるのは天辺の部分だけでなく、その周囲の空に浮かぶ雲まで歪ませられてしまっている。それにはさすがに周りにいた人達も、バートレットも気付いたようだ。

そして、突然。

その歪みは一瞬だけ強く、白く光を放った。下を歩く人達は皆顔を手で隠すほどの強い光だった。

(…………な、なに?)

それから再びゆっくりと目を開けて塔の天辺を見遣る。

そこにはあるはずのないものがまるでさつきから存在していたかのように、空中に鎮座していた。それに歪みは一層強くなり、空は雲と混ざり合い禍々しささえ感じる。

鎮座しているそれは、台座のようなものの上に白くまばゆい光を散りばめて、台座の中心にいる「なにか」を覆い隠しているようにも見えるのだ。

73話 歪んだ空？

強い光を放ち、塔の上に周囲の空と雲を歪ませて鎮座する台座と白い光。

ただ、突然現れたのはそれだけではなかったのだ。

……シエルトの足元に赤い鮮血が飛び散る。生々しいそれはフォリーのものだった。

シエルトの握る大剣がフォリーの体を貫いたからである。

「ど、どうなってるの……？」

突然どこからかフォリー達が姿を現した。聖神塔の祭りの時ほどではないが状況は似ているだろう。

塔の上になにかおかしな物が出てきて、そして同時にフォリーも出てきた……関係はあるはずだ。けれど今はそんな事を考えている場合ではない。

祭りの時より数が少ないとはいえ四方八方に彼らの姿はある。油断はできないし、しかしこれだけの量を相手にできるはずもない。

「シエルトちゃん、大丈夫かい？」

後ろから声を掛けられる。……バートレットだった。

こんな状況にもかかわらず、相変わらずいつも通りなにも気にしていない様子で、楽しそうに笑っているのだ。まるで彼のことは理解できない……する気もないが。

「……別に、平気」

バートレットに「大丈夫か」などと言われても、とても本心でそう思っているような気はしないのでこちらの返事も素っ気なくなってしまう。

そんなふうにはシエルトが考えているのをバートレットは気付いているのか「僕これでも本気で心配してあげてるんだよ」と笑いながら言った。それに対してシエルトは「あっそ」とやはり素っ気なく返す。

……そんな下らないやり取りをしているうちに、いつの間にか周囲にフォリーが集まってきてしまっていた。

さすがにこうなると足は竦み戦う気力が恐怖によって失われはじめる。武器を持っていてもこうなのだから武器を持たない周りにいる人達はいま、どれほどの恐怖を感じているのだろうか。

「さて、こういうのは塔の人達や騎士団さんがどうにかしてくれらるだろうから、そういうのに任せて。僕達にはやく逃げよ」

「う、うん……」

向こうの方で塔の天使達が避難をさせているのが見える。

バートレットに手を引かれる形でその場所へ向かっていくが、普段なら即刻彼の手を振り払っているだろう。しかし今はそんな事をするのも忘れてしまっていた。

……ふともう一度塔の上に視線を向ける。あれはなんなのだろう。白い光に覆い隠されてしまっただけではつきりと見えるわけではないのだが、台座の上には何かがある気がするのだ。

「シエルトちゃん、あれがなんだか気になるの？」

「……普通みんな気になると思っけど」

そう言うとバートレットは「まあそうだろうね」と答えた。

「シエルトちゃんはなんだと思うかい？」

「……」

見た目は神秘的で綺麗。あんなふう我突然現れたりしなければ害のあるものとは思わないだろう。

けれどいきなり強い光を放ち塔の上なんか姿を現して。なにかよくないものなのでは、と疑ってしまう。実際こうしてフォーリーが出てきたりしているのだから……。

あの幻想的な姿に禍々しさを感じるのだ。ほんとうに……変なことが起きなければいいのだが。

「僕ねえ、なんとなくんだけど分かったかちゃったかもしれないなあ」

「えっ……」

「教えてほしい？」

「……はあ」

どうせ教えるといっても教えてくれないような気がする。たとえ教えてくれたとしても内容がとんでもないものだったりして、ひどく混乱しそうだ。

シエルトがため息を吐いてなにも返事をせずにいると、彼はわざとらしく悲しそうな顔をしてきた。

「え、知りたくないんだ……」

「……だつて。どうせ言わないでしょ」

「うん、そうだよ。教えてあげないよー」

「……ったく、なんだつての？」

彼と話すとはんとうに疲れる。なにを考えているのか分からないというのもあるが、なにを言いだすのかもさっぱり分からない。適当に返事をしていればいいのかもしれないがそれさえ面倒に感じるほどだ。

「でもねえ、ほんのちょこつとなら教えてあげてもいいかな」

「もうどっちだっていいし……ほんとにこんな状況でなに考えてんのかなお前は」

「僕はあるまりなにも考えてないよ。でね、塔の上のあれだけど。もしかしたら、みんなが知ってるもの……かもしれないよ」

やっぱりわけが分からない。みんなが知っているものと言われても、あんなものは見た事がない。

なのになぜ「知っているもの」になるのか。

……多分考えても理解できないことだと思うので聞き流すことにした。

ようやく天使達がいる場所に辿り着く。途中でフォリーに襲われたりしないかとも思ったが運良く避けることができた。

そう安心していたが……幼い子供を避難させようとしていたひとりの天使が突然大きな悲鳴をあげる。

天使　女性と子供の二人の目の前に、一匹のフォリーが立ちはだかっていたからだ。子供は泣いて、女性は子供を守るようにして、けれどその場にうずくまるしかない。

そのフォリーは女性よりもずっと大きく、長い腕を二人に向かって伸ばそうとしている。

けれどその腕は……、

「……………!?!」

文字の刻まれた純白の翼を持ち、皮膚がぐずぐずになった赤い体で動く人間のように人間ではないような、そんな容姿をしたものによって切り落とされた。

夢の中や祭りの日、廃墟だらけの場所で出会ったあの存在と同じである。

いつの間にそれは、そこにいたのか。さっきまではどこにもいなかったはずなのに、いつの間にか女性とフォリーの間に姿を現していたのだ。そして、腕を切り落として女性と子供を助けた。

(なんで……………あれが……………)

シエルトはただ混乱するしかなかった。

なぜ、あれがここにいて、人を助けて……………これも塔の上のものとの関係があるのか？そもそもあの翼を持ったものは一体、なんなのだろうか。

……………翼を持つその人間のようなものは突然、皮のめくれた両腕を空に向けて振り上げると凄まじい音を立てはじめる。

それから腕のまわりに奇妙な文字や模様を次々と浮遊させていき、腕を振り上げた彼は甲高い声で……………まるで叫び声のようなものから出した。

「……………っ」

あまりの大きな声に思わず両手で耳を塞いでしまう。

いったい、なにが起きているのか。なにが起きようとしているのか。もうわけが分からず自分はいま怖いのかどうか、それとも状況が理解できずに苛立っているのか、それさえ分からなくなっていた。

甲高い叫び声はやむと、浮遊した文字や模様はそれぞれいくつもの小さな刃のようなものになり……。次々と塔のまわりを蠢くフォリー達の体や腕、頭や足などに突き刺さり、そしてそのフォリーを砂のように変えて消していつてしまう。そんな光景を目の前にして、あまりにも恐ろしいものを見てしまっているような気がして。ただただその場に立ち尽くしていた。

「……うーん、シエルトちゃん。今日のレーヴは……ていうかこの塔はどうしちゃったんだろっねえ。なんか変なものばかり出てきてるけど」

バートレットはまるでフォリー達が消えて行くその様に興味がないような声で言う。シエルトは、なにも答えなかった。

……けれど本当に彼の言うとおり、今日の塔は一体どうしてしまったのだらう？

塔の上におかしなものが出てきたと思っただら今度は大量のフォリーが現れて。そうしたら、次に翼を持ったあの化け物まで出てきてしまったのだ。

どどんフォリーは姿を消していつて、最終的には数えるほどしかいなくなってしまう。

塔の天使達や他の人達もその光景をただ呆然と見つめていた。なにも気にしていないのはバートレットくらいなものである。

……すると、どこからか静かな足音が聞こえた。この場にいる人間

はまったく言葉を発せずフォリーもほとんどいなくなってしまうため、足音は鮮明に耳に届いた。

足音の主は後ろからゆっくりとシエルトの真横を通り過ぎて行く。通り過ぎてから、その主の姿を見ることができた。

艶やかな長い髪、真っ黒なドレスに身を包む、気だるそうな少女…

…以前、一度出会ったことのある少女。

また…またおかしなことになった。なぜ彼女がここにいるのだろう？

少女は一瞬振り返ってシエルトを一瞥したあと再び視線を前に戻し、翼を持った彼のもとへと歩いて行く。

そしてその翼を持った彼に優しく、小さな声で話しかけた。

「疲れてしまった…？いいのよ、あとは私がやるから」

そう言うと少女の足元はかすかに円形に光り出し、その光はやがて爆ぜて残ったフォリーの体も同時に爆ぜてしまうのだった。

それからもう一度、少女はシエルトを一瞥する。

気だるそうな眼差しで…少女はとても、かなしそうな顔をしていった。

「え…もう、帰りましょう」

少女は文字が刻まれた翼をやさしく撫でてそう言った。

…そして。

無意識のうちにするような小さなまばたきをしたその間に、少女の姿も翼を持った彼の姿も、跡形も無く消え去ってしまっていた。

まるでいままでの光景がすべて幻であったかのように…。

74話 ブラック・ダリア

……星の夜空がすぐ真上にみえる、そろそろ生徒達が眠りにつく頃のシエルの寮。

ぐったりと疲れた顔のシエルトがベッドの上に座り、足をふらふらと動かしていた。

そんなシエルトの隣にイヴェルがぼすんと座る。

「……あ、イヴェル」

「だいじょうぶかなあ、シエルトちゃん。すごい疲れたーって顔してるよ」

そう言うてにっこりと笑うとイヴェルはシエルトの頭を優しく撫でた。

それだけでシエルトの疲れきったような表情はすこし綻ぶのだった。

「ありがとう。それよりイヴェルこそ、腕は……」

彼女の腕にはまだ包帯が巻かれている。けれども怪我の方はだいぶよくなってきているようだ。

だが怪我が完全に治るまでシエルトは心配せずにはいられなかった。痛いのを無理しているかもしれないし、それに自分のせいでもあるのだから……。

「ぜんぜん大丈夫だよー？ほんとに痛くないし……」

「……そう？あの、無理しないでね」

「あひゃ〜してないよう。それよりシエルトちゃんこそ怪我とかしなかったの？……塔のところにはいたんでしょ？」

昼間……突然、塔の上におかしなものが姿をあらわした。

それからフォリーが大量に出てきて何人も人間が、とくに一般人を守るために塔の多くの天使達が怪我をしていたのだと……全てのフォリーが姿を消してから知った。

フォリーが姿を消したのは逃げていったのではなくあの真つ白な翼を持った、不気味な容姿をしたアレに殺されたからである。

そして最終的に数えるほどしかいなくなったフォリーはあの真つ黒なドレスを着た少女によって、やはり殺されてしまった。あの後騎士団の人間が塔に到着したが、すでに一匹も残っていなかったのである。

一体なんだったのだろうか……。

「うん、怪我はしてないよ」

「そつかあゝよかった」

こう考えるのはすこし腹立たしいのだが、正直バートレットがいなかったら避難させている天使の場所まで行けず無事ではすまなかったかもしれない。

「結局、塔はしばらく閉鎖になっちゃったみたい。塔周辺も少しの間は近寄れないかも」

「みたいだね……レーヴの中心なのに残念だなあ。でも危険かもしれないし、仕方ないよね」

「塔の上の……あれってなんなんだろう」

「テレビのニュースで見たけど、なんかすっごくキラキラ光ってたね。でも周りの空とか雲がぐにゅってなってる変な感じだったなあ」

そう言うとイヴェルは自分のベッドの横にあるサイドテーブルの引き出しから水色のヘアブラシを取り出した。

そのブラシでシエルトの短い髪をやさしく梳かしはじめるのだった。そんなイヴェルの表情はとても楽しそうで、ブラシが髪を通るたびに笑顔になる。

「シエルトちゃん、もっと髪のはせばいいのに〜」

「……前にすこしだけのばしたじゃん」

「えー、でもでも似合ってたのにすぐ切っちゃったんだもん〜。せつかく可愛かったのにもったいないよう」

「やだ……はずかしいし」

「リンセルトさんだって可愛いって言ってたのにー」

以前、イヴェルに絶対似合うからと髪をのばすように言われて、少しの間だけのばしてみた。

でもなんだか自分じゃないみたいで落ち着かなく、結局すぐ切ってしまったのだ。イヴェルにはものすごく残念がられたが、髪を伸ばした自分を思い出すと今でもベッドの上で足をじたばたしてしまう程である。

なんというか本当に恥ずかしくて学校を休もうかとさえ思った。

「シエルトちゃんはー、自分に自信が無さすぎる〜」

「うんー……だって、そんなのあってもしょうがないし……」

「しょうがないもんー」

イヴェルは、今度はあんな髪型にしてみよう、あんな服を着てみようなどと色々としエルトに提案しながら髪を梳かし続けている。しかしそれらの提案は全て「やだ」「はずかしい」という理由で「とごとく却下されていくのだった……」。

「……よし、終わり〜」

髪を梳かし終えたイヴェルは満足げにシエルトの髪に指を通す。さらさらと肌を滑り落ちる髪感触を、イヴェルは嬉しそうに感じていた。

「ありがとう」

「あひゃ〜、どういたしまして！じゃ、そろそろ寝ようかー」

ドア付近にある部屋の電気スイッチをぱちつとかたい音を立ててイヴェルが消す。

その瞬間、もちろんカーテンも閉められたこの部屋は真っ暗になる。目が慣れるまではイヴェルがどこを歩いているのかまったく分からない。

……そんな暗い部屋。ベッドの上で、シエルトは塔での出来ごとをぼんやりと考えてしまった。

この静かな空間で目をつむると、まぶたの裏側にその時の映像が浮かんで、どこからか音まで聞こえてくる感覚が頭の中にうずまいた。

隣から聞こえる物音でイヴェルも自分のベッドに入ったことが分かる。

もう考えるのは今日は終わりにしようと思いきやシエルトはさっさと寝てしまおうと布団の中に潜り込むのだった。

「……」

それでも、なんだか眠れない。

あの黒いドレスの少女のことも気になるし文字の刻まれた翼を持ったあの存在も、とにかくすべてが気になって眠れない。

……いつたいなにが起きているのだろう。

考えても分かるはずがないし仕方がないのだが、じっとしているとどうしても思い出してしまう。

布団のなかでもぞもぞと動いているシエルトにまだ眠っていないかったイヴェルが小さな声で話しかけた。

「……シエルトちゃん、シエルトちゃん。眠れないのかな？」

「……あ、ごめん。もう寝るから……」

うるさくしてしまったかな、と思い今度こそちゃんと寝ようとした時。

イヴェルがベッドから降りるような、そんな音がした。……そして。

「ひゃあー?! い、イヴェル……?」

「えっへへー。シエルトちゃんたら、帰ってきてからずっとなんか考え事してるみたいなんだもん」

「え……ええと」

突然、イヴェルがシエルトのベッドの中に入ってきたのだ。暗闇のなかでのいきなりの事だったので、びっくりして変な声が出てしまった。

「あひゃー、今日は一緒にベッドで寝ようか」。シエルトちゃん

のお布団のなかあったかいねえ」……」

「……う、ん」

たしかにあったかいのだけれど、これはこれで恥ずかしいものだ。しかもイヴェルは背後から抱きつくような形でくっついてくる。なんだかさらに眠れなくなるような気がするのだが……。

たしかに、ほんとうに、あったかいのだけれど。

「こうしてるとすぐに寝れちゃうよー」

「そ……そうなの？」

「そうなんだよ」……じゃあーおやすみなさーい」

「……お、おやすみ」

そんな小声での言葉を交わしてからほんの数分が経つと、すぐうるからイヴェルの静かな寝息が聞こえてくる。

安らかでやわらかくて、聞いているとなんだか眠気がおしよせてきた。考え事なんてできなくなるくらい頭がぼんやりとなる。

二人分の体温で布団の中はすっかり完全にあたため、それと彼女の寝息とでシエルトは少しずつ深い眠りへ落ちていくのだった。

……ここはどこだろう。

ふと、そんな言葉が頭の中に浮かび上がった。なぜそんな風に思ったのか。

それは濁った視界が鮮明になった事でようやく理解できた。

「……?」

シエルトは、瓦礫の上に座っていた。

辺りには枯れかかった少しの草木と、廃墟と化した建物達。暗い大地。よどんだ空。

命が存在していないような、そんな世界。

……ここはどこだろう、と最初はおもったが、ここは……。

(塔のお祭りの時に来た……)

あの日、いつの間にか倒れていたあの廃墟だらけの場所とまったく同じだった。

「……どうして」

そんな言葉が口から漏れる。

このよく分からない場所。誰もいないのだ。誰の姿も見当たらない。どうして、なぜまたここへ来てしまったのか?イヴェルはいるのだろうか?

いつきに不安が体中を満たし、シエルトはよろよろと立ち上がった。足にうまく力が入らない。おもわず瓦礫から滑り落ちそうになる。

(ここどこなの?なんで……こんなことになってるの?)

周囲を見渡すがやっぱり人らしき姿は無い。イヴェルだって、きつ
とこないと思う。

……ひとり、なのかもしれない。こんな場所で……。こんな寒くて
怖くて寂しい場所。

とぼとぼと、ゆっくりと歩き出す。

冷たい風が肌を通り過ぎるたびに不安が膨れ上がっていくのだ。そ
んな不安を紛らわせようと、腕に爪をたててしまう。

「……………」

いくら歩いても誰もいない。なんでこんな場所に自分がいるのかも
分からない。

どうしようもなくなってついにシエルトはその場にしゃがみこんで
しまった。祭りの時はフィリップやクロード、ノックスがいたけれ
ど……。

いまは、ほんとうにひとりなのか。

「顔をあげて」

「……………え？」

突然どこからか聞こえた声に、言われた通りとっさに顔をあげるシ
エルト。

すると目の前にはいつの間にか……………あの真っ黒なドレスを着た少女

が、手を差し伸べていたのだった。

75話 ブラック・ダリア？

しゃがみ込んだシエルトに手を差し伸べる、真っ黒なドレスを着た少女。

どこか虚ろで赤みがかった目はじっとシエルトの顔を見据えていた。

「……また、あなた」

「……」

なにも言わぬ少女に困惑するが自分に差し伸べられた手にシエルトはおずおずと触れた。

触れた途端、少女はシエルトの手をしっかりと握りそのままやさしい力で引いてくれる。その瞬間が、なんだか体がふわりと浮いたみたいで不思議な気持ちになった。

……すると、なぜか。

「……、……」

胸の辺りがじんわりとする。悲しいような寂しいような、なつかしいような……。

いろんな感情がごちゃ混ぜになったみたいでよくわからなくなるが、それは「楽しい」や「面白い」というものとは違う。

ほんとうになんだか不思議で。自分の知っている言葉だけでは言い表せない感情。思わず少女の手を見つめてしまっていた。

彼女の手が……差し伸べられたということが、なぜだか懐かしくていつまでも触れていたいという、そんな気になる。けれど握ったままというわけにはいかないのでそっと手を離れた。

冷たい風が吹く。風は少女の髪をさらさらと靡かせた。

艶やかな髪も、色白な手も、気だるそうな表情も、虚ろな眼差しも、彼女という存在が、その姿がすべて懐かしく感じるなんて。なぜそんなふう思うのか。

……それは、

(会ったことが……ある)

もうそれはずっと昔のことのように感じるけれど。懐かしくて、でもすごく悲しかった。

どうして悲しいのかは分からないがその悲しさには……かすかな怒りが混じっていた。

そんなめちやくちやな感情にどうしようもなくなってシエルトは少女の手をふたたび掴んでしまう。それはまるで、彼女をどこにも行かせない、というふうにも感じる。

懐かしき少女に触れることであらゆる感情が胸に伸しかかるのと同じ時に、頭の中にはひとつの文字が浮かびあがるうとしていた。

それは曖昧なものではっきりと思いつき出すことができない。必死に文字を導き出そうとするところちやこちやになる。でも、ゆっくりと考えるのなんて嫌だった。

今すぐにはやく思い出したかった。

……するといきなり。

「わっ……」

いきなり少女がシエルトの体を、腕を引っ張って引き寄せ抱きしめる。淡い、甘い香りが飛び込んできた。

驚いて身動きがとれなくなつて……それから。

(……………あ……………)

『ダリア』。

ふと浮かんだ文字。ようやくはつきりと思い出すことができた。けれど、ダリアとはなんだったか。一体なんのことだったのだろうか。せつかく思い出せたのにまた分からなくなる。

「……………ダリア」

つい、その言葉を口にした。すると自分の体を抱きしめている少女の腕の力がさっきよりも強くなった。……………まるでシエルトの言葉に反応したかのように。力を強めた腕は気のせいかすこし震えているような気がする。そして少女はいまにも風の音で掻き消されそうなほど小さな声で言った。

「シエル、ト……………、もう、思い出してくれないかと、思った……………」

「えっ……………？」

「……………あ……………、っ……………ごめんなさい」

突然謝る少女。

少女は申し訳なさそうな、そんな顔をしてシエルトの体からゆっくりと腕を解いた。よく見ると彼女の目はすこし涙に濡れているよう

だ。なぜ泣いているのだろう。

シエルトは動揺するがどうにか言葉を見つけて少女に話しかける。

「私、いまどうなってるのかよく分からないんだけど……この場所や、あなたの事も」

髪を風に靡かせて、今度ははっきりとした声でシエルトの問いに少女は答えた。

「ここは……なんて説明したらいいのか分からないけれど。今のあなたにとっては、夢を見ているということだと思っわ」

「夢？」

夢……。よく考えたらそうなのかもしれない。だってついさっき、自分はイヴェルと一緒に眠ったはずなのだから。

ならここは夢の世界なのか？夢だとしたら現実ではないのだろうか？この少女は、幻だということになるのか？

しかし「今のあなたにとっては」という部分が気になる。ただの、普通の夢ではないのかもしれない。

シエルトにとってこれは夢であり、しかしこの少女にとっては夢ではなく別のなにか……。

「ねえ、この場所は……まえにも一度来たことがある。ここは一体なんなの？」

「……私にも、はっきりとはよく分かっていない。でもあなた達の住む世界と同じように目には見えないけれど魔力が漂っているわだからもちろんフォーリーもいる」

魔力がある、というのは以前来た時に分かっている。ノックスが言っていたがここは魔力が普通より強いのだということも。

「あなた達の住む世界って……ここは私が住んでいる世界とは違うって？」

「そう。偶然見つけることのできた、強い魔力を持つ世界。ここはもうこんなになっちゃったけど、もっと遠くの方へ行けば人が住んでいるのです」

……こんな場所に人が？

そこまで遠くの方は行ったことがないが、こんな生命が失われたような世界に人が暮らしているなんて。生きているのはフォーリーくらいだと思っていた。

そして自分達の住む世界以外にも他に別の世界が存在しているとは初めて知った。

人間が暮らしているのに失礼かもしれないが、この世界に生まれなくてよかったと思ってしまう。なんだか常に危険にさらされていそうだ。

「それじゃあ……あなたは？私が前にここに来た時、会ったよね？」

「……っ」

そう聞かれると少女は悲しそうで悔しそうで、でも諦めを感じる、そんな表情になった。

それからとても小さな震えた声で……。

「……私が……いけないのよ……どうしてあんな事……」

手を握り締め、必死に涙を堪えようとしている少女。その様は胸が締め付けられるほどとても痛々しかった。

「どう、したの？」

シエルトの声に少女ははつとして、また「ごめんなさい」と謝る。

「……ダリア」

少女はぽつりとそう言った。

ダリア、それはさつき自分が思い出した言葉。

「ダリアは、私の名前」

「えっ……」

ダリアはこの黒いドレスを着た少女の名前。

どうして彼女の名前を自分は思い出したのか……。思い出したという事は、知っていたから、ということだ。

自分は彼女の「ダリア」という名前を知っていた。けれどなぜか今までずっと忘れてしまっていた。でも、いま思い出した。

どこで知ったのか？知っていたということは……。

(やっぱり、どこかでこの子と……出会っているから？)

前にこの世界に訪れたときよりも、更にずっと前に出会っている。

それはいつ、どこでなのかまるで思い出せないのだが。

あの妙に感じた懐かしさ。それは昔会ったことがあるからなのだろうか。

気になって、この少女ならなにか知っているかもしれないと思い聞いてみることにした。

76話 ブラック・ダリア？

ダリアは、こぼれそうになる涙を何度も手で拭った。涙を見せたくないのかもしれない。

「あの……ごめんね、私があなただの事思い出せないから……」

彼女がずっと悲しそうな顔をして時折涙を見せているのはやっぱり自分のせいだと、そんなふうに思う。

思い出してほしくないと言っていたけれど本当は覚えているかも期待していたのか。

ダリアという存在が懐かしい、というのは分かるのに、それ以上のことは何も……。

「……いいのよ、シエルト。あなたが思い出せないのは全部私のせいだから。思い出さなくて、いいよ」

そう言うとダリアは、悲しそうな顔を少しだけ笑顔に変えて笑ってみせた。

それを見てやっぱり「懐かしい」という感情は湧きあがるのだがそれ以外のダリアの事を思い出したりはしない。だけど、彼女の笑顔はずっと見ていたかった。

ふと、ダリアの言葉を思い出す。そういえば彼女は「どうしても会いたくなってしまう」と言っていた。

……これで彼女の悲しみを癒せるかどうかは分からないけど。

シエルトはそっとダリアの手を自分の手でぎゅっと握った。彼女にとって自分は会いたかった存在なのだ。だからこうして、できるだ

け彼女の側に、近くで触れてあげていようと思った。

「……ありがとう。シエルト」

「ダリアの事、はつきりと思いつけてないけど。懐かしいし、こうして手を繋いでいるのは嫌じゃない。なんだか落ち着く感じがする……そういうのは分かる」

「今日、塔であなたを見て、私の事にも覚えていないんだって理解して……だからそんなふうに感じてくれるなんて思わなかった。だけどいいの、もう。なにも思いつさなくていいの……」

思いつさなくていい……ほんとうにそれでダリアはいいのだろうか？けれど彼女は何度もその言葉を繰り返すから。

シエルトはダリアという存在を、無理に記憶の中から探るのはやめた。

でも、もしかしたら。彼女とこうしているうちに自然と思いつたりするのだろうか……。

それから二人は近くの瓦礫の山に腰をおろして聖神塔の話をしはじめた。

「ねえ、ダリア。今日……塔の場所に突然あなたが現れたからびっくりしたんだよ」

「ああでもないで大勢の人が死んでしまうことになると思って……」

たくさんの方が出てきてしまった塔にダリアが姿を現した。しかしダリアが来る前にあの翼を持ったものが姿を見せている。翼を持ったそれが大量の方を次々と殺していき、その後現れたダリアが残りの方を殺した。

そしてダリアと翼を持ったものは一緒に消えていった……。

あの様子から考えると、共にフォリーを殺しに来た、という感じだった。ダリアは、あの化け物のような姿をした存在を知っている、はず。

その事についてシエルトが聞こうとすると、

「……気になっているのかしら？ 天使のような大きな翼を持つ、彼のこと」

「ん、まあ、うん。ダリアはあれの事知ってるのかなって」

ダリアには、シエルトの考えている事が分かっていた。

「彼は……ああ、他にもいるから彼ら、ね。彼らはとくに名前を持っていなかったけど、私が『ランジユ』という名を与えたの」

それから軽く息を吐き空を仰いでからじっとシエルトの目を見据える。

今から言う事はよく聞いて欲しい、というそんな彼女の気持ちが伝わってきてシエルトは真剣に耳を傾けた。

ダリアはいままでよりもずっとしっかりとした声で話し出す。

「まずランジユの話をするなら、この話から始めた方が分かりやすいかもしれない……塔の神のはなし」

聖神塔の神。ずっと昔、戦争の最中。巻き込まれた自身の村を護る為に神となったという女性の事である。その女性があの塔のどこかにまつられているという事になっているが……。

実際ほんとうにいるのかどうかシエルトは半信半疑である。神、というのものにかの比喩かもしれないし。

「あの神のこと、シエルトは知っている？」

「なんとなくならね」

「そう。分からないことがあったら質問してね」

シエルトは小さく頷いた。

「あの塔の上におかしなものが現れたでしょう？」

「……うん」

「白い光に隠されてなにがいるのか分からない状態だけれど……」

あそこにいるのはね、塔の神なのよ」

「え……、え？」

いきなり「神なのよ」と言われても困惑してしまっ

神が実在しているのかどうかについては半信半疑で、しかもなぜ彼女にそんな事が分かるのか。

「えつと、それは……」

「あの塔に神は本当に存在しているという事。村を戦争から護るために、というのも全て事実よ。塔の天使達は神の存在は信じているけれど塔のどこにまつられていていかなんてはつきりとは知らなかったみたいね。あの光の中に神がいると誰も気付いてない」

まるで実際に塔の神と出会った事があるような言い方。それは、彼女が何者なのか分からなくさせるものだった。

塔の上のあれが本当に神だというのなら、なぜ突然あんなふうに現れたりしたのだろうか。同時に大量に現れたフォーリーは関係があるのか。

そんな頭の中に浮かぶ疑問をこちらが何も言わなくともダリアは勝手に答えを出してくれる。

「神は……あいつはね。神となったはいいけれど強い魔力を持ち過ぎて塔に封じられ、隠されることになった。ただまつられているってだけじゃないのよ。隠されているの」

突然彼女の口から「あいつ」という言葉が出る。

ほんとうにその神とダリアは出会っているような雰囲気があるし、このダリアが「あいつ」なんて呼び方をするとは思わなかった。なんとというかあまり塔の神を快く思っていないような感じがする。

「けれど長い時を経てあいつを隠していた力が脆くなってきたしまったのね。フォーリーがああやって現れたのは、神のせいよ」

「……？」

「強い魔力を持ち過ぎて、と言ったでしょう？封じ、隠していた力が脆くなったことであいつは時々目を覚ますようになってしまった。その時あいつの持つ魔力が勝手に動いてしまうみたいなの」

「……動くよ、どうなるの？」

おそろおそろ聞くシエルト。塔の神の存在が、想像していたよりもずっと恐ろしいもので……。

ダリアは少し悲しげで、なのにどこか苛立っているような。なぜだかそんな表情を見せた。

「そうになると神の強い魔力に惹かれたフォーリーを引き寄せたり、その魔力で新たにフォーリーを生み出してしまったりするの」

「あ………！」

それを聞いて、あの二つの光景が思い出される。

「塔のお祭りの時や今日のと違って……」

「そうよ。突然現れたあのたくさんのフォーリーは塔の神が目覚めたのが原因。この短期間で二度も目を覚ましている。二回なんて数が少ないようにも感じるけど、毎回フォーリーがああやって姿を現して……大きな被害を与えている」

二回といっても、あんなことが二度も起きるなんて大変なことなのだ。一回の被害がとても大きいからだ。

それにこのまま更に封じる力が脆くなっていけばもつと頻繁に目を覚ますようになるかもしれないのだ。そうなれば、どうなってしまうのか。

「塔の上に神が姿を現したのは、封じ隠す力がとても脆くなっていく証拠でしょう。いずれ完全に姿を見せることになるかもしれない」

ダリアはそう言うため息を吐いて俯いてしまう。

それからボソリと小さく口を動かした。

「……あんなの神なんかじゃ……ないわ。ただの、兵器なのよ……」

小さく、けれど力の入ったいらただしげな声がダリアの口から漏れる。だけどやっぱり悲しそうで、辛そうだった。

なんと言ったらいいのか分からないがこのどんよりと雲に覆われた黒くて灰色な空は今の彼女にぴったり合うかもしれない。それほどこの目の前のダリアは重く暗く見えた。

「ダリアは塔の神様が嫌いなの？」

シェルトにそう聞かれるとダリアは首を小さく横に振る。

「……さあ。よく分からないわ」

……冷たく強い風がおおきな音を立てて二人を通り過ぎて行く。その風はいまにもダリアを掻き消してしまいそうだった。

ダリアは風に弄ばれる艶やかな髪を手でおさえると、真剣な声色でこんな「警告」を告げる。

「塔の神がどれだけ恐ろしいか分かったでしょう？」

「たしかに危険だとは、思うけれど……」

「シェルト。だめよ、あの塔に近付いては」

じっとシェルトの目を見据えて、塔には近付くなど少し強い口調で警告するダリア。

どこか威圧感が感じられて返事をするのに数秒の間があいてしまう。

「う……うん。そりゃあ今は閉鎖されてるし、近付きたくても近付けないだろうけど」

「閉鎖が解除されたって、またいつあいつが目を覚ますか分からないのよ。絶対とは言わない。でも、なるべく近付かないようにして……おねがい」

そこまで強く言われてしまうと「嫌だ」なんて言えないし言う理由もない。

絶対に近寄らない、というのは無理だろうが、なるべく近寄らないようにするというのは可能だろう。なんだかそれは塔で働いている

人達に失礼な気もしてしまうが……。
今日の塔でのことを思い出す。なるべくだったらもうあんなことには巻き込まれたくない。もしかしたら大きな怪我を……それどころか死んでしまう可能性だってあるのだから。

「……うん。大丈夫だよ、ダリア。あんまり塔の方へは行かないようにするから」

ダリアは無言で頷き返事をした。
そして、ようやく塔の神の話をする理由となった「ランジュ」についての話がはじまるのだった。

77話 ブラック・ダリア？

「…………ランジュっていうのはね」

ダリアは瓦礫の山からそつと立ち上がって疲れきってしまったような目で空を見上げた。

彼女の黒がこの命を失ってしまったような世界と合わさり不思議と神秘的にうつつて、空を仰ぐ横顔が幻想を見ているような感覚にさせられる。

「ある方法により生み出された存在…………なのだけれど。正直、私にも彼らのことはよく分かっている。知っているのはそのある方法と彼らがとても強い力を持っているってことだけ」

どうして生まれてくるのかも、本来なんのために存在しているのかも知らないのだとダリアは言った。

それにそのある方法で生み出せているのはいいのだが完全に成功していないのかあまり強い力を持たないらしい。…………塔でのことを考えると、十分凄いと感ずるのだが。

ダリアはさらに大きな力を持ったランジュを生み出したいのだという。

…………生み出さなければ、ならないのだと。

「なんでそんなこと…………」

シエルトにそう聞かれるとダリアは少しの間目をつむり、そしてゆっくりと開いてから答えた。

「塔の神を殺すため、……壊すためよ」
「……」

彼女の言っていることがよくわからなかった。殺す、だなんて。でも、あまり驚きはしなかった。

ついさつきまで神の存在にたいして半信半疑だったのだ。それをいきなり実在すると言われても。しかも時折目を覚まし、それが原因で危険なことになると言われても。

最初聞いた時はどこか信じてしまったけれど、よくよく考えてみると「その話は本当なのか」と疑問に感じ始める。

実際にこの目で見たわけではないし……ダリアが嘘を吐いていると言いきるわけではないが、思っていたより話が大きくてなんだか架空の創作物語を聞いているような気分なのだ。

……こんな現実感のない夢の世界にいるせいもあるのかもしれないけれど話の内容がめっちゃくちゃというわけではなく、なぜ彼女が殺そうとするのか。その理由はなんとなく理解できる。

「その神様は危ないから、だから完全に姿を現すようになる前に消しちゃおうって……そういうことでいいの？」

「ええ、そうよ。あんなものはさっさと壊してしまったほうがいい」

たしかに、ダリアの言っていることがもし本当だとしたらこのまま塔の神を放置しておくわけにはいかないのかもしれない。

しかし彼女ひとりの力でどうにかなるものなのだろうか？そのランジュという存在の力を借りたとしても、今の段階ではまだ完全に生み出すことに成功しているわけではないようだし……。

完全なランジュを生み出すというのは、神を封じ隠している力が消

え去るまでに間に合うのだろうか。

ダリアがたつた一人で何かしようとも。塔の神を殺すなどという計画は本当に実現可能なのかどうか……神というものが具体的にどれほどの力を持つのかなんて知らないが、そんな存在の前では人間など、あまりに非力な気がしてならない。

「ねえ、塔の天使の大人達に協力してもらったら駄目なのかな？
そういう人がいたほうがね、いいような気がする……」

塔の天使達が信じるかどうかは分からないが、塔はおかしなことになるしこの状況だともしかしたら、なんて思う。
けれどそれはダリアによって拒否された。

「塔の天使の中にはね、神の狂信者みたいなのがいくらでもいるのよ。天使でなくなつてそういう人間はいるの。神を壊すから協力しろなんて言つたら……ええもう、想像するのも恐ろしいくらいだわ」

「……そ、そっか。そうだよな」

狂信者は一度もお目にかかったことがない。なのでそういうことはまったく考えていなかった。

フウカやルイスならばひよっとしたら協力してくれるかもしれないが……、狂信者というと大抵は塔の中でも地位が上、というイメージがある。

そう考えるとフウカ達にそんな狂信者を怒り狂わせるようなことはさすがにできない。

それに塔で働いているくらいなのだから二人にも神に対する信仰心というのはあるだろう。

塔の人間に協力してもらおうというのは無理なのかもしれない。

「……難しいはなしだね」

ダリアは本当に神を殺そうとしているのだろうか。でも実際にランジユを生み出すことまではしているのだ。本気、なのだろう。

「その神様のことは、多分だけどダリアしか知らないことだから……だから真実を知っているダリアにしか神様を殺すっていうのはできないのかもしれないけど。このまま放っておいたら大変なことになるっていうのも理解できるんだけど」

そこまで言っ言葉が詰まってしまっ。

なんて言えばいいのかわからない。だが、言いたいことがあつた。

「……ごめん。正直言っダリアの話、信じきれてるわけじゃないの」

「いいのよ、べつに。信じられないのはわかってるから」

「うん。だからね、変なこと言っかもしれないけど……どうしてダリアなのかなって」

ダリアはきょとした顔をする。

シエルトも、自分でなにを言っているのかよくわからない。

でも「どうして」という疑問が渦巻いて、とりあえず思ったことを口に出す。

「ダリアにしかできないってことも、放っておいたらいけないってことも、誰にも協力してもらえないってことも分かってるんだけど」

「……ええ、そうね」

「どうしてそんな危なくて大変なこと、ダリアがひとりで全部やらなきゃいけないのかなって……その、思ったり」

なぜダリアにしかできない事になってしまったのか。

どうしてもずっと大人な人間ではなく、少女のダリアがやらなければならぬのか。

この少女がひとりでどんなに頑張っても誰も協力してくれないし気付かない。ダリアはなぜ、そこまでしなければいけなくなってしまったのか。

……艶やかな髪を揺らしながらダリアはくすりと笑った。

「ほんとう、なんで私なのかしらね……でも。そういう事に、なっちゃったのよ」

「……」

なにか理由があってこんな事になっているのは分かる。ダリアは本当に、ひとりで神を殺すつもりなのだろうか。

「ありがとうシエルト。神を壊すという事……どうしたらいいのか分からなくなって、もう一度あなたと話がしたくなってここへ呼んでしまったけれど。こんな事、許されるべきじゃないのに……」

許されないという、その意味は分からない。どうして彼女はそんな事を言うのだろうか。

「ダリア……」

「あの時は思わずあんな『約束』をしてしまったけれど。あなたは、私を許してはダメよ。あなたにあんな事をしておいて、なのに

心細くなったらあなたを呼んで。私はなんて……都合がいいのかしら

「……………えっ？」

『約束』。それは、なんの約束なのか。

……………思い浮かんだのはあの幼い頃の日記に書かれていたこと。「あの子」と、約束をしたと。

「……………さて。そろそろあなたは目を覚ます頃よ」

「ダリア、約束って……………！」

問い詰めようとして、けれどダリアはシエルトの言葉を聞かない。

足は地にたしかについているはずなのに、突然ふわりと体が浮いてしまったような感覚におそわれる。自分の声が出ているのかどうか。体を動かしているのかどうかも分からない。

すてられた廃墟達が、瓦礫の山が、命を消したような空が、すべて段々とかすれて、見えなくなっていく。

約束の事を叫ぶけれど自分の声はまったく耳に届かない。それどころか冷たい風が吹く音も何もかも聞こえないのだ。

なのに、完全に意識が消えかかるその直前。

頭のなかにダリアの声が小さく響いた。

「あなたが私を許さなくても、私はあなたが好き」

それから、

「…………る、し…………？」

シエルトの口からこぼれた言葉。…………ダリアの言葉。

「ルシファーには気をつけろ」と。たしかにその言葉が、声が、頭の中に響いた。

…………まぶしい。

なんでこんなにまぶしいのだろう。…………。

ああそうか。朝だから、か…………。

「あひゃー、シエルトちゃん、起きて起きて〜朝ですよー」

「……………」

ふ、と息が漏れる。

ゆっくりまぶたを開くと、目の前にはイヴェルの笑顔が咲いていた。…………夢から覚めた。あの世界から戻って来た。だから、そこにはイヴェルがいる。

ぼうつとする体を無理やり起こしてシエルトはイヴェルに「おはよう」と言った。けれど、頭の中にはまったく別のことがあった。

寝起きの、ふらふらとした足取りで引き出しから一冊のノートを取り出す。幼い頃の日記である。あの記念祭の日以来開いていなかったが……。

「約束」のことについて書かれたページをそつと開いた。

「……………ダリア」

黒い少女の名を呼んでみる。

また、彼女に会えるのだろうか。それとももう会えなくなってしまったのだろうか。

ダリアとの約束を……………どうしても知りたかった。

78話 大人になれない兎

ありとあらゆる人間と喧騒が行き交う場所。人混みのなかのレーヴを、フィリップとその友人が歩きづらそうに歩いていた。友人が前を、フィリップがその後ろをついていく。

二人は閉鎖された聖神塔の方へと向かっていた。

「ね、ねえリオト……やっぱりさ、危ないかもしれないし、やめた方がよくない？」

「なにが危ないんだよ。見に行くだけじゃないか」

「だってあんまり塔の方へは行かないようにって学校の先生言ってたし……」

塔の上に現れた妙な物体。そして祭りの時と同じようにまたフォリ―が現れたこと。

それらの情報はすぐに雑誌や新聞、ニュースなどで伝えられ、もう誰もが知っている事件になった。

先生達からはなるべく塔には近寄らないようにと注意されたが、ほとんどの生徒はそんな言い付けを無視して早速塔の姿を見に行っている。

周囲にも安っぽいカメラを片手に持っていたりプロが使うような本格的な写真機を首からさげた人間が何人も歩いているのだ。彼らの目的は分かりきっている。

「真面目だな」

「なにがあつてからじゃ遅いんだよ？」

フィリップは祭りの時に一度経験している。だから、なるべくだったら本当に行かない方がいいと思っている。

「それに塔が閉鎖っていつてるけど、実際には塔の周辺もほとんど行けないようになってるから……どうせ見れないでおわると思うんだけどなあ」

近辺ごと閉鎖され塔には近寄れないうえにもうすでに大勢の見物人が押し寄せているだろう。

見れないどころかとても大変なことになりそうだった。

「そんな事はわかってる。でももしかしたらってこともあるじゃないか」

「はあ……」

たぶん、もうなにを言っても無駄だと思ったフィリップは結局リオトと一緒に塔へ行くことになってしまった。

予想していた通り。

塔の周辺はめまいがする程に大勢の人だかりができていて、とてもじゃないが何時間待っても近付くことはできないだろう。

「わー、すごいねえ」

塔は空に向かってまっすぐ伸びるとても背の高い建物。多少遠くても天辺くらいなら見ることはできるのだ。しかし、見えない。

「……どっ？」

「あー、遠過ぎて……たしかになにか変なものが上にあるのはな

んとなく……分かるんだが」

天辺がそこにあるというのは分かる。

ただここからでは「言われてみれば天辺に見慣れないものがあるよ
うな気がする」程度にしか見えない。これでは見えないのと一緒だ。

「だから言ったでしょ？」

「そうだなあ……もうちょっと近付けると思ってたんだけどな」

リオトは諦めたようにかるく溜息を吐いた。

もう一度上を見上げてみるが、塔のそれは鮮明にうつらない。しつ
かりと見たければ新聞でも読めばいいしニュースを見ていればいい
のだ。必ず塔の天辺の姿を大きくうつした画像や映像が目に入る。
すると、誰かがフィリップの肩と軽くぶつかった。それはほんとう
に軽くだったのだが、ぶつかった「誰か」はドサリと音を立てて転
んでしまったようだ。

慌ててその「誰か」の方を向く。

「だ、大丈夫？」

フィリップが手を差し伸べたのは、垂れた兔耳がついた黒いシクル
ハットと真っ白なエプロンドレスに身をつつむ少女だった。

変わった格好だけれど可愛らしい子だなとフィリップは思った。

おそろおそろ手を伸ばす彼女は一見幼いように見えるのだが、手を
引かれて立ち上がると意外にもフィリップより背は高めで年上なの
では、と感じさせられる。

ありがとっございます、と小さな声で言う少女。どこか顔色が悪か
った。

そして、

「……っ」

少女はフィリップの顔を少しの間じっと見つめると、驚いたような怯えたような反応を取ってそのまま走り去ってしまふ。まるで逃げてしまったみたいだった。

不思議に思いつつなにか失礼なことをしてしまっただろうか、とフィリップは不安になった。

「……ウサギ？」

シエルトといつもの二人の姿が、めずらしく図書室にあった。

小さな四角いテーブルの上にはそれぞれ三人の筆記用具やノートなどが置かれている。勉強会のようなだった。

普段はこんなことはしないのだが、出された宿題の内容が思ったより難しそうだったためイヴェルに教えてもらいながらやる事になったのだ。ちなみにフィリップのクラスも似たようなものが出されたので教えてもらう事に。

だがシエルトの言った「ウサギ」という言葉は宿題とはなんの関係もない。

いまはすこし休憩しようということになって、そこでフィリップが昨日出会ったという少女の話をはじめたのだ。

「兎耳の帽子の女の子。変わった格好の子だったんだけど僕の顔見たら逃げちゃって……」

「へえー……ぶつかったんでしょ？金でも巻き上げられると思っただんじやないの」

「うう……僕そんな事……しない」

「あひゃー、フィリップ君は巻き上げられちゃうほうだよね」

「えええー……！」

僕ってそんなふうに見えるのかな、とフィリップは本気で考え出してしまった。

ある程度宿題も終わり、残りは明日にしようということになった。外はもうオレンジ色に染まってもいい頃だったが今日は立派に曇っていて夕日がレーヴを照らすことはないようだ。

図書室にいた他の生徒達も寮に戻る支度をしはじめて、次々と部屋を出て行く。

「……」

校舎の外に出てシエルトはイヴェル達とこのまま寮へ戻るつもりでいた。

しかし、気まぐれなのか何なのか。ちょっと散歩でもしようかな、という気になったのだ……。

散歩といつても人混みに入り込むのはいやだったので、ダイアナと初めて出会った場所の近くにある本屋にでも行こうかなと考える。あそこはほんとうに人が少ない。

そんな事を思いながら、気付くと自分が塔の付近を歩いていることに気付いた。

近い場所、というだけでここからはあまり塔の姿は見えないが、人だかりができているのは騒がしさで分かる。

……夢の中でしたダリアとの約束。

危険かもしれないから塔へはなるべく近付かないでと言われた。彼女のする話が本当だったなら。

もし、今。神が目を覚ましたりしたらあの人だかりはとんでもないことになるのだろうか、と想像する。頭の中に浮かんだ映像はとも恐ろしいものだった。

ひょっとしたら塔周辺が人間の体から漏れてきた液体で赤い海と化してしまうのかもしれないのだから。

本屋へは行ったけれど、とくに気になるようなものはなかった。というかそもそも持ち合わせがなかったことに気付く。寮へ戻らずそのまま下においてきたものだから……。

どうしようかなと思いながら今度は久しぶりに自分の家の近くでも歩こうかと思った。

……もう夕方だというのに。空は雨だつて降りそうなのに。なんでこんなことをしているんだろうと、自分で散歩に行くことにしたのにそんな事を考えてしまう。

(……あ)

ふと横を見ると、そこには幼少の頃よく訪れていた懐かしい公園があった。

あの頃と比べると遊具はだいぶ汚れてボロボロになっている。自分がたまに乗っていたブランコは撤去されていて、新しいブランコが別の場所に移動しているのを見るとすこしさみしく思う。

この時間にこんな天気だからか人っ子一人いない。

公園に足を踏み入れると、いくつか幼少の頃と変化はあるものだった。変わらずのままだった。砂場に置き去りにされた小さいスコップなんかもよく見る光景だった。

そんな砂場の横にある木材のベンチ。そのベンチにシェルトは公園に来るたびひとりで座っていた。

(遊ぶ子なんていなかったからなあ)

公園に行くとなんかいていひとりぼっち。なのに幼い頃、よく公園に通っていた。たぶん誰かが遊びに誘ってくれるのを待っていたのだから。自分からは恥ずかしくて声なんて掛けられなかったのだから。薄汚れたベンチを懐かしむように腰掛ける。昔、自分はここからずっと楽しそうに遊んでいる子達を眺めていたのだ。あの中に自分から入っていけたらどんなに楽しかったらうか。

(結局だれとも遊べないのが悲しくて、いつの間にか公園に行く

こともなくなっただけで……、……あれ？)

ほんとうにそうだったけど、よく思い出してみる。

たしかに公園に行く回数は次第に減っていったのだろうが、でも……。

誰かが声を掛けてくれた。手を差し伸べてくれた人が、このベンチから立ち上がらせてくれた人がいなかったのだろうか。

(私もその人の手を握ったはず……)

白い手だったと思う。髪を風に揺らしてよく笑っていた。

それから……黒い。

「ダリア……」

黒いドレスのダリア。

遊びに混ざれずひとりでベンチから眺めるだけだった自分に声を掛けてくれた優しいあの子。それは……。

ダリアなのか。

でも記憶にあるのは幼少のダリアではなくて夢の中で話したあのダリア。

ダリアはシェルトが幼かった頃からなにも変わっていない……。

(私はその時、はじめてダリアと会ったのかな……やっぱりダリアとは前にも会ったことが……)

するとどこからか視線を感じることに気付く。

その視線の主は、ぼーっと考えていたから分からなかったのだろう、
なんとすぐ真横に立ってこちらを見ていたのだ。
ここまで気が付かなかった自分にも驚くが、いつの間にかいた視線
の主にはさらに驚いてしまう。

「え、ええと」

こちらを見つめるそれは尚も視線をはずさない。

その視線の主は、もちろん見たことのない人だ。幼く見えるのだが
身長からしてたぶん自分と同じか上くらいだろう。

白いエプロンドレスと兎耳の帽子の

「…………あれ。それって」

フィリップの言っていた、逃げてしまったという少女。

もしかしてこの目の前の人間がその少女なのではないのだろうか…
…。

79話 大人になれない兎？

じっとこちらを見つめたままの兎帽子の少女。

シエルトはどうしたらいいのか分からない、ただこのままにいるわけにはいけないのでおそろおそろ声をかけた。

「あ……えっと。どう、したんでしょう……」

「……」

「……あの」

何を言っても少女は表情ひとつ変えることなくただこちらを見続けているだけだった。どうしたらいいのだろう、と困っていると。

「……あ……」

すこし顔をうつむかせて、少女はようやくかき消えそうなほど小さな声をひとつ、発した。なにか言おうとしたのか、それともただ声を出しただけなのか分からない。

少女はすこしだけシエルトから離れる。そしてなにか……口を小さく動かしているのが分かった。

最初それは動かしているだけのようにも見えたのだが、よく聞いてみるととても小さな声であるひとつの言葉を繰り返しているのだ。

「やっぱり……やっぱり……！ああ、やっぱり……あなた……」

「……？」

なにが「やっぱり」なのかさっぱり分からず、そしてもうなんと声を掛ければいいのかも分からない。放っておいてもいいのだろうか、とも考えたがそういうわけにもいかないような気がした。

「あなた」というのはシエルトのことだろうし、この少女は自分になにか用があるのかもしれない。

……正直少し怖いのだがもう一度声をかけてみることにした。

「えっと、その。私になにか……？」

少女は黙ってこちらを見る。忙しく動かしていた口もぴたりと止められていた。それもそれでなんだか不気味に感じてしまう。

だけど少女は、今度はきちんと口を動かして声を聞かせてくれたのだ。

「ごめんなさい、すみません。驚かせてしまいましたね」

さつきとはまるで別人のようにとてもはっきりとした口調。聞き取りやすい声の大きさ。

それにいきなり謝られて、驚くシエルトは「いや……」としか返事をするのができなかった。

そんなシエルトを気にすることなく兔帽子の少女は言葉を続けた。

「何年も前に、あなたと似ている女の子と会ってるんですよ。今はあなたくらいの年齢に成長しているはずで……だから」

「あ、私をその子だと思ったの？」

「はい……すみません」

深々と頭を下げ、礼儀正しく謝ってくる少女。最初の雰囲気はまるでどこにも無い。

友人から、塔であなたと似たような子とぶつかったと聞いた、と話したら、少女はたしかに昨日は塔にいたし人とぶつかってしまったと言った。やっぱり彼女はフィリップの言っていた子で間違いないのだろう。

兎耳のついたシルクハットに白いエプロンドレス。

話を聞いただけでも変わった格好だと思っていたが、実際に見るとほんとうに変わっていて、そしてとても可愛らしい子だとおもった。すると少女はベンチの、シエルトの隣に腰をおろした。

……昔会った子に似ていて、と言っていたし、もしかしたら自分と話がしたいのかもしれない。

「私……この辺りに来たのは久しぶりなんです。いまはちょっと、あまり外に出てはいけないような状況で」

その状況がいつたいたいなんなのかを聞くことはしなかったが、なんとなく病気が何かなのかな、と思った。

「昨日もようやく塔のほうまで行ったんですけど。閉鎖されてダメでした」

「うん、いま……大変なことになってるしね」

この少女もまさか塔の天辺に現れたあれが、塔の神だとは思っていないだろう。

正直シエルトもダリアの言っていたことを信じきれではないのだが。

「はい。大変なことになっているそうですね。人がたくさんいてびっくりしました」

……そう言ったときの少女の表情はとても大人っぽくて、なのに兎帽子なんて頭に乘せていて。そのギャップがとても不思議でなぜだか神秘的に見えてしまった。

「なんか……喋り方とかもそうだけど。あなたって意外と大人っぽい感じがする。えっと……なんて言ったらいいのかよく分からないけど」

そんな事を言われると、少女はふふつと笑って空を見上げた。

「そうですか？でも私、大人になりたくないんです」

「そう、なの？」

「はい。そうなんです。最近、離れ離れになっていた母と再会して一緒に暮らせるようになって。でも私……もう小さい子供とはいえない年齢でしょう。私は前から母と、幼い子供時代を過ごしてみたかったんです」

さあつと風が吹いて、少女の表情はいまのこの空と同じになってしまったような気がする。

重くて、暗くて、灰色だった。

「そっか、甘えたかったんだね」

「そうです。べつにいまの年齢でも甘えたってかまわないのでしよう。でも……幼い子供が母親に抱っこをねだったりするのを見ると羨ましくて。私、小さい時にそういうのがしたかった……」

「……」

「だから私、母の前では口調とか仕草とか、すごく小さい子供みたいになっているとおもいます。子供みたいに振る舞って、すこしでも過ごしたかった子供時代を楽しもうと。できることなら……大人になんてなりたくないんです」

すつと目をつむった少女はかるく、ゆつくりと息を吐いた。

たしかにこのまま大人になっていけばいずれは甘えることもできなくなるのだろう。そしていつかは……親は死んでしまう。

そんなことを考えると少女の気持ちは分かる気もするし、いつまでも子供でいたい気も分かる。

大人になって、いつかは周囲にいる人や……イヴェルやフィリップとも別れたりするのだろうか。子供っぽく見られるのはあまり好かないが、そういうのはなんだか悲しかった。

「……すみません。私、変な話をしたとおもいます」

少女はまた、深々と頭を下げるのだった。

「それである、ひとつお聞きしたいことがあるのですが。よろしいでしょうか？」

「え？ああ、うん」

「その……あなたのつけているブレスレットのことなのですが」
シエルトの腕には、前までは銀色のビーズのものがつけられていたが……それはいまフィリップのもとにあり、いまは姉からもらった鈴のついたものをつけている。

少女はブレスレットをしばし見つめて、それから質問を始めた。

「それはいつ頃からつけていますか？」

「これは……つい最近だけど」

「そうですね。では、その前に別のはつけていませんでしたか？」
なぜそんな事を聞くのだろう、と不思議に思いつつシエルトは答える。

「うん、つけてた。銀色のやつを……」

「……銀、色……」

少女の表情は……とても厳しかった。なぜそんな顔をするのか分からない。手をぎゅっと握りしめて、ただブレスレットを見つめていた。

どうしたのかと聞こうとして、しかしそれは公園の向こうから聞こえてきた一人の女性の呼び声によって遮られた。

「……………ルシファー！」

「……………」

ルシファーと女性に呼ばれて、兎の帽子の少女はぴくりと反応する。それがこの少女の名前なのだろうか。

しかし、声の主である女性を見てシエルトは……思わず自分の目を疑ってしまう。

「えっ……………ダイアナさん……………」

「……………あ、シエルトちゃん!？」

そこにいたのは、兎帽子の少女の名前を呼んだのはダイアナだったのだ。しばらく会っていないくて……こんなところで出会うとは思わなかった。

ダイアナも驚いた表情でこちらを見ている。

ただそこでシエルトはひとつ、あることを思い出した。

(……………ん、そういえば……………ルシファー、って……………)

どこかで聞いたことのある名前。……………そう、塔でルイスから聞いたのだ。

塔の天使達はいまルシファーをさがしていて、なぜそんなことをするのかというとそれはルシファーが「危険」だからで……。

そんな事を思い出しているうちにダイアナはルシファーの手を握ると小さく頭をさげて、慌てた様子で公園から出て行ってしまった。なにが起きたのか分からず呆然としてしまう。一人きりとなった公園でシエルトは必死に考えていた。

（えっと、え……？でもルシファーって、名前は偶然同じだっただけかも）

しかしダイアナは、あの少女と……ルシファーとどういう関係なのだろうか。

ルシファーの名前を呼び捨てで呼んで手を引いて……まるでそれは母娘のようだった。

80話 もう会えぬ少女

時間は夜の十時を回り、カーテンの閉められた寮の部屋。

シエルトはベッドに寝転がりその隣でイヴェルがせっせと編み針を動かしウサギのぬいぐるみを編んでいた。ウサギというのは、今日フリリップの話聞いたからである。

だが壁に掛けられた時計を見てイヴェルの手が休む。

「あ、もうこんな時間だねえ。そろそろ寝る？」

そう聞かれたシエルトはむくりと起き上がり「そうだね」と返事をした。

……今日公園で出会ったあの兎少女。

そういえば以前、ダイアナは自分に娘がいると言っていた。それがもしかしたらあの少女……ルシファーなのだろうか。

そんな事を考えながらぼーっと天井を見つめていると、

「シエルトちゃん、電気消していいー？」

イヴェルが電気スイッチの前に立ってそう聞いてきた。

「あ、うん。いいよ」

返事をした途端パチリと小さな音がして、部屋は真っ暗になる。

布団のなかに潜り込んだシエルトは静かな空間の中、目をつむった。

「……………」

一瞬、とてつもない息苦しさに襲われた。しかしその息苦しさをすぐに解かれ冷たい空気が喉を通って入ってくる。重く感じるまぶたは自然と開かれた。

目を開けるとそこは……………これで三度目の世界。光を通さぬ重苦しい空、壊れた廃墟と瓦礫の山、灰色の景色。

ダリアのいる世界だった。そう分かった瞬間、倒れていた自分の体をすぐに起き上がらせる。

「……………ダリア……………！」

思わず彼女の名を声に出す。

いそいで辺りを見回すが、黒いドレスを着た少女の姿はどこにもなかった。でも、自分がここにいるという事は彼女に呼ばれたということ。

かならずどこかにいるはず。

そう信じて歩いて、彼女を見つけるのにそれほど時間が掛かることはなかった。すぐに「彼女の声」を見つけることができたのだ。

それは、どこからか聞こえてくる囁り泣く声。いまにも崩れそうな建物のもの影に隠れて……………。

「ダリア……………」

冷たい空気のなかでうずくまって肩を震わすダリアがそつとこちらを振り向いた。黒いドレスのスカートはすっかり涙に濡れていて、それはそれで綺麗に見える。

ゆっくりと立ち上がったダリアは何も言わずシエルトの肩に手をまわしてそのままふわりと抱きしめた。それから声にならないような小さな声で、何度も謝り続けていた。

「ど、どうしたの？」

そう聞いてもダリアは同じ言葉を繰り返すだけ。こちらの言葉が届いていないのかと思うほどだった。

それでもシエルトは、今度は別の言葉をかける。

「私、もうダリアに会えなくなっちゃったかと思ったんだよ。いきなり夢から覚めちゃっし……！」

「……」

……そつとシエルトから腕を離すと、下をつつむいたまま涙をこぼしてようやく返事をしてくれる。

「うん……もう、これで最後。シエルトと会っの、これで最後だから……」

「えっ……」

「言ったでしょう？ほんとうはここにあなたを呼ぶなんていけなかったって」

ダリアは涙を力強く拭ってスカートを握りしめた。

「私が、シエルトとこうして会うなんて許されないはず、だけれど……でも、どうしてもあなたに会いたくなっちゃって、でも、もうこれで最後に……する。勝手に呼んで、勝手に終わりなんてあんまりよね……ごめんなさい」

自分がダリアと会ってはいけないだとか、突然謝りだしたりだとか。彼女の言っていることはよく分からない。そしてそれは、聞いたとしてもおそらく、なにも答えてはくれないだろう。ダリアがわからない。

だけでもし、もう会えないのは嫌だなんて言ったとしても。会ったびに彼女は「本当は会っちゃいけないのに」なんて思ってた傷付くことになるだろうから、シエルトはそんなことは言えなかった。なんにも言えずにただ黙っているしかなかった。

「最後にあなたを見ることができれば、もういいわ。……あの神を壊すことのできる、そんな存在をつくりだそうとしたけど……もう、だめ」

「ダリア？」

「いまあるものではなく、つくりだせない……やっぱりだめだった」

「いまあるもの？えっと……ランジュだっけ。あれをつくるのになにか必要なものがあるんだ」

ダリアは力無くうなずいた。

なにが必要なのか、とても想像がつかない。

「ここにいるフォリー達を利用していただけ、でもやっぱりそれじゃだめだった」

ふ、と空を見上げるダリア。まるで何かを決意したような、そんな

目だった。

それからその目をシエルトに向ける。また、泣きそうな目に戻っていた。

そして突然……。

「……ばいばい、シエルト」

そう告げたダリアは涙をこらえているかのように下唇を噛む。

シエルトは「待って！」とあわててダリアの腕をつかんだ。まだ聞きたいことがあるのだ。過去にダリアとはどういう関係だったのかとか、「約束」のことだとか。

話したいことがたくさんあって、しかしダリアはそれを許さなかった。つかまれた腕を、乱暴に振り払う。

もうダリアはなにも言ってくれなかった。

しゃがみ込んで、顔を隠してひとり震える彼女の姿は……また泣いているのだろけれど、もう声が聞こえない。

「……やだ！ダリア！！」

そんなふうに叫んでみたけれど。もう彼女は顔をあげてくれなかった。

「……」

目が……覚めてしまったのだろうか。
頭の中が空っぽになってしまったようでも考えられない。すこ
く、真っ白だった。

イヴェルの声が聞こえる。いつもの朝だ。

「おはよ〜シエルトちゃん〜」

いつもならその声ですぐに起き上がるシエルトだったが、いまは返
事をする気力すらなかった。ただ、ぼうつとしているだけ。

（……これで最後）

もう本当にダリアとは会えなくなってしまったのだろうか。ダリア
があの世界に呼んでくれない限り、彼女との会い方なんて知らない。
たくさんあった聞いたかったことはもう聞けないし、もう彼女の顔
を見ることはできない。声も聞けない。

（塔の神様の事とか……どうなっちゃうんだろう）

ダリアはこれからもずっと、ひとりで……。

「シエルトちゃんー？どうしたのー？」

ひょっこりと顔をのぞきこむイヴェル。不思議そうな顔をしていた。夢のなかでなにが起きたのか。彼女になにを言われたのか。わけが分からなくなりそうだった。ダリアのことを考えるだけで混乱してくる。

だから一度夢のことなんて忘れようと、無理な笑顔をつくってみた。

「ううん。なんでもないよ……」

「？……そつかー。なんかね、ちよつと昨日の夜学校で大変なことがあったみたいで」

「大変なこと？」

とりあえずベッドからおりるシエルト。

そんなシエルトの髪にすこし寝ぐせがついてしまっていたようで、イヴェルはくすりと笑うと黒いヘアピンでとめてくれた。

「うん、学校でっていうか……下級生の子たち三人がね、夜中に寮を抜け出してどこか行っちゃったみたいなんだよね」

「へえ……」

「でね、なんかその三人が朝になっても帰ってこないらしくて……。レーヴのどっかで遊んでるんでしょ？」

夜中に抜け出す生徒はよくいる。一応門限は決まっているのだが、全員がそれを守っているわけではない。

「さがしてるらしいんだけど……どこにもいないって。まあレーヴはすごく大きいからね。ほんとうにどこかで遊んでるだけなのかも。でも……」

「……っ？」

81話 もう会えぬ少女？

「ルシファー……ちよつといいかしら？」

覆い茂る木々に囲まれた屋敷。

いつものように人形達と茶会ごっこをしているルシファーはダイアナのほうを振り返って「なあに？」と返事をした。

人形達はあわてて椅子を運び出してそれをテーブルの横に置くとダイアナに座るように促す。

「ありがとう。……あのね。昨日のこと、なんだけれど」

ゆっくりと椅子に腰かけながら静かな口調で話し始める。昨日のことと聞いてルシファーは、すぐになんの話かを理解できた。

「あの女の子とは、昨日の公園で初めて会ったの？」

「そうだよ。一緒にお話したの」

そう言うとカップの紅茶を一口飲もうとして、けれどルシファーの手は止められた。

ふう、と軽く息を吐き、カップのなかで揺れるお茶をじつと見つめる。ルシファーがなにか言いたいことがあるのかもしれないと感じたダイアナは、なにも喋らず黙っていることにした。そんなダイアナに気付いてもう一度ため息をひとつ。

「ママ……ママはあの子のこと知ってる……よね」

昨日の態度、反応を見て分かる。ダイアナはその子の名前だって呼

んでいたのだから。
ダイアナはこくりと頷いた。

「あの女の子の名前ね、聞きそびれちゃったの。ママたしか昨日名前を言ってたよね。なんていう名前、だっけ……？」

すこし震えたルシファアの声。まるでなにかを恐れているようにそんな質問をする。

その様子に、正直に答えてもいいものかとダイアナは迷ってしまったが、おかしな返答をしてよくないことになってしまっただけは困ると思ひ正直に名前を教えてあげる。

「シエルトちゃんよ。まえに落としたハンカチをわざわざ拾ってくれたとても優しい子で……、……？」

ルシファアの顔色がひどく悪くなっていることに気付く。うつむき、スカートを強く握りしめて。

二人の邪魔をしないようにと少し離れた場所で遊んでいた人形達は心配した様子でルシファアに声をかけている。

「ママ……」

とてもちいさな声だった。それでもダイアナは聞き逃さず、しっかりとうなずく。

「嘘じゃないよね？もしそうだったら、私怒るよ」

「何言ってるの……嘘なんて言うわけないわ」

そう言われてルシファアは「ごめんなさい」と謝った。普段の彼女ならきつと母の言葉を疑ったりはしなかっただろう。だからこんな

ことを言ってしまったのは自分でも信じられないようだった。人形達の慰めの声は彼女の耳に届かず、さらに顔色を悪くしていく。気分がわるくなつたのかルシファーは椅子からふらふらと立ち上がると、おぼつかない手つきで窓を開けて森の空気を吸いこんだ。

「……やっぱりそうだったんだ。あの子はシエルトだった……だって、似てると思ったもの。あの日、彼女が連れてきた子に間違いないんだわ……」

「ねえ、ルシファー」

ダイアナも立ち上がり、窓辺でうつむく娘に歩み寄る。そしてとても優しい声で言った。

「あなたが今までママに言えなかったこと、全部話して？ママ、ちゃんと全部聞いてあげるから」

ルシファーはあの日「大勢の人の命を奪ってしまった」と言った。けれどそれ以上のことは話さなかった。塔にいたころ犯してしまった罪を告白するだけで精一杯だったのだろう。

でも、母親として娘の隠している罪を知らないわけにはいかない。知らないままでいいなんてことはできない。

知ったあとはどうすればいいのか……それはまだ、分からないけれど。

「ママ……ぜんぶ話すよ、私。もうママに隠し事なんてしないから。だから、聞いてね」

少女の目には涙が溜まっていた。でもそれを零すのは、堪えていた。

「私はあの日、身勝手な理由で事件を起こしたわ。『ある儀式』
を行つたためだったの……」

(またここに来ちゃった……)

子供の姿の見えない公園のベンチでシエルトは空を見上げながらぼ
ーっとしていた。時間も昨日来たときと同じくらい。昨日と同じ公
園の光景が目の前にある。だいたい天気も似たようなものだった。
ここへ来ると、夢の世界でもないのにダリアに会えそうな気がする。
このまま彼女のことを思い出したりはしないだろうか。
そうすれば意味の分からないダリアの言葉を理解することができ
るかもしれないに……。
とにかく知りたいのはダリアが謝る理由。「私が悪い」だとかそん
なことはかり言っていた。まるでダリアが自分になにかしたかのよ
うだ。
それから約束のこともだ。日記の「あの子」というのがもしダリア
だったとしても、約束の内容までは分からない。
……せめてもう一度だけでも会えないだろうか。シエルトはそう思
っていた。

「……」
「お前は何をたそがれているんだ」
「……びっくりした、あんたかあ」

いつの間にかすぐ近くに、なぜかクロードの姿があった。ルシファ
ーの時もそうだったが、なんだかここに座っていると自分の周囲の
事がまったく目に入らなくなる気がする。
というか、まさかこんな場所で知人に……彼に会うとは思わなかつ
た。

「なにか用？」
「暗くなるまえに帰れよ」
「もう暗いけど」

深い青色の空はもうすぐ夕方から夜へうつろうとしている。誰もい
ない寂しげな公園にいと、まるでなんだか「出てきそう」だった。
それに言われなくてももうそろそろ帰ろうかな、というふうには思
っていた。あんまり帰りが遅いとイヴェルが心配してしまうだろう。
シエルの生徒が三人も行方不明になっているのだから尚更だ。

「あ……そうだ。イヴェルから聞いたんだけど、夜に抜け出した
三人の生徒っていうのは戻ってきたの？」
「いや……」

クロードは困ったような顔で首を横に振った。

「ああ、それで。そのイヴェルなんだが」
「なに？」

「なんか『シエルトちゃんが元気ない〜』とか言って心配してたぞ。『最近よく悩んでることが多いみたい、相談してくれればいいの』ってさ」

たしかに……この頃よくイヴェルに「どうしたの？」と聞かれることが多い気がする。彼女が心配性気味なのもあるのだろうが……。最近、主にバートレットのせいで悩まされている。

今日だってダリアのことで呆然としてしまって心配をかけてしまったかもしれない。多分自分は、イヴェルの前でよく元気の無いような顔をしているんだろう。

そういえば相談というものをあまりした事がなかった気がする。いきなり「誘拐事件の被害者だって言われたんだけど」とか言ったら返答に困らせてしまうだろうか……。

でも、心配を掛けさせるのは良いことなわけがない。ちょっと反省しようとおもっ。怪我までさせてしまっているのだ……帰ったら謝ろう。

「あの……シエルト、さん？」

「えっ」

いきなり誰かから名前を呼ばれる。クロードではない。ちいさな少女の声だった。聞いたことのある……。

「あつ、あなた！」

ふわりと白いスカートの裾を揺らし、帽子を被りなおしてにこりと微笑む少女。
ルシファーだった。

「こんにちは……こんばんは」

そう言つてルシファーはぺこりとお辞儀をする。ほんとうに礼儀正しい子だと感じる。それから、ちらりとクロードの方を見遣つてどこか落ち着かなそうにしていた。見知らぬ男がいるのだから当然だろう。

「ああえつと……気にしないで、うん」

「そう、ですか」

そういえばルシファーは自分の名前を知っているようだ。たしか、名乗った記憶は無い。
もしかしたらダイアナが教えたのだろうか。

（ダイアナさん……）

ダイアナが、ひよつとしたらルシファーの母親かもしれない。べつにそれはそれでいいのだが……。
なんというか昨日のダイアナの焦ったような様子を見ると彼女達にとってあまり触れられたくないようなことの気もする。
そう考えるとルシファーにダイアナのことは聞きづらかった。

82話 星空の下の告白

シエルトに、クロードに、ルシファー。その三人が夕暮れ時の公園で顔を合わせている……すこし妙な場面のようにおもう。

「ずいぶんと風変わりな知り合いがいるんだな」

と、クロードがそう言った。風変わりというのはきつとルシファーの、やたらヒラヒラふわふわしたエプロンドレスに大きめの黒いシルクハット。しかも兎の耳付き……そのことだろう。

まるで小さな子供が心惹かれる童話の世界から抜け出てきたような登場人物。

不思議の国のアリス……白兎だか三月兎だかをまぜこぜにしたような雰囲気。

よく考えてみると、やっぱりルシファーは不思議な子だった。

「ん、まあ昨日会ったばかりだけどね。ええっと……名前はルシファーでいいのかな」

一応名前を確認しておく。直接本人がそう名乗ったわけではないのだから。

「あ……はい。そうです」

ルシファーはこくりと頷いた。

けれどその時の表情は笑顔とかそういうものではなくて、笑っていただけけれど苦々しいものに見えた。

やっぱり塔のルシファーの事とかがあるせいなのかもとシエルトは考える。まさか塔が捜しているルシファーとは別人だろうと、たま

たま偶然同じだったただけだろうと。
こんな少女が危険だなんてとてもじゃないが思えない。

まえにダリアに、ルシファーには気をつけると警告されたことがあった。

(でも……この子のわけないし)

この弱々しさのある少女の一体どこに気をつけるといっただろう。
むしろルシファーのほうがどこかで倒れたり事件に巻き込まれたりしないか気をつけるべきのように感じる。

「あの、どうかしましたか？」

いつの間にかぼーっとしてしまっていたようで、ルシファーの呼び掛けにはっとする。

あわててシエルトは謝って別に何でもないのでと言った。

「そうですか……あの、私……」

言い掛けて、ルシファーはうつむいてしまう。それでもなにか言いたげな様子だった。

「大丈夫？」

「すみません……今日はシエルトさんにお話ししなければならぬ事があったんですけど……もう少し頭の中を整理してからにします。ごめんなさい」

ひょっとしてクロードがいるから言いづらいのかとも思ったが、そういう理由ではなさそうだった。

ほんとうに悩んでいるような、整理がついていないような。

「……そう？話してくれるのはいつでもいいからね」

「はい、すみません……ありがとうございます」

ぺこりと頭をさげるルシファー。

……気が付けば、空はもうそろそろ本格的に夜と呼べそうな姿に変わりはじめている。瞬く星たちがいつの間にかすこしだけ顔を覗かせていた。

シエルから見る夜空は目の前にすぐ迫っていて幻想的だけれど地上から見るちいさな夜空も宝石箱を眺めているようで綺麗なものだった。

そこでルシファーが口をひらく。

「あの、あのあの……もし、ご迷惑でなかったら……なのですが」

語尾がはっきりと聞こえないような喋り方。なんだか緊張しているようだった。

「ひとつお願いがあるのですが……よろしいでしょうか？」

三人は、なぜか人混みのなかを歩いてきた。両脇に店がずっと並んでいて……以前にもクロードと歩いたことのある場所だ。あの時はイヴェルとフィリップも一緒に、たしか塔に行ったときだったともう。

でもいまは別に塔へ行こうというわけではない。「ルシファーのお願い」だった。

ルシファーは公園へ来る途中、あのガラスのドームでプラネタリウムが開かれることを知ったらしい。

それでもしよかったら一緒に見に行きたいと、そういうお願いだったのだ。

断る理由は……祭りが苦手だとかそういうのはあったがプラネタリウムなら昔リンセルトと一緒に見に行ったことがあるし、緊張しながらも言いだした彼女のお断りをお願いするというのはいくらなんでもできなかつた。

といわけで、いまはあのドームの方へと向かっているのである。ルシファーはどこかそわそわして既に楽しそうに見えた。歩きながらも並ぶ店に気を取られていて二人とほんのすこし離れた場所を歩いている。はぐれる心配は無い距離だ。

「ていうか……なんでクロードまで一緒に」

「保護者保護者」

一応学校の先生ではあるのだし、こんな時間に生徒が三人行方不明になっている状況で出歩かせられない……のかもしれない。

「そういえばお前、祭りみたいなのは苦手じゃなかつたのか」

「そうだけど……あの子のお願い断りたくなかったし。プラネタリウムは行ったことあるから分かるけど、そんなお祭りっぽい感じじゃないもの」

よく見れば周囲には子連れやカップルが多く、皆同じ理由で同じ場所に向かっていのだと分かる。

「んー、でも、なんで苦手になっちゃったのか……」

お祭りの中で子供っぽく振る舞わないようにしようとしていたら苦手になった、というのは確かなのだが、なんでそんなふうに振る舞おうと思ったのか。

誰かに「子供みたい」と馬鹿にされた記憶がなんとなくある。もしかしたらそれが切っ掛けだったのかもしれないが、誰にそんなことを言われたのだろうか？

そもそも当時は小さな子供だったのだから「子供みたい」で合ってるのではないだろうか。

……前にも言ったことがあったかもしれないがそんな事をクロードに話してみると彼は意外な表情をした。

てつきり笑われるかと思っていたのに、まるで何だか困ったような考え込んだような顔。

「……なに？」

「いや、お前ほんとうに覚えてないのか」

「まあ小さい頃の話だし」

ますます困ったような表情になるクロード。

怪訝な様子でシェルトは彼を一瞥して……そして。

「……その、多分それ俺だ」
「……………はっ?」

あまりにも妙なことを言うものだから、シエルトはおもわず素っ頓狂な声を出してしまっ。クロードは今なんて……。

「いや多分じゃなくて、絶対そうだと思うが……」
「ちよつと何言ってるのか分からないです」

多分それ俺だというのはつまり、馬鹿にしたのがということだろうか?

「だから、俺はお前が小さかった頃に一度会ったことがあつてだな」

「なにそれ知らないし……」
「まさかここまで覚えてないとは思わなかつたぞ……」

クロードはもう一度、シエルトが小さかった頃に一度会ったことがあるのだと説明した。しかしまったく覚えていないのである。

「た、たしかにあんた最初の頃、まるで前から私を知ってたみたいなこと言ってたけど」

「言つてただらう?あるんだよ、会つたことが」

彼の話によると。

このレーヴで昔、幼かった頃のシエルトと出会つた。しかもクロードに懐いてしまったのかあとをついてきた……らしい。

「……は、懐いた？私があんたにだって？信じられない。大方よからぬ趣味で連れ回したんじゃないのか、このロリコン」

「あ……あんまりだな。あの時のお前は迷子だったんだって。親とはぐれて俺についてきて、迷子を無責任に追ひ払えないだろ」

クロードは、シエルトをちらりと見遣る。

「昔はもうちょっと可愛げがあった気がしたが、まあそれほど変わってないのかもなあ」

「うるさい馬鹿。で、懐いたらしい私があんたと祭りかなんかに行って、そこであんたに馬鹿にされたってわけ」

「なんていうか、やたら大人ぶったことばっか言ってたくせに祭りになったら子供みたいにはしゃぐからつい……いや何気に言っただけだったんだけど」

「なるほど。最低なやつだったんだな」

「悪かったと思ってるって」とクロードが言う。まさか何気なく言った言葉がここまで影響するなんて思いもしなかったのだろう。

「ふん、しかもそれで数年後には学校の先生ねえ。私は昔のことあまり覚えてないけど……子供好きだったの？」

「ん……別にそういうわけじゃないんだが……」

途端にクロードの表情が失せていくのが分かる。視線を下に向けて、歩調を遅くさせる。

……気が付けば、ガラスのドームがすぐそこまで見えてきていた。

83話 星空の下の告白？

……静かな空間の中、頭上のガラスに天体が映し出される。

それは人の手によってつくられたただの映像だけれど、それでも本物の宇宙のように綺麗で星が輝いている。幻想的な世界だった。

見たことのないどこかの星が浮かんでいる。それは球体でとても不思議な青色をしていた。そういうよく分からないけど不思議なものをプラネタリウムは次々を映しだしてくれる。

……ルシファアはこういうものを見るのは初めてだった。幼い頃はずっと塔にいてあまり外に出なかつたし、今は塔に怯えてあの森の屋敷で過ごすことが多い。今日のように、たまに塔の天使に見つからないようにこっそり出掛けたりしているけれど……。

(……)

ふと、見上げるシエルトの横顔を見る。人混みやこういう空気が苦手なのかすこし疲れたような顔をしているが、それでも楽しそうに眺めていた。

彼女は年齢のわりに顔立ちが幼い気がする。性格はべつに子供っぽくはないのだろうけど。

(それでも……あの頃と比べたら大きくなって……当然よね、もう何年も経っているし……あの頃はまだ学校だって通ってないような年齢よね)

今日は、シエルトに話さなければならぬことがある。そのために外へでてきた。話す決心をつけてきた……。

なのにいざとなるとまるで口が動かなかった。話してしまっただろうなるんだらうと、想像するとおそろしくて声が出ない。もう決めたことだというのに。

一晩中悩んで決心をつけて、だからシエルトに会いに行ったのに……。

公園で言えなかったのはあの男の人も一緒だったから、というものがある。今は、シエルト以外に聞かれるのはかなりまずい話なのだ。彼女以外にまで話す決心はまだついていない……。

プラネタリウムを見たいという願いをしたのはもう一度考える時間が欲しかったからだ。話すと決めたのにまた悩むなんて自分がいやになる。

だけどシエルトの楽しそうにしている横顔を見ると、話すこと躊躇いそうになるのだ。

ひよっとしたら彼女をひどく傷付けることになるかもしれない。そう考えると……。

(でも……)

もうすぐプラネタリウムも終わってしまふ。

(……大丈夫)

自分の出した答えが正しいのかどうかはわからない。そもそもこの問題に正解があるのかどうかすらわからない。なら、自分で決めなければいけないのだ。

後悔することばかりずっと悩んでいてもどうにもならない。このまま悩み続けてなにもできず、結局それでも後悔することになるとおもった。ならばつきりと答えを出してしまわないといけない。

……プラネタリウムが終わったことを告げるアナウンスが響いた。
シエルトが「綺麗だったね」と笑いかけてくれる。

「シエルトさん……あの」

「なあに？」

そこでまた躊躇いそうになるが、そんな気持ちをどうにか振り払ってみせる。

「あの、シエルトさんに大事なお話があります。聞いて、ほしいんです……」

そこは近くに海の見える人気のあまりない場所だった。夜空の下、とても静かで、ずっと人混みのなかにいたシエルトにとって心地良く感じる。夜風が頬を撫でるが……すこし風が強くなってきたかもしれない。
ここにいるのはシエルトとルシファアの二人だけである。クロードは自分には聞かれたくない話だろうと分かったのか何を言われなくても立ち去った。

「……シエルトさん。これからする私の話は、もしかしたらシエ

ルトさんの聞きたくないこともしれません。なのでもし嫌になつたらすぐに言ってください」

……彼女の口からなにが語られようとしているのか、シエルトにはまるで想像がつかない。

ルシファーは弱々しい息を吐きながら「大事な話」をはじめた。

「覚えているでしょうか。きっと、忘れることはないとおもいます。すごく辛い記憶だとおもいますから……」

「……？ん、えっと……」

なんのことだろうと記憶をめぐらす。辛い記憶といわれてもなんのことだかわからない。忘れられないほど辛い記憶とはなんなのだろうか。

いままで生きてきて嫌だとか辛いとか感じることは、それはいくらかでもあるが……。

「誘拐事件のことです」

「え……」

一瞬、あの断罪者の顔が頭の中に浮かぶ。あの男以外からその話を持ちだされるなんておもわなかった。

「……私です」

動揺している間にさらに奇妙なことを言いだされた。シエルトはまったく理解できなくておもわず聞き返してしまう。

「……え？あ……ごめん、それはどういっ……」

「だからッ、私なんです！」

ルシファーは思い切り真っ白なスカートを握りしめていた。

「たくさんの子供が犠牲になったあの誘拐事件は、私が起こしたんです！この私が犯人なんです……！！」

髪を振り乱して、力無く地面にしゃがみ込むルシファー。彼女の頭からシルクハットが落ちて風に転がされても、彼女は気にも留めなかった。

「な、なんの話……？」

自分が散々被害者だと言われてきた、あの誘拐事件の犯人は「この私」。

そんなことを言われてもなにがなんだかわからない。誘拐事件の犯人は未だに見つかっていない、いまは断罪者が首を刎ねてやろうと捜しまわっていて。

そんな事件の犯人が、突然自分から名乗り出てきた。

それがなぜかルシファーだった。いま目の前に断罪者が捜し続けてきた犯人がいるというのだ……。

「え……、ちょっと……」

「冗談なんかじゃないですよ。ふざけて言っているのではなくて、真実です。私が犯人なんです」

彼女の声は真剣だった。ふざけているようには聞こえないし、ルシファーはこんな冗談を言うようには見えない。だから尚更どうしたらいいかわからなくて、シエルトはうまく言葉がでなかった。

ルシファーは夜風に転がされた帽子を拾い上げ、しかし手に持ったまままで被ることはしなかった。

「話すか話すまいか悩んでいました。自分が犯人であることを永遠に隠し続けることは可能でした……でもシエルトさん、あなたは許せないですよ？自分を誘拐した犯人が憎いですよね」

「あ……待つて、私……」

許せないなんて言われても、自分には誘拐されたという記憶が無いし、そもそも完全に信じられずにいるのだ。いまだ本当なのかどうか疑っている。初めて被害者だと聞かされた時と比べれば……多少は「本当なのかもしれない」という気持ちも生まれているが。

「あのね、私いま、ちょっと何言われてるかよくわかんないんだけど……」

「私はたしかにシエルトさんを誘拐しましたよ。そして唯一あなたを助かった」

ルシファーはうつむいていた。しかし帽子のない彼女の顔はいつもよりもよく見えて、そしてとてつもなく顔色が悪かった。指先は異様に震えているし、さっきから何度も自分の体をさすっている。

「だから……っ、……う」

伏せた目からぼろぼろと大粒の涙があふれだす。

「ひっ……うめ、……なや、い。うめんなさいうめんなさい……」

彼女の中の恐怖心が限界に達したのか、その限界が吐き気となってあらわれてしまったようだ。

ルシファーは口元をおさえてくるりと向きを変えるとそのまま走り出してしまふ。……そんな彼女の後ろ姿を追うことはできなかった。

……なにが起きたのかわからない。

誘拐事件の犯人はルシファーで、自分は小さい頃、彼女に誘拐された、らしい。記憶にない……でも、ほんとうにそんなことがあったのだろうか？

立ち尽くしたまま、まともに考えることができなかった。

あのか弱そうな少女が犯人。小さな子供の命を奪ったなんて……。

その様子を、建物の陰に立つクロードが見ていた。

すべての話を聞いていた彼の表情はとくに無く、ただ残されたシエルだけに視線を向けていた。

ただ、二人の会話を聞いていたのは彼だけではなかった。

「……っ、シエルちゃんと、あの兎の帽子の子……？」

……それはフィリップだった。

クロードは立ち去ったふりをして二人のあとをつけていたわけだが、フィリップの場合は偶然シエルトの姿を見かけてあとを追い、そしてこの場に来てしまったのである。クロードの存在には気付いていないようだった。

ポケットの中の銀色のブレスレットを握り締めて、二人の会話を何度も思い出す。

「そんな……あの子が、誘拐事件の……あの子がアリスを……」

塔の近くでぶつかったあの少女が妹を誘拐した事件の犯人。信じ難いが、妹のこととなると冷静な判断ができなくなっていた。

……あの少女が犯人なら、いますぐ少女を見つけ出してすべてを問い詰めさせる。

もう、そんなことしか考えられなくなっていた。

84話 狂気の報い

「……」

シエルトはあれから寮に戻っていた。イヴェルは教室に忘れ物をし
てきてしまったらしく、それを取りに行っているため今は部屋にい
ない。

……カーテンが閉められた静かな部屋の中。枕に顔をうずめて目を
つむっていたが、まだ動揺が消えない。
ルシファアーの言葉を信じるべきなのか。彼女が嘘を吐くようには見
えない。でも彼女を信じるということは、自分はやっぱり被害者の
一人で……そういうことになる。

(ああ、もう……次から次へと……)

いったい何度このベッドの上で悩んだことだろう。

今日、公園でクロードに言われたことを思い出した。……イヴェル
が自分をひどく心配している。せめてイヴェルの前だけでは何事も
ないように振る舞おう。それにずっと悩んでいるというのもよくな
いことだと思う。

ちらりと時計に目をやると、もうすぐ十時半を過ぎようとしている
ことにはじめて気付く。

結局あのあとルシファアーはどうしたのだろうか……。
そんなことを考えているうちに、時間に配慮してか静かに寮のドア
が開かれた。もちろんドアの向こうからひよっこり顔を出したのは
イヴェルである。もうシエルトは眠ったとおもっていたらしい。

「あひゃー、シエルトちゃんまだ起きてたんだね」

「あ、うん……」

だが、部屋に入ってきたイヴェルの表情はめずらしくどこか暗かった。

そしてその理由はすぐに彼女の口から語られる。

「……あのね、なんかフィリップ君、まだ寮に戻ってないんだって」

普段めつたに聞くことのない重い口調だった。

「え、フィリップが？」

「うん……おかしいよね、こんな遅い時間なのに。どこにもいないみたいなんだー……」

もうあと三十分もしないうちに十一時になってしまう。フィリップがこんな時間まで外を出歩いているなんて想像できなかった。

それに、遅い時間になっても寮に戻ってこないという………そういうえばあの下級生はどうなったのだろう。まだ見つかっていないのだろうか。

こんなことがあると、まさかフィリップも下級生達と同じように……なんて考えてしまう。

ルシファアのことでもあって嫌になるほど誘拐事件のことが頭から離れなかった。

湿った空気とにおいが流れる森の中。空を隠すほど木の覆い茂るそこは異常なまでに暗く、たとえ灯りひとつあったとしても心許ないだろう。

　　いまずぐ少女を見つけ出してすべてを問い詰めさせる。

　　フリリップはすぐにそれを実行に移してみせた。人の多いレーヴとはいえ、あの後すぐに探しはじめ、白いエプロンドレスや兔帽子など目立つところが多かったため思ったより簡単に見つけることができた。

　　とりあえずあとをつけて様子を見ることにしたのだ。

　　……最初は人混みの中をただ進み、その後は知らない道へ入っていた。人気があまり無く、暗くて狭くてそこだけ見たらここがレーヴだなんて誰もおもわないだろう。そんな道がしばらく続いて、あとはもう暗くてよく分からなかったが気が付いたら森へと辿り着いていた。

　　こんな夜中にもかかわらず森へ入っていくなんて……とおもったが、妹を誘拐した犯人かもしれない彼女をそんな理由で逃すわけにはいかなかった。もうこの森へと来る道もよく覚えていないし、このチャンスを逃したら二度と彼女を見つけることができなくなってしまうに違いない。

　　これからどうするのか、何度も頭の中で繰り返し考えていた。

　　彼女を問い詰めるならちゃんと整理してよく考えてからのほうがいいとおもったのだ。……とはいえ、ほんとうは彼女にたいする恐怖心があつて未だに声も掛けられずにいるのかもしれない。妹を連れ去ったかもしれないのに……そう考えると自分が情けなかった。きっと兄ならこんなくすぐずしないでさっさと……。

「……………」

あまりの緊張のせいで気持ちが悪くなってくる。

(だめだ……こんなんじゃ)

いったい、彼女はどこに向かっているのだろう。この森の奥にはなにがあるのか……。
なにが起ころのか分からないままひどく暗い森の道を、何度も少女の後ろ姿を見失いそうになりながらただ進んで行くしかない。

……すると、じよじよに視界がぼんやりと明るくなっていった。木々の葉や枝がどこからか漏れる光に照らされている。淡い、薄いオレンジ色の光……。

少しずつ道が開けてくる。

光もだんだんと鮮明になっていって、そして現れたのは 森に包まれた大きな屋敷。オレンジ色の光は街灯と、屋敷の窓から漏れているものだった。

少女はその屋敷へと向かって歩いている。この屋敷は彼女の住む家なのだろうか。

(どうしよう……)

少女をこのまま屋敷の中へ入れてしまえば、次にいつ出てくるかわからない。

(別の入り口を探してお屋敷の中に侵入しちゃう……とか?)

けれど、中に彼女以外の人間がいたら……こんな大きな屋敷なのだ。たったひとりで住んでいるとは限らない。他に別の人間が何人かいたらすぐに見つかってしまいかもしれない。それならもう方法はひとつしかない。少女が屋敷に入る前に引き止めてしまえばいい。ただそれだけなのだ。そもそも少女が本当に事件の犯人なのか、それを問い詰めるためにここまで来たのだ。

(……僕はなにを躊躇っているんだ！)

フィリップは見つからないように木の陰に隠れていたが、深く息を吐くと堂々と道の真ん中に姿を見せた。

……けれど、慎重なつもりだったのだが落ちていた枝を踏んでしまい、更にそれが大きな音を立ててぱきりと割れる。しかもその音に自分で驚いて思わず後ずさり……その時にもまた少し大きめの衣擦れの音を立ててしまった。

当然この静寂な森の中でこれだけ騒がしくすればいくら離れた場所にいる彼女だって気になって後ろを振り向く。

目が、合った。

「……………」
「……………」

互いの視線が離れない。

少女はしばらくこちらを見つめたあと、おそろおそろ目線を逸らした。

「あの……あなた……塔で、ぶつかった人……ですか？」

弱々しい、とても小さな声で話しかけられる。けれども彼女の声を邪魔するような音は一切無い静かな森であるため、はっきりと聞き取ることができた。

……どう話を切りだそう。

ここまで来て言葉が詰まる。相手は、こんなか弱そうな容姿でも誘拐事件の犯人かもしれない。自分ではつきりとそう言っていたのだ……偶然聞いてしまった。もし本当にそうなのだとしたら、この少女はきつと人を傷付け殺すを事をなんとも思わないような、残酷な人間……。

だからそんな人間を目の前にして、おかしなことを言ったらこの場で殺されてしまうんじゃないかと思ってしまう。

妹を誘拐したかもしれないのに……怖がっている場合ではないのに。

(もしこの子が……本当にそうなら、僕は……)

決心しなければならぬ。真実を聞いてしまったら、それが予想していた通りのものだったなら、彼女が過去にしたことを、今度は自分が彼女にしてしまうかもしれない。もしかしたらそうする前に彼女が真実を知った自分を……という事もある。どうなってしまうのかわからないのだ。

でも……妹を連れ去り殺したかもしれない人間を許すつもりは絶対に、無い。

「あの……？」

「聞いたんだ、僕は。さっき君の話してたこと、全部。たまたまあの場に居合わせて、君の口から出た言葉……すべて聞いてた」

どうにか詰まりそうな声を出すフィリップ。

少女はびくりと肩を跳ねあがらせてあきらかに動揺しはじめる。定まらない目線は、けれど決してこちらの顔を見ようとはしないし、指先を異様に忙しく動かした。

涙を浮かばせる彼女の目と数歩後ずさる震えた足。

……ああ、やっぱりそうなんだなと思った。もう確信していた。

少女は首をおおきく横に振って、まるで意味のない嘘を吐きだす。

「……っあ、ち、がうんですっ……違います、なんのお話ですか。私にも言っていないです、知らないです、人違い……きっとそうです……」

さっきシエルトに話していた時とはまるで正反対。別人ではないかというくらいに取り乱し必死に嘘をつく。

シエルト以外にあの話を聞かれる……彼女にとってまったく予想していなかったことだったのかもしれない。

「あの話は全部ほんとう？ねえ、君がやったわけ？」

自分でも驚く程に冷たい声が出される。少女は体全身を竦ませて、ただ呆然とフィリップを見ていた。

「聞いている？君がやったわけ？聞いている？聞いているの？」

もう止まらなかった。

『この目の前の少女が犯人。妹を誘拐して殺した』と、自分のなか

でそんな確信が生まれて……そうしたらもう止まらなかった。怒りなのか恐怖心なのかわけがわからなくなって、とにかく思い付いた言葉を吐き出していく。

白状するまで絶対にやめない……そのつもりだ。こんな妙な感情は初めてだ……心臓は激しくやかましく鼓動するし、自分の考えていることがまるでわからない。

……自分がおかしくなっていく。変になりそうだ。ただそれだけ、理解できる。

「あ……ちがつ……私っ……！」

「ううん、僕は知ってる。だって聞いたんだもん。ね……君おかしだよ、さっきと言ってることが全然違うよ……？」

少女はなにも無いところで躓いて尻餅を打ってしまふ。しかし立ち上がることはなく、今にも殺されそうな目でフィリップを見上げていた。

涙をぼろぼろとこぼして、もう嘘をついて否定するということに、それともフィリップの言葉に耐えられなくなったのだろうか。目をつむり、掻き消えそうなほど小さく震えた声で真実を話す。

「ごめん、なさい……わた、し……私が……私が……あ」

その言葉を聞いて、自分のなかでなにか恐ろしいものが爆発した気がした。

気がつくと 左手には自身のアルムである剣が握られていた。それがいったい今からどうやって使われるのか、それを理解した少女は叫び声をあげそうになる。

「うん……そっか、そうなんだね。アリスを殺したのはやっぱりお前なんだ」

あきらかに自分だとは思えない口調……でもそれが正常なんだと思うことにする。いままでの自分は弱過ぎたんだ。

いまは変わらなければいけない。アリスのためにも、いままでの自分ではだめなのだ。あんな情けなくてどうしようもない自分は今、捨てなければならぬ。

「くっ……は、は……！は、はははっ……そっか、そっかそっか君か……塔の前でぶつかつた時はさ、君がそんなクスで気の違つた人殺しだと思わなかつたよ。ははは、いままでよく平気な顔して生きてこられたものだなあ」

少女はフィリップのことをよく知らない。塔の前で肩がぶつかっただけの知り合いだ。いや、知り合いになるのかもわからないけど……。

彼は、こんな人間だっただろうか？あの時すぐに逃げてしまつたけれど、手を差し伸べてくれた。きつと優しい人だつた。……だつた。そう思う。

なのにこれは一体なんなのだろう。人は、こんなにも簡単に豹変してしまうのだろうか。

不思議なほど、フィリップは笑いが止まらなかつた。犯人を見つけられて嬉しいのだろうか。それとも自分が変わったことが嬉しいのか。今なら、ずっと劣等感を抱き続けていた兄さえどうでもよく感じる。

……どうでもよく、というより、あの兄でさえ未だ討てなかつた仇を、たったいま自分が討とうと……殺そうとしている。そのぐちゃ

ぐちゃな優越感が感情を高ぶらせる。そして、そしてもうじきに、アリスは報われる。なんの罪もないのに殺されたアリスはきつと喜ぶだろう。

愛しい妹の幼い笑顔が何度も脳裏に浮かび上がる。

なんて素敵なんだろう。この少女たったひとり殺すだけでアリスは幸せになれるし醜いコンプレックスも消えて無くなるに違いないのだ。

「よく平気な顔して生きてこられたものだ」……そう言ったけれど。

「でも、今日まで生きていてくれてありがとう。もし君が首でも吊ってしまっていたら、こんな素晴らしい日は永遠に訪れなかった！」

それからフィリップはもう一度最後に「ありがとう」と告げるとアラムを、剣を振りかざした。少女の目はびくりと見開かれる。

……そして間を置かず、そのまま勢いよく振り下ろされた。

悲鳴が森の静寂を突き破る。

少女の真っ白なエプロンドレスには、苺ジャムをこぼしたような赤い液体がべつとりと染みついていた。

気持ちの悪いにおいがする……少女がそれを血だと認識するにはほんの少し時間が必要だった。

白いドレスのスカートが赤く染め上げられていた。でも……けれど少女は苦痛に顔を歪めているわけではない。彼女の体のどこにも血があふれるような傷口はなかった。

……ただ、目の前の彼を放心して見ていた。

フィリップはぐったりと、力無く空を見上げる形で倒れていた。

そんな仰向けの彼の腹　右わき腹辺りから真っ赤な血液が流れ出ていた。剣はどこかに放り投げられ手に握られていない。意識があるのかどうかわからない。

フィリップの体は真っ赤に染め上げられていた。ドレスを赤く彩るのは彼の返り血だった……。

自分が殺されると思った瞬間、反射的に魔法を使っていた。冷静でなかったせいか、ただ身を守るだけでよかったのに……きつと魔法が暴発してしまっただとおもった。

そして彼はこんな怪我を負ってしまった。こんなことになってしまった。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。

少女は　ルシファーは震える足でふらりふらりと立ち上がった……。

85話 狂気の報い？

夜の十一時だろうとレーヴの道は、どこも人混みをつくっていた。ただ昼間とくらべると若く柄の悪い人間が増えている。

……シエルとイヴェルは、いけないとは思いつつもフィリップのことが心配になり、寮を抜け出してさがしに来てきていた。

正直夜中のこのレーヴは……特にいま二人が歩いている道は、未成年だけで行動するのはあまりよくないかもしれない。スーツを着こんだ「仕事帰り」な大人もいるが大抵派手な見た目の男女がうろついている。

あのフィリップがこんな場所をひとりで歩くなんていうのは信じられない。気の弱く真面目な彼なら足が竦んでしまうのではないだろうか。

「いそもないけど……」

「うーん……こんなところにフィリップ君がいたら、きっと目立つからすぐわかるよね……」

この状況だからか会話をする時はつい小声になってしまう。

イヴェルの言う通り、派手な男女と仕事帰りの大人の塊のなかに未成年の男の子がいればすぐにわかりそうなものだ。

……結局それらしき姿はまったく見かけず、違う場所もさがしまわってみたのだが、やっぱり見つけることはできなかった。

そして普段あまり入らない道にまで来た。そこは店ではなく高いビルが並ぶ通りで明かりもビルの一部や街灯しかついておらず人もほとんど通らない雰囲気。

ここをさがし終えたらもう戻ろう、という話になった。近くに時計がないためわからないが、もう十一時もとっくに過ぎてしまってい

るとおもつ。

「フィリップ君、私達がこうしてる間に寮に戻ってたりしてね」
「それならいいけど……」

下級生達がいなくなったことと、それとなんの関係もないのならそれでいい。……そうであってほしい。

ビルの並ぶ静かな夜道を見渡してみるけれど、人の気配なんてまったく感じない。誰もいないことはすぐにわかった。

「……戻ろっか」

そう言ったイヴェルの表情はほんとうに暗い。普段笑顔を絶やさない彼女のそんな姿を見るとよほど心配していることがわかる。きつとクロードに「最近シエルトちゃんの元気が無い」と相談したというときもこんな顔をしていたに違いない。そう考えるとなんだかとても申し訳ない気持ちになって……。

「……………」
「ごめんね」

と、こんな言葉が無意識に口から漏れる。

「んー？」

イヴェルはきよとんとした顔でシエルトを見ていた。

だが、どうやらその言葉の意味がなんとなく理解できたようで、イヴェルはそつとシエルトの右手を握った。突然そんなことをされたのですこし驚いてしまう。

そして握られた右手がゆっくりと引かれシエルトの体はイヴェルへ

と引き寄せられた。

何が起きているのかわからず硬直するシエルトにイヴェルの両腕がまわされる。不思議な甘い香りがした 気がする。

なぜだかよくわからないが、イヴェルに抱きしめられている状態になってしまった。この感じは、以前ベッドに潜り込まれた時とよく似ている……。けれど誰もいないからって外でこれはいくらなんでもまずいんじゃないかという気がしてきた。

「……………えっと……………」

「えへへー。シエルトちゃん、あのねー。シエルトちゃんは私になーんでも相談していいんだよー。私はね、いつかそうしてくれたら嬉しいなーって」

「……………」

ざあつと音を立てて冷たい風が吹くが、イヴェルが心地良くて、あたたかくて、妙な眠気におそわれる。

……………ほんの少しして。まわされた腕が解かれると彼女の温もりが薄れてしまう。それがちよつと残念に感じてしまった。

「じゃ、そろそろ帰ろうか」

完全ではなかったがイヴェルにやわらかい笑顔がもどっていた。

「……………うん」

彼女の笑顔を見ると自分の表情までほころんでしまうのがわかる。

しかし、そんな二人の和やかな時間は、突如どこからか響き渡った悲鳴によって破られた。

驚いて振り返るけれどシエルト達の周囲にはさつきと変わらず誰もいない。

その悲鳴というのは幼い感じの子供の声で、性別は判断できなかった。

何度もあたりを見渡してみるが、やっぱりどこにも人の姿はない。こんな時間に子供が歩いているというのはおかしいが、歩いていたから悲鳴をあげるような事が起きてしまった。

……イヴェルがビルとビルの間狭い路地を見ていた。

「イヴェル？」

「……ん、ひょっとして、そこからかなっておもって」

そこというのは路地のことだろう。見えない場所から悲鳴が聞こえてきたというのなら、まず思い浮かぶのはそういう場所かもしれない。

互いに顔を見合わせて、イヴェルの見ていた路地へと近づく。まさか誰もいないだろうと、そんなことをおもいながら……。

暗く狭い闇のなかで、なにかが揺れた。

ふわりと動く真っ黒なスカート……長い髪が静かに揺れて、袖からすらりと伸びる白い手がなにかを掴んでいる。

そこに誰がいるのかをはっきり見ようとして、けれどシエルトはすぐに後悔することとなった……。

「……ダリア!？」

シエルトの口から出た名前の少女が、目の前の暗闇のなかに立ち尽している。そこにいたのはダリアだったのだ。突然あらわれたシエルトの姿に、呆然とした顔をしている。

そしてダリアの手に掴まれているのは、おそらくさっきの悲鳴の正体。十歳にも満たないような幼い女の子だった。体はぐったりといてまったく動かない。目は見開かれたままどこか遠くを見ていて、それがもう既に絶命しているんじゃないかと、そうおもわせた。ひよっとしたらあの悲鳴がこの女の子の最後の……。

「なにしてるの……」

ダリアはなにも答えない。本当はなにか言いたいのだろうが、それをうまくまとめられないのか言葉が出ない様子だった。

それから伏せた目をつむつてくるりと振り返り哀しげな背中を見せて、ダリアは女の子を連れのまま闇へと溶け込んでしまう。……もうどこにもダリアの姿はなかった。

「ねえ……シエルトちゃん？」

どうしたらいいかわからない様子のイヴェルが小さな声で話しかける。けれど、シエルトは返事をする事ができなかった。

ダリアが、子供を連れていってしまった。どこへ行ったのかはわからない。なにも言わず消えてしまった。

……連れて行った　連れ去った？

あの女の子はダリアに連れ去られた……それはつまり、誘拐ということになってしまうのだ。

86話 狂気の報い？

吐く息が白い、そんな朝だった。

早朝のレーヴを静けさが包み込んでいる。今は人の姿をほとんど見かけなくなる唯一の時間帯である。

塔は朝日に照らされて、不思議な神々しさのようなものを纏っていた。そんな塔の周辺にも……たった二人の人間の姿しか見られない。一人は足早に閉鎖された塔を通り過ぎて行き、もう一人はそれを慌てて追いかけていた。

「ちよっ……と、待って、くださいよ……！」

冷たい空気に指先がかじかむ……けれどそんな事は気にしていられないというように息を切らしながら走っていたのはノックスだった。遠くの前方を歩くのはファルクスで、彼はノックスの言葉にぴたりと足を止める。そしてゆっくりと振り返り、しかし何も言うことはなかった。

けれどそれは「何の用だ」と問われているのだと、すぐに理解することができる。

「……あ、すみません。こんな朝早くに出て行くものだから……様子を見て来いと頼まれました。その……ファルクスさん、昨夜から様子がおかしい、と」

ファルクスは、今は普段と変わらずその表情は冷静に見えるのだが、昨夜はめずらしく焦りがあったように見えた。理由はわからない。確かにどこか様子がおかしかったのだ。

ただ、昨夜はなにか連絡を受けていたよう……焦りが感じられるようになったのは明らかにその後からなのである。勿論その連絡の

内容は誰も知らない。

……こんな時間に出掛けようと彼の事だから心配は無いはず、なのだが、彼らしくない様子を見たあとだとしても不安があった。

「……えっ？あ、ちよつと……！」

ノックスの言葉にはなにも答えず、ファルクスは歩きだしていつてしまった。徐々に彼の背中が遠ざかっていく。

置いて行かれ、はあ、と深いため息が出た。放っておくか追いかけるか……後者は何があったのだろうという好奇心からくる選択肢である。

どうするべきかと朝の澄んだ空を見上げて、またため息をつきながら考えはじめた。

……ふわりと風が頬をかすめる。

まぶしい光がまぶたに被さって、おもわず顔を背けた。それが目を覚ました瞬間だった。

ゆっくりゆっくりとまぶたを開いていく。

「……」

そして完全に開かれた目にうつつたのは、まったく見知らぬ場所。なぜか自分の体は古めかしい、とても温かいベッドの上に寝かされていて、すぐ横には大きな出窓があった。まぶしい光は朝日だったのだろう。窓の外から光が射しこんでいて、窓が開いているものだから風も一緒に入ってきていた。本当はやわらかい朝日のはずなのに、光に慣れていない目には力強い明るさとなっていた。

……いまいち状況がよくわからない。
なぜ、自分はこんなところにいるのだろうか？今いるこの部屋には、どれも古さを感じるテーブルや椅子にクローゼット、洒落た絨毯や、価値のわからない絵などが立派な額縁におさめられ飾られている。なんだか金持ちというか「古い屋敷」によくありそうな部屋で、当然こんな部屋を知っているはずもなく。

「……、屋敷？」

はっとなつて慌ててベッドから降りようとするが、突然、激痛が体中を突き刺しそれを拒んだ。意識が飛びそうになつてしばらく動けなくなつてしまうほどだった。

「申し訳ありません。窓、閉めますね。ずっと閉めきつていたので、それもよくないとおもつて……」

どこからか聞こえてきた少女の声。それは、多分知っているはずの声だった。けれど体の痛みに邪魔されてうまく思い出せない。

……自分に振りかかっていたまぶしい朝日がすつと消えた。少女が窓を閉めるとかで窓の前に立ったからだろう。

少女の後ろ姿が見える。風に髪が揺れていた。可愛らしい白い服が

朝日に照らされて、それがなんだか天使のように美しく見えて……。

「……………」

そして憎悪に満たされた。

この屋敷も　天使のような少女も　そうだ、昨夜のことである。この少女が誘拐事件の犯人である可能性が出て、あとをつけて、そのまま声を掛ける勇気もなく森の中へ入り、屋敷が見えてきて、そこで音を立ててしまつて気付かれて。

それから、問い詰めたのだ。事件のことを……そうしたら、おそろしく取り乱していた。馬鹿みたいな嘘だとわかる演技をして、自分は犯人ではないと否定したのだ。

それがもう、この少女は誘拐事件の犯人であると、そう確信させたのだ。

あとは……そのあとのことは正直よく覚えていない。自分が自分ではなくなっていく、その感覚だけは頭に染みついている。だがそのあとなにがあつただろうか？

少女はこちらを向くと、伏せた目とひどく弱々しい声で謝った。

「ごめんなさい……あなたを傷付けるつもりはなかったのです。しかしあの時の私は冷静ではなくて……自分の身を守るだけのつもりだったのですが、魔法が暴発してしまつたようで……あなたに、怪我を負わせてしまつたのです」

そんなことがあつただろうか、と考えた。

本当になにがあつたのかよく覚えていないのだ。だからそんな説明をされてもいまいち実感がわかないのだが……。

痛みになんか少しづつ慣れ始め、一体この痛みは体のどこから生まれてくるのだらうと思ひ、そしてそれはすぐにわかつた。

右のわきの腹だった。痛みでというより、服についた黒い染み
乾いた血で気付くことができた。怪我というのはこのことなのだ
ろうか。

「母の魔法で傷はほとんど治癒されているはずですが。しかし痛み
までは取り除けませんでした。しばらくは痛むかとおもいますので、
どうかあまり動かないようお願いします」

少女はひどく申し訳なさそうな声で話していた。……そんな彼女を、
さらに傷つけたくなくなる。

「ほんとうは初めから僕を殺そうと思っていたんじゃないのか？
でも殺し損ねてそんな嘘をついているんだろ、そうなんだろう？」

そう言ったが、本当に少女がそうしようとしていたとは思っていない。
今言ったことの通りなら治癒などせずとつくに心臓でも頭でも
潰して殺しているはずである。

ただ彼女に対する嫌悪感がどうしようもなく……とにかく傷付け
る言葉をぶつけてやりたかったのだ。

「馬鹿だなお前は、そんな見え透いた嘘をついてさ！」

しかし少女はなにも言わない。それが、腹ただしかった。

少女はテーブルと一緒に置いてあった椅子をベッドの真横まで持っ
てきて置くと、その椅子に静かに座る。あの兔帽子は被っていないく
て、よく見ると服も昨日のエプロンドレスとは似ているが違うもの
のようだ。

「……僕はきみを殺しても許される。そう思わないか、思うだろ

う

「私には、あなたに殺されるか新聞にも載っている断罪者さんに首を刎ねられるか。そのどちらかの運命が用意されているのです」

「僕がきみを殺す時まで、くれぐれも首を取られるんじゃないぞ。どちらかの運命だつて？きみは自分の辿る運命を予測することもできないのか。……なあ、わかるだろう」

殺す時までというのは、この体の痛みが取れるまでまともに動けないことがわかつているからである。こんな怪我さえ無ければ、今頃少女をとつくに殺していたはずなのだ。

「……私はルシファーといいます。塔でルシファーについて騒がれていますが、それは私のことです」

「その話は知らない」

「今、塔では数年前に追放されしばらく姿を見せなかったはずのルシファーが目撃されたと騒ぎになっているはずです。……といっても、塔が閉鎖されるような事態になって私の事は二の次になっているでしょうが。それが、すこし安心で……」

ルシファーは静かに目を伏せて、なにか思い出しているようだった。それはたぶん、自身の過去のこともかもしれない。

「あなたは、初めて会ったときどこか似ているとおもいました。あの足を悪くした女の子に」

「……そんなの当たり前だよ。アリスは僕の妹なんだッ！」

足を悪くした女の子。それはアリスのことなんだとすぐにわかった。彼女は車椅子を使うほどではなかったが、いつも片足を引きずって

いた。

「私が事件を起こしたのは追放されたあとのことです。まだ塔にいた頃、私は、私を馬鹿にした者達を見返してやろうと毎日懸命に魔法を学びました。ですが行き過ぎてしまったのです。私は彼らに大きな怪我を負わせてしまった」

重い口調が部屋の空気を暗くしていく。けれど彼女の辛い過去を聞くのは、とても愉快なことにおもえた。アリスが死ぬ時まで受けた苦しみと比べれば、それはなんてことのない小さな話なんだと……そう思った。

「あの頃の愚かな私はそれが行き過ぎたことだと気付かず、そんな行為を繰り返して満足していました。当然、追放されたのはそれが理由です」

しかしそんな事になってもまだ愚かさに気付くことはできなかったのです、と深く息を吐いて言った。その目には少し涙が溜まっていた。

「『何も悪くない自分を追放した天使達』がとても許せなかった。塔は私の我が家のようなもので、天使達も家族だとおもっていましたから……そんな彼らに裏切られて、復讐をしてやりたいと考えるようになったのです。悪いのはすべて私だというのに……」

「その間抜けた復讐とやらが……、あの事件ってことなのかい？」
「すこし違います。……誘拐事件は……復讐のために起こさざるを得なかった。……赤子の頃から塔にいましたからね。追放されたあとも神の存在を信じていました。そして神は、とても強い力を持っているのだと教えられてきました。私は……」

ルシファアの顔色が、さつきとくらべて悪くなっているようにおも
う。深く息を吐く回数も増えはじめていた。

「塔のどこかに神が存在しているのだと信じていたから……その
神を殺したなら。天使達はどうなるのだろうと考えたのです。そん
なことできるわけがないのに！私は愚かであまりに幼かったのです
……」

神を殺してしまおうという復讐。しかし、それがどう誘拐事件に繋
がるのか。とても分かりそうにはなかった。

「私は懸命に魔法を学んでいたと言いましたよね。その時に、人
間の心臓をつかった恐ろしい儀式……そんなものを何かの書物で目
にしたことを思い出してしまったのです」

ルシファアは、さらに顔色を悪くして肩をふるわせていた。

「強い力を持った存在を生み出す、そんな内容の儀式なんですよ。
心臓は命の核だとどこかで聞きました……そんな心臓を使えば命を
持った存在を生み出せるということなのでしょう。力の強い存在、
それがあれば神を殺せるのではないかとおもったのです」

「……」
「私は……儀式に必要な材料を集めるためにたくさんの子供を誘
拐したのです！」

叫ぶような声が部屋に響き渡った。

誘拐事件を起こした理由。それを彼女の口から聞いて、それは材料
集めが目的で、ならアリスは一体なにをされたのか。

想像してしまっただ瞬間、今すぐにこの少女を同じ目に、それよりも

もつと酷い目にあわせてやりたいという激しい感情が爆発した。けれど、体の痛みがそれを許さなかった。

「……………つ……………一体なんなんだよ！？子供から心臓を抉り出して、お前はそれが楽しかったんだろう！でなきゃこんなこと出来るはずがない！」

「!?!?……………そんな！楽しい、なんてっ……………」

力強く首を横に振り否定するルシファア。けれど当時の彼女の性格を考えれば楽しんでいなかったとしても、そんな行為を抵抗なくやってみせたに違いない。

妹を、復讐のための材料にされてしまったのだ。生きるために必要なものを取り出されたのだ。ひよっとしたらどこかでまだ生きているかもしれない、なんて妄想を抱くことも許されない。

それに塔の天使達は今でも何事もなく神を信じて生きている。神が殺されただとか、そんなことは一切なかったようだ。つまりルシファアの復讐は失敗に終わったということなのではないのだろうか。アリスは無駄で成功などするはずのない、くだらない復讐の犠牲にされてしまったのである。

87話 朝日に照らされた「始まり」

早朝。まだ空は朝を迎えたばかりである。

窓から射し込む朝日が辛かった。けれど、カーテンを閉める気力さえ無かった。

とても辛い朝だった。

「ねえ……シエルトちゃん、大丈夫……？」

イヴェルが心配そうに声を掛けてくれる。なのに声が出なかった。返事ができないほどの疲労感がのし掛かってきていた。

ベッドの上で、寝ているわけではなくただ座り込んでいた。そしてぼーっと部屋のどこかを見つめているのだ。

……ダリアが小さな子供をどこかへ連れ去ってしまった。それを見てしまった。あの子供は生きていたのかどうか……そんな事はどうでもよくなっていた。

もしかしたらこの学園の下級生達もダリアによって連れていかれてしまったのだろうか。

フィリップはまだ帰ってこない。彼は……大丈夫なのだろうか。ひよっとしたらもう、フィリップもダリアに……。

ダリアは誘拐犯なのか？

そして過去の誘拐事件と関係はあるのだろうか。もしあったとしたら、過去の事件はルシファーが犯人であると自ら告白している。

とんでもなくややこしい事になってしまっている……。

頭の中がひどくこんがらがっていて、ズキズキと痛みだした。そんな頭痛さえ、どうでもいいと感じていた。

ダリアは「大勢の人が死んでしまうかも」とあんなにも人の命を大

事に考えていたのに。それなのに、どうしてこんなことをするのだらう。

昨日の光景が信じられない。信じたくないと思っている。けれど、イヴェルもしっかりと見ている。幻ではないのだ。

「……………」

シエルトはふらふらとベッドから降りて立ち上がった。それはただ、なんとなくそうしただけである。なんとなくそこで朝日に当たり続けていたのが嫌だった。

こんなにも早く目を覚ましているのは滅多にないことである。……………寝られなかったのだ。一睡もできなかったわけではないが、すこし眠ってはすぐ目が覚める。その繰り返しだった。

イヴェルは、自分が目を覚ましてしまつたたびに何度も寝かせようとしてくれた。それでも結局まとまな睡眠は取れなかったのである。

「……………シエルトちゃん。昨日のあれは、シエルトちゃんはなににも知らないの？あの人、あの女の子のこと連れて行つちゃったよね……………」

「…？私達が昨日見たのは、えっと、見間違い……………じゃないんだよね……………」

「あのね、私、シエルトちゃんはもしかしたら、なにか知ってるのかなっておもったの。あの人とも知り合いなのかなって……………」

「シエルトちゃん……………シエルトちゃんはきつとね。私が想像しているよりも、ずっとずーっと辛い思いをしてるとおもつ。それですごく大変なことになってるんじゃないかなって、そうおもって……………」

返事はできなかった。それでもイヴェルの掛けてくれる言葉はしっかりと耳に届いていた。

ふらりと足が動く。疲労のせいで意識がぐらぐらと揺れていた。

シエルトは無意識のうちにイヴェルに寄り掛かっていた。そして、彼女の体をベッドの上に押し倒す形になってしまっていた。……ひどく疲れきった目でイヴェルを見下ろす。

「たすけて」

口が勝手に動いていた。実際声が出ていたかどうかはわからない。しかし、イヴェルはシエルトの声を聞いてくれた。彼女の手が頬に触れて、そして指先が瞼を優しく撫でた。すると不思議なことに涙がほろほろと流れてしまうのである。

「たすけて、ほしいの」

「うん。たすけてあげるよ。あなたが望むなら私はなんでもしてあげられる」

「……変なの。なんかイヴェルじゃないみたい」

「そうかなあ。じゃあ、今のが本当の私ってことで、いいよね」

またおかしなことを言うものだから、シエルトは不思議な気持ちで「やっぱり変なの」と言った。その間も涙は止まらなかった。

イヴェルの上から体をどかす。……よく考えたら、自分は今なんてとんでもないことをしていたのだろう。彼女はまったく気にしていないようだけれど。

それどころか、なんだか妙に嬉しそうだった。

「シエルトちゃん。私に話したいこと、全部話して」

「……」

シエルトの話はベッド　イヴェルの横に座ってからはじまった。最初に見た悪い夢の話や断罪者のこと、誘拐事件の話、ダリアや、塔の神、ルシファーの話。いままでにあつた事をすべて、イヴェルに話す。彼女は口を挟まず相槌をうってくれた。手も、ずっと握って来ていた。

話すたびに、頭の中の重いものが溶けて無くなっていった……。この話を彼女はまったく疑うことなく聞いてくれているのだと、表情を見てわかる。

……すべて話し終わるとイヴェルは強く抱きしめてくれた。それは昨夜よりもずっとあたたかく感じるし、ずっとこうしていたかった。

「……シエルトちゃんはお馬鹿さんなんだよ。もつとはやく話してくれればいつでもシエルトちゃんを守ってあげられた」

「ごめんね……こんな変な話されても、困らせるだけだとおもったから……普通は信じられないでしょ、誘拐された、なんて」

「……お馬鹿さんだよ。信じないわけじゃないよ」

イヴェルのあたたかさがとても心地良くて、ふわふわとうとうと眠気が押し寄せてくる。

「昨日の、ダリアさんだっけ。その人のことね、ちゃんと大人に話したほうがいいとおもうの」

「……」

ダリアのことをイヴェル以外に話す。それはたしかに今起きている誘拐事件を、ひよっとしたら止められるかもしれない。けれど……。

「……、……あのね」

「うん」

「もしかしたら昨日のあれは、なにかの間違いじゃないかなって、思っちゃって……確かめられるかわかんないけど、もう一度、昨日のあの場所に、行って……一度確認しに行つて、たとえダリアに会えなくても、もう、それでもいいから……そしたらちゃんと、大人に話す、から……」

眠気が疲れのせいか、シエルトの声はちいさく途切れ途切れだった。

「うん、いいよ。それでいいよ。もしかしたらなにかの間違いかもしれないもんね。ダリアさんは悪い人じゃないんだよね」

「ダリアは……よく、わからないこと、いっぱいあるけど……きつと、やさしい人、だから」

シエルトの言葉にイヴェルは何度もうなずいてくれる。それがうれしくて、安心できて、涙が止まらない。

気持ちも頭の中もすべてが軽くなった。体の中の悪いもの、すべてがどこかへ流れていった。そんな感覚だった。

早朝のレーヴは人がいない。ぼつりぼつりと店の人間が外に出てシャッターを開けたりと準備をはじめているのが見えるが、人の姿といたらそれくらいである。

空から降り注ぐ朝日は、さつきと比べるとそこまで辛く感じない。イヴェルのおかげ……そうだとおもう。

二人は朝早いレーヴを歩いてきた。ダリアのことはひよっとしたら何かの間違いかもしれない。それを、確かめに行くためである。……とはいえダリアに会えなければ確認のしようがないことはわかっている。そしてそれが不可能に近いことも理解している。

ただそれでも、どうしても昨日のあの光景を完全には受けいれられなかった。

「ごめん……一緒に来てくれてありがとう」

「あひゃ〜だってこんな状態のシエルトちゃんを一人で歩かせるなんて嫌だもん〜。それに……なにかあったら……守れないじゃない」

その言葉に、一瞬あの夜の浜辺での出来事を思い出す。自分をバートレットから庇ったせいでイヴェルが腕に怪我を負ってしまった、あの夜。

「イヴェル……怪我、しないで」

「しないように頑張るね」

「絶対、しないで」

イヴェルの体にひしと身を寄せる。そんなシエルトの前髪にさらりと指を通してイヴェルは笑った。

「そうだね……えへへ、ちょっと前髪長いんじゃないかなー？」

「……。そう、かな」

「寮に戻ったら切ってあげる。これくらいなら大丈夫かもしれないけど、長いままだと目を悪くするって聞くし」

「うん……」

……そんな何てことのない会話を交わしながら、二人はいつの間にか手を繋いでいた。

海が、宝石を散りばめられたように輝いていた……そんな海が見える道をファルクスが歩いていった。時折遠くのほうに散歩をする人が見える。けれどファルクスは散歩なんて理由でここへ来たわけではない。

昨日、フィリップのことで連絡を受けた。夜遅くになっても寮に帰らない、見つからない、そういうことだった。

その時真っ先に思い出されたのが、アリスがいなくなった日のこと。ふたたびあの日と同じことが起きようとしているのでは……アリスはもう戻ってこないんだとわかったあの時の感情は、きつと死ぬまで永遠に消えない。

フィリップは自分を疎ましく思っているだろう。話をしている時の表情を見ればなんとなくわかる。どこかよそよそしく感じられる。自分から少しずつ離れて行こうとしているのが、わかる。ずっと昔はアリスとフィリップと三人で一緒にいたのに。アリスがいなくなつて、フィリップは離れていって、そして妹のようになくなるうとしている。

少しずつ壊れていく家族の繋がりに言い知れぬ恐怖を感じていた。

「……」

ふと、足を止めた。ダイアナの姿があったからである。彼女もこちらにすぐ気が付いたようだ。

「あなた、は……」

動揺していたが、ダイアナは軽く頭を下げた。

「こんな時間に……またお会いするとは思いませんでしたわ」

声が若干震えているように感じる。ルシファアのことをまた聞かれるのではないかと怯えているのかもしれない。

「……弟を捜しているのです。彼の行きそうな場所を歩いているのですがね」

「弟さん、ですか」

「ええ。昨夜からずっと戻っていないようで」

「昨夜……から」

一瞬、ダイアナが「なにかに気が付いた」ようなそんな表情をした。それを、ファルクスは見逃さなかった。

「心当たりが？」

「……えっ？」

びくりと肩を跳ねあがらせる。わかりやすい、とおもった。

「ですから、なにか心当たりが？」

「……」

同じことを聞くと、ダイアナは視線を逸らした。けれど静かに口を開き自身の「心当たり」を話し出す。

「昨夜、娘が一人の男の子を家に連れてきたのです。十四、五歳くらいの子だとおもいます。その子は……怪我を……」

「怪我？」

「は、はい……ですがその、もう傷はだいぶ癒えているのです。」

私は……その弟さんが一瞬その男の子なのではと思って……けれど、どうでしょう」

「弟はあなたの言う通りの年齢です。なにか特徴をあげていただけますか」

「と、特徴、ですか。あの、特徴といつかなんとつか、怪我を見る時に服を動かして……その時にズボンのポケットから銀色のブレスレットが出ていて」

それを聞いてファルクスは、深くため息を吐いた。銀のブレスレットと言ったらフィリップしかない。アリスと一緒に無くなっってしまったはずのブレスレットを、なぜかフィリップが持っていたのを見て知っている。

そのため息を見て、ダイアナは連れてこられた男の子というのが弟であると理解したようだ。

「傷は癒えていると言いましたが、それは無事ということではないのですか」

「はい。まだ動けるかどうかわかりませんが……あとはもう、少し休めば平気です。そうですね、明日頃には。明日の昼過ぎ、ここに待っていてくださるなら連れて来られますが」

それで構わない、とうなずく。それから「あの日」と同じことが起きるかもしれないという可能性が否定されて、あまりの安堵におもわず笑みがこぼれそうになる。……こんな彼は滅多に見られないのかもしれない。

しかしそんな思いと同時にある事を考えていた。

「娘がいるのですか」

その一言にダイアナの表情が固まる。なにを聞かれるのか薄々わかっているのだろう。

「これは私のただの想像です。ルシファーは、あなたのその娘なのでは……」

「……どうして」

「以前のあの反応からして、あなたとルシファーが無関係のはずがない。なら……と、ただそんな想像をしただけです」

ダイアナは、くるりと後ろを振り返り顔をうつむかせた。その背中
はあまりにも弱々しかった。

「………そう、です。あの子は私の娘です」

「何故？」

そのファルクスの言葉は「何故捨てたりしたのか」という問い掛けだとわかる。

「ルシファーは……家を守るためにどうしようもなく孕んだ子、
なのです」

まだら模様の灰色の空、瓦礫と廃墟を乗せた黒い大地。冷たい風が吹き、悲しげな音を立てている。

そんな世界の大きな廃墟の中。奥の、ずっと奥の部屋にダリアの姿はあった。

中央に不気味な祭壇の置かれた部屋。あちこちに立つ蠟燭の火がゆらめき、どうにか部屋を照らしている。祭壇の前に、ダリアは立っていた。

そしてそんなダリアのすぐそばには、

「……」

数人の幼い子供が綺麗に横たわっていた。その中には昨夜連れ去ったあの少女の姿もある。

一見ただ眠っているだけのようにも見えるのだが、よく見れば恐ろしいほどにびくりとも動かない。呼吸をしているようにも見えない。

「ごめんなさい……」

それはもう、すでにただの死体であった。皆死んでいるのである。二度と目覚めることはない。

「私は……あの頃から、なにも変わってない……あんなに必死になつて頑張ってきたはずだったのに、結局同じこと繰り返しただけ……」

唇を赤く滲むほど噛みしめ、思い切り地を踏みつけた。

「でもっ……それでも……」

ぎりぎり腕に爪を立てて、涙が落ちてくる。落ちた涙が蠟燭の火をかすめ、大きくゆらめいた。

「私……はやく『お母さん』を壊さなくちゃ……!」

88話 朝日に照らされた「始まり」？

空は、とても眩しかった。

遠くのほうに塔が見えてくる。天辺は眩しくて直視できないが、まだあの　ダリアの言う塔の神はそこに鎮座しているのだろう。いまだに完全には信じることができないのだが……。でも、彼女の話がすべて真実なのだとしたら、また神が目を覚まして大変なことになってしまふのだろうか。

「……」

ダリアに一体なにが起きているのだろう。神を殺すということと、昨日のあれは、なにか関係があるのかもしれない。意味もなく子供を連れ去るはずがないし、考えられる理由はそれくらいである。それでもやっぱりその二つは繋がらない。

「シエルトちゃん、今はあんまりいろいろ考えないほうがいいんじゃないかな。疲れちゃうよ」

「……うん」

イヴェルのほうを見遣るとにこりと笑ってくれた。それが、いまのシエルトにはとても嬉しくて、いつまでも見ていたいものだった。この目で彼女の笑顔を見られることは、ほんとうに幸せ……。なんだとおもつ。

少しずつ塔が近付いてくる。朝日に照らされたそれはどこか儼かな

雰囲気を漂わせている。

歩いて、ようやく塔が目の前まで迫ってきて……そして、見覚えのある人影があることに気付いた。その人影もこちらに気付いたようで、いつものように人の顔を見るなり後ずさる。ノックスだった。なんだか会うのは久しぶりのような気がする。

「なんでこんな時間に……」

「……いやだから、いちいち数歩引くの失礼だとおもわない？」

くい、と服の裾を引っ張られる。イヴェルが不思議そうな、すこし困ったような表情で見ている。そういえば彼女はノックスと一度も会ったことがないのだと気付く。

とりあえず名前を教えて、一応女が嫌いであるということも伝えておいた。

「あひゃー、女の人がダメなんだ。不思議さんだねえ」

「あー……こんなところにいるんじゃないか……さつさとファルクスさん追ってれば……朝からこんなの二人と会うとは」

その言葉にシエルトはノックスを睨みつける。

「ちょっと、イヴェルのまえで変なこと言わないでよね」

「一体どこが変なんだ？耳おかしいんじゃないか、医者行け医者」

「お前の知能の低さにはほとほと呆れるな」

そんな会話にイヴェルがころころと笑いだす。

「えっへへー。シエルトちゃん楽しそうだねえ。ちょっと元気になっただんじゃないかな」

「いやこれは……一応怒ってるんだけど」

どうでもいいような会話がほんの数分ほど続き、しかたしかにイヴェルの言う通り、少し気分は軽くなったのかもしれない。

「だいたい、はあ……、なんで本当にお前がこんなところにいるんだよ」

「……さあねー。あんたこそなんでさ」

「俺は、」と言いかけたノックスは、なにか思い出したように塔を見上げた。

「ああ……そうだ、お前のせいで忘れてた」

「人のせいにすんなし」

「事実だろ。……塔の中に、変な奴が入っていくのが見えたんだよ」

塔の入口に目を向ける。ここからだとはっきりしないが、よく見ると入口の扉が半開きの状態になっているかもしれない。

「変な奴ってなに？塔の人とかじゃないの」

「あれは違うな。変な女だったんだ。髪はすこし長くて、真っ黒いドレスみたいなのを着てたんだよ。趣味悪いよなあ……」

真っ黒いドレス……あたまの中にすぐに思い浮かんだのは当然ダリアだった。

どきりとする。ひょっとして、彼女なのだろうか？塔に入って行ったというのなら、どう考えても塔の神が目的であるに違いない。けれど、だとしてもなにを考えているのだろうか……今は閉鎖され

ていて関係者以外立ち入れないはずである。ということは、なんらかの方法で侵入したことになるってしまっただ。なにかの見間違いではないか、ともおもったのだが……。

「あひゃ、これ、大変なことになってるよー!？」

いつの間にかイヴェルがそばにおらず、塔の裏側のほうから声が飛んできた。

声のほうへ慌てて向かっていくと、イヴェルが驚いた表情で立ち尽している。どうしたんだろうと思ったが、近くへ寄るとすぐに理由がわかった。

彼女の足元にはガラスのような透明な破片がいくつも散らばっていた。

「イヴェル、それ……?」

「これ……たぶんねえ、塔に近寄れないように張ってあったバリケードが壊されたんだとおもう……ほら!」

イヴェルの指差した先には一見なもののように見えるのだが、よく目を凝らしてみると空間にヒビのようなものが入っている。落ちている破片に触れてみると、ぱちつと小さな音を立って消えてしまった。魔法かなにかでつくられているものだったのだろうか。

ここまで目に見えないほど薄くなっているということは、もうこのバリケードは破損したことでほとんど機能していないのかもしれない。

「壊されたってことは……えっと、その変な女の人はこちらから入っていったのかな……」

「……」

黒いドレス、ほんとうにダリアなのだろうか。彼女がこの塔へ入りこむ可能性はいくらでもあるとおもつ。さっきも考えたように、塔の神のことが関係しているはず。

子供の誘拐に……次はなにをしようというのか。とても危険なことなのではないか。それにバリケードが破壊されたことに気付くことなく塔の天使が一人も出てこないというのも不気味である。もしかしたら……。

そう考えると居ても立っても居られなかった。勝手に足が動き、壊れたバリケードの隙間をくぐって走り出す。

「あつ……おい、なに考えてるんだよ！」

後ろからノックスの声が聞こえるが、かまわず半開きになった扉の中に入って行く。

……イヴェルも慌てていたが、黒いドレスという言葉にぴんときたようだ。

「あひゃ……！そっか、もしかしてえー……」

今朝聞いた話からシエルトが塔に入って行った理由を理解して、こうしてはおられないというようにイヴェルも大急ぎでバリケードの隙間をくぐる。

驚いて止めようとするノックスをちらりと見遣った。

「の……何さん？でしたっけ……あ、そうでなくて！えっと、来ても来なくてもどっちでもいいです！」

それだけ言つとイヴェルは走り、シエルトを追いかけていった。

「な、なんなんだ一体……」

息を切らしながらシエルトは呆然と塔の中を見渡していた。背後からイヴェルの小さな足音が近づいてきて、シエルトに駆け寄る。

「はあっ……シエルトちゃん、って……わ、わ……！」

中の様子にイヴェルがおもわず声をあげて後ずさる。

そこには何人かの天使が倒れていて、なかには体のどこからか血を流している者もいた。普段人々が手を合わせて拝み囲む噴水に一人の天使がもたれかかり、透明な水の中に血液が広がっていく。

しかし死んでいるものはいないようだった。時折ゆっくりと手足を動かしているが、どうやら起き上がれないようである。

……この光景はシエルトの予想している通りであった。一人も天使が出てこないということは、もしかしたらダリアに何かされたのではないかと、そう考えていたのだ。

後からノックスも塔へ入って来る。反応はイヴェルと似たようなものだった。

すると突然、耳を塞ぎたくなるような大きな金切り音が響き渡り、

その直後に何かが崩れたような、そんな音がした。聞こえてきたのはおそらく真上から。つまり塔の上の、上。

ダリアに違いない。

シエルトはふたたび走りだして階段を駆け上がって行く。これより上は一般人は立ち入れないはずだろうが、どこの階の天使も下と同じように倒れており止める者はいなかった。

長い長い階段をどんどん上がって行って、しかし体力が持たず足が止まりそうになった頃。

上のほうから光が射し込んでいることに気付く。

「これ以上、上は……」

もう、無いはずである。だがあるはずのない「何か」があるようで、けれど眩しさのあまりそれが何であるか見ることはできない。

……ゆっくりと近づいていく。

「な、なにこれ……」

一番上へと辿り着いた。

……本来あるはずのない道がすつと伸びていたのである。天井は崩され、その道というのも透明な光の集まり。崩れた天井の向こうへと伸びているのだ。

この上には、ダリアの言う塔の神が鎮座しているはず。その神の場所へと行くための道なのだろうか。

道に、足を乗せてみた。とりあえずそれはちゃんと歩けるようで、落ちるといったことはないだろう。

一歩ずつおそるおそる足を進める。不思議なことにこの道は足音がしない。空中に浮いている気分だった。

ついに天井の裂け目を抜け、塔の天辺へと足を踏み入れる……。

「っ……！うわ……」

ひゅう、と冷たい風が体を通り過ぎた。

目の前には……一人の女性が眠っていた。足までつくほどに長い、銀色に輝く髪が風に揺れている。

肌は雪のように真っ白で、体についた赤い切り傷がとても目立つ。そんな切り傷さえとても美しく見える。身に纏っているのは純白の布で、まるで花嫁のドレスだった。

そんな綺麗な女性の背中から生えているものはあまりにも異様だった。

背中の皮膚を裂いて生える巨大な鉄のようなものが、まるで天使の翼のような形で骨組みをつくっている。汚く錆びて、乾いた血のようなものもこびり付いている。

ダリアは　　ここには塔の神がいます、言っていた。

「え……？この、人、が……？」

閉じていた女性の目蓋が、静かに開いた。

89話 欠陥品のフィオナ

冷たい風が音を立てながら吹き荒ぶ……だいぶ強くなってきたようだ。

女性はしばらくの間じっと宙を見つめていた。髪を弄ぶ風など気にせず、眠気が覚め切らないような表情でただじっと。

そして一つ、まばたきをして、それからようやくこちらの存在に気付いたようである。

女性はシエルトに視線を向けた。目が、合う。

「……っ」

一瞬、息が詰まりそうになった。冷めたような目で見据えられて、視線を外してくれない。この女性がなにを考えているのかもまったくわからない。とにかく無表情なのである。

……正直この場から逃げ出したかった。

自分が想像していたような塔の神とは何か違うし、弱々しそうで神なんてものとはまるで程遠い。なのに妙な不気味さを身に纏っていて近寄りたいとは思えない。

けれど……ダリアの言っていたことは本当なのだろうか。

すると女性は小首を傾げて、あいかわらず無表情であるが、なにかを考えているように見えた……。

「あらっ、どなたかしら？私の知らない子ね。人と会うなんて久しぶりだから緊張しちゃうわ。ふふ、あらあら可愛い子ね」

一変。彼女は幼い子供のような顔をして、こちらを珍しそうに眺め

てくる。あまりの雰囲気の変わりように動揺してしまつて返事ができなかつた。

それからまた、女性は小首を傾げて不思議そうな顔をする。

「うん？ いやいや違つわね。たしかに久しぶりだけど、この子のまえにも誰かお客さんが来た気がしますわ……はて、どんな子だったかしら。眠くて眠くてよく覚えていません」

眠いわねえ、と言つて女性はひとりでころころと笑っている。

シエルトはついて行けずに呆然としながらも、彼女の言葉であることに気付く。

「誰かお客さんが来た気がしますわ……この女性のことですついでに頭から抜けてしまつていたが、それはひよつとしてダリアのことなのではないか。よく考えたらこの場のどこにもダリアの姿はない。」

「あ、あの……」

「う〜ん、なんかすごくお腹すいちゃつたわ〜 うふふ、朝食はやっぱり目玉焼きよねっ！ 私、ターンオーバー派です。あなたは？」

「……さーさいどあつぷ……」

あまりのわけの分からなさに涙目になりそつ。

ダリアから聞いた話となにか違つ気がする。たしかに恐ろしい性格であると言つていたわけではないが、なにか話が違つ気がする。

「……あらつ？」

上機嫌で話をしていた女性は、目を細めて頭上を見上げた。気にする暇がなく気付かなかつたが、ここはドーム状の光に覆われていて

外がまったく見えない。もし見えたらなかなか絶景だろうとおもった。

女性が真上に手を伸ばすと、覆っていた光がはらりと剥がれ落ちていく。落ちた光は地面と衝突すると力無い音を立てて消えていつてしまった。

外の景色が見えそうになって……しかし、突然何かがひゅつと飛んできて勢い良くこの場へと突っ込んだのである。それに驚いたシエルトは避けようとして尻餅をつきそうになった。

……突っ込んできたのは蜘蛛のようだが、蜘蛛にしては巨躯な体を持ち異様なまでに足が長い。一目見ただけでそれがフォーリーであるとすぐにわかる。

「ううん？ あらあ、また新しいお客さん？ 今日は賑やかね」

「えー……」

正直、この女性の思考がよくわからない。見えている世界が違うのではと思うくらい状況と発言が合っていないのだ。

すると、後ろ、というより下の方から自分の名前を呼ぶ声が聞こえてくる。

イヴェルの声だった。

「シエルトちゃんっ……どうしたのー？ そこになにかあるのー？」

階段を駆けしてきたのか息切れの混じる声。そんな聞こえてくるイヴェルの声に、女性は和やかで楽しそうな表情をしていた。

「わー！？ なにこれーっ！」

今度は驚愕の音が響いてくる。おそらくこの場所へと通じる光の道を見て驚いたのだろう。とりあえずこちらにはフォリーもいるし、来ないほうがいいということ慌てて伝えようとしたのだが……。

「あ、シエルトちゃんっ」

すでにすぐそこまで来ていたため間に合わず、ひよこっつと姿を現したイヴェルが自分のもとに飛んできて抱きついてきた。その後ろからはノックスと……そしてどこかに隠れていたのか、どうやら無事で動けるらしい数人の天使達もやって来る。

女性は、外の景色がよく見えるようになった周囲をきよろきよろと見回して、すこし困ったような顔をした。

「あら……うーん？ちょっとここ、危ない気がしてきましたわ」

なぜ彼女がそうおもったのかはすぐにわかる。

空にはたくさん鳥、ではなくて、明らかに姿形のおかしいフォリーが飛びまわっていたのだ。それにどれも塔へ近付こうとしている……様子が祭りの時と同じ。こうなるのはこれでもう三度目だろうか。

「おいー！」

ノックスが、シエルトとイヴェルに呼び掛ける。

「お前らは早くここから離れる」

逃げろということだった。塔が、なぜか完全にフォリーの標的になっ
ているということは明白。

……この状況で自分がどうすることもできないのは二度も経験して
よく理解している。足手まといとなるのだから、その指示には従う
しかない。

「シエルトちゃん、行こう！」

「うんっ……」

イヴェルに強く手を引かれ、光の道を走って長い階段を駆け下りる。
焦りもあって何度か躓きそうになった。けれど、必ずイヴェルが支
えてくれた。

ダリアは、神が時折目を覚ましてしまうことでこんな事が起き
るのだと言っていた。あれが塔の神だなんて信じ難いが、たしかに
あれが目を覚ましたら同じ事が起きてしまった。

けれどもいままではすぐにまた眠ってしまったはずである。完全
に神を封ずる力が消えたわけではなかったからだ。

しかし今回は……どうなのだろう。もしかしたら彼女を封じていた
力は完全に消えて……だとしたら、どうなってしまうのだろう。い
ままでのようにはいかないはずだ。

もっと恐ろしいことが……。

走って、走って、ようやく一番下へと辿り着く。

倒れていた天使達は先程よりも動けるようになったようで、立ち上
がり歩きだそうとするものもいた。

……外は、やはり祭りの時と同じ状況であった。地上に降りても、
地をフォリーがうごめいている。足が竦みそうになった。

なぜこうもフォリーは塔へと集まるのか……などと考えて、ダリアの言葉を思い出す。あまりの焦りで忘れてしまっていた。フォリーは神の強い魔力に惹かれて来るのだから、神のいる場所に現れて当然なのだ。塔ではなく、あの女性に集まっているという事になる。

「わー……！すごい、あれっ……！」

イヴェルが驚いた表情でさっきまで自分達のいた塔の天辺を見上げる。そこでは何度も何度も光が爆ぜ、その度にフォリーが砂の如く消えていった。

あの、女性の力だった。その直後、なんとそこから女性がふわりと舞い降りてくる……。これにはイヴェルも目を丸くしていた。

「ふふ、あなたたち大丈夫？あ、天辺にいるあの男の子たちは無傷よ みんな強くてびっくりしちゃった」

すとん、と優雅な仕草で軽々着地する女性。花嫁のドレスのようなスカート裾から伸びる真っ白な足はよく見ると素足。細くて弱々しい感じがする。そして、やっぱり足も傷だらけであった。

……無傷というのはノックス達が強いからというより、さっき見たこの女性の力の強さのおかげだと思った……。

「うーん……大変ね。二人とも、目を塞いで。ちょっと眩しいから」

よくわからないが、とりあえず言われた通りにするしかない。……この状況で視界が闇に包まれるのはかなり恐ろしく思わず身を縮み

こませる。

目蓋を閉じて手で目を覆ったあと聞こえたのは、耳も塞ぎたくなるほどの大きな金属音に似た嫌な音。

「もうだいじょーぶ。目を開けていいわ」

おそろおそろ手を降ろし目蓋を開いてみると、周囲にたくさんいたはずのフォリー達が綺麗さっぱりと姿を消していた。先程、天辺では何度も光が爆せていたが、それをここで使ったのだろうか。

この女性が目を覚ましている以上少しすればまたフォリーは寄ってくるだろうが、とりあえず今は安全……であるとおもつ。

「なんだかよくわからないけれど、なんでこんな事になっているのかしら……」

彼女は、自分にフォリーが引き寄せられていることを知らないのだろうか。

「それに目が覚めて久しぶりに外へ出たような気がするけど、なんだかこの町？かしら、凄いですわねえ。初めて見るものばかり。私、なんでこんなところにいるのかしらね？」

そう言っただけでそんな様子できよきよとあたりを見回す女性。たしか塔の神というのはレーヴなんて無かつたずっと昔の話で、その頃から塔で眠っていたならこの都市の姿に驚くのも当然かもしれない。

……どうしてもまだ神だなんて信じられない気がするけれど。

「……ねーねーシエルトちゃん。この女の人、だれ？」

「わ、私にもちよつとよくわからないけど……たぶん、えっと、

ほら、ダリアのこと、話したでしょ？」

「あー、黒いドレスを着た子だよな」

「うん……あの人、そのダリアの言ってる塔の神様かも……しれなくて」

「えーっ！」

目をまん丸にして驚愕の声をあげるイヴェル。女性をまじまじと見つめながら目をぱちくりさせていた。その仕草が可愛らしい、と思う。

「……うん？あらあら、また誰か来たみたい」

周囲の様子に夢中になっていたはずの女性が、シエルトとイヴェルの後ろを見ながらそう言った。背後に誰かがいたなんてまったく気付かず……すこしびっくりして、おそろおそろ振り返ってみる。

そこにいたのはずっとシエルトがさがしていた少女の姿。

「あ……ダリア!？」

「……」

ダリアはなにも言わずただ黙ったまま髪をかき上げる。

そんな彼女の視線は押しつぶされそうなほど威圧的で、二人の後ろに立つ女性をじっと見据えていた。女性は、ダリアのその身に纏う鋭い空気に困惑した表情をみせる。

冷ややかで威圧的な視線のまま靴の裏で地を踏み蹴り、唇を噛み、力強い歩調でダリアは女性へと歩み寄った。

90話 欠陥品のフィオナ？

「こんにちは」

無感情に、吐き捨てるようにダリアがそう言った。女性は精一杯の笑みをどうにか浮かべているが、この冷たい空気にどこか引きつっている。

「え、ええ……こんにちは。えっと……どなた、かしら？」

その言葉にダリアの目が伏せられる。女性はどうしていいかわからず戸惑っている様子だった。

空気は冷ややかに、鋭くなるばかり。

「最低ね。ま、わかっていたことだけど」

「……ごめんなさい」

聞いたことのないダリアの冷たい口調に、シエルトは彼女へと近寄ることはできなかった。……近寄るべきではないと思う。なにか異様な空気を感じる。

イヴェルは、シエルトの話で聞いたダリアの口調や態度などの様子の違いにひどく困惑しているようだった。

「あなた、自分の事どこまで覚えているの？」

ダリアの突然の問いに女性が焦る。自分の事を必死に思い出そうとしながら、彼女の気分をこれ以上害さないようにと慎重に言葉を選んでいくようだ。女性がどれほどの焦りに襲われているのか、その息苦しそうな呼吸からよっほどのものだとわかる。

「わ、私……ひどくおぼろげだけど、少しだけ……」

「ええ、何？」

「頭のなかに映像みたいなのが残ってて。ええっと、えっと……私には大事な人がいたのかも。ずっと一緒に暮らして……あの、好きな人っていうのかしら？それで……」

語尾を曖昧にしながら女性の言葉はそこで途切れてしまった。他には？と聞いてくるダリアの視線に、隠すように目を背けた。これ以上ダリアの目に見られ続けるのは耐えられなかったのだろう。

「それだけしか、覚えてないって？」

見下すような目付きと憎悪の混じるダリアの声。女性が、びくりと肩を跳ねあがらせる。

「ふん、本当に最低な女ね。あんたのせいで取り返しのつかない事が起きたっていうのに、全部忘れて今日まで呑気におねん寝なんて」

「え……取り返しのつかない……？」

「そうよ。もう気が遠くなるほどずっと昔の話だけど」

女性の顔がみるみる青ざめていく。ダリアにどれだけ言われても何も思いつくことができないようだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい、わからない……」

必死に謝り続けるその様が、ダリアには非常に気に食わなかったらしい。

「……ああそう！あんななんてどうせもつすぐ居なくなるんだし！そんなに謝らなくなつて私が教えてあげるわよ！」

怒鳴るように口調が激しくなり、さらに女性を威圧させる。

「あんなつて有名なのよ？みんなあんなの事知ってるの」

「……」

「あの塔の神様ですつて。あんなそんなふうに言われてるのよ。ずっと昔、この都市さえ無かつた頃、ここには小さな村があつて……あんなはそこに住んでいたのよ。唯一覚えてるっていう『大事な人』と一緒にね」

「……」

「けどある日、別の村と戦争も同然な状態になつてしまつたわ。その村つていうのは前から争い事が絶えず過激だつたのよ。だからあんな達はどうにか自分の村を護ろうと必死になつた」

「そ、それは……本当なの？」

記憶に無い自身のことを聞かされ、女性は混乱しているようだった。そんな女性には構わずダリアは話を続けていく。

「ちなみに原因は宗教の問題。どちらの村もかなり行き過ぎてて、怪しい事……村人を生贄にっていうのもよくやってたらしいけど。まあそんな感じで、村を護るため考えられた策も宗教めいたものだったのね」

ダリアは、深く息を吐いた。

「『自分の村を護るために神になつた女性』なんですつて、あんな

たは」

「私、が……？」

「ええ、そうよ」

また深く息を吐く。

「……、私が、いたのに」

「……………え？」

ぼそりと呟かれたダリアの、さっきまでとはまるで正反対の弱々しい声。

うまく聞き取れないほど小さな声だったが、その一言で空気が完全に冷え切ったのがわかる。ひゅう、と冷たい音を鳴らして風はどんどん強くなっていった。

「その時あなたの腹の中には、私がいたのに」

この空気よりも遙かに重く冷ややかなダリアの声と言葉が、容赦なく女性へと突き刺さった。

「え、私……あ、あなた、は……私の……！？」

少しうろたえて、「あ……」と女性は力無く声を漏らす。

ダリアに告げられたことによって少しずつ、長い眠りの中で消えた記憶を取り戻しているのかもしれない。

「私、大事な人と……その人と、子供が……？」

「そうよ！私がいいたにもかかわらずあなたは村を護るためだとか

「いって、自ら自身を妙な儀式へと捧げたのよ！私のことなんてきつとどうでもよかつたんでしょうね！」

ダリアの声は、次第に震えた涙声へと変わっていった。それと同じように女性の表情も暗く沈んでいく。

「ごめんなさい……ごめんなさい、私……今でもまだ完全に思い出せないけど……私は、『フィオナ』？そう呼ばれていた？」

「そう、その馬鹿みたいに真っ白な姿の通りの名前よ。だから私は白が大嫌いなもの」

真っ黒なドレスに身を包むダリア。それは、そんな理由があるからなのかもしれない。

ダリアは目を伏せながら話を続けた。

「……馬鹿じゃないの……変な儀式であんたは村を護る力を持つ神とやらになつたそうだけど……もし何かあつたら私死んじゃうかもしれないのに……」

「違うの！わたし……あなたの事、死んでもいいなんて……そんな事！」

叫ぶようにそう言って、女性　フィオナは言葉を詰まらせる。そう言いながらもどうして自分はそんなものへ身を捧げたのか、その理由をまだ思い出せないでいるのだろう。

「ねえ……ねえ……あの人、あなたになんて名前をつけたの……？」

「なによ、私の事なんてほとんど思い出しちゃいけないくせに！あの人あの人って、私の父親のことばかりで……、私はあんたを母

「親だなんて認めてない！」

「……………」

「フィオナは数歩後ずさる。もうなんと言えればいいかわからないようだった。」

「あんたはね、神だとか言われてるけど、それとは名ばかりのただの兵器なのよ！儀式とやらは間違いなく失敗だったんでしょうね。正常に作動しなかった兵器だもの」

「そんな……………どうして……………私どうなってるの……………？」

「あなた、兵器と化した直後、もう自我なんかほとんど残ってなかったのよ。この時点で失敗作。あんたは大量のフォリーを引き連れて戦争相手である村の壊滅を果たし、そして自分の村の人間まで虐殺していった」

「ダリアによって語られるその話に、ただ聞く事しかできないシエルトとイヴェルは恐ろしい気持ちに満たされる。」

「え……………なに……………だって、私、村を護るためにつて……………なのにごうして、殺しちゃうの？」

「だから言ってるじゃない。あんたは正しく動かない失敗作なんだもの。自我を失って敵と味方の区別がつかなくなっただんでしょう？」

「がくりと膝を地につかせ、呆然とダリアを見上げるフィオナ。」

「あんたは神として塔に祭られたんじゃないわ。とんでもない力を持った兵器だからと隠されていたのよ。塔は兵器庫みたいなものね。まあ折角の封印も、たった今完全に機能を失ったようだけだ」

「……………どうして……………私……………うそ、よ」

「失敗したらこうなるかもしれないって、わかってたことじゃない？なのにあんたは身を捧げたってわけ。儀式を遂行した奴もどうかしてるけど、あんたのせいでもあるのよ！」

それでもまだフィオナは信じられないようで、じっとダリアを見つめていた。

「私はあんたを兵器としてしか見ていない。私は、あなたを壊すわ。そのために私はここにいるの」

「……あ……」

強く風が吹いた。それがフィオナの中の何かを目覚めさせたかのように、彼女の痛々しい叫び声が響き渡り、辺りを覆う。風の吹く音は掻き消されていた。

ダリアはその姿を、醜いものを見るような目で見下ろしている。

「これでどれだけ自分が愚かかわかったでしょう！？これだけじゃないわ！あんたのせいで私も、父も……！！！」

そんなダリアの声は、もうフィオナの耳には届いていない。フィオナは見開いた目でダリアへと手を伸ばした。

「ああ、あなたは、私の大事な娘なのね！ごめんね、あなたの母親でいてあげられなくてごめんね！！ねえっ、あの人はどこにいるの！？そうだ、ねえ、一緒に三人で暮らしましょう？お母さんもう、どこにも行かないから！これからはずっと一緒よ！」

見開かれた目も声も狂気に満ちていて、あまりの豹変にシエルトはイヴェルの手を思わず強く握っていた。イヴェルも、それを握り返してくる。

「……思い出したのか適当に言っているだけのかわからないけど、気がおかしいの？こんなの母親だなんて絶対に認めたくないわね。さっさとぶっ壊してあげるから大人しくしててくれないかしら」

「いやよ、なんで、あなたが言ったことは全部嘘よ！私、そんなんじゃないわ！？そんな酷いことしてないわよお！！」

再び、フィオナの叫び声が辺りを包みこんだ。しかし、それは短いもので突然ぴたりと止む。フィオナの目が不気味に空を仰いだ。

「酷いのはあなたでしょう？そんな嘘ばかり吐いて罵って」

「は……？」

「それにあなた本当に私の娘なの？私の子はあの人に似て、きつととても優しい子のはずよ。そんな最低な嘘を吐いたりしないわ！うそつき！！」

ざあ、とノイズのような、嫌な音と風が吹く。空は完全に重苦しい灰色で、フィオナを禍々しくみせていた。

雑音のあまりの酷さに何の音も聞こえない。ただ、フィオナの恐ろしい狂笑だけは、耳を塞いでもしっかりと届いてくる。

「！」

ダリアが、なにか必死にこっちに向かって叫んでいる。けれどノイズと狂笑に掻き消されてなにも聞こえない。

……しかし彼女がなにを叫んでいるのか大体理解することができる。

「はやく逃げろ」と言っているのだろうか。きっとダリアには今からなにが起ころうとしているのかわかっているのだろう。

でも、もう遅いのである。

足を動かすよりも先に恐ろしい光が視界を覆い隠した。何も見えず、恐怖で足が固められたように動けなくなってしまう。

それから間もなくのことだった。

聞いたこともないような風音と轟音　爆発を起こしたような音が轟く。それと同時にとてつもない程強い力に背中を押されて、遠くへ突き飛ばされていくのがわかる。

そこで意識が遮断された。思考が停止して、体の全てが動かなくなる。

最後に脳裏に浮かんでいたのは、ダリアが叫んでいた時の表情だった。あまりにも悲しそうで今すぐにも泣きだしそうだった彼女の表情は、いつまでも目蓋の裏に焼きついたままである。

9 1話 灰の都市の少年少女たち

ぱきん、と氷の砕ける音が空中で静かに鳴った。ぱらぱらと無数の細かい破片が地に落ちていく中、同時に巨躯の獣も落下していく。血に汚れたフォリーの死骸が、破片の散らばる地面へと衝突した。

「はあっ……、っ……」

疲労に満ちた息を漏らし、氷の弓を握りしめたままふらふらとイヴエルが歩きだす。

「シエルトちゃん……どこ……？」

あのフィオナという女性の放った光にのみこまれて意識を失っていた。それからどれほど経ったかはわからないが目を覚まして……。
目を覚ますと、都市の姿は一変していたのである。

灰の雲の下に並ぶ建物はどれもこれも壊されていて、その瓦礫が地面を覆っていた。殆どが一部崩壊しており、酷いものは全壊……。そしてその瓦礫の間からは人の手が伸びていた。

遠くの方で灰色の煙が空へと立ち上っているのが見える。向こうもここと同じ状況なのだろう。

何かの店だったとわかる建物の入り口の上に掲げられていたネオンの看板は外れかかって、風が吹くたび揺れている。その下の入り口であるドアは半開きの状態で、これも風が吹くとキィキィと音を鳴らしていた。

そんなドアの下から……赤い液体が流れ、灰色の瓦礫を真っ赤に染

めている。ドアの向こうになにがあるのか？

そこから逃げようとした人は、間に合わず瓦礫に押し潰されたのだろうか。あと少し早ければ助かっていたかもしれないのに……そんな場面をおもわず想像してしまって、吐き気が込み上げてくる。

立ち止まりそうになって、それでもイヴェルは足を動かす。こんなところで休んでいる場合じゃない。

……シエルトがないのだ。

目を覚まして先程からずっと周囲を捜しているのだが、彼女の姿がどこにもない。それどころか人つ子一人見当たらない。

あるのは、転がった死体だけである。

「……どこ、なの？シエルトちゃん……」

目に涙が滲む。彼女を守るなどと言っておいてこの有り様。あの光の中、もっと必死になっていればシエルトの手を掴むくらいはできたかもしれないのに。

後悔が押し寄せてくるのと同時に心細さも生まれる。いつも一緒にいる彼女がいないと不安で寂しい。

彼女のまえでは腕に大きな怪我を負っても笑顔でいられる強さがあったというのに、一人になると簡単に涙が出てきてしまう。

「………ひとりにしないでえ……」

咳かかれた涙声。自分でも驚くくらいの弱さに、さらに悲しくなる。ついに耐えられなくなって、地面へ両膝をついてしまった。涙の雨が落ちて瓦礫の色を変えていく。それでも堪えているつもりだった。しかしとにかく、早くシエルトを見つけなければと力の入らない足でどうにか立ち上がるうとする。

背後に気配を感じた。

数秒遅れて振り返る……と同時に、黒い影が素早く眼前をかすめる。

「きゃっ……！」

驚いて、後方へと飛び退いた。黒い影はすぐ側にあつた建物の壁と強くぶつかつて、そのコンクリの破片がいくつかイヴェルの体へと振りかかった。

「……っ」

慌てて弓を握り直す。

目の前にいたのは、あやふやな形をした真つ黒い……辛うじて四肢が生えているとわかる影に黒いもやが掛かったようなフォーリー。

一旦離れようとして数歩後ずさるが、その時足のかかとなにか、柔らかいものがぶつかった。それにつまずき尻餅をついてしまう。ぶつかったのは、破れた布にくるまる肌色の……。

「……！」

自分と同じ年くらいの少女の死体だった。少女は黒髪で、そこからシエルトの姿が連想されて、次に思い浮かんだのは……。

「……、……」

強く押し寄せる不安と焦りに声も出ず、目の前にフォーリーが迫ってきているというのに逃げることができない。

もうここで動けないというのなら後は殺されるしかないだろう。

今までに感じたことのない死の恐怖で涙があふれ、景色の色がぐちゃぐちゃになっていく。

そんな滲んだ視界を　　なにかが勢いよく遮った。

それはひとりの、見知らぬ少女。イヴェルを守るようにフォーリーとの間に立ち、瓦礫の地を強く踏みしめてその手に持つ武器を掲げる。武器　刀はすでに鞘から抜かれていて、重く冷たい灰色の曇天が長身の刃にうつる。

もう一度踏みしめて、それから強く地を蹴り、黒い影へと走り出した。影の腕と思しき部分が少女にむかって振り回されるが、身を屈め眼前で回避する。

更にもう片方の腕が振り下ろされるも少女はそれを右足で蹴り上げた。一瞬バランスを崩した影の、蹴り上げた腕へと飛び乗る少女。少女は、刀の柄を強く握る。

次の瞬間、黒いもやの中に灰色の一線が引かれた。それは見事に影を裂いており、もやは掻き消され、影はたちまち地の中へと沈んでいく。

その光景をイヴェルは呆然と見つめていた。一体なにが起こったのか、理解できたのは全てが終わり、少女が再び瓦礫の地へと戻ってきたときである。

少女はこちらへ歩み寄ると「大丈夫ですか？」と言って手を差し伸べた。息一つ上げず、非常に落ち着いた様子の少女。

おそろおそろ差し出された手を取ろうとすると、

「フウ〜ちゃ〜んっ！置いてくなんてひどいじゃないかー！」

遠くの方から青年の声が飛んでくる。見ると、こちらに向かって手をぶんぶん振りながら走ってくる人間が一人。

その姿を見て少女は呆れ顔になり、深くため息をついていた。

走ってくる人間……それはルイスであり、イヴェル達の元へ到着す

ると肩で息をしながら「フウちゃんのバカ〜」などと言っている。
フウちゃんと呼ばれた少女は　　フウカである。フウカは表情と同じくらい呆れた声を出した。

「はあ……あなたが勝手にはぐれたのでしょうか。その年にもなつて、まとも人についていくことも出来ないのですか？」

「ん〜フウちゃんちっちゃいからさ〜、なんか見失っちゃうんだよね」

「うるさいです。……まったく情けない」

フウカはもう一度ため息をつく、イヴェルの手を握って立ち上がらせた。

イヴェルは、この二人を知らない。なので少し戸惑った様子で二人を見ていた。そんなイヴェルにフウカが気付く。

「……あ、ごめんなさい。お怪我はありませんか？」

「大丈夫です……あの……ありがとうございます」

「私達は塔の者です。この場所、塔付近は危険な状態ですので、向こうの避難場所へ移動しましょうか」

そう言つてフウカは周囲を注意深く見渡しながら歩きだす。「じゃあ行こうか〜」とルイスがイヴェルに笑いかけた。

……このまま彼女たちについて行っていいのかと、イヴェルは思う。まだシエルトが見つかっていない。もしかしたらシエルトも、どこかで自分を捜しているかもしれないし、あるいはどこかで倒れているかもしれない。

この周囲を完全に捜したわけではないし、その避難場所とやらへ向かうことでシエルトから離れるようなことになってしまったら……。避難するべきかシエルトを捜すべきか。イヴェルは当然前者を選び

たいが、この二人はそれを許してくれるだろうか。フォーリーに襲われて助けられたばかりだし、危険だと強く反対されるに違いない。

「……どこか痛みますか？」

「え？」

気が付けば、フウカが心配そうにこちらの顔を覗きこんでいた。

「やはり、どこか怪我を……」

「あ、あひゃ〜……いえ〜違いますよ、大丈夫です。ただ、あの……人を捜してて」

「人ですか。なにか特徴はありますか？」

そう聞かれてシエルトの姿を思い浮かべると不安と焦りに心が包まれる。あの黒髪の少女の死体を見てしまったせいで、まさかもうシエルトも……などという恐ろしい妄想が頭から離れないのだ。先程動けなくなったのもその妄想のせい。

しかし……いやいやそんな事はありませんと、とりあえず思いつく特徴をあげてみる。

「黒髪で、肩につくかつかないか程度の長さの女の子なんです。それでブレスレット……は最近鈴のついたものになったっけえ……えっと、そういうのをしてて。あと誰かから貰ったっていう三日月のブローチをつけてます」

フウカとルイスは顔を見合わせる。

「あー……その子さ〜、鈴のブレスレットをしているところは知らないんだけど、前は銀色のものをつけてなかった？」

そのルイスの言葉にイヴェルは表情をぱつと明るくする。

「は、はいっ！そうです、してました」

「名前はシエルトちゃん……だよな？」

「そうです、その子です！！」

この状況でまさか彼女を知っている人に会えるなんて、とあまりの嬉しさに泣きそうになる。

しかし、ひよっとしたら居場所を知らないかとおもわず期待してしまっただが、ルイスの少し考えたような表情でそれはないのだとわかってしまう。

「……いないの？シエルトちゃん」

「……っ、……はい」

今度は落胆の意味で泣きそうになる。さすがにそう都合よくいくはずがないと、わかつてはいたのだが。

そんなイヴェルを慰めるようにフウカが優しく背を撫でてくれた。

「大丈夫ですよ、もしかしたらもう避難場所へ移動しているかもしれません。私達も、シエルトさんを捜しながら行きましょう」

「は、い……」

先に避難しているかもしれないという希望と、まだどこかで、という不安を胸に広げながらイヴェルは歩くしかなかった。

機械音に似た耳鳴りが脳に響く。

その耳鳴りによって眠りから目を覚ますように目蓋を開いた。ただその時、開いた感触に気持ちの悪い違和感を覚える。

「……………う……………く……………っ」

瓦礫に横たわり、小さく声を上げたのはシエルト。

石の突起した部分が体中に当たり、起き上がるのもやっとの痛みが体を襲う。見れば、足や腕のいたる所を傷付けて血が滲んでいた。服の裾も若干破れてしまっている。

「……………？……………あっ……………！！」

ひどく朦朧とした意識と視界。

ようやく起き上がって、そして倒れていたその瓦礫の部分が恐ろしいことになっているのに気付く。

石が、べっとり赤いペンキを塗りたくったように染まっていたのだ。そのペンキ、のようなものは服にも肌にもついている。ただ、においでペンキではなく本物なのだとわかった。

誰のものなのか？

一瞬そう考えたが、自分しかない。どこかに大きな怪我を負っているのか。

慌てて自分の体を確認しようとすると……………。

「　　っ……！！！」

息が詰まるほどの鈍い痛みが、今更思い出したかのように訪れる。

目だ。右目だ。

あまりに朦朧としていて視界がおかしいことにすぐに気付けなかった。

片目が、右の目が真っ暗だった。視界がいつもより狭まっている。痛みが、徐々に激痛へと変化していく。右目の周囲も切ってしまうように、生ぬるい液体が頬を伝っていくのがわかる。

「あ……っ、う、……痛、……あ……っ」

おもわず手で抑えようとするが、それが更に痛みを与えてしまう。感じたことのない激痛が脳にまで伝わっているような気がして、意識がぐるぐると回りはじめる。

どうにか周囲を見渡すものの、誰もいない。イヴェルも、いない。あまりの痛みで気がおかしくなりそうだ。むしろそうだったほうがこの激痛から解放されるのか？などと、妙な思考が頭の中を駆け巡る。

……ぼつりと、首筋に一滴の冷たい水が落ちた。

鼠色の雲を携えた空が、静かに雨を降らしはじめたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4753w/>

空の下の神様

2011年12月13日01時54分発行